フロイド精神分析學全集

精神分析總論

大槻憲二譯

精神分析學研究所

春陽堂版

Sigm. Freud
(1891)

Sigm. Freud
(1891)

譯者序文

本書は『フロイド精神分析學全集』の第十卷に當り、本全集は一先づこれを以て完結したことゝなる。併しながら譯者は本全集の第一卷『夢の註釋』の序文に於いて、『夢の註釋、補說』を公にすべきことを約束してゐる。この約束を譯者は決して忘れるものではないが、さま〴〵な理由に依つて一先づこの全集は、これを以て完結したものとしておいて頂きたい。やがて適當の時期に於いて、『夢の註釋、補說』(題名は或はこれと異るかも知れないが)と『分析實例鈔』とを追加刊行し、卽ち現在の十卷に加ふるに二卷を以てし、都合十二卷とし、愈々本全集の價値を完全にし、永久にしたいと譯者と出版者とは意氣込んでゐる。

ではそれほどの意氣込みを何故直ちに實現しないかとの反問を讀者諸氏から聽くであらうことを我々は期待する。それには前にも云つた通り『さま〴〵な理由』があるが、それ等の理由の一つは、譯者に於いて足掛五ケ年に亙る苦鬪にやゝ疲勞を感じたと云ふ點である。本全集は最初は相當の人數を以て取掛つたのであつたが、何しろ深刻精緻なる斯學の理論と方法と、並びに斯學の對象たる人間無意識心理の複雜多樣なるとは、譯者の如き馬鹿根氣のあるものに非ざれば大抵は投げ出したくなるも

のと見え、（一つには原書がドイツ語であるせいにも由るが）一人去り、二人逃げ、遂に本全集十卷の中七、八卷までは余の努力に成り、全然余の息のかゝらぬものは僅か一二卷に過ぎぬ有樣となつた。その間、余は精神的に、肉體的に、物質的に、幾多の勞苦と犧牲とを拂ひ、もし余にして研學と眞理愛との熱誠なくば、到底この大業を完成し得なかつたであらうことを告白するに憚からぬ。他人の業績に對して冷淡なる、ナルチスティシュなる學界は、果して余の事業に多少の同情と關心とを拂るであらうか。もし例に依つて默殺を以て迎へられたとしても、余は原著者が受けた幾十年の迫害と虐待とを想ふて、余の境遇のまだしも平穩なるを感謝すべきでこそあれ、恨むべきでないことを自分に納得せしめんと心掛けてはゐるが、時に長大息の自ら洩れ出づることをまた如何ともし難い。

十卷を以て一先づ本全集を完了したるものとせんとする今一つの理由は、我等が精神分析學研究所より機關雜誌を刊行せんとする意圖にある。余をして暫く、自らを飜譯事業から解放して、獨創の研究と論評とに精力を傾注することを、乞ふ滿天下の讀者よ、許させ給へ。

×

卷末に添へた附錄『本全集總索引』は譯者が讀者諸氏の研究の便宜を思ふて、繁雜なる勞務をいとはず作成したものであつて、これに依つて斯學の研究は非常に便利になつたであらうことを確信する。

本文中『精神分析五講』に就いては、精神分析研究會員、農學士、現在滿洲國官吏千葉廣祥君の助力を辱うし、また本文中引用のフランス文の譯に就いては同じく精神分析研究會員松田俊武君の教示に負ふところ甚だ多い。共に記して兩君子の御好意に對する謝辭とする。

×

本卷の最後に添へたる前卷『分析療法論』の正誤表に就いては、その大半が精神分析研究會員松田俊武、廣井重一兩君の報告に負ふものであることを玆に斷ると共に、兩君の精讀と好意とを深く感謝しておきたい。このやうに我等の事業が志を同じくする會員諸君子の協力に依つて愈々完全のものになり行くことを發見するのは誠に欣懷の至りである。

×

この『緒論』の序に、本全集の讀者に對し、本全集の讀方を案內しておくことは、機宜の處置であらうと信じて、次にそれを揭げておいた。『總索引』と相俟つて、研究者諸氏に多少の親切を意味するならば、譯者の老婆心の喜びこれに過ぐるものはない。

×

以上は昭和八年三月に書いた譯者自序であるが、こゝに再版を見るに際し、附言すべきことは、本全集はこの序の文初に斷つてあるよりは數を增し、完全なフロイド全集とせらるゝ機會あるべきを期してゐると云ふことである。その時日に關しては姑く明言を避けさせて貰ひたい。

昭和十一年十二月

譯　者　識

本全集讀方手引

大槻憲二

フロイドは精神分析總合大學を計畫したことがあるほど、精神分析はその興味が多岐に亘るものであり、その體系が鉅大であるから、フロイドの全著作を讀んで見ようと云ふ人々は、まづ當面の書物が彼の全著作並びに全體系の內の何れの位置又は部署を占めるかと云ふことを大體心掛けてから取掛るのが便利であり、また精讀時の徒勞を省くと云ふものである。以下、私は本全集を手にする人々のために大體の案內役を勤めるであらう。

フロイドの著書はこれを大別すると

一、講義風のもの、總論風のもの

二、治療實驗の記錄、並びにその說明

三、理論的のもの——純粹理論的のもの／應用理論的のもの

四、應用的解釋の論——文藝學的／言語學的／宗教論的／その他

始めての讀者は第一類の『講義風のもの』から讀み出すのがよいことは勿論で、それには『精

神分析五講』が他の類似の諸書よりも一番適當なものであるが、遺憾ながら、この全集に於いてはこれは一番最後に、卽ち第十卷『精神分析總論』の卷頭に出ることになつてゐる。これはいさゝか順序を誤まつたものであるかの如くであるが、これは『總論』として他の結論的、概括的の諸論（例へば『精神分析運動史』や『自傳』）と一緒にする必要上から云ふ形をとつたのであつて、その代り最初に出版せられた『夢の註釋』に於いては卷末に『精神分析語彙』を附錄してこの語彙を一覽すれば、大體斯學の要領が呑込めるやうな仕組みにしておいた心算である。

併し精神分析の基礎知識がなくとも常識だけでも理解出來るのは『日常生活の精神分析』（本全集第二卷）である。我等はこの書から第一に譯出したかつたのであるが、彼の全著作中最も高名な『夢の註釋』を第一にしなければならない他の事情も存したのである。

一通り斯學の豫備知識を得たならば、第二類の『治療實驗の記錄並びにその說明』を讀まれるのが宜しからうと思はれる。これに屬するものとしては、

一、『夢の註釋』（第一卷）

二、『強迫神經症の一例』（第四卷の內）

三、『或る婦人同性愛者の心理的原因』（第九卷の內）

などがある。

第三類としては治療に直接役立つ應用理論的の書と、間接には勿論意義重大であるが直接には關係のない純粹理論的の書とがある。前者の例としては

一、『夢の註釋』
二、『日常生活の精神分析』
三、『療法論』(第八卷)

とがある。(一)は第二類の書としても擧げたがこゝにもまた擧げられる。(二)は無意識が意識の檢閲を裏切つて我々の行動を支配すると云ふ理論を人々の實際の日常(意識)生活の內から幾多の實例を取出して來て證明したものである。第三は分析治療の實際方法と經驗と理論とを說いたものとして興味の深い、醫家には是非認めたいものである。その他、

四、『性說に關する三論文』(第五卷の內)
五、『分析戀愛論』(第九卷)

の二書があるが、これ等は無意識心理現象としての性慾及び戀愛を論じた書で、生理學の云ひ及ばなかつたところを說き、非常に示唆が多い。フロイドはその戀愛道德論に於いて〝ニイチエ〟の强者道德に近付いてゐることは甚だ興味が深い。

純粹理論の書としては

六、『快不快原則を超えて』(第四卷の內)
七、『自我とエス』(第七卷の內)
八、『禁制論』(第五卷の內)
九、『集團心理と自我の分析』(第三卷の內)

などがある。

十、『トーテムとタブー』（第七卷の内）

十一、『機智とその無意識に對する關係と』（第六卷の内）

これ等の内（六）（七）（九）はフロイドの『超心理學』を説いた三部作として、理論上の奥義を極めるには精讀しなければならぬ。超心理學とは所謂經濟的見地、局所的見地、動的見地の三つを綜合して一つの心理過程を觀察する精神分析獨特の理論を云ふ。（八）は自我とエスの論を發展させたものである。これ等の論に於いて、フロイドの思想は屢々佛教の教義に近づいてゐる。佛徒にして精神分析に興味を寄せる人々の多いのは偶然でない。

（十）と（十一）とは應用理論の書で、前者には『野蠻人と神經症患者との心理生活に於ける二三の一致』と小見出しがついてゐるに徴しても分る通り、原始生活と神經病と小見心理などに共通する重大な特徴を指摘したもので、特に原始生活的要素をたほ多分に保存してゐる我々日本人としては思ひ當る節が如何にも多い。

（十一）はフロイドの所謂經濟的見地から機智、滑稽、諧謔などを論じた書で、精神分析から美學的領域への進出の最初の試みである。その他

十二、『諧謔』（第六卷の内）

十三、『詩人と空想』（同）

などは（十一）と密接の關係がある。

第四類の應用的解釋の論としては、まづ藝術方面のものを擧げれば、

一、『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼兒期記憶』(第六卷の内)
二、『ミケルアンヂエロのモーゼ』(同)
三、『匣選みの動機(主題)』(同)
四、『無氣味に就いて』(同)
五、『ゲーテの幼兒期記憶』(同)
六、『夢と童話』(同)

などがある。(一)は世界美術史上の謎となつてゐるレオナルド作『モナ・リーザ』の不思議な微笑が作者の幼兒時代に於ける母の俤の追想であることを各方面からの證據を擧げて論じたもので、かう云ふ種類の論文の内ではフロイドの最も得意とするものではないかと思ふ。實際私もこの書を一讀しないことは現代の有識者の恥辱であるとさへ考へてゐる。

(二)はモーゼの巨像が只今見る如き姿勢をとるに至つた前の體勢を想像し、そこから結果としての現状を推論した、實に微に入り細を穿つた論文で、精神分析が如何に普通人々の無視し看過してゐる細々した點に重大な意義を發見するかを示してゐるものである(三)はシェークスピアの『ヴェニスの商人』と『リヤ王』とを比較して一人の男が三人の女の内の最後の一人を選ぶ世界文學史的主題の起源と眞意義とを論じたもので、非常に深刻精到な恐ろしい論文である。(四)は無氣味の感が實は親熟したものゝ無意識内に抑壓されてその反對となつて感ぜられるものであることを各種の實證に依り明かにしたもので、内に去勢恐怖の文藝としてのアマデ・ウス・ホフマン

の『砂男』の批評がある。（五）と（六）とは藝術論としてよりも、或は臨床論的意義の多いもの（即ち第二類の書）であるかも知れない。

宗教や文明の如き現象に對する應用的解釋論としては、

七、『宗教の將來』（第三卷の內）

八、『文明と不滿』（同）

がある。前者は宗教の强迫神經症的要素を摘出し、キリスト教の弱者道德を分析的根據から批難したものであり、（九）は（八）の續論の如きものであるが、廣く文明一般の人類への弊害ある點を指摘して、人類の無意識的本能解放のために天下に呼號してゐる大文字である。

なほ言語學的論文としては

（九）『原始語の相反意義について』（十）『機智と無意識』（共に第六卷の內）があり、

敎育論としては

（十一）『子供の嘘二つ』（第九卷の內）

（十二）『婦人の同性愛の心理的原因』（同）

（十三）『幼兒性慾論』（第五卷の內）

（十四）『肛門性慾と性格』（第八卷の內）などがある。

その他、哲學的興味、生物學的興味、進化史的興味、社會學的興味などを以て見られる個所は全集のあらゆる隅々に散在してゐるが繁雜に亙るから一々の指摘は控へておく。

「精神分析總論」目次

目次

精神分析總論目次 終

精神分析總論

1909

精神分析五講

一九〇九年九月、マサチウセッツ州、ウスター市、クラーク大學創立二十年記念の際の講演。原名„Über Psychoanalyse, fünf Vorlesungen."

クラーク大學總長、心理學、教育學教授

ジー・スタンリ・ホール博士に

感謝を以つて獻ぐ。

第一講

滿場の紳士淑女諸君、玆に新大陸の篤學なる各位の前に講演者として立つことは、私にとつて一種の、今までに經驗したことのない感激の覺えられることである。私がかゝる光榮に浴するのも、一に、演題なる精神分析と私の名とが聯關して居る事に依るものと考へて、これから諸君に精神分析の御話を致し度いと思ふ。それには、その新しい研究方法、並びに治療方法が成立する迄の歴史、及び成立後の發展に就いて、あらましを出來る丈け手短かに述べるやうに心懸けて見る積りである。

精神分析の創始と云ふ事が若し一つの功績であるならば、其の功績は私に歸する者ではない。[1] 私は斯學の發端には當らなかつたのである。即ち、私が未だ白面の一學生に過ぎず、卒業の試驗にいそしんで居た時に、これまたヰインの醫師なるヨゼフ・ブロイヤー博士[2]が、此の治療法を初めて、ヒステリー病の少女に用ひたのである。(一八八〇—八二年)。そこで、吾々は先づその病歴及び處置史を調べて見る事としよう。詳しくは、其後ブロイヤーと私が合作發表した『ヒステリー研究』[3]を參照せられたい。

註(一)　一九二三年補筆、此點に關しては、『精神分析運動史』(一九一四年)中の一節に、私が精神分析に關する一切の責任を完全に承認して居る箇處を參照せられ度い。

(二)　Dr. Joseph Breuer. 一八四二年生れ、帝室學士院通信會員。呼吸及平衡感覺に關する研究にて著名。

(三)　『ヒステリー研究』ザイン、一八九五年初版、一九二二年第四版、其の内、私分擔の諸論文は紐育の A. Brill 博士の手に依り英譯されて居る。(エス・フロイド著『ヒステリー其他精神分析に關する論文選集』紐育出版、神經及精神病學モノグラフ第四卷、一九二〇年增訂第三版)。

が、その前に一つ申上げておき度い事は、この聽講者たる諸君の大部分がなまじつか醫者でない事を知つて、私は少からず滿足して居る事である。諸君は、私のこの講演を聽くのに、特に醫學の豫備知識が入用であらうと心配なさらない樣に願ひ度い。吾々はこゝ暫くは醫師達と同じ道を行くけれども、直きそれを離れて、今度はブロイヤー博士と共に、醫師のとは別の、全然特殊な道を辿るであらう。

ブロイヤー博士の婦人患者と云ふのは二十二歲の天生才ある少女であつたが、二年間に亘る罹病中に、打ち棄てゝは置けない色々の身體上、及び精神上の故障を呈したのである。即ち、右半身の手足が無感覺になつて硬直麻痺したり、時には、これが左半身に現はれたり、眼球運動の故障の爲め視力に色々の障害を來したり、頭部姿勢に苦痛を感じたり、强度の神經性咳嗽を覺えたり、食物を攝らう

とすると痙氣を催したり、又一度は、數週間も甚しい渇感を訴へるにも拘らず、水を飲む事が出來なかつたり、或は言語能力を失ひ、果は、母國語を話す事も理解する事も出來なくなつたり、遂には、失神、錯亂狀態に陷り、譫語を放ち、全性格の變換を來したりしたのである。これ等の病徵に就いては、後に考へる事とする。

このやうな症候を聽くと、諸君は假令へ醫者でなくとも、これは多分、腦か何かの非度い病氣で、治療の見込みも餘りあるまい、間も無く、患者は死亡したに違ひないと推測する事であらう。ところが若し諸君が、醫師にこれを尋ねたならば、こんなに非度い徵候があつても、諸君の豫想と別の、遙に樂觀的な見方の方が正しいのであると聞かされるのである。卽ち、かゝる徵候が、命に關る重要なる內臟器管（心臟、腎臟）を客觀的に調べても正常であつて、それで尙、甚しい精神上の變調が、若い婦人に現れるのならば、而して一つ〳〵の徵候が若干の微細の點で豫想に外れるのであるならば、醫師は其れを重大と解しないのである。彼は腦に何等の器官的障害があるのでもない。只ギリシャ醫學以來ヒステリーと名付けられた一種の不思議な精神狀態が現れて、此れが色々な非度い發病徵候を裝つてゐるのであると主張し、而も生命は別段危險に瀕して居ないから、大方自然に、健康が回復して來るだらうと考へるのである。斯るヒステリーと器官のほんとの障害との區別は、仲々容易ではな

いが、我々は醫師が此の區別診斷を如何に行ふかを知る要はない。只ブロイヤー氏の此の少女患者の場合は、正に、如何なる醫者に見せてもヒステリーであると云ふ診斷を下すに相違ないものであつた事を確めれば足りるのである。更に茲で、病狀報告から、彼女が特別なやさしさを以つて(zärtlich)親愛する、危篤の父親の看病をして居た時に發病したこと、彼女自身が斯く發病してから、看病を止めなければならなかつた事を附け足す事が出來る。

醫師共と一緒に廻つて來て利益があるのはこゝ迄であるから、こゝらで彼等と別れよう。と云ふのは、腦髓に器官上の異常が無くてヒステリーであると診斷されたからとて、醫師の治療に依つてこの病が直る見込みが多くなつたとは期待出來ないからである。重い腦病に對しても、醫術は大抵の場合無力であるが、ヒステリー病患に對しては全く爲す所を知らないのだ。彼は只その內に直るだらうと云ふ豫報診斷を下しておいて、それが何時、又如何にして實現されるかは、全く天の御慈悲に任せて拱手して待つのみである。[一]

註(一) この斷言は今日には旣に當て嵌らないものであることは、私も承知してゐるが、本講演中では、私も私の聽講者も一八八〇年代以前に戾つて居るのである。またその後、情勢が變つて來たのも、實は私が今その歷史を槪述して居るところの研究勞作が大部分これに與つて居るのである。

故にヒステリーであるとの診斷だけでは、患者には何の益にもならないが、醫師には大いに益になる。卽ち、醫師はヒステリー患者に對しては、器官上の患者に對すると全く別の態度を取る事を我々は看取する事が出來る。先づ、前者に對しては、其の障害はさう重大でない、隨つて重大に扱ふに値ひしないからとて、後者に對する程の同情を寄せない。而もこれのみではない。醫師は其の修業からして、素人には手の屆かない多くの事を學んでゐる。例へば、卒中、又は腫瘍患者の腦中にある發病原因及病的變質を頭に描いて見る事も出來、病狀に詳細に通曉してゐれば、其の描く所も、或る程度まで妥當であらう。が、事一旦ヒステリー現象に關する限り、彼のあらゆる解剖生理學的乃至は病理學的豫備知識も、少しも彼の助けにならないのだ。彼はヒステリーを理解し得ず、其の前に立つときは、素人と全く同一である。さうして、これは今まで己れの學識に斯くも自惚れてゐた者には決して快い事ではないのだ。さうなると、彼はヒステリー患者に少しの同情も示さず、彼等を自分達の醫學の法則を犯す違反者と見做し、恰も、正教信者が邪教信者を目擊した時の樣に、彼等に凡ゆる惡口をつき、彼等を仰山、故意の見せ掛け、假病だと責め、遂には罰として、斯んな者に係つて居られないとて、手を引いてしまうのである。

所で此の非難は、ブロイヤー博士の其の患者の扱ひ方には當て嵌まらない。彼は最初の內こそは、

どう治療して良いかは知らなかつたが、十分の同情と關心とを寄せたのであつた。恐らく、彼女も其の精神上の並びに性格上の長所で以つて、治療法の發見を助けたであらう。同氏等の病歴中にも處々此の少女の才媛であつた事が見える。兎も角、氏は同情ある觀察に依つて第一の治療法を發見することになつたのである。

話戻つて、この患者が失神狀態、乃至は錯亂を伴ふ性格變換中に、よく自發的に或る文句を呟くのが觀察され、其の文句がどうも何か彼女の胸裡を去らない或る事情から發して居るのではないかと思はれたのである。そこで、醫師は其の文句を書き留めて、患者を催眠狀態に導いて、其の度毎に其の文句を云つてやつて、彼女が其れに話頭を結び付ける樣にと仕向けたのである。ところが患者は、これに應じて醫師の前で、失神中ならば彼女が暗誦して居て片言の樣に口走つた文句の中に正體を現はしかけた心理的所産を、想起し、物語つた。それは、よく、少女が父親の病床に侍る樣な時に起り勝ちな、甚だ悲しい、時には詩的に迄美しい空想――寧ろ白日夢とも呼ぶべきか――であつたのである。さうして、彼女がかゝる空想を幾らか物語つてしまうと、恰も釋放されたかのやうに、平常の精神狀態に戻る。が、この健康も數時間續いては、又翌日消えて、再び失神狀態を現はし、これがまた同じ樣にして新たに創作した空想を物語ることに依つて、消えるのであつた。そこで、如何しても失神

中に現はれる心理的變調は、此の非常に感動的な幻想的形成から源を發する亢奮のため起るものであると考へる外はないのである。患者自身も——罹病の此の時期中奇妙にも英語丈け話し、又理解出來たのではあるが——此の新しい治療法に談話療法(Talking Cure)の名を與へ、また冗談に煙突掃除(Chimney Sweeping)と呼んだ。やがて殆ど偶然的に、かく魂を掃除する事に依つて繰返される魂の溷濁を一時的に取除くだけに止まらず、其れ以上が成し得られる事が判明した。卽ち、どう云ふ動機で、又どう云ふ事情から、此等の病徵が初めて現はれたかを催眠中に回想して、其の感動を釋放することに依つて徵候を解消させる事も出來たのである。『或る非常に暑い夏に患者は甚しく渴を覺えたが、何か自分でも分らない譯のために、水を飮む事が突然出來なくなつたことがあつた。卽ち、熱望してゐた水のコツプを手に取つて唇に當てると、恰で恐水病患者の樣にそれを推し除けてしまうのである。その時、幾秒間かは、一種の失神狀態にあつた事は明かであらう。で、彼女は苦しい渴を、果物、メロン等で癒める外はなかつた。それから、約六週間經つてまた、彼女は或時、催眠中に、彼女の嫌ひな或る英人の同僚婦人を酷評し、極度の嫌惡の情を見せて、自分が其の部屋の所に來た時、其の英國婦人の小犬——嫌やらしい小犬が、コツプから直かに水を呑んで居たことを物語つた。彼女は、其場は失禮にならぬ樣にと、何も口に出して云はなかつた。さうして、更に力強く彼女にこびり付い

てゐた鬱憤を發散してしまつて、何の故障も無く多量の水を飲み、コツプを唇にあてたまゝ、催眠狀態から醒めた。さうして其後、此の障害は消滅してしまつたのである』(1)

註(一)『ヒステリー研究』、第四版、二十六頁。

まだも少しこの患者の話を續けるが、我慢して下さい。此の時まで誰も、ヒステリー徵候をこんな方法で取除いたこともなければ、またヒステリーの原因の理解にこれ程深く入つた人もなかつたのである。若し、患者の其の他の徵候が、(うまく行けば更に徵候の大部分迄が)、上に推定した樣にして發生したもので、さうして上の如き方法で、治療することも出來ようと云ふ期待が成立つならば、此れは實に一つの劃期的な發見である譯だ。ブロイヤーは勞を惜まず此の事を確めようと努め、今度は秩序的に、他の更に重い徵候が如何なる病理的過程に依つて發生するかを硏究したのだ。ところが、果して期待した如く、殆ど凡ゆる徵候は、感動的經驗——これに我々は後に心理的外傷なる名を與へた——の殘滓、或は(語弊があるが)沈澱物とも云ふべきものとして發生してゐるので、其の突飛な點も、其の原因となつてゐる外傷的場面との關係から說明されるのである。それ等は術語で云へば其の記憶殘滓を成す所の場面によつて決定されてゐるもので、最早、神經症の出鱈目な、又は不可思議な發動として解しなくともよいことになつた譯である。只茲で期待に背くやうな事を一つ云つてお

かなければならない。症候の動機となつた經驗は何時も只一個とは限らず、大抵は數多くの、時には反復された非常に多くの類似な外傷が共同作用して居る事である。さうして此の病源となつて居る一聯の記憶は、再生する際にも、時間的順序に、而も逆の順序に、卽ち、最後のものを最初に、最初のものを最後に、と云ふ風に溯らなければならないもので、後に經驗した者を省略しては最初の、而して屢々最も影響重大なる外傷に、直接到達する事は、決して出來ないのである。

諸君はなほ、コツプから水を呑む事に對する嫌惡の爲に起つた恐水病の他に、もつと別のヒステリー症候發作の例を私から聞き度いと望まれる事と思ふが、私は私のプログラムに從つて、極く少數の例に止めなくてはならない。ブロイヤー氏は、彼女の視力障害が次の如き動機に出づるものであると述べてゐる。『該少女患者は、眼に涙を湛へて父の病床に侍つてゐた際に、突然父から何時かと尋ねられて、時計を見たところよく見えなかつた。で、懸命に見ようとして、時計を眼のところまで持つて來たのであるが、そのとき時計の文字板が非常に大きく見えたこと(大視症、及び內斜視)、また病人(父)に涙を見られない樣にと一生懸命涙を匿へたことから、發してゐたのである。』[二] 病源となつた印象は皆、彼女が病父の看護に當つてゐた時に生じたのである。『或時、彼女は父が高熱を發したのに大變心配して、ポインから醫師が手術に來るのを待ちつゝ、非常な緊張裡に一夜を明かしたことがあつ

た。丁度、母親は暫く他へ行つてゐたので、アンナは病床の傍に、右腕を椅子の背にもたせて坐つてゐた。其時、一種の覺醒夢想の狀態に陷つて、壁から一匹の黑い蛇が現れ病人に近付き、今にも病人を嚙まうとしたのを見たのである。(恐らく家の背戸の草原にほんとの蛇が居て、少女は前にも其れに慴いた事があり、其れが此の錯覺の材料となつたのではあるまいか)。彼女は、蛇を逐拂はうとしたが全身不隨の樣になつてゐた。卽ち、椅子の背に掛けてゐた右腕が痺れて、無感覺で利かなくなつたのである。さうして其の腕を見つめてゐると、指先が小さい髑髏(爪)を持つた小さい蛇に變つてしまつた。大方、彼女は痺れた右手で蛇を逐ひ拂はうとしたのであらうけれども、それで蛇の錯覺と聯想されて、右手の無感覺乃至麻痺が現はれたのである。次に、蛇の一場が消えて後、彼女は不安に驅られて祈らうとしたが、何の國語も使へず、やつとの事で英語の兒童詩を一つ思ひ出し、爾後この英語でのみ物を考へたり祈つたりすることが出來た。』(二) 催眠中に此の場面を思ひ出して後は、發病當初以來付き纏つてゐた右腕の硬直麻痺が除かれ、治療は終つた。

註(一)『ヒステリー研究』第四版、三十一頁。
(二) 前揭引用書、三十五頁。

數年經つて、私がブロイヤーの研究法並びに治療法を、私の患者に施してみたが、私も彼のと全く

一致する經驗を得たのである。一人の約四十歳の婦人が筋肉攣縮症（tic）に罹つてゐて、彼女が興奮して仕事をしてゐる時には、別に動機もないのに、舌鼓のやうな妙な音をさせるのであつた。此の病は二つの經驗から起つたもので、そして其の二つの經驗には、彼女が今度こそは音を立てまいとして而もまるで一種の逆意志に驅られて、丁度其の音で沈默を破つたと云ふことが共通してゐる。其の内の一度は、病氣の子供をやつとの事で寢かしつけて此れで目を醒まさない樣に靜にしなければならないと獨言を云つた時でもあり、今一度は彼女が雷雨の中を兩人の子供と一緒に馬車を驅つてゐた際、馬がおぢけてゐたので、彼女は此れ以上馬を驚かさない樣にと氣を付けて、物音を避けて居た時であつた。(一) 私は玆に多くの例を擧げずにこの例だけに止めて置くこととし、其他は『ヒステリー研究』中に讓ることとする。(二)

註(一) 前掲引用書、第四版、四十五、四十六頁。
(二) 同書より拔萃は其の後ヒステリーに關する二三の研究を增補して、現在は紐育の A. A. Brill 氏の英譯中に含まれてゐる。

諸君、こゝらで私は一般的論斷を下すことを許されたい。實際、またこんな要約した敍述には些少い例から一般的論斷を下すのも止むを得ないことである。私の今までの知識を次の樣に、まとめる事

が出來る——我々の扱つてゐるヒステリー患者は、過去の記憶の爲に病むでゐるのである、と。彼等の徴候は或る（外傷的）經驗の殘物乃至は記憶象徴なのである。玆で用ひた象徴は、他の方面の表象を引合ひに出してみれば一層明かになることと思ふ。我々が大都市を飾る紀念像又は紀念碑もこれに類する一種の紀念象徴である。倫敦の街を散歩して見ると、市中最大の停車場の一つである或る驛の前に、一つの念入に裝飾したゴシック式の柱、卽ち、チャーリング・クロス（"Charling Cross"）がある。十三世紀の或るプランタジネット家の皇帝が、彼の最愛なるエリナ Eleanor 皇后の骸をヱストミンスター寺院へ運ばせて後、棺を下した驛毎に、ゴシック式の十字架を立てさせた。で、チャーリング・クロスは此の悲みの道行きの思ひ出を止める最後の紀念物なのである。(二)また倫敦橋から程遠からぬ處に、只『紀念碑』と呼ばれる、もつと近代的な立柱が高く聳えてゐる。これは一六六六年に其の附近から發火して、街の一大部分を破壞し去つた大火を紀念するものである。で、これ等二つの紀念物も紀念象徴物であることは、ヒステリー徴候と同じである。只、若し現代の經濟組織の波に壓されて自分の仕事も忙しいことを忘れて、又は、自分自身の若き皇后樣の御壯健を慶ぐのを忘れて今日も此の紀念柱の前に悲みに沈んで立ちつくしてゐる倫敦市民があつたならば、若しくは倫敦市が大火以來こんなにも復興してゐるのに、尙も此の『紀念碑』の前で、曾て彼の愛する倫敦市街が灰燼

に歸した事を泣くロンドン市民があつたならば、諸君はその人を何と思ふだらうか。ところが、ヒステリー乃至神經症患者は、正にこの兩人の浮世離れのした倫敦市民の樣に、振舞ふのである。而も只に遙か過去の苦しかつた經驗を追想する許りで無く、生々とした感動を以つて執着してゐて、過去の現實を過去の現實として置くことが出來ず、それの爲に現在の現實を等閑に附してしまふのである。この病源となるべき外傷へ精神生活が定着することが、神經症の最も本質的な、且つ實際上最も意味深い特質の一つである。

註(一) 或は寧ろ、さう云ふ紀念柱の後世の模寫物と云ふ方が正しいかも知れない。また E. Jones 博士は、Charing Cross なる名稱も Chère reine 〔愛する皇后〕と云ふ言葉から出たものであると云つてゐる。

諸君は、ブロイヤーの少女患者の病狀報告を考へて見て、多分一つの反對說を心に抱いて居られることと思ふ。それは尤である。僅かに、彼女の外傷は皆病父を看護してゐた時に發したもので、其の徵候も、父の病氣乃至は死去に對する記憶象徵としてのみ、理解する事が出來るものである。して見れば、それ等の外傷は悲嘆に相當したもので、死者の追憶に定着する事も、其の死を去る間も無い內は、僅に病理的ではなく、寧ろ常態の感情發露であると云ふべきだと。成程、ブロイヤーのこの少女患者の場合は、外傷に定着するのも、確かに變態的ではない。それは私も認める。が、其の外の場合

に於いて、例へば、私の扱つた、筋肉痙攣の場合に於いては、其の動機は十五年、十年以上も前に溯るのであるから、病的に過去に執着してゐる事は明瞭で、而してブロイヤーのあの患者と雖も、若し外傷經驗後、乃至は病徴發生後、あんなに早く、吾々の云ふ洗ひ流し療法（Kathartische Behandlung）を受けてゐなかつたならば、恐らく同じ事になつた事であらうと思ふ。

吾々はこれまでのところでは、只ヒステリー徴候と患者の生活史との關係だけを討究したのであるが、尚進んでブロイヤーの觀察中の二個の要素から、發病及回復の過程を如何に解すべきかに就いての示唆を得ることが出來る。先づ注意すべきことは、ブロイヤーの患者が、病源となつた殆ど總ての境遇立場に於いて、或る亢奮を抑壓してゐて、それに適した言語動作でそれを發散してゐないと云ふ事である。彼女の婦人家庭教師の小犬のつまらない一件に於ても、世間なみに遠慮して、彼女の甚しい嫌惡感の發露を抑へてしまつてゐる。また彼女が父の病床に侍つてゐた時、病人に自分の憂慮を、苦しい心痛を見られまいと、間斷なく氣を配つてゐたのである。後で、醫師の前で此の同じ光景を再體驗した時、當時抑壓した感情は、恰も其れ迄長い間蓄へられてでも居たかの如くに、特に猛烈に現はれたのである。然り、かの經驗が殘して行つた症候は、醫師がその原因に近く迫つて行くにつれて、その強度の全體を取り返して、遂に洗ひざらひぶちまけられて了つてから消え去つたのである。

また他方に於いて、外傷的場面を回想して醫師に話しても、何かの譯で感動の發露なしに過ぎてしまつたら、治療的効果はないものであることが、經驗に依つて知られる。かかる感動は、云はば、一種の伸縮し得る量であつて、其の消長が纒綿の、又回復の程度を決定するのである。そこで、病氣は或る病源的境遇の際に發生した感情がその常態的發散を閉鎖された爲に起つたもので、病氣の眞諦はこの匿し込められた感動が或る變態的な轉向を採つた事にあるのだと、考へざるを得ない事になる。卽ち、一部は、精神生活の永續的負擔となり、不斷の興奮の禍根となつて保存され、一部は、異常の神經的思考作用(Innervation)乃至禁制へと變化され、これ等がこの病氣の肉體的症候を形成するのである。我々はこの後者の過程に對して、ヒステリー的轉換(hysterische Konversion)なる名稱を與へたのである。吾人の精神的エネルギーの一部分は、正常の場合には、肉體的神經作用となつて導かれ、吾々が感情の表現と呼ぶところのものとなつて生ずる。ヒステリー的轉換とは、取りも直さず、感情に色彩された精神過程の此の部分が極端に誇大されたもので、それは只今のより遙に強度の、感情表現に相當するものでそれが別の方向へ導かれてゐるのである。例へば、一つの河が二つの水路に分れてゐる場合には、一方で流れが障碍されれば、他方で汎濫する、それと同じである。

諸君は、我々が斯くして、感動過程を第一位に置く所の、ヒステリーに關する一つの純粹に心理

學的な理論に到達した事に氣付かれるであらう。ブロイヤーの第二の觀察に依つて、また吾々は、病的現象の特徴を述べる際には意識狀態に重大なる意義を置かざるを得なくなつてゐる。ブロイヤーの件の患者は、常態の外に、なほ失神、錯亂、乃至は性格變換の如き色々の精神狀態を示してゐた。さうして常態では、彼の病源となつてゐる場面、及びその場面と徴候とに連關がある事を少しも知つてゐない。卽ち、かゝる場面を忘却してゐたり、或は少くとも病源的連關の聯想が切れて居るのである。ところが、彼女を催眠狀態に導いて、隨分骨を折つて見たところが、これ等の場面が記憶へ甦つて來、またこの想起の方法によつて病徴をも取除く事が出來た。で、若しこの場合、催眠術を實施し實驗する事に依つて、其の途を開かれなかつたならば、これ等の事實を如何に解釋す可きかは、全く五里霧中に迷つた譯であつたのだ。催眠的現象の研究に依つて初めて、同一人に於いて、精神を數個の群に別つ事 (mehrere seelische Gruppierung) が可能で、これ等は互に殆ど聯關して居ず、卽ち互に何も知らずに居て、それで、意識を交互に自分の方へ別々に引寄せると云ふ、一見しては奇異に思へる見方を、我々はせざるを得なくなつて來たのである。二重性格 (double conscience) と名付けられるものに似た場合は、旣に、時偶自然に發生し、現れてゐる。かく人格の分裂に於いて、意識が必ず、それと結合する方の精神狀態を吾々は意識的と呼び、意識から引き離される方を無意識

的と呼ぶ。催眠中に與へられた云ひ附けが、覺醒狀態に戻つて後も命令的に果されると云ふ、誰も知る所謂覺醒後に及ぼす催眠の暗示（post-hypnotische Suggestion）の現象に於いて、意識狀態が無意識狀態に依つて影響を蒙る（よしんば意識は無意識の存在を知らないにもせよ）と云ふ事の見本を見ることが出來る。で、この見本に倣つてヒステリーに於ける種々な事實をも解釋することは、確に可能なのである。ブロイヤーは、ヒステリー徵候が斯かる特殊な精神狀態——彼は之を催眠類似狀態と名付けた——から發するのであると推論した。かゝる催眠類似的狀態中に起つた感情的性質の經驗は容易に病源となる。何故なれば、斯かる狀態は感情の正常なる釋放に都合よい條件を提供しないからである。さうなると、此の感情から、特異な産物、卽ち徵候が發生し、此者が正常の精神狀態の中へ異物として投出されるので、從つて正常精神狀態には、催眠類似的で病原となつてゐる境遇事情の如何に重大であるかが分らなくなつてゐるのである。卽ち、徵候があるところには、また健忘が、記憶の穴があり、この穴を充たす事は直ちに、徵候の發生條件の除去を意味するのである。

私は今迄述べた所が諸君に充分徹底しなかつたかも知れない事を恐れる。が、どうか、我々は只今一つの全く新しい、難かしい見方を、而も恐らくこれ以上には大して明かにし得まいと思はれる見方を、論じてゐるのだと云ふ事を考慮せられたい。これは正しく、吾々が今までの知識を以てしては、

未ださうこの問題に深入りして居ない事の證據である。ブロイヤーの催眠類似的狀態と云ふ考へ方は今では色々の點で不便であり不必要であることが分つて、今日の精神分析の考へ方では之を棄てゝゐる。このブロイヤーは催眠類似的狀態だけを病源的契機として擧げたけれども、それ以外に如何なる影響や過程があるかを、私はこれから段々少くとも暗示的にお話して見よう。諸君は尙、ブロイヤーの研究は、今觀察した現象に對しても不完全な理論、不十分な說明をしか、與へて居ないと云ふ印象を持たれるかも知れないが、其は無理からぬことである。が、完全なる理論と云ふものは天から降る樣に、最初から出來上つてゐるものではない。寧ろ若し誰かが諸君に、觀察の最初から、遺漏のない完成した理論を提出したならば、其時こそ諸君は一層大いに警戒すべきであらう。さう云ふものは、稍々、思辨の產物に過ぎず、事實の先入觀念無き研究の成果ではあり得ない事は確かである。

第二講

諸君。前講御話しした少女患者に、ブロイヤーがかの『談話療法』を施してゐたのと殆ど同時に、シャルコー先生もサルペティエールのヒステリー患者たちに就いて、巴里で研究を開始してゐたのであるが、此の研究からやがて本病に関する理解が得られるに至つた。が、その研究結果は、當時未だギインでは知られてはゐなかつた。ところが十年も經つて後、ブロイヤーと私が前述の少女患者の洗滌療法に關聯して、ヒステリー現象の心理的機制に就いて差當つての報告を公表した時、我々は二人ともシャルコーの研究に囚はれてゐたのである。吾々は、吾々の扱つた患者の病源となつた所の經驗を、（心理的外傷として作用したところの經驗を）、肉體的外傷（そのヒステリー的麻痺に及ぼす影響をシャルコーが確めた所の肉體的外傷）と、同一視したのである。さうしてブロイヤーが催眠類似狀態なるものを主張したのも、取りも直さずシャルコーが催眠狀態中に、ある外傷的麻痺を人工的に再生せしめたと云ふ事實の反映に外ならなかつたのである。

此のフランスの偉大なる科學者の許で、私も一八八五年から八六年に掛けて學んでゐたのだが、彼自

身は心理學的見解には氣が向いて居なかつた。その門弟ジャネー P. Janet に至つて始めて、ヒステリーに見られる特殊な心理現象を一層深く洞察研究するやうになつた。で、吾々も、彼の例に倣つて精神の分裂、人格の不統一を我々の見解の中心點とするやうになつたのである。ジャネーもヒステリーに關する一つの理論を說いてゐるが、それは遺傳及び退化に關する、フランスを風靡してゐる諸學說を考慮に入れたものである。即ち、彼に依れば、ヒステリーは精神系統の退化的變質の一種であつて、心理綜合機能の先天的脆弱となつて現はれてゐるのだ、と。ヒステリー患者は、出發から既に心的過程の複雜多樣を相關統一させ得ないものであつて、その爲め心的分裂の傾向が現はれると云ふのである。で、若し卑近な、併しはつきりした比喩を用ふることを許されるならば、ジャネーの所謂ヒステリー患者は、例へて云へば、一人の力の弱い婦人が買物に出掛けて山程の箱や包を抱へて歸つて來るのではあるが、二本の手で十本の指でそれ丈の荷物は到底持ち切れない爲め、先づ手から一つが拔け落ちる、それを拾はうとしてかゞむと、又一つ落ちると云つた樣なものになるわけである。

が、ヒステリー患者をかく精神的虛弱と考へては、彼等の機能が下がる以外に、一種の補償として機能能力が一部分向上する例も見られるのはどう云ふわけか、それのつじつまが合はないことになる。ブロイヤーの少女患者も、英語以外は母國語その他の外國語も忘れてしまつてゐるのに英語だけは書

だ自由にあやつり、彼女にドイツ語の本を渡してやると、誤りのない流暢な英語譯を立ち所に讀み下すことが出來た位であつた。

ブロイヤーが始めた研究を後で私が自力で續行するに及んで、ヒステリー的に意識分裂の生ずることについて、間も無く別な見解を持つやうになつた。このやうに私の見解が甚だ離け離れ、根本的に相違することになつたのも已むを得ないわけであつた。何故なれば、私は、ジャネーの樣に研究室での研究からでなく、治療上の試みから出發したからである。

私は、何よりも、實踐的必要に驅られて居たのだ。ブロイヤーの施行した洗ひ流し療法は、患者を先づ深い催眠狀態に導く事が出來ることを前提とする。即ち、催眠狀態に於いてのみ患者は病源となつた事件を知つてゐるのであつて、平常狀態に戻れば忘れてゐるのである。ところが、此の催眠も私には、氣まぐれな、云はゞ、神秘的な手段でしかなくなつたのである。如何に努力しても、總ての患者を催眠狀態へ導き得ない事を知るに及んで、私は催眠法を棄てゝ、洗ひ流し療法とこれとを分離せしめようと決心したのである。即ち、私が、私の大多數の患者の精神狀態を意のまゝに變換出來ないとすれば、彼等を正常な狀態に置いたまゝで色々と努力して見ることにしたのである。これは勿論、一寸考へると無意味な、見込みも無い企てに思はれる。何しろ、患者の内から、醫者も知らなければ、

患者自身も知らない事を知らうとすることである。どうしてそんなことがうまく行かうと考へられよう。その時私は、曾てナンシー Nancy のベルネイム (Bernheim) の許で、一つの甚だ注意すべき、暗示に富んだ試みを觀たことを想起して、この難場をば打開したのである。卽ち、ベルネイムは或る時、催眠的夢遊狀態に導かれて色々の事を經驗させられた人々は、夢遊中に經驗した事を外觀上では忘却した樣になる事、及び平常狀態に於いても彼等（被施術者）にこの記憶を呼び醒まさせ得ることを、吾々に示して吳れた事がある。夢遊狀態中に經驗した事を尋ねて見ると、彼等は初めの內は何も知らないと頑張るけれども、一步も讓らず追窮し、又は知らないと思つても實は知つてるのだと請合つてやると、忘却した記憶が何時も蘇つて來たのである。

それ故に、私も患者に左樣して見た。患者がもうこれ以上何も知らないと云ふところ迄來ると、私は彼等に、さう云つても確かに知つてゐるのだからそれを云はなくてはいけないと云つてやり、私が患者の額に手を置いた瞬間に現はれる回想が取りも直さず所要のものだと敢て主張したのである。斯くして私は催眠術を用ゐる事無く、忘却せる病源となつた場面と、それが殘して行つた症候との間の連關を再生せしめるに必要な事項を、皆知る事が出來た。が、これは非常に骨の折れる、隨分長くかゝる方法で、仕上つた手法ではなかつた。

けれども、私は此の方法で得られる觀察からして決定的な結論を引き出す迄は、この方法を放棄しなかつた。で、遂に私は忘れられた記憶は實は失はれたものでない事を確め得たのである。卽ち、患者はまだ其れを所有してをり、それは彼の他の心的內容といつでも聯結しようとしてゐる。が、何か一種の力が、それを阻碍して無意識のまゝに止まらせてゐるのである。この一種の力の存在は確に推定されたのである。何となれば、これに抗して、患者の無意識にある記憶にまで導かうとすると、相當の努力が要ることを自身で感ずるからである。さう云ふ工合で、病的狀態を保持せんとするこの力を患者の抵抗と云ふ現象から認めるやうになつた。

そこで、私はこの「抵抗」〝Widerstand〟なる概念を基礎としてその上に、ヒステリー患者の心理的過程についての理論を立てる事とした。患者を治癒するには、この抵抗を克服する事の必要である事が旣に確められてゐた。さて快癒する時の機構を出發點として、今や、發病に至つた顚末が判然と理解される譯である。卽ち、今日抵抗として、忘却されてゐる事柄の意識化を妨げてゐるこの力そのものが、曾てはこの忘却を起させ、問題の病源的細胞を意識から追出したに過ぎない。私はこのやうに假定した過程を「抑壓」〝Verdrängung〟と名付け、抵抗の存在が否定し得べからざる以上は、この抵抗も證明されると見たのである。

が、玆になほ問題がある。こゝで云ふところの力とは一體何者であるか？　吾々がヒステリーの病源的機制をその中に認めるところの抑壓の條件は何か？と。それには、病源となつた種々な立場や境遇を比較研究する事を既に洗ひ流し療法で學んでゐるから、この比較研究に依つてそれへの答を與へることが出來る。かゝる立場や境遇に於ける種々な經驗の際、當人の他の諸願望と全く正反對なる一つの願望——患者の人格の倫理的又は美的自負とは調和し得ない願望——が偶々現はれてゐたのである。そこで一寸した抗爭が起つて、結局この内的抗爭は、かの聽屆け難い願望の代表として意識面に登場して來た觀念の抑壓となつて終りを告げる。そこでそれに附屬する記憶と共に意識から驅逐され忘れられてしまふのである。件の觀念が患者の『自己』と調和しない事が抑壓の契機で、個人の倫理的その他の自負が抑壓する力である。かく、調和せざる願望が發動してをり、それに續いて抗爭が起るので、心中に高度の苦痛が生じてゐる。この苦痛は抑壓に依つて避けられる。このやうに抑壓に依つて苦痛を避けると云ふことは、このやうな場合に於ては明かに、人格を守護するための一つの工夫である。

このやうに抑壓の條件及効用がよく現はれてゐる例を私はあまり澤山擧げる事はしないが、一つだけ擧げて見よう。それには、私は病歴をも手短かにお話しし、多くの價値ある理論的考察をも、この

目的に副ふ樣、簡略にする事を御斷りして置く。その患者と云ふのは或る若い娘で彼女はその父親に深く愛着してゐたのだが、その父親が、つい先頃亡くなつたのである。丁度ブロイヤーの少女患者の場合にそつくりの境遇である。ところが、彼女の姉が結婚してから、新しい義兄に對して、特別な好意を持つ樣になつたが、未だ暫くは容易に親戚故の親密と云ふことで濟んでゐた。ところが、この少女とその母親が不在の時に、この姉が死んでしまつたのである。で、二人は至急呼び戻されたけれども、この痛ましい出來事は詳しくは知らしてなかつた。この少女が死んだ姉の枕頭へ寄つた時、一瞬間一つの考へ——簡潔に直して云へば、大體、これであの人も自由な體になつて、私と結婚出來るのだと云ふ考へ——が現はれた。義兄に對する自分の知らなかつた、强い愛を暴露したこの考へも、次の瞬間に彼女の反撥的感情に依つて抑壓されたと推定して間違ひはない。少女はそれで病に罹り、重いヒステリー症候を呈するに至つた。で、私が彼女を處置するやうになつた時には、姉の死床の場面も、彼女の心中に起つた厭らしい利己的な慾望も、完全に忘れて了つてゐるやうに思はれた。彼女は處置中に其を想起し、此の病源になつたこの契機を激しい感動と共に再體驗し、かくして健康に復したのである。

私は、吾々御互の只今の立場からの一つの卑近な例で以て、抑壓と、抵抗に對するそれの必要的關

係とを、諸君に一目瞭然たらしめることが出來るやうに思ふ。今この講堂に、この聽衆に——その模範的沈靜と謹聽振りとに對しては、私は賞讚の辭を知らないほどであるが——私を妨害し演題から注意をそらせようとして、不行儀に笑つたりお喋舌りをしたり足で音を立てたりする人が假りにあつたと想像する。私は、これでは講演を續けられないからと云ふと、諸君の內から力の强さうな人が數人立上つて、一寸競合つて後にこの邪魔者を扉の外へ突出す。さうなると彼は『抑壓』されたことになり、私は講演を續ける事が出來る。が、その退場者が堂內に入らうとしても、さう云ふ邪魔が、二度と入らぬ樣に、私の意思を實行して下すつた人達は椅子を扉口に据えて、抑壓を完全にする樣、自ら抵抗として立つであらう。この室の內外を心理上の意識と無意識とに移して考へるならば、抑壓の經過について判然とした觀念を持つことが出來よう。

こゝまで來ると、諸君は我々の見解とジャネーのそれとが如何なる點で異るかゞ、お分りになつたであらう。吾々は心理分裂の生ずるのを、心的裝置が先天的に統合へ達する力を持たないためとせずに寧ろ動的に相克する二三の心力の抗爭として說明し、二つの心的コムプレクスの能動的な軋轢の結果と認めるのである。吾々の見方からは、數多くの問題が現はれて來る。心が葛藤を起すと云ふ場合は到るところ頻發するが、その結果が必ずしも精神の分裂ではない。葛藤が分裂となつて結果するため

には、なほ他の條件が入用である事は否み得ないわけである。私も、抑壓を假定しただけでは萬事解決とするわけには行かず、寧ろ心理學說のほんの出發點に過ぎない事を認める。が、吾々は一度に一歩しか進めることは出來ないものであるから、完全に知り盡すには更に立入つた研究に待たなければならない。

諸君は、ブロイヤーの少女患者の場合を抑壓と云ふ觀點から見たらどんなものかと考へるかも知れないが、其の試みは止した方がよい。その話その物が、催眠術を施行して得られたものであるから、このやうな試に適しないのである。催眠を排除して始めて抵抗と抑壓を認める事が出來、從つて實際の發病過程について正確な觀念を持つことが出來るのである。催眠狀態になると抵抗が隱れてしまうので、心的領域のある部分に自由に近付くことが出來るやうになる。隨つて、催眠のために抵抗は、この開放された領域の境界線上に圍ひの樣に積み上げられてそれ以上先きへは總てが行けなくなつてしまうのである。

吾々がブロイヤーの觀察から學んだ最も價値ある點は、症候と病源的經驗、或は心理的外傷との相關々係に就いての結論であるから、これを吾々の抑壓說の立場から評價して見る事を忽せにしてはならない。一見しては、抑壓から如何して症候が形成されるに到るかの見當がつかない事と思ふ。で、

私は、複雜な理論的誘導を避けて、其の代りに、吾々が先ほど抑壓の說明に用ひた例に歸つて見よう。諸君、邪魔をする奴を退場させて、戶口に番人を置いたゞけでは、事件は片付いては居ないことを考へて頂きたい。突出された者が、今度は立腹して全く前後を顧慮する事無く、吾々を更に煩す事もないとは云へない。彼はもう吾々の間には居なくなつてゐるし、吾々は彼の存在、彼の愚弄的な笑聲、彼の聞こえよがしの「文句」に依つて煩はされる事もない。が、彼は、今は外で、忍び難い騷ぎを始め、叫んだり、拳で扉を叩いたりして、以前の不行儀な振舞以上に私の講演を妨げるから、見樣によれば、抑壓は少しも効果がなかつたのである。さう云ふ有樣になつて來ると、例へば、吾々の投敎するスタンリ・ホール博士 Dr. Stanley Hall が仲介者乃至は調停者になつて下さるならば、吾々は甚だ有難いのである。博士は、外にゐるあの無作法な奴と交涉し、今度は行儀よくすると保證してゐるから彼を再び入場させてやつてくれと、吾々に懇請する。吾々も、ホール博士の權威に信頼して、抑壓を撤回することを決意し、かくして再び平靜が回復される。これは、實に、神經症の精神分析的療法に於いて、醫師に振りかゝつて來る任務そのまゝである。

で、もつと直截に云ふならば、吾々は、ヒステリー患者乃至その他の神經症患者を研究する事に依つて、彼等には自ら許し得ない願望を表はす觀念の抑壓が、うまく行かなかつたのだと云ふ結論に達す

るのである。彼等は、その觀念を意識乃至記憶から追ひ出して了つて、多くの不快を免れた樣に見えたが、實は、抑壓された願望は猶ほも無意識中に殘つて居て、活動の機會を覗つてゐるのである。そして遂に、抑壓された觀念の代りに、變裝された、觀破し難い（被抑壓觀念の）代償形成（Ersatzbildung）を意識中へと首尾よく送り出す。すると間もなく、抑壓によつて免れたと思つたその同一の不快感がその代償形成に結び付くに到るのである。この抑壓された觀念の代償形成物——卽ち症候——は今や自衞する自己からの攻擊を受けることなく、從つて短い抗爭の代りに、今度は終りのない病患が擡頭する。症候に於いては、歪み（變裝）と共に、元來の抑壓された觀念と（歪みと）の仲介的類似性の殘つてゐることが確かめられる。代償形成の作られる徑路は、その患者を精神分析的に治療する內に發見する事が出來、さうしてまた治療には、この同一徑路を逆行して症候を再び、抑壓された觀念にまで辿り行く事が必要である。抑壓された觀念を再び意識的心理活動へ導けば——これ、厄介な數々の抵抗を克服する事を豫想する一つの過程であるが——患者が避けようとしたのと同じやうな心的葛藤はやがて、醫師の指導下に於いて、抑壓が與へるのよりももつと好い捌け口を發見し得るのである。葛藤乃至神經症を仕合せな結末に導く所のかかる適當な解決法は色々ある。特殊な場合にはそれ等を組み合はせて見る事も出來る。患者の人格が、病源となつた願望に對して不當な抑壓をしたのだと說

明してやり、それを全部又は一部、受け容れる様に勸めるのも一法である。或はこの願望その物を、より高尚な、隨つて反對の必要のない目的に導く——これを『昇華』(Sublimierung) と稱する——か、又は、その願望の放棄が正當の動機に出づることを認識させるのである。このやうに自動的な、從つて不十分な抑壓機制を、より高尚な、人格的な精神能力の助けを藉りて働かせるのである。人間は意識的思想に依つてその願望を支配し得るものである。

以上、精神分析と名付ける治療法の主要なる諸觀點をお話したが、もしあまりよく分らないやうであつたら、許して頂き度い。困難は對象の新しさにのみあるのではないのだ。抑壓にも拘らず、無意識中から勃々と自ら現はれて來るところの、所謂許容し難い願望は、抑〻如何なる種類のものか。抑壓の不成功、代償形成、又は症候形成などの生ずるのは、其の人に於いて如何なる主觀的、又は體質的條件が存するためであるか、これ等については、後程、若干お話しするであらう。

第三講

紳士淑女諸君、兎々眞理を語る事は容易ではない。特に、簡單に叙述しようとすれば、極めて困難な事になる。で、今日私は、前講に於いて致した謬りを正さなくてはならないことになつた。私は、催眠術を放棄するに至つた顚末を述べた際に、患者に對して當面の問題に關して思ひ付くまゝを――忘れてしまつたと云ふのは表面上さう見えるだけで、念頭に浮んで來る思ひ付き（Einfall）は必ず所要の事項を包含してゐるのであるから――私に傳へよと迫まり、かくて患者の頭に第一に浮んだ事が卽ち求むるところの記憶の體現であり連續であると述べた。實は、これが何時でもさうだとは限らないのだが、私は、簡單に述べる爲めさう云つたのである。實際、私の方から迫つたゞけで、求むるところの事が直ちに頭に浮ぶのはたゞ偶然のことにすぎないのであらう。經驗をなほ續けて行くと、求むる所のものである筈がない（目的に適はないから）所の思ひ付きも必ず現れ、患者自身もそれ等を見當違ひだとして棄てる。さうなると、迫ひ迫まりの手法も役には立たず、催眠術を放棄したのを悔ゆる事になるわけである。

このやうにどうしてよいか迷つてゐる時に、臆斷ではあつたが、ある考へ方に依つた。然るにその考へ方は、後年チウリヒのC・G・ユング、及びその一派に依つて科學的に是認されることになつた。私は、臆斷（先入見）も、時には役に立つものである事を告白せざるを得ない。私は一體精神過程の決定者に非常に價値をおくもので、患者が注意を緊張させてゐる時に云ひ出す『思ひ付き』が全く出鱈目で、吾々が求めてゐる所の忘れられた觀念と無緣であるとは、どうしても信ぜられなかつたのである。さう云つた思ひ付きが、求むる所のこれ等の忘れられた觀念その物でないことは、その時限りにとつてゐる心理的立場で充分說明される事である。即ち、患者の內には、二つの力が相對して働いてゐる。一方は自分の無意識中に存在する被忘却事を意識內に引込まうとする患者の意識的努力、他方は既に御話した抵抗である。即ち抑壓されてゐるもの、或はそれを聯想させるものの意識化に對してさからうところの抵抗である。若し、この抵抗が存在せぬか、又は極めて些少であるならば、忘却されてゐた事は、歪み（Entstellung）なしに意識化され得る。從つて、求むるところのものの意識化に對する抵抗が大きければ大きいだけ、それだけそのものの歪められる度の甚しくなる事も、容易に考へられて來る譯である。求むるところのものの代りに、（患者に於て）現はれて來る思ひ付きは、それ故に、症候と同じ樣にして成立したものなのだ。實に被抑壓事項に對する別の、人爲的な、一時

的の代償形成であつて、抵抗の影響の下に受けた歪みが大きければ大きいほど、その本物とは似つかないものとなるのである。と云つても、それは症候たるが故にその性質上、本物とは、或る程度の近似を示してゐる筈である。随つて、抵抗が餘りに强すぎない限り、埋藏されてゐる、我々の求むる物を、思ひ付きから推測する事は可能である。思ひ付きは被抑壓事項に對して諷刺の如き關係にある。同じ事を間接話法で敍述してゐるやうなものでなくてはならぬ。

ところが常態の精神生活に於いても、今吾々が推定したのと似たやうな立場が、同じ樣な結果を齎らす場合を、吾々は數多く知つて居る。それ等の場合の一つは機智（Witz）である。精神分析的技法に依つて私は、機智は如何なる性質のものであるかを研究して見ることが必要になつて來た。今、その種の實例を一つ擧げて見よう。これも英語でなされた機智（洒落）のお話であるが……。

或る二人の圖々しい商人が投機的な企業で一躍成金になつたので、今度は上流社會に仲間入りしようと腐心した。それは町随一の、随つて最も潤筆料の高い畫家——一枚肖像を描いて貰へば、町中の大事件となる底の畫家——に肖像を描かせるのが、一番手取り早いと考へた。かくて一夕、宴會を催しこの二枚の高價な肖像畫を披露する事になり、二人は、最も聲望ある鑑識家にして批評家なる人を二枚の肖像畫の竝べて掛けてある壁へ請じ何とか驚嘆的な讃辭を吐いてくれるだらう待構へてゐた。

ところが先生、長い間ぢつと肖像畫を眺めてから、恰も何か足りないものを捜すかのやうに、首を振つて二枚の肖像畫の間の空所を指して、意味深重に『で、救世主は何處に在るのです？』と尋ねたと云ふ話である。

如何です、諸君もこの機智の美事な實例を可笑がつてゐられるではないか。では、これを分析して見ませう。云ふまでもなくこの鑑識家は、貴樣達は『一對の惡黨だ、丁度その二人の間に救世主が十字架に掛けられた例の惡黨達と同じやうだ』と云ふわけであつたのだが、さうは云はずに、一見しては奇異な、的外れな、相應しくない言葉ではあるが、併し彼の心中に抱いてゐた侮辱の仄めかしであり、或はその侮辱の完全なる代償だと直ぐ分るところの事を、口にしたのである。勿論、機智に於いては、吾々が患者に於ける思ひ付きの成生について假定した樣な關係がすべて發見されるとは期待出來ないけれども、只今私は機智と思ひ付きとの動機が同一であることを強調しておきたい。何故、あの批評家は、自ら云ひ度かつた事を、直接的にあの惡黨達に云はなかつたか？　面と向つてづけ〳〵云つてやり度いと云ふ欲望もあつたらうが、同時に相當な反對動機が心中に動いて居たからである。それは當夜の主人達たる彼等を怒らせることであり、また彼等を怒らせては多數の郞黨の腕力を自由に驅使するであらうから、さうなつては事面倒でもある。下手をすると、前講において抑壓を說明す

るための例として私が擧げた、あゝ云ふ運命に陷るかも知れない。さう云ふ譯で、批評家は、心に抱いてゐる侮辱を直接云ひ現はさずに、歪められた形において、意味深重な、併し、充分原意を傳へる諷刺として、口に出したのである。所要の忘却事項の代りに、多かれ少かれ歪んだ代償的思ひ付きを成すのは、これと同じ關係に由るのだと我々は考へるのである。[1]

註(一)『機智とその無意識に對する關係と』"Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten" (1905)本全集第六卷參照。

諸君、玆で、互に共通的な感情の色どりある觀念群を、チウリヒ派(ブロイラー、ユング、その他)の行り方に從つて、"Komplex"(錯綜、復合、復合心圖、結情など)と名付けると非常に工合が好い。さうすれば我々は、患者に就いて、彼がなほ記憶してゐる事から出發して、抑壓されてゐるところのコムプレクスを發見せんとするに(若し患者が相當數の自由聯想を提供して吳れさへするならば)十分可能性ある事が分るであらう。で、吾々は、患者に云ひたい事を何でも勝手に語らせる方法を取りさうして自分では、患者が何を喋舌らうと、所要のコムプレクスと間接に關係してゐる事以外は、決して念頭に現はれないと云ふ前提を確信してゐるのである。かくして抑壓せられたものを發見するこの方法が餘りにも迂遠に思へるにしても、私は少くともこれが唯一の役に立つ方法であると云ふ事を確

言する事が出來る。

ところが、この方法を施行して行く內に、患者が屢々行き詰りに陷つて、何も云ふことがないとか何も思ひ付かないとか云つて、我々を困らせる事がある。若しこれが本當で、患者が正しいのならば吾々の方法は又もや不適當なものであることを示す譯になるのである。ところが、更に仔細に觀察して見ると、思ひ付きが存在しないと云ふわけでは、ほんとうはないので、存在しないやうに見えるのは、患者が折角浮んだ思ひ付きを抵抗——此の抵抗は思ひ付きの價値に對する批判と云ふ外形を裝つて働く——に影響せられて云はずにおくか、或は再び壓し除けてしまふからである。これは、施術に先立つて患者に、さう云ふ事のないやうに、無意識の批判に煩はされないやうにと要請することに依つて、防ぐ事が出來る。患者は自分の念頭に浮ぶ事を批判し撰擇することを完全にやめて、當て統るまいとか、見當外れであらうとか、馬鹿氣てゐるとかと思はれても、特に自分がこんな事を思ひ付いたのが不愉快に感ぜられても、すべてを話してしまう可きである。この注意をさへ守るならば、抑壓されたコムプレクスの足跡を辿るべき材料を吾々は確保し得るのである。

患者が醫師の忠言に從はずに、己れの抵抗の影響下にある時には、これ等の材料はつまらない事に見えるが、精神分析者にとつては鑛石の如きもので、これに簡單な解釋法を施せば內に含まれてゐる

貴重な金屬を引き出す事が出來るのである。若し一人の患者の抑壓されてある諸々のコムプレクスについて、それ等の間の配列及び聯關々係に迄洞察せず、只假りの見當をでも急いで得ようとするならば、ユング及びその一派が建てた『聯想の實驗』[1]を以つて試みて見るのもよからう。この技法の精神分析學者に於けるは、なほ定性分析の化學者に於けると同じである。神經症の治療には別に必要缺くべからざるものではないが、コムプレクスの客觀的證明に於いて、又チウリヒ派によつて着々と研究されてゐる所の精神病の研究に於いては、缺くべからざる技法である。

註(一) ユング、『聯想の診斷的研究』C. G. Jung, » Diagnostische Assoziationsstudien, « III. 1906.

患者が精神分析處置を受ける時の主要なる規則に從つて浮べ來るいろんな思ひ付きを、何とかひねくる事は、無意識を解くために我々の有する唯一の手段ではない。この同一目的のために、なほ二つの別の方法――患者の夢を解釋することゝ、彼の行り損ひ及び偶然行爲からその無意識動機を判知すること――がある。

聽講者諸君、私は、精神分析全般に亙つて簡略な概說を試みる代りに、夢の解釋だけを詳しくお話しした方が好くはないかと、長い間迷つてゐたことを告白する。併し或る全く主觀的な、又多分第二次的と思へる動機の爲に、それを思ひ止まつたのである。この古風な、馬鹿にされてゐる夢判じの術

意味以外の方法では理解し得る見込みが少しもないと言つても、矛盾せる見解ではないのである。かゝる通俗人の仲間に、今日の殆ど凡ゆる精神病醫たちを算入しても大過はない。で、諸君よ、夢の諸問題の領域を暫く渉獵して見るから、私に從つて來て下さい。

精神分析者が患者に求めた思ひ付きを彼等が輕視すると同じ樣に、我々は覺醒時には夢を輕視する。我々が夢をすぐに、すつかり忘れ去つてしまふところを見ると、我々が夢を排斥してゐることは、明かである。我々が斯く夢を輕視するのは、混亂もして居ない、又不合理でもないある種の夢は、それ等が我々の人格に緣遠いと云ふ感じがするためであると共に、他方また、或る種の夢は、明かに不合理で無意味であることに基くのである。而して我々が夢を否認する一半の理由は、多く夢の中には驚くべき破廉恥な、不德な慾求が現はれるためである。古人は明かに、我々の樣に夢を輕視しなかつた。その事は人々の知るところである。吾々の民衆の下層階級に於いては、今日も、夢が重視されてゐるのは、故なき事ではない。併し彼等は古人と同じく、未來の啓示を夢に期待してゐるのである。

吾人の現在の知識の缺陷を充すために、神秘的臆說を援用する必要はないと信じてゐる。それ故に私は、夢に豫言的性質のあることを認めしめるやうな事柄を發見する事は出來なかつた。夢に就いて語るべきこととしては、もつと別な事で、勿論、充分驚異に値する事柄が澤山にある。

第一に、夢と云へども悉くが、夢の當人に取つて、思ひがけぬことでもなく、不可思議でもなく、混亂してもゐない。諸君にして、滿一年六ケ月以上の幼兒の夢を觀察して見るならば、それが非常に簡單に、容易に、説明が付く事を發見するであらう。幼時は、前日に現はれて而も滿たされなかつた慾望の充足を夢見るものである。かゝる夢の解釋を見るには、別に解釋など心得てゐるには及ばない。その幼兒の前日（夢見た日）に於ける經驗を訊き出せばよい。然らば、假令へ成人の夢に就いてでも、幼兒のと全く同じことが云へて、夢見た日が齎した諸願望の充足に外ならないとなると、これは慥に夢の謎の最も滿足の行く解決であるだらう。ところが、實際に於いてさうなんである。夢の解釋への途上に於いて、躓きの石となる諸難點も、夢をもつと突込んで分析をして見る事によつて、徐々に取り去られるものである。

こゝで第一に、且つ最も重大なる非難——成人の夢は一般に理解し得べからざる内容を持つ、願望充足とは似ても似付かないものであると云ふ非難——が起る。が、これに對してはかう返答しておけばよい。かゝる夢は歪みを受けてゐるのだ。かゝる夢の根底に横はる心理的過程は、本來の言葉で云へば全く別な風に表現される筈だつたものである。そこには「夢の顯在内容」〟manifestes Traum-inhalt〟と「夢の潜在思想」〟latente Traumgedanken〟とが區別されなければならない。前者は、

人々が、朝になつて朦朧と思ひ出し、やつとのことでもつともらしく出鱈目に言語に云ひ換へるものであり、後者は我々の無意識に存すると見ざるを得ないものである。然り、この『夢の歪み』Traumentstellung." は、ヒステリー患者の爲すところ（症候）を研究した際に諸君が見た所の過程と同一である。この歪みと云ふ事は、夢の形成に於いても、症候形成に於いても、同じやうな精神的諸勢力がそこに對抗してゐる事を示すものである。夢の顯在內容は、無意識的な夢の思想の歪められた代償物であつて、さうして、この歪みは、自己の防禦的な力、卽ち抵抗の作用である。これ等の作用は無意識の抑壓された願望が覺醒生活の意識へ侵入して來るのを防禦し、またこれは睡眠狀態中は弱つてはゐるが、なほ願望に或種の覆面で假裝する事を强要する程度の力を有する。それ故に、夢の本人が自分の夢の意味を曉らないのは、丁度ヒステリー患者が自分の症候の關係や意味を知らないのと一般である。

夢の潛在思想が存在する事、またこれと夢の顯在內容とは、實際上述の如き關係の下に立つてゐる事は、諸君が夢の分析をして見れば分るのである。――この分析の技法が、とりもなほさず精神分析のそれなんである。諸君は夢の顯在內容中の諸要素の外見上の關係を意に介せずして、夢の中の個々の要素に就いて、精神分析的操作の法則に從つて自由聯想をとり、かくて現はれる思ひ付きを丹念に

拾うのである。かうして得た材料からして夢の潜在思想を發見することが出來るのである。それは丁度、諸君が神經症患者の語る、その症候に就いての思ひ付きからして、その隱れたるコムプレクスを發見したと全く同樣である。このやうな方法で得た夢の潜在內容よりして、諸君は、成人の夢も要するに幼兒の夢と同樣だとする事の如何に正當であるかゞ容易に分ると思ふ。ところで、夢の顯在內容の代りに夢の本當の意味をなしてゐるものは、これをその前日の諸印象と聯關させて見ると常に明瞭に理解されて來、さうして滿たされざる願望の充足であると思はれて來る。從つて、覺醒後に記憶される夢の顯在內容は、抑壓せられた願望の假裝せられたる（歪められたる）充足として說明され得るのである。

夢の無意識的思想が、如何にして夢の顯在內容へ移行するかの歪曲（エントステルング）の經過は、一種の綜合に依つて、洞察することが出來る。吾々はこの過程を夢の仕事（トラウムアルバイト）と稱する。これこそ吾人の深甚なる理論的關心に値するものである。何故ならば、無意識の中で、否、嚴密に云へば、意識と無意識なる二つの別の心理組織間に如何に思ひも寄らぬ心理的過程が起り得るかを十分に硏究するには、この夢の仕事と云ふ過程に就いてするにまさることはないからである。この新たに知り得た心理的過程の中に就いて、「濃縮」„Verdichtung" 及び「轉位」„Verschiebung" なる心理過程が特に目立つてゐる。夢

の仕事とは、つまり、相異なる精神群相互間の影響の特殊な場合であつて、從つて精神分裂の結果でもあり、また抑壓し損つた被抑壓コムプレクスを症候に變形するところの彼の『歪曲の仕事』"Entstellungsarbeit"とは、凡ての本質的な點で同一である。

諸君は更に、夢の分析からして、幼年時代の早期の印象、並びに經驗が、その人の成長發展上、如何に思ひも寄らぬ程の大きい役割を演じてゐるかを、發見するであらう。特に諸君自身の夢を分析して見ると、まざ〳〵と思ひ當る。幼兒は云はゞ、成人の中にも生存を續けてをり、それの特性ならびに願望――後年の生活に不必要になつたものも一切合切――は總て保存されてゐるものである。兩々の發展過程、抑壓、昇華、反動構成などを通りつゝ、所謂常態なる成人が――困苦して獲ち得た文化の繼承者にして或る部分は文化犧牲者なる成人が――特殊な天分や傾向を持つた幼兒からして生じ來る事は、如何にも必然的な力を以つて人々に印象する。

更に諸君の注意を森いておきたい事は、夢を分析することに依つて、無意識が一種の象徵――特に性的コムプレクスの表現描寫に於いて――を用ひることを吾々が發見したと云ふことである。さうしてこの象徵は、一部分は個人的に差異はあるが、他の部分は類型的で、且つそれが吾人の神話、傳說の中に推定されるところの象徵と一致する樣に思はれると云ふ事である。諸民族の神話傳說が、夢

の研究からその說明を受け得る事は固より不可能でない。最後に云つておかねばならない事は、不安の夢 Angsttraum なるもの、存在すると云ふことのために、夢の願望充足說が動搖を來すのでないかとの疑ひを持たれないやうにして頂きたいことである。不安の夢もまづ判斷を下す前にやはり解釋を下さなければならない筈である。それはともかくとしても、不安なるものは、人々が、神經症的不安の諸事實も碌々知らず、またその諸條件にも頓着せずして無雜作に想像する程、さう單純に夢の內容に係つてゐるものでは、概して云へば、ないのである。不安とは、强烈になり過ぎた被抑壓願望から逃避するための自我の反動の一種であつて、從つて、抑壓さるべき願望の充足に夢があまりにも役立つてゐる場合には、さう云ふ夢の中の不安はこれを解するに容易である。

御覽の通り、夢の研究以外の方法では解し難いものとされてゐる事柄が、これに依つて明かになつたので、その新たな啓示に依つて、夢の研究と云ふことも是認されるやうになつた。併し、吾々は、神經症患者を精神分析的に治療する內に、この見解に達したものである。以上述べたところからして諸君は、夢を解釋することに依つて（もし患者の抵抗によつてそれが餘りに難しくなつてゐないならば）患者の匿され、抑壓されてゐる願望、並びにこれによつて養はれつゝあるコムプレクスを認識し得るやうになるものである事に容易に氣付かれたことゝ思ふ。で、次に、私は、日常の心理現象と云

ふ第三群に移つて、それに就いて一言しておかう。これまた、精神分析の技術上の手段となつてゐるのだ。

第三群と云つたのは、即ち、常態人、神經症患者の何れにも起る、小さい失策（Fehlhandlungen）を云ふので、今迄はあまり重視されなかつたところのものである。僅に知つてゐる筈の事で、他の場合ならば實際よく知つてゐる物事を忘れること（例へば固有名詞の一時的度忘れ）、否々の屋ゝ行ろ云ひ損ひ（Versprechen）用事のやり損ひ（Vergreifen）をしたり、物品を紛失したり、又は壞したりするのは、皆この類であつて、台ては、これ等が心理的に決定されてゐるものとは認めず、單に偶然的な出來事、故心狀態、不注意その他これに類似した條件の結果として、無雜作に片付けてしまつた。また、その人自身がその氣がなくして行ふ行爲や身振り――その人自身、これに何等心理的意義を認めてゐないと云ふ事實はともかくとして――もこの内に這入る。例へば、物品をいぢつたり、何かの鼻歌を唄つたり、自分の身體や着物をひねくつたりする如きである。[二]かゝる些細な行り損ひも、症候行爲は偶然行爲と同じく、人々が云はゞ一種暗默裡に合意したがるほど無意味なものではなく、十分意味があるもので、それが起つたその時と場合とからして、大抵は容易に且正確に、解釋出來る。これ等の些細な行り損ひはそれぞ〳〵意味を持つてゐる。さうしてこれ等の意味はその行り損ひの起つた

立場から容易に、確實に説明され得る。さうしてそれ等の行り損ひが、抑壓されてをり、且つ（もし可能ならば）當人の意識から匿されてゐるところの衝動や目的を表現してゐるか、或は吾々が既に症候を創り出すもの夢を編み出すものとして學んだ所の上述の被抑壓願望並びにコムプレクスから出發するものであることは、證明される。從つてこのやうな些細事でも症候と同等に重要視すべきもので、これ等を觀察することに依つて、夢を觀察する事に依つてと同じく、精神生活の中の隱れたるコムプレクスを發見するやうになるものである。これ等の行り損ひに依つて人々は常に、その最も深い秘密を曝露する。さうしてこれが特に容易に、且つ共通的に健康者に起るのは、——殊にその無意識の抑壓が大體に於いてうまく行つてゐる健全者に起るのは——それが些細事であり、目立たないことだからである。が、些細で目立たない事であつても、理論上の價値は甚だ高い。何故ならば、健全と云ふ條件の下に於いても、抑壓や代償形成があると云ふことが、これに依つて證明されるからである。

註（一）本全集第二卷『日常生活の精神分析』參照。

諸君も既に氣付かれた如く、精神分析者は、精神生活の決定性に對して強固な信念を抱く點で、他と斷然異つてゐる。彼に取つては精神的表現に些細と云ふもの、氣まぐれと云ふもの、偶然と云ふものは存在しない。彼は、何事にも相當の動機があると期待する。大低は誰もさう云ふ期待をしない筈

のところに、さう云ふ期待を持つのである。それのみならず、我々の持つて生れた因果觀的傾向に從へば、たゞ一つの心理的源因だけで滿足すべき筈のところを、分析者は精神作用に多元的規制を認めんとするものである。

さて精神生活の内に匿されてゐるもの、忘れられてゐるもの、排斥されてゐるものを發見する爲に、我々が驅使し得る方法としては、自由聯想に依つて患者の心に浮ぶ思ひ付き、患者の夢、行り損ひ、症候行動などの研究がある。なほこれに、精神分析療法中に現はれる一現象――これについては後に『轉嫁（交付）』"Uebertragung"の條下で若干の記述を試みる積りであるが――の利用を加へれば、吾々の手法は、其の課題を解く爲に、また病源になつてゐる心的材料を意識へ導く爲めに、まだかくして代償的症候の形成によつて起される苦惱を取除く爲めに、既に十分であると云ふ結論に、諸君は私と共に達せられることゝ思ふ。吾々が治療的操作をする内に、正常人や異常人の精神生活の認識を豐富にし、且つ深くすることが出來ると云ふ事は、實に斯學特有の魅力及び長所として、尊重され得るものである。

以上諸君に披露申上げた精神分析の手法が、妙に六つケしいものだとの印象を與へたかも知れない。何しろ仕事が厄介な仕事だから技法もさう簡單と云ふわけには行かないが、併し十分呑込んで了へば、

やれると私は思ふ。併し少くとも分り切つた事ではない。組織學や外科醫學と同じく、十分に習得しなくてはならないものであることは確かである。

ヨーロッパに於ては、吾々の手法を知りもせず、また實際それを施行して見たこともない人々が屢々精神分析の事をかれこれ云ふのを聞いて、諸君は驚かれることゝ思ふ。彼等は、吾々の結果の正しいことを證明して見せよと吾々に要求してゐるのだ。かゝる反對者中にも、勿論、科學的な考へ方を精神分析以外のことに就いては心得てゐなくもない人々もゐるのだ。例へば、解剖學上の標本を肉眼で確める事が出來ないからとて、顯微鏡的研究の結果を矢鱈に棄てゝしまつてはならないと考へてをり、また顯微鏡を用ふるまでは無暗なこと云へないと承知してゐるのであるが、事一旦、精神分析に關する時は、どうもさう公平に見て貰へないのだ。精神分析は、精神生活中にある抑壓されたものを意識的に認識にまで持ち來たさうとするものであるが、精神分析を批判する者自身もかゝる抑壓を持ち、或はやつとの事でその抑壓を支持してゐる人間であるからして、當然、批判者の中にも曾て患者の中に起きたのと同じ抵抗が呼び起されるに相違ない。さうしてこの抵抗にとつては、合理的拒否の假面を被つたり、尤らしい理屈を拵えたり（丁度、患者を扱ふ際に、精神分析の根本規則に依つて彼等に云はせないやうにしておいた理屈と同じやうな理屈）を捏つち上げたりするのは、易々たるのみ

である。吾々の患者に於けると同じく、かゝる反對者に於いても屢々、輕視と云ふ如き、批判能力への或る種の甚だ著しい感情的影響を確証する事が出來る。例へば、夢を取るに足らぬとするが如き、意識の高慢さは無意識的コムプレクスの侵入に對して吾々の内に、全く普遍的に、豫め備はつてゐる最も強い防禦施設に屬するものである。從つて、無意識の眞相に就いて人々を納得させ、またその意識的認識に矛盾する如き新事實を承認させるのは、甚だ難事である。

第四講

紳士淑女諸君、さて上述の如き技法を以て吾々は、神經症の病源なるコムプレクス及び抑壓されてゐる願望活動に就いて何を知り得たのかと、諸君は尋ねて居られる事と思ふ。

就中第一に知り得たことは、精神分析的に研究して見ると、患者の病的症候は意外なほどいつもきまつて、彼の愛慾生活に源を發してゐることである。また病源としての願望は、性愛的(エロティッシュ)な部分本能の性質を帶びたものだと云ふことである。罹病への諸影響の内で、最も重大なるものは愛慾の障害であつて、而もこれは兩性に於いて同樣だと云ふことを、認めざる得なくなつたことである。

かう主張しても、諸君が唯々としてこれを受け容れて下さるとは私も思つてゐない。私の心理學的研究に甘んじて追隨し來る研究者諸君の内にも、性的契機が病理發生に關與する部分を私が過大視してゐるとの意見に傾いて、何故に他の精神的興奮は抑壓及代償形成の如き上述の諸現象を惹起しないのかとの問を以て私に向つて來る者も數多くある。彼等に私はかく答へる、何故他の者が惹起しないかは、私も知らない。別に惹起するわけがないとする程の理由もない。が、經驗に徴して、かゝる者

は、高々性的契機の効果を支持する事はあつても、これに取つて代る程でない事を知るのである。この結論は、何も私の理論的出發點としての要件ではない。現に一八九五年に、ブロイヤー博士と共にヒステリー研究 „Studien über Hysterie" を發表した際にさへも、私はまだこのやうな立場に立つて居なかつたのだが、經驗を積むにつれて、また研究對象を深く探つて行くにつれて、斯る結論に到達せざるを得なくなつたのである。諸君、列席者諸君の内には、私と共にウスター Worcester くんだり迄出掛けて來た私の友人や同志も居る事であるから、彼等に尋ねて御覽なさい。彼等も始めは性愛の病理發生上の決定的意義に關する凡ての斷定を疑つてゐたのだが、自ら分析操作をなすに及んで同じ結論に到達せざるを得なくなつたのだと告げるであらう。

さて、右の斷定の正しいことは患者の行動を觀察したゞけではなか〳〵容易に納得出來ない。患者はその性生活について、唯々として吾々に報告するどころか、凡ゆる手段を盡しても匿さうとするものである。一般に人間は性に關する事柄に於いては率直でない。その性慾を露はに見せず、虚言で編んだ厚い外套を纏うて匿さうとする。あだかも、性の世界では年中天氣が惡いかの樣である。が、それも無理は無い。性生活に對しては、實際、吾々の文明世界に於いては、お天道樣も風も思ひ遣りを持つて下さらないのだ。事實、吾々の誰もが自分の性について腹臓無く隣人に打明けはしない。患

者も分析者の處置に於いては習俗的な差控へを取除いていゝのだと分ると、そこで始めて虚言の面紗を拂ひのける。このやうに打明けられたものにして始めて、神經症の病源としての性の問題について判斷を下し得るやうになるのである。不幸にして醫師は、性生活の問題に關する個人關係に於いて、他の人々より有利な地位に立つては居ない。彼等の多くは、性問題に於いて大部分の文明人(クルツールメンシエン)の行動を決定してゐる所の、かの内心は淫蕩だが表面は取澄してゐると云ふ主義の下に立つものである。

さて、諸君、次に吾々の得た結果を續いて述べよう。或る種の患者に於いては、精神分析探究の結果、症候が性的でない、只の外傷性の經驗に歸せられる場合もあるにはある。が、このやうな區別はまた別の事情を考察することに依つて、意味のないものとなる。一つの疾病を徹底的に闡明し、根治するに必要なる分析操作は、何れの場合にも決して罹病當時の經驗を問題にするに止まらず、必ず患者の思春期乃至は早期幼兒時代に迄遡るもので、そこまで迪つて始めて、後の罹病を運命付けたところの印象や事故を探り當てるのである。後年になつて外傷を受け易いやうに敏感になつてゐるのは何故か、說明を與へるものはたゞ幼兒期の經驗である。その殆ど常に例外なく忘却されてゐる記憶痕跡を發見し、これを意識化する事に依つてのみ、症候を除去するの力を獲得するのである。こゝに於いて、我々はまた、夢の研究に於いて達したのと同じ結論に到達することになる。即ち、幼兒時代

に容認せられず、抑壓された願望が力となつて症候が形成されたのである。これがなければ、後年の外傷に對する反應も正常に經過すべきであるのだ。ところで、幼兒期のこれ等の力强い願望は、極く一般的に云つて、性的性質を帶びたものであるのだ。

かう云ふ事を云つては、諸君が驚駭される事と私は確信する。『では、幼兒性感なるものが存在するのか、幼兒時代には性的衝動がないと云ふのを特徵とする生活期ではないのか？』と諸君は尋ねるであらう。否、幼兒時代に性はなくはない。聖書に見られる、豚に惡魔がつく樣に、思春期になつて子供に性衝動がつくのでは斷じてない。幼兒は最初から、性的衝動及び活動を具へ、生れ乍らにして有するもので、この幼兒性感からして、意味深い曲折多き發展過程を經て、所謂成人の正常なる性感が由來するのである。幼兒の性的行動を觀察する事は、決して難事ではない。否、寧ろ、それを看過し又は變解する方にこそ、或る種の技巧を要するのである。

運の好い事に、私は自分の主張の證人に立つてくれる人を諸君の內から呼び出すことの出來る立場に置かれてゐる。私はこゝに、サンフォード・ベル(Sanford Bell)博士の硏究(『米國心理學雜誌』、一九〇二年中所載)を御覽に入れる。同氏は、吾々が今居る此の會場の屬するクラーク大學學術協會に名を列ねるものである、『兩性間の愛情硏究未定稿』と題する該論文（拙著『性說に關する三論文』

より三年前に現はる）中に著者は、私が諸君に今し方言つたのと全く同じ事を述べてゐる。卽ち「性愛の感情は、今迄考へられてきた樣に、青年期になつて始めて現はれるものではない」と。同氏は（吾々が歐洲で云ふとすれば）アメリカ的方法で調査し、十五年間に亘つて二千五百件の實證的觀察を蒐集し、その內八百件は氏自身の觀察である。この戀愛狀態の現はれる徵象について著者はかう云つてゐる。「數百の幼兒に於けるこれ等の徵象を觀察するに、先入觀念に煩はされてゐない人ならば誰しもこれ等を性的起源に歸せざるを得ない。それ等徵象の觀察のみならず、更にその上幼兒時代にそのやうな感情を著しい强烈さで經驗し、且つその記憶を比較的判然と保存してゐる人々の告白が證據となる時、如何に假借しない人でも、承服するのである。」と。これほど云つても、まだ幼兒性感を信じようとはしない諸君の內の或る方々も、早熟的に戀を知つた幼兒の內、五歲四歲乃至は三歲と云ふ早期のも數少くないことを聞いては甚だ驚かれる事であらう。

諸君が私の觀察よりも、諸君の同國人の觀察をより多く信用されるとも、私は驚きはしない。私自身も暫く前に、五歲の、不安症に惱む小兒を、その父が自分で正確に分析したのを見て、衝動の肉體的表現、及び幼兒の早期性愛生活の種々の心理的行爲をまざ〳〵と看取する事が出來た。また私の友人のユング博士 Dr. C. G. Jung も本講堂に於いて、ほんの數時間前に、一人の尙ほ幼い少女が、

私の扱つた患者と同じ動機——家族の内に赤ん坊が生れたこと——からして殆ど同様な肉體的興奮、願望形成及コムプレクス形成を明かに呈したと云ふ觀察を講演された事を回想して頂きたい。それ故に私は、諸君も初めは不審に思はれたであらう所の幼兒性慾と云ふ考へを既にをかしく思はれなくなつたであらうと思つてゐる。で、更にチウリヒ派の精神病學者ブロイラー（E. Bleuler）の著しい實例を諸君に御紹介しておきたい。同氏は僅々數年前に、私の性慾理論には而喰ふが、どうも信用出來ないと公言してゐたけれども、その後自分で觀察して見て幼兒性慾說を全部的に確認するやうになつた。（二）

註（一）『或る五歲男兒の恐怖症の分析』、精神分析並びに精神病理學研究、第一卷、前半、一九〇九年版。原書全集第八卷中に收む。

（二）ブロイラー著『兒童の性的異常』、スキツル學童保健年報、第九卷、一九〇八年。

大抵の人が、その醫師的觀察者たると否とを問はず、幼兒の性生活について何事をも知らうと欲しないならば、その事實は餘りにも容易に說明がつく。卽ち、彼等は文明敎育の壓力の下に、自分の幼兒期の性行爲を忘却してゐて、而もかく抑壓したものを回想し度くないからなのである。若し、自分の幼兒期記憶の自己分析、反省、解釋などによつて調べて見るならば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

で諸君、疑を棄てて、私に從つて極早期の幼兒性慾の檢討に移らうではありませんか。[一] 幼兒の性衝動は非常に錯綜したものとして現はれ、種々の源より發するところの數多くの成分に分解し得る。まづ第一に、幼兒性慾は後にはそれの役立つやうになるが、生殖機能とは無關係であるが、彼等はそれに依つて樣々な種類の快樂を得るのである。これ等の快樂を吾人は、それ等が示す類似と聯關とに依つて、性的快樂の名の下に總稱するのである。幼兒性慾の重なる源は、刺激に對して特に敏感な或る身體部分——性器の外に、口唇、肛門、尿道口、及び皮膚乃至それ以外の敏感な表皮——の自己興奮である。この幼兒的性生活の第一段階に於いては、滿足は自己の身體にあつて、外的對象は問題にならないのであるから、吾々は此の段階を、ハヴロック・エリス (Havelock Ellis) の造語に從つて、『自己色情』,,autho-erotism" の段階と稱する。性的快樂を獲得する個所を吾々は『性的帶域』"erogene Zone" と名付けてゐるから、指をしやぶること (Ludeln)、夢中になつて乳を吸ふこと (Wonnesaugen) は、この種の性的帶域からの自己色情的滿足の好い例である。ブダペストの小兒科醫リンドナー(Lindner)は、この現象の最初の科學的觀察者であつて、當時既に正當にも、これを性的滿足と解し、且つこれが他の更に高等な形の性行動へ變移し行くことを詳細に記述してゐる。[二] 生活のこの期に於ける今一つの性的滿足は、性器の自慰的興奮であつて、これは後年の生活に對して非常

に大きい意味を持ち、且つ多くの人々に於いて緩して、完全に克服されることはない。以上の如き、またそれ以外の自己色情的顯現の他に、我々は極早期の幼兒に於いて性對象として、相手を豫想するところの性的快樂——即ち吾々の所謂リビドー Libido ——の部分本能（衝動）を見る。これ等の衝動は、能動的と受動的と云ふ工合に、對を成して現はれるもので、これ等の一群の最も重大なる代表として、苦痛を他人に加へることを喜ぶ加虐本能（Sadismus）と、それの受動的對照をなす被虐本能（Masochismus）とを、また能動的及受動的なる窃視慾、露出慾——前者からは後になつて知識慾が派生し、後者からは藝術的乃至演劇的誇示が分岐する——を擧げるに止めておかう。幼兒の右以外の性的顯現は、第二者が問題となるべき對象選擇と云ふ事を考へて見ると旣に分ることで、根本的には自己保存本能と云ふ動機にその意義を負ふものである。併し、性別と云ふことは、幼兒に於いては、まだ決定的な役割を演じてゐない。子供には總て同性愛的傾向があると云つて過言ではない。

註（一）『性說に關する三論文』、ボイン、一九〇五年、第五版一九二二年、本全集第五卷に收む。

（二）『小兒科醫學年報』、一八七九年。

幼兒の性生活はこのやうに豐富であるが支離滅裂であつて、個々の衝動は他の衝動とは獨立に、快樂獲得の事に從つてゐるが、やがてこの性生活は二つの一般的方面に於いて關係付けられ、組織化さ

れ、思春期の終る頃に個々人の性的特質は實際上窮極的に決定せられる。個々の衝動はみな性器帶域の主權下に統制され、かくして性生活の全體は生殖のために役立つやうになり、前者の滿足は今やただ本來の性行爲の豫備乃至は促進としてのみ意味を有するに至る。他方に於いて、對象選擇は自己色情を克服して、性生活に於ける性衝動のあらゆる成分は愛する人物を俟つてのみ滿足されることになるのである。併し本來の部分本能が全部上述のやうに確立せられた性的主權の形成に參與するのではない。思春期以前にでも或る種の衝動は敎育の影響を受けて特に力強く抑壓され、羞恥、嫌惡、道德の如き諸々の心的勢力は發達し來り、これ等が番人の如き役割を果して抑壓されてゐる願望を制しておくのである。やがて思春期に入り、性的欲求の高潮が來ると、前記の精神的反應形成又は抵抗形成なる堤防に行き當る。するとこの堤防は所謂正常なるはけ口の方へその高潮を導いて行き、抑壓されてゐる諸衝動が再び生きる事を不可能ならしめるのである。これ等の抑壓されてゐる諸衝動の內で、最も重要なるものは嗜糞症、卽ち幼兒期に見られる排泄物に對する快樂興奮、及び最初の對象選擇の人物への定着である。

諸君、一般病理學でも、各々の發育過程が障碍されたり、或は遲延されたり、又は完全に行はれなかつたりすると、そこに病的な素質の芽が生ずると云つてゐる。同じ事が當然、あれほど複雜に發展

する性的機能にも當嵌る。性的機能は何人に於いても必ず圓滑に發展するものではなく、時には諸種の異常を、或は後退即ち退行の道に依つて、後に羅病するべき素質を殘して行く事がある。部分本能の總てが性器帶域の主權下に統治されない事もあり得る。このやうに性器帶域から無緣に取殘された部分本能は、吾人が倒錯(Perversion)と名付けるところのものとなり、それ自身の目的を以て正常の性目的の代りにするのである。前にも云つたやうに、自己色情はなか〳〵完全に克服されるものではない。その事は種々の性的障害が證明してゐる通りである。性對象としては兩性は平等の價値を有するもので、元からある性目的とその價値は保有せられるであらうし、從つてそこから、成人に於ける同性愛的活動への傾向も結果して來る。この傾向は、場合によつては、對絕的同性愛癖にまで進む事もある。これ等一聯の障碍は、性的機能の發展を直接的に阻碍するに應じて生ずるもので、これには倒錯や性生活の一般的幼兒癖も包括されるが、これ等は稀少なことではない。

神經症になり易い後天的傾向は、性生活の發達に對する障害から、また別の方法で說明される。神經症の倒錯(變態)に對するは、消極の積極に對する關係である。神經症患者もコムプレクスを保有し症候を示す者であつて、倒錯患者に於けるのと同じ衝動要素が彼等に於いて發見されるが、併し彼等に於いては、衝動要素は無意識から働いてゐるのである。卽ち或る種の抑壓を蒙つてゐるが、それに

も拘らず、無意識裡に殘つてゐるのである。精神分析の教ふるところに依ると、若し早期に於いてこの衝動が餘り强く表現されると、それが一種の定着（Fixierung）となり、性的機能の連結中に一つの弱點を作る。また後年成熟してから、正常な性的機能が妨げられて實施出來なくなると、發達の時からのこの抑壓は、丁度幼兒的定着の起つた一點に於いて破られることになる。

今や、諸君は恐らく、反對されるであらう。併しそれ等の總てが、性的なものではあるまいと。私は諸君が用ひ慣れてゐるよりも廣い意味にこの語を用ふるものである。この點は私も甘んじて承認する。が、併しこの語を只生殖の領域にのみ限つて用ゐるとなると、それはあまりに狹きに失することになりはしないかが問題となる。さう狹義に解するならば、倒錯症の理解もつかなくなるし、倒錯症と神經症と正常的性生活との間の連關々係も從つて分らなくなつてしまひ、自然、あれほど觀察し易い皆の幼兒に於ける肉體的並びに精神的性愛生活の發端――性生活の眞に重要なる發端――をさへ認識する可能を失つてしまうことになるのである。諸君が如何なる意味でこの語を用ふるにもせよ、これだけはよく覺えておいて頂きたい。卽ち、精神分析者は幼兒性慾の研究によつて到達したところの最廣義に於いて性を解するものであると云ふ事を……。

吾々は今一度、幼兒の性的發展に話しを戻すことにする。吾人は性生活の精神的表現よりも肉體的

表現により多くの注意を拂つて來たのであるから、この點に就いてもなほ云ふべき事が甚だ多い。幼兒の極最初の對象選擇は、抑々幼兒等が何人かの世話にならなければならないと云ふ必要から自然惹されるものであるが、この對象選擇と云ふ事に、我々は更に關心を持つやうになる。幼兒はまづ自分の平生親炙する人々に執するが、やがてそれ等の人物への心持は兩親への心持の中へ這入つてしまふ。幼兒の兩親に對する關係は、幼兒を直接觀察しても分るし、また成人後に分析研究しても分る通り、決して性的同感の要素を全然含んでゐなくはない。幼兒は自分の性的願望の對象として兩親を、また特にその一方を取るものである。普通には兩親の方から刺戟を與へるから、その刺戟に應じて兩親を對象に選ぶので、兩親の感傷愛(優しさ Zärtlichkeit)には明かに性的顯現の特質が見られる。よしんばその性目的は禁斷されてゐるにもせよ……。一般に父は娘を、母は息子に贔負する。幼兒は之れに反應して息子としては父の地位を、娘としては母の地位を願望する。兩親と子女間の感情、及びその結果生じ來る兄弟姉妹間の偏愛感情は、啻に積極となつて感傷愛となるのみならず、また消極的には憎惡となる事もある。かくて形成されたコムプレクスは直ちに抑壓されて了ふものであるが、尚無意識中にあつてそこから大きな、持續的な力を及ぼすものである。そこで私は、このコムプレクスがその派生コムプレクスと共に凡ゆる神經症の核心的コムプレクスを成すものであると云ふ意見を述べてお

かねばならぬ。であるから精神生活の他の諸領域においても、やはりこの種のコムプレクスに遭遇するものであると當然考へてゐる。父を殺し、己れの母を妻としたエディポス王の神話は、この幼兒的願望——これを否認する近親姦禁制が後に對立してゐるが——を、極僅かしか改變を加へないで表明したものであり、シェイクスピアのハムレット物語もよしんばその隱蔽の手際はより見事であるにもせよ、近親姦コムプレクスを同じく土臺とするものである。

この核心的コムプレクスがまだ抑壓されないで、幼兒がこれに支配されてゐる時分に、彼の知的活動の甚だ重要な部分が性的關心の役に任ずるやうになる。即ち、一體子供は何處から來るのかを探究し始め、彼の見得るさまざまの徵象から歸納して、成人が想像するよりも多くの事を眞相について推知するのである。普通には、かう云ふ探究の興味が彼に起きるのは、新に赤ん坊が彼の家族中に生れて來て、自分の幸福の邪魔をする、卽ち新しい競爭者が來ると云ふ脅威からである。かくして彼自身の內に働いてゐる部分本能の影響も受けて、彼は若干の幼兒的性理論を作り上げるやうになる。例へば、兩性何れにも同じ男性的性器があると考へたり、子供は食物を攝ることによつて宿ると考へたり、腸端から生れると考へたり、性交は敵意ある行爲、一種の暴力行爲であると考へたりする如きである。

併し子供は何しろまた自分の性器が完成してをらぬのだし、それに女性の膣は潜在してゐて彼等にこれを窺知すべくもないので、この幼い探究者は、自分の勞作を失敗として放棄するやうになるのである。幼兒のこの性探求なる事實それ自身は、個々の幼兒がこの探求によつて造り出した幼兒的性說と同じく、その幼兒の性格形成に對して、また後年になつて罹る神經症の內容に對し、決定的意義を有するものである。

幼兒が兩親をその性愛的選擇の對象とするのは避くべからざる事であり、また全然正常な事である。たゞそのリビドーがこの最初の對象に定着してはならないのだ。兩親を單に模型とするにとゞめ、窮極的に對象選擇をなす時期に兩親から、移り行くべきものである。幼兒の兩親からの解放は、このやうに、その幼兒の社會的能力が損はるべきでないならば、當然不可避の問題である。故に、抑壓が部分的性本能の何れを抑壓しようかと選擇を行ふてゐる間、またそれより後になつて兩親の影響（これ等抑壓の最も主要な材料を供したものは兩親の影響である）がそれほど强くなくなつて來た時、それ等の時分には教育勞作に、大きな役割が降りかゝつて來るのであるが、今日ではこの役割は必ずしも常に理解に富んだ、非の打ち處もない行り方で、果されてはゐないのである。

諸君、私は以上、幼兒の性生活並びに性的心理の發展を論じて來たが、これ等は、精神分析乃至神

經症的障害の除去に就いて論ずべき筈であつた今日の本題から餘りに脱線しすぎたと諸君は考へられるかも知れないが、さうでない。聊か語弊があるかも知れないが、精神分析療法は、つまり幼兒期の殘滓(Kindheitsresten)を克服する爲の延長敎育にすぎないのである。

第五講

紳士淑女諸君、吾々は幼兒性感を發見したことからして、また神經症々候が性愛的部分本能に起源してゐるのを知つた事からして、神經症罹病の本質と傾向とについて若干の豫期もせぬ結論に到達したのである。人間は、外部からは障碍を受け、內部には適應力が缺けてゐて、その性愛的要求が現實において充足されない時に、罹病するものである事を我々は知つたのである。このやうな場合に、拒否された事柄に對する代償充足を得んとして病氣に逃避する事を我々は知つたのである。病的症候は其の人の性行動の一端を、又はその性生活の全體を含んでゐることを我々は認識する。さうして現實からの逃避と云ふことが、この病氣の主要傾向であり、またその主要障害であることを發見したのである。で、吾々は、患者が病氣の癒ることに對して抵抗するのは單純な動機によるものでなく、そこに多くの動機の存することが察知される。患者の自我の方で抑壓を切り上げる事を拒む——何しろその抑壓に依つて自我はその本來の資質から現在の如きものに變化したのであるから——のみならず性的衝動の方でも、現實が何かよりよい充足を提供しない限り、症候に依る代償的充足を斷念しよう

としないのである。

さて、滿足を與へない現實から、吾々が疾病と名付けるもの――疾病とは云つても患者に取つては直接的な快樂獲得であるのだが、生物學的には障害を本人に及ぼすものだから、かう云ふのだ――への逃避は、後退形成（退行）、即ち性生活のより早期の、曾て滿足が相當遂げ得られた段階への回歸と云ふ方途で行はれる。この退行は二重のものであるらしく、リビドー即ち性愛的要求が時間的に、より早期の發展段階へ立ち返ると云ふ意味では時間的退行であり、また元來最初の心理的表現手段はこのやうな要求の發露のために用ひられると云ふ意味では、形式的退行でもある。このやうに二重ではあるが、共に、幼兒的狀態を作り出さうとする點では一致するのである。

神經症の發生的病理を深く洞察すればするほど、愈々諸君は、神經症と人間の精神生活の他の所產との關係を、否それ等所產の內の最も價値あるものとの關係を知るやうになつて來るであらう。諸君も御存知の通り、我々人間は文明の高き要望からして、また我々自身の內なる抑壓の故に、現實を大低は不滿足に思ひ、從つて空想生活を營み、その中で、現實世界に於いては缺けてゐるものを願望充足の所產に依つて補ふことを好むものである。これ等空想の內に、人格の特殊な素質的本質の多くがまたその本質の諸傾向が、現實生活に於いては抑壓されるが故に、そちらの方に包含されて出て來る

のである。精力的な、有爲なる人物とは、卽ち願望空想を仕事によつて現實の中に移し得た人の謂ひであつて、もし外界の抵抗があまりに强く、個性があまりに脆弱な爲めに遂げ得られない場合には、現實からの逃避が行はれ、その人はより如意なる空想世界へと歸る。而して空想の內容は細視すれば症候へ移されるのであるが、もしそこに或る工合のよい條件があると、幼兒性へ退行して現實から不斷に疎遠になつてしまはないで、これ等の空想から現實へ行くもう一つの道を發見する可能性が、殘ることになる。例へば、もし現實を不滿とするその人が藝術的天分（こいつは心理學にまで謎とされてゐるが）を有してゐると、彼はその空想を症候へではなく藝術的創造へ移して、神經症患者となるの運命を免れて、現實への關聯をこの迂回路によつて回復する事が出來るのである。(一) ところがもし現實世界に對する反抗がやはり存し、而もこの價値ある天分が缺けてゐるか、或は不充分である時はリビドーは空想の起源に從つて、夫々退行と云ふ方法で幼兒的願望を復活させ、かくて神經症を生ずることは不可避的である。神經症は現代では、生活に幻滅を感じた人々、または生活に堪へ得ないほど弱いと自覺した人々が隱れた昔の僧院の代りをするものである。

註(一)オットー・ランク (O. Rank) 著『藝術家』„Der Künstler, Ansätze zu einer Sexualpsychologie,“ Wien, 1907. 參照。

こゝで、神經症の精神分析的研究に依つて獲た重要なる結論を述べる事を許して頂き度い。即ち神經症患者と云つても、健全者には發見され得ない様な、患者にのみ特有な様な心理的內容を有するものではないと云ふ事、これである。或は、ユング氏の云ひ方に從へば、神經症患者も、我々健康者が苦闘してゐるのと同じコムプレクスから病氣になるのである。苦闘した結果が健全になるか、神經症になるか、或は補償的に行り過ぎる（Überleistung）やうになるかは、量的關係に基くのである。相苦闘する諸勢力の關係に依るのである。

淑女紳士諸君、神經症が性的本能の諸勢力から生ずるとの假定を確立する最も注意すべき經驗を、私はまだ諸君に話してゐないのだ。我々が神經症患者を分析的に處置する度毎に、名付けて「轉移」„Uebertragung" と呼ぶところの一つの妙な現象が起るものである。即ち、患者は醫師に對してある程度の溺愛的な感情——でも屢々敵愾心をも混じた感情——を抱くと云ふ事である。而もこの感情は何ら、現實的な關係に基づくものでなく、その現れ方について何から何まで患者の古い、無意識的になつた空想願望から源を發してゐるのである。患者にも、もはや記憶中に呼び起す事も出來ない様な、彼の感情生活の一片が、かくして今や醫師との關係に於いて再體驗され、轉移に於けるこの再體驗によつて醫者も始めてかゝる無意識の性的感情の存在、並びにその力量を確知するに至るのである。症

係は、化學の用語で比喩するならば、最廣義に於ける以前の戀愛經驗の沈澱物であつて、これは轉嫁と云ふ體驗の高温度においてのみ、溶解されて、別の心理的產物へと變形するものである。この反應に於いて、醫師は、フェレンチ[一]の巧みな表現を借用すれば、淨化的酵素（Katalytisches Ferment）の役割を演ずるもので、この酵素はこの過程の間に解放されてゐる感動を一時自分の方へ引寄せるものである。轉嫁作用をよく研究して見ると、また催眠術的暗示の何たるかゞ理解出來る。我々も實は曾てこの催眠術を用ゐて、患者の無意識を探究してゐたのである。催眠術はその當時は、治療的手段と見られたが、當該患者の眞相を科學的に認識するには一障碍であると見られるやうになつた。と云ふのは、催眠術は心理的抵抗を或る領域から除去するが、その代りにその領域の境界に、越ゆべからざる壘壁としてそれを聳えさせるからである。それはさうとしても、諸君は轉嫁の現象――これについては殘念乍ら只今多くを語ることは許されないが――が精神分析の影響によつて生じたものだとは考へない樣にして頂きたい。轉嫁は患者の醫師に對する交渉の場合に於けると同樣に、自然發生的に人間のあらゆる交渉に現はれるもので、これあればこそ常に治療的影響は可能であるのだが、この轉嫁が強烈であればあるほど、常人はその存在を認識しないのである。それ故に、精神分析がこれを作り出すのではなく、たゞこれを意識化するに過ぎず、また患者の心理的過程を所要の目標へ誘導するためにそれ

を利用したに過ぎない。が、私は轉嫁なるテーマを論ずる以上は、この現象が啻に患者を納得させる爲めのみならず、醫師を納得させる爲めにも決定的な問題であることを强調しておかざるを得ない。私に賛成してゐる人々のすべてが、轉嫁を體驗するに及んで始めて神經症の發生病理に關する私の主張の正しさを納得された事を私は知つてゐる。で、自分で精神分析をして見ない人が、從つて轉嫁の效果を自ら目睹しない人が、これほどに確實な判斷を持ち得ないのも、なるほど考へられる事である。

註(1) S. Ferenczi: „Introjektion und Übertragung." Jahrbuch f. psycho-anal. u. Psychopath. Forschungen, Bd. I, II. 2, 1909.

諸君、精神分析的な考へ方の承認に對して、理智の側から、特に二つの障碍があると私は考へてゐる。第一に、精神生活もやはり一定の原因から一定の結果が生ずると云ふ風な決定的な考へ方をこの方面に適用する事には、人々がまだ慣れてゐないことである。第二に、吾々は意識的心理過程に就いては相當熟知してゐるが、無意識心理過程が意識的心理過程と相違するのは如何なる特徴に依つてゞあるか、その特徴の認識が不足してゐる。精神分析の操作に對する最も一般的な抵抗——患者にけると健康者におけるとを問はず——の一つは、上述二契機中の後者に歸する。或る者は精神分析によつて傷けられるのを恐れてをり、また或る者は折角抑壓した性的衝動を再び患者の意識に呼び醒すと、

このために、より高尙なる倫理的努力が打負されてしまひはせぬかとの危險を懸念してゐるのである。換言すれば、患者がその精神生活中に痛い個所を有するものであると認めるが、その古創に觸れることが患者の苦痛を激化しはしないかを人々は恐れるのである。吾々もこの比喩に從つて論じよう。勿論、苦痛を新たにする以外、何の役にも立たないならば、傷ついた個所に觸れない方が上策であらう。が、周知の如く、外科醫も根治のための手術をするときには、痛い局部を探究したり、いぢつたりする事を差控へないではないか。患者の病態を一時惡くしても、若し目的を達してその苦痛を永久に治療してしまふ事が出來るならば、誰も診療の際の不可避的苦痛や、手術の反應現象を外科醫の罪にしないではないか。精神分析に於いてもさうである。精神分析も外科治療と同じことだと云つて當然である。分析治療中に患者にも與へる苦痛は增加はするが、手法さへ好ければ、外科醫の與へるそれに比して、比較にならぬほど少いもので、元來の苦痛の非度いのに比しては何でもないくらゐのものである。また抑壓から解放された諸々の衝動のために文明的人格が擾亂されると云ふ如き懸念は無用である。さう云ふ懸念に對しては、我々は自分等の經驗が確實に示すところを考へなければならない。卽ち、一つの願望の肉體力と精神力は、それの抑壓が仕きれなくなつた場合には、無意識的である時の方が、意識的である時よりも遙かに强烈である事、從つて、意識化する事に依つて弱められるにす

ぎないと云ふ事を考へなければならない。無意識的願望は、如何にそれへの反對努力をして見ても及ばぬもので、吾人の如何ともなし得ないものであるに對し、意識的願望は、同時に意識されてをり、且つこれに反抗するものによつて、制止されるものである。故に精神分析的操作は、無効になつた抑壓のより好い代償として、最高の、また最も價値ある文明的努力の役に立つものである。

では、精神分析によつて解放された無意識的願望は、如何なる運命を辿るか。それを當人の生活に無害になすには、どうすべきか！　それには色々の途がある。第一に分析操作中にすでに、それ等はこれに對立するより高尚なる傾向の正しい精神活動によつて喰盡されてしまうのが常である。抑壓の代りになるものは、當人が自由に驅使し得る最上の手段で行はれる自己判斷である。何故さう云ふことが可能であるかと云ふに、我々は大抵は、自我の早期の發展段階からの結果のみを除去したのだからである。當人の本能はその時分まだ完全に組織されてゐず、弱かつたが故に、役立たぬ衝動を抑壓してのみゐたのであるが、成熟して強くなつた今日では、自分に有害なものを多分巧に支配し得るのである。精神分析の第二の歸結は、發見された無意識的衝動が有効に適用されるやうになり得ると云ふことである。前々から障害なく發展して來てゐたならばもつと早くさう云ふ風に有効に適用されてゐたであらうに……。幼兒的な願望活動を根絶させる事は決して理想的な發展目標ではない。神經症

患者はその抑壓の爲めに、精神的エネルギーの多くの源泉を失つてゐる。これ等エネルギーの源泉こそは、その人の性格形成や生活々動に取つて甚だ貴重なるものであるのだ。我々は更に一層目的に適う發展經過を知つてゐる。卽ち、『昇華』"Sublimierung"がこれであつて、このために幼兒的願望活動は阻止されるのでなく、利用され得るやうにそのまゝ殘つてゐるが、特別な允審に對しては不用なものとならず、高尙な、事實上最早性的でない目標が据えられるやうになるのである。性本能の諸成分は、それが昇華される可能性のある點で、その性的目的をそれからかけ離れた、社會的により價値ある目的に變換へる可能性ある點で、特徴がある。このやうに精神活動へのエネルギーの寄與がなされるのであるが、實は吾々の最高の文化成果はこれ等寄與のお蔭なのである。早期に抑壓が起ると、被抑壓本能の昇華は不可能になるが、抑壓を廢棄して後は、昇華への道が再び開ける。

次に、精神分析的治療から生じ得べき第三の歸結に就いても一言する事を忽にしてはならない。抑壓されてゐたリビドー的感情の若干部分は、昇華でなく直接的な充足を得ようとして、生活中にそれを發見して行くことになる。ところが、吾人の文化要求は、大抵の人間に取つて生活を著しく困難にしてをり、益々性を抑壓しても文化的所得は益々殖えては來ず、却つて現實から逃避させ乃至は神經症の成因を愈々助長することになる。我々は餘り調子に乘つて、我々の本來の動物性を全く蔑にして

はならないと同時に、個々人の幸福論足をもたらせ苦人の文化の目標から逸すべきでない事をも忘れてはならない。部分本能が其の本来の自体中に自然なものであることは、それに昇華の可能性あることによつて知られるが、それのために益々昇華を進めることによつて、より大なる文化的成績を目指さうといふ気になつて来るが、勿論、吾々が肉体組織にあつても、消費される熱量のある一定部分以上を有効な機械的仕事に変へることを期待しないやうに、性的衝動をそれの全エネルギー量に於いて、その本来の目的から引き離さう（昇華させよう）と試みてはならないのである。これはやつてもやりされるものではない。また性を抑り狭く抑し過ぎると、その結果は性の欠乏のために来る害を出して来るのである。

私が只今申し上げた警告に対して、諸君に、いささか出過ぎた話であつたかも知れない。私は敢て一つの古い笑話を締結して、私の意図する所を間接に述べて見たい。それを如何様に利用なさらうと、それは諸君自身の御勝手としておかう。独逸文学中に、シルダ（Schilda）と云ふ小さい町の事が出て来る。その町の住民は非常に狡巧であると云はれてゐる。ところが、このシルダの住民は大変よく働く馬を一頭所有してゐたが、唯一つ惜いことには、この馬は高価な燕麦を沢山に喰べるのであつた。そこで、彼等はかう思い廻らして、此の悪癖を直す為めに毎日少しづつ飼料を減らして行つて、遂には全く燕麦抜きの飼料に慣れさせようと決心したのである。初めの内は上手く行つて、馬も日に一本燕麦をも喫

はせておけばよいと云ふところまでなつた。愈〻翌日からは、燕麥なしに働くと云ふ事になつた。ところが、その翌日この動物は意地惡くも死んでしまつた。シルダ住民はどうして馬が死んだか了解せなかつたと云ふ。

吾々は馬が饑え死にしたのであると信じたい。而して一定量の燕麥なくしては、働き得ないと信ずるものである。

終りに私は、わざ〳〵の御招聘と、私に與へられた傾聽とに對して、謝意を表する。

精神分析要領

ブリタニカ大百科全書刊行所より、一九二四年に、ロンドン及びニウ・ヨオクにて公にせられたる『多事なる時代。廿世紀を作りつゝある人々に依る自家描寫』"These eventful years. The twentieth Century in the making as told by many of its makers" と題する叢書の第二卷第七十三章に英文（ブリルの英譯）にて始めて現る。ドイツ原文は原書全集（十一卷）公刊の際に始めて公にさる。本譯はドイツ原文に據る。原題名は "Kurzer Abriss der Psychoanalyse."

一、精神分析前史

精神分析は云はゞ第二十世紀と誕生を共にしたものである。拙著『夢の註釋』の公刊が一九〇〇年の事で、この公刊と共に精神分析は新しい何物かとして世界の前に現れたのである。併し精神分析は固より分りきつたことながら、石の中から湧き出したものでもなければ、天外から落ちて來たものでもない。これもまたこれを醞めた年代の子であり、これを促した刺戟の所産である。であるから、精神分析の原史を說くには、精神分析發祥の契機となつたさま〴〵な影響の描寫から始めなければならない。さうしてまた精神分析創造以前の時代と狀態とを忘れてはならない。

精神分析は誠に猫額大の小地面から發生したものである。斯學は本來、從來の醫學が所謂『機能的』神經症の本性の或るものを理解するに全く無力であるから、その無力を救つて何とかこの病氣の處置法を知りたいのが目的であつた。この時分の神經學者達は、化學的・生理的並びに病理的・解剖的の事實を非常に尊重するやうに教育されてゐた。彼等は結局、ヒッチク、Hitzig, フリッシュ Frisch, フェリア Ferrier, ゴルツ Goltz その他の人々の諸發見に强い印象を受け過ぎてゐた。彼等は若干の機

能が頭腦の一定部分と內面的に、（さうして恐らく專ら）結び付いてゐると證明しようとするもの丶如くであつた。精神的契機に就いては、彼等はこれを如何とも處理することが出來なかつた。彼等はそれを把握することが出來ず、これを哲學者、神秘家、並びにインチキ治療者どもに一任し、さうして心理的契機を扱ふのを非科學的であると考へてゐた。從つて神經症と云ふ秘密境に至るべき道は全く塞がれてゐた。就中、この種の病氣の典型とも云ふべき謎の如き「ヒステリー」には全然手のつけようがなかつた。まだ私が一八八五年に、サルペトリエール Salpêtrière で見習ひをしてゐた時、人々がヒステリー的障害に對しては、頭腦のある部分が重い障害を受けると、それに相當する肉體的不自由が生ずる如き、さう云ふ頭腦部分の輕い機能的障害にヒステリーは基くとの公式だけで滿足してゐることを私は知つたのである。

このやうに病氣そのものに理解が缺けてゐたゝめに、この病狀の治療にもまた當然困らなければならなかつた。當時の方法は大抵は「固める」„roborierende“行り方であつた。卽ち、醫藥を豐富にしたり、恥づかしがらせたり、嘲つたり、脅したり、精神的影響を與へようとしたり、「しつかりする」やう意志を振ひ立たせようとしたりする、誠に不適當な、不親切な試みであつた。神經症狀態の特殊な治療法として電氣療法が案出されたが、併しエルプ W. Erb の細密な注意書に從つてこの療法を受

けた者は誰しも、一見精密らしい科學の中にもまだ空想が何と随分多く入込み得るものであるかを不思議に思ふであらう。ところが八十年代に、催眠術が再び醫術的科學の中へ這入り込んで來た時に、決定的な轉向が始まつた。催眠術の今度の入込みは、リエボー Liebault, ベルネイム Bernheim, ハイデンハイン Heidenhain, フォーレル Forel 等の勞作のお蔭で、これまで屢々あつたのよりは遙かに成功したものであつた。そのやうな成功があつたとなると、人々は催眠術から二つの根柢的な、忘れ難い說を引出さゞるを得なかつた。第一に、人々は、驚くべき肉體的變化がやはりたゞ、自分が患者に惹起させた心理的影響の結果に過ぎないことを首肯した。第二に、人々は、技術者が催眠終了後に示す態度からして、彼等がたゞ『無意識的』と名付けることの出來た、さう云ふ心理的過程が存するとの、明白な印象を受けた。『無意識』は既に久しい以前から哲學者の間には理論的概念として問題になつてはゐたが、併しこゝに催眠術の現象としてそれは始めて生きたものとなり、具體的なものとなり、實驗の對象となつたのである。更にまた、催眠術的現象は多くの神經症者の爲すところと明かに類似してゐることが分つたのである。

精神分析發評の歷史に催眠術が如何に重大な意義を持つてゐるかは、人々の思ひがけぬ程である。理論の點においても治療の點に於けると同樣に、精神分析は催眠術から受繼いで來た遺產を扱つてゐ

るのである。

催眠術は神経症を、殊にヒステリーを、研究する方法として價値あるものであることが分つた。偉大な印象を與へたものはシャルコー（Charcot）の試みであつた。彼は、外傷（不幸）に依つて惹起した障害はヒステリー性のものであり、從つて催眠中に外傷の暗示を與へると、同じ特性の障害を人工的に呼起し得ると考へた。その時以来、外傷的影響がヒステリーの徴候の源泉には常に必ず伴つてゐるに違ひないと期待されてゐた。シャルコー自身はヒステリー的神経症を心理的に理解しようとの努力を進めはしなかつた。併し彼の門弟ジャネー Janet はこの研究を取上げ、ヒステリーの徴候は或る無意識の思想（idées fixes）に確乎と依屬してゐるものであることを、催眠術の助けに依つて示すことが出来た。ジャネーは、心理的綜合を纏めることが素質的に出来ない事が、その為めに心理生活の破綻（分裂 Dissociation）が生ずるのだと仮定し、それがヒステリーの特質だと説いた。

併し精神分析は決してジャネーの研究に負うてゐるものではないのだ。精神分析が負うてゐるのはウインの醫師ヨゼフ・ブロイヤー博士の實驗である。彼は何ら外國人の影響を受けることなしに、一八八一年頃に、高級の才分あるヒステリーの娘を、催眠術の力に依つて研究し、癒すことが出来た。ブロイヤーの報告はその後十五年間も公表されなかつた。フロイドが協働者となつて初めて報告は

されたのである。彼の處置した患者の場合は、神經症を我々が理解するに就いての意義を今日に至るまで保有してゐる唯一のものだ。故にこの場合に就いてやゝ長くこれを論ずるのは當然である。ブロイヤーの處置した患者の場合が、如何なる特質を具へてゐたかを明白に把握することが必要である。その娘は彼女が感傷的な愛を寄せてゐる父の病氣の看護をしてゐた時に病氣になつたのである。ブロイヤーは今や證明することが出來た、總て彼女の徵候はこの病氣看護に關係を有してをり、この看護に依つて徵候の說明がつくと云ふ事を……。このやうに、謎のやうな神經症の患者の場合が或る限なく透視され、一切の病氣現象の有意味であることの暴露されたのはこれが始めてゞあつた。また、徵候の一般的特質としては、徵候が、或る滿たされざる（さうして他の動機のために抑へ付けられてゐる）衝動（一つの行動への）を包含する如き立場（事情）に於いて生ずると云ふことであつた。その抑へられてゐる行動の代りとなつて、正に徵候は擡頭したのであつた。かくて人々は、ヒステリー的徵候の病源として感情生活（感動 Affektivität）と精神力の働き（動力性 Dynamismus）とのあることを知つた。さうしてこれ等二つの見地は、それ以後今日まで放棄せられてゐないのである。

徵候の生ずるこれ等の契機は、ブロイヤーに依つて、シャルコーの所謂外傷と對比せられた。さて茲に注意すべきことは、これ等の外傷的契機、並びにそれ等に結付いてゐる一切の心理的感情は、患

者に於いて忘却せられ宛も嘗て起つたことはないかの如くであり、而もその効果（卽ち徵候）たるや變らずに存續し、決してその間に消耗することのないかの如くだと云ふことである。かくて人々は無意識的な、併し正にその故に特に力强い、精神的過程（さきに人々が、催眠術後に及ぼす暗示の効果に依つて知つたのと同じ精神的過程）の存在してゐることに對する一つの新たな證據を發見したのである。ブロイヤーが用ゐた療法と云ふは、患者に催眠術をかけて忘れられてゐる外傷を想起させ、力强い感動表出を以てその外傷に反應させるにあるのだ。さうすれば、これまでそのやうな感情表出の代りになつてゐた徵候が解消するのである。このやうに、同一方法が同時に病害の探究と解消とに役立ち、さうしてまたこの異常なる一致が後に來つた精神分析に於いても保有せられることになつた。

九十年代の最初の數年間に、筆者がブロイヤーの業績をもつと多數の患者に就いて確めた後に、ブロイヤーとフロイドの兩人は一書の出版の決心をした。この書の中には、彼等の實驗並びにその實驗に基く理論の試みが含まれてゐる。（『ヒステリー研究』一八九五年。）さうして、ヒステリーは、一つの强く感動的に纏綿されてゐる心理的過程の感動が常態的に意識的に消化されないで押込められ、かくて一つの誤つた道程に入込んだ時に生ずるのだと、說いてある。かゝる感動はヒステリーの場合には神經的思想作用の異常な肉體的顯現となつて移つて行く。（轉換。）併し催眠中にその感動を再縱

驗せしめることに依つて別途に導き來り、解消せしめることが出來る。（發　散。）著者等はこの方法を洗ひ流し法 Katharsis（淨化法。閉ぢ込められてゐる感動の解放法。）と名付けてゐる。

洗ひ流しは分析法の直接的先驅者である。さうして、よしんば實驗は更に進み、理論は種々に改變されてゐるにもせよ、やはりその中樞として精神分析の中に保有せられてゐる。併しそれは要するに、何らかの神經病に對して醫者が加へ得る一つの新たな方法に外ならず、まさかこれが一般的の興味を牽き、激しい反抗を呼び醒ますやうにならうとは、誰も豫期しないところであつた。

二、精神分析の抑壓說と性慾說

『ヒステリー研究』公刊の直後、ブロイヤーとフロイドとの共働は破れることになつた。元來、内科醫であるブロイヤーは神經症患者の處置をしないことになり、フロイドはこの年長同僚から引繼いだ道具に更に磨きをかけることになつた。フロイドは技法を刷新し、發見を加へて、洗ひ流し法を精神分析法となした。それをなすにつけて最も困難であつた歩みは恐らく、催眠術と云ふ技法上の手段を放棄することであつた。彼はそれを二つの動機から爲した。第一に、彼はナンシイに於いてベルネイ

ゝの許で稽古の課程を濟ませて來たのであるが、多數の患者の内には催眠させられぬ者もあつたからだ。第二に、催眠術に基く洗ひ流し法の治療上の成功に、彼は滿足し得なかつたからだ。これ等の成功は固より甚だ驚くべきものがあり、治療期間も僅少で濟んだが、併し再發の恐れがあるし、それに患者の醫師に對する個人的關係に依存するものが甚だ多いことが分つたのである。催眠術を放棄すると云ふことは、從來進めて來た方法を用ゐず、新たに出直すことを意味した。

併し、催眠術は患者の忘れてゐることを彼の意識に想起せしめることには、役立つたのである。それの代りになる技法が發見されなければならなかつた。フロイドがその時分へついたのは、自由聯想法であつた。即ち、それは、患者に總て彼からの意識的考察を放棄して、心を落着けて自發的に（その意なくして）想起されて來るものを追及させる（「彼の意識の表面から離れて探らせる」）と云ふ方法であつた。このやうにして想起したものを、患者たちは醫師に報告しなければならない。よしんば如何にそれ等の想起が、彼等にとつて報告したくないものであるにもせよ……。例へば、この考へは不愉快であるとか、馬鹿氣てゐるとか、重要でないとか、この場合には關係がないとか思はれて、報告したくなくてもよからうと思ふにもせよ……。忘れられてゐる無意識を探索するために自由聯想法を用ふると云ふことは、如何にも奇異だと思はれる向きもあらうから、それを是認せしめるためにここに一

嘗辯明しておくのも無駄ではなからう。フロイドがその時、期待してゐた事は、所謂自由聯想も實は一切の意識的思考意圖が抑へられてゐる以上、そこに想起せられるものは無意識的材料に依つて浮び上りを決定されるものであるから、要するに不自由であるに相違ないと云ふ事であつた。この期待は實驗に依つて確證せられた。右に擧げて來た如き『分析時の根本規則』を守つてゐて生じ來る自由聯想を追及することに依り、人々は材料としての想起を豐富に得、この材料に依つて、患者の忘れてゐることを浮び上らせることが出來た。この材料は忘れられてゐるものそれ自身を齎さなかつたが、併しそのものゝ何たるかを判然と、豐富に仄めかしたので、醫師はそこに多少の補遺と解釋とを下すならば、肝心の忘れられてゐるものをそこから察知（再組立）して來ることが出來るほどである。このやうに、自由聯想と解釋術とは、以前に催眠術に掛けてしたのと同じことを爲したわけである。

これでは我々は自分でこの仕事を誠に厄介な、複雜なものにして了つたやうに見える。併しこの方法に依ると、これまでのやうに催眠術をかけて觀察したのでは分らなかつた種々な力の働きを瞥見することが出來ると云ふ、誠に大きな利得があるのだ。病理的に忘れられてゐるものを發見しようとの操作が、一つの不斷なる、甚だ激しい抵抗に會ふので、それに對して自己を防がねばならないと云ふことを我々は認識した。患者が自分の内に擡頭し來る想起を告げないやうに押し込んでおかうとする

（それを押込まれては困ると云ふので『分析時の根本規則』を定めたのだが）ために用ふるあの批評的抵抗そのものが既に、この抵抗の表れであつたのだ。この抵抗現象を重要視するところから、精神分析的神經症觀の根本支柱の一つたる抑壓の理論が生ずるのだ。次に直ちに考へられることは、病理的材料を意識化することに對して現在反抗してゐるその力は、平常とてもやはり同様に發動してゐたに違ひないと云ふ事だ。そこで神經病的徴候の病源に於ける一つの空隙が滿たされる事になつた。現在では徴候がその代理となつて現れてゐるところの諸々の抑壓されてゐる印象や感情は、理由なく、或は（ジャネーが考へたやうに）綜合への力がそこに素質的に缺けてゐて、そのために忘れられたのではなく、それ等は別の心理的な力に依つて抑壓されてゐるのである。さうしてその抑壓を奕事に被つてゐるために現れてゐる徴候が、意識からの閉出しであり、想起からの遮斷である。この抑壓を被るが故に始めてそれ等の印象や感情は病理的となり、つまりそれ等は異常なる途に於いて徴候としての表現をとるやうになるのである。

抑壓の動機としては、從つて一切の神經病の源因としては、二群の心の動きの間の葛藤を我々は擧げなければならない。ところで實驗に依つて知り得たところに依ると、相互に爭ふ諸々の力の性質に關してそこに一つの全然新しい驚くべき事實があるのだ。抑壓は常に必ず、病人の意識的人格（自我）

から發し、倫理的、審美的の動機に據るのだ。抑壓を被るのは利己的なことや殘酷なことで、これ等を人々は一般に惡として考へることが出來るが、併し就中惡いとされてゐるのは性的な願望感情で、これは屢々惡中の尤なるもの、最も禁斷されたものと考へられてゐる。病氣の徴候はこのやうに、禁ぜられたる滿足の代償であり、病氣は人間の中なる不道德なもの丶一つの不完全な束縛に相當するもの丶如くである。

認識の進むに從つて愈々判然して來たことは、如何に驚くほど大きな役割を性的願望感情が心理生活に於いて演じてゐるかと云ふことであつた。かくて性本能の性質と發達とを立入つて研究すべき契機となつたのである。（フロイド『性説に關する三論文』一九〇五年。）併し人々は亦一つの別の、純粹に經驗的な事實に逢着した。即ち、早期幼兒時代の體驗と葛藤とが思ひも寄らぬ重大な役割を、個人の發達中に果し、拂拭すべからざる性向を成熟後にまで遺すと云ふことを發見したのであつた。かくてこれまで科學に依つて根本的に看過された或ることを發見したのであつた。即ちその或る事とは幼兒性感であつて、これは最も初心な年齡時代から肉體的反應にも精神的態度に於いても表れてゐるのである。この小兒の性感を、所謂成人の常態的性感や變態性慾者の異常的性生活など丶等しく性感として一列に見ようとするためには、性慾の概念それ自身が考へ直しと擴張とを經なければならない。

それを考へ直し擴張することは、性本能の發達史に照して正當とせられるのである。

催眠術に代ふるに自由聯想法を以てして以來、ブロイヤーの洗ひ流し法は精神分析法となり、この分析法はそれ以後の約十年と云ふもの、專ら筆者（フロイド）の手に依つて成育を遂げてゐた。精神分析はこの時分に漸次に一つの理論を持つやうになつた。その理論に依つて神經症的徵候の起源、意味、並びに意圖は、十分な說明がつき、この病害を除くための醫者の努力は、合理的な根據を併せられたやうに思はれた。私はこの理論の內容をなす諸々の契機をも一度纏めておかう。それ等は——本能生活（感動性 Affektivität）、心理の動力性、一見漠とした、出鱈目と見える心理現象にも筋の通つた意味があり、何ものかに決定されてゐることなどを强調すること。心理的葛藤の說。抑壓の病理的性質の說。病的徵候を代償滿足と考へる說。性生活が病源としての意味を持つてゐること、殊に幼兒性慾の萌芽にその意味があることなど。哲學的な點に於いてはこの理論の執らなければならない立場は、心理は意識と必ずしも同一でないこと、心理生活はそれ自身に於いては無意識であり、特別な器關（個所、組織）の行動に依りてのみ意識化される。以上列擧の諸項に更に補ひとして附加するならば、幼兒時代のこれ等の感動的な心的態度の內にあつて、一際頭角を現はすものは兩親に對する複雜た感情關係、卽ち所謂エディポス・コムプレクスであつて、このコムプレクスに於いて人々は益々個體

と神經症のあらゆる場合の核心を認識するのである。それから、被分析者の醫者に對する關係に於いて、感情轉嫁 Gefühlsübertragung と云ふ現象が起り人々を驚かすと云ふことも附言しておかねばならない。この轉嫁は理論に對しても實踐に對しても、同樣に重大な意義を獲得してゐるのである。

神經症の精神分析的理論は、このやうな形に於いては、根幹をなす意見や傾向にそれ自身矛盾し、また門外漢からはをかしく思はれ、反感と不信とを招くやうなものを旣に多く含んでゐる。無意識の問題に對する態度のとり方も、幼兒性慾を認めることにも、心理生活一般に於いて性的契機を强調することにも、同樣の事は云はれるだらうが、併しそんなことにはならない筈であつたのだ。

三、精神分析の理論的及び社會的擴充

ヒステリーの少女に於いて、一つの禁斷されてゐる性的願望が如何にして苦痛なる徵候と變化するかをともかくも理解するためには、精神的裝置の構造及び所作に關して深き、錯雜した假定を下さなければならなかつた。それは一定のリビドーを支出してをりながら、それが十分に成功を見ないので兩者の間に矛盾があると云ふことであつた。精神分析の主張する如き關係が實際に存在するものとす

れば、その關係は根本的な性質のものであり、ヒステリー的現象以外の現象に於いても見られ得るものでなければならない。ところでこのやうな推論が事實に合するとすれば、精神分析は既に神經症學者に對してのみ興味あるものとは限らなくなり、凡そ心理的研究が何らかの意味を持つ一切の方面の人々の興味を要求することが出來るのである。精神分析の業績は、そこで病理的精神生活の分野に對してのみ問題になるのではなく、常態的機能の理解に對してもまた等閑視すべからざるものとなり得るのである。

病理的精神活動以外の活動の説明に精神分析が役立つことの證明は、既に夙く二樣の現象に就いて首尾よく成し遂げられたのであつた。一つは日常生活に非常に屢々見られる行り損ひ、忘却、云ひ損ひ、置き忘れ、等であり、他は健康にして心理も常態的な人々の夢である。平素は知つてゐる固有名詞を度忘れしたり、その他云ひ損ひ、書き損ひ、並びにこれに類したことどもは、これまでは説明しようともされなかつたが、或は疲れてゐたゝめとか、注意が行屆かなかつたゝめとか云ふ事で説明してゐたものである。そこで筆者はその著『日常生活の精神病理』(一九〇一年及び一九〇四年)に於いて、そのやうな現象は意味のあるものであり、常人の意識的意圖がそれとは別の、抑壓されてゐる、屢々直接無意識的の意圖に依つて障害されるがために生ずるのだと云ふことを、多くの實例に就いて

證明した。大抵は一寸考へて見たり、手短かに分析して見るだけで、何が障害の力となつてゐるかを發見するに十分である。云ひ損ひと云つたやうな不完全行爲を屢々行ふと、誰でも自分の内に意識的ならぬ心理的過程が存在してゐてそれが効果を及ぼし、少くとも他の意圖的な行動の禁制となり改變となつて表れて來ると云ふことを、容易に認めるやうになるであらう。

夢の分析はこれよりも更に一歩を進めた。それを筆者は、旣に一九〇〇年に『夢の解釋』てふ一書として公にした。分析して見ると、夢は神經症の徵候とその構造が違つたものでないことが分つた。夢は神經症的徵候と同じやうに、をかしな、馬鹿げたものと見えるかも知れない。併し精神分析に於いて使用する自由聯想とあまり違はない或る技法を用ひて調べて見ると、我々は夢の顯在內容から多くの隱れたる意味、卽ち潜在內容にまで到達するのである。この潜在する意味は總ての場合に於いて一つの願望感情であつて、現在充足されたものとして表はれてゐるのである。併し幼兒の場合とか、さし迫つた肉體的要求に壓迫されてゐる場合とかの以外は、この祕密の意味は決して分るやうには表はされるものではないのだ。夢はまづ一つの歪みを受けなければならない。

その歪みは夢の本人の自我內に在る制限的な、檢閱的な力の仕事であるのだ。そこで覺醒時にあつて想起される如き顯在的の夢が生ずるのだが、これは檢閱との妥協に依つて譯の分らないまで歪めら

れてゐる。併し分析して見ると、或る満足狀態又は願望充足の表現としての正體を暴露して來る。つまり夢も相互に相爭ふ二つの心理的な力の間の妥協であることは、正にヒステリーの徵候などに於いて發見したのと同じである。夢は（抑壓されたる）願望の（認められたる）充足であるとの公式は、根本に於いて夢の本質に最もよく當てはまるものである。潛在的な夢の願望を顯在的な夢の內容に變化させるあの過程（夢の仕事）を研究することに依つて、我々は、無意識心理生活に就いて知り得たところの最上のものを把握したのである。

そこで、夢は旣に何ら病的徵候ではなく、寧ろ常態的心理生活の所行であることになつた。充足されたものとして夢が表はすところの願望は、神經症に於いて抑壓を被つてゐるところの願望と同じものである。夢がどうして生ずるやうになるかと云ふに、それは人間は眠つて了へば實動の作用力がなくなるので、その間に抑壓が輕化して夢の檢閱となつてゐる、その狀態が夢の成立に好都合だからである。併し夢の構成が成る限度を超えると、夢の本人は夢を打切つて驚いて眼をさます。このやうにして、常態的な心理生活に於いても病的な心理生活に於けると同じ諸勢力と同じ過程との存するものであることが、證明せられた。夢の解釋以來、精神分析は二重の意義を持つやうになつた。分析は神經病醫からばかりでなく、更に一般の精神科學に携はる一切の人々から重要視せらるべきことが必要

となつた。

ところが併し、精神分析に對する一般學界の待遇は決して香ばしいものではなかつた。約一年間と云ふもの、何人もフロイドの事業に頷首するものはなかつた。一九〇七年頃になつて、スキツルの精神病學者たち（チウリツヒなるブロイラーとユング）が精神分析に注意を寄せて來、今や殊にドイツに於いては、憤慨の暴風雨が捲起つて來た。併し暴風雨は方法と論調に於いて甚だ几帳面とは云ひ難かつた。精神分析はその時、甚だ多くの新奇な事どもと運命を共にし、それ等と一緒に暫く時日の經つ内に、やがて一般の承認を得るやうになつた。とにかく精神分析の本質中には、特別に激しい抵抗を呼覺まさねばならないものがあつたのだ。斯學は文明人の先入見の二三の急所に觸れたのだ。さうして總ての人々を何らかの程度で分析的反應に服させたのだ。と云ふのは、斯學は、萬人が申合せたやうに無意識内に押込んでゐるものを發見し、かくて同時代者たちをして、分析處置を受ける患者らがその抵抗を露はに出すのと丁度同じやうに振舞はざるを得なくさせたからである。なほこゝで告白しておかなければならないことは、精神分析學說の正しさに就いて確信を持つやうになり、或は分析實施の手心を覺えるまでには相當骨が折れたと云ふことである。

一般の敵視的態度は、併しながら、精神分析がその後十年間に着々として二つの方向に擴まつて行

つたことを、妨げ得なかつた。地圖の上では、斯學が段々新しい國々に迎へられることに依り、また精神科學の分野では、段々新しい學科に應用せられることに依つてゞある。一九〇九年にはスタンリ・ホール G. Stanley Hall は自分が總長たるマサチウセッツ州、ウスター市のクラーク大學に於いて、精神分析に關する講義を乞ふべくフロイドとユングとを招待して、また彼等を大いに歡待した。精神分析はそれ以來、アメリカに於いて一般的となつてゐるが、併し却つてそのためにまたこの國に於いては斯學の名に於いて多くの輕薄と誤用とが行はれてゐる。既に一九一一年に於いて、ハヴロック・エリス Havelock Ellis は、分析が單にオーストリとスヰツルに於いてのみならず、同樣に合衆國に於いても、イギリス、印度、カナダに於いても、さうしてまた確にオーストラリヤに於いても、研究され實施されてゐることを確證してゐる。

この苦鬪と最初の開花との時代に於いてまた、專ら精神分析のための文獻的機關が現はれた。それはまづ『精神分析的並びに精神病理的研究年報』„Jahrbuch für psychoanalytische und psychopathologische Forschungen." であつて、發行者はブロイラーとフロイド、編輯者はユングであつたが、世界大戰の勃發と共に廢刊となつた。次にアードラー及びステーケルの編輯に屬る『精神分析中央雜誌』Zentralblatt für Psychoanalyse." (1911) があるが、これはやがて『國際精神分析雜誌』

„Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse"（一九一三年創刊、今日に至る）に合流することになつた。更に一九一二年以降、ランク及びザックスに依つて『イマゴー』„Imago"が始められたが、これは精神分析を精神科學に應用するための雜誌である。英米に於ける醫師間の偉大な興味は一九一三年に、ホワイト White 及びジェリフ Jelliffe の編輯に成る『精神分析評論』„Psychoanalytic Review"の發刊となつて、これは今日も存續してゐる。降つて一九二〇年には特に英國に對してのみ定められてあるところの『國際精神分析雜誌』„International Journal of Psycho-Analysis"が、アーネスト・ジョーンズに依つて生れた。國際精神分析出版局、並びにそれに相當する英國の局(I. Ps A. Press)は、國際精神分析叢書の名の下に、分析的出版物を逐續刊行しつゝある。勿論、精神分析の文獻は、大低は國際精神分析學會に依つて企てられてゐるこれ等の定期的刊行物にのみ限られてゐるわけではない。無數の個所に分散し、また科學的及び文藝的の刊行物中に存する。ロマンス語の世界に於いては、リマ（ペルー）のデルガドー H. Delgado に依つて發行されてゐる„Rivista de Psyquiatria"が、精神分析に特別の注意を寄せてゐるものとして特筆される。

精神分析のこの第二次十年を第一次十年に比して如何なる點が本質的な相違であるかと云ふに、それは、筆者が既にそれの唯一の代表者ではなくなつたと云ふことである。筆者の周圍に集る門弟、追

隨者の數は愈々多きを加へ、彼等の仕事はまづ精神分析學說の傳播に努め、次いでこれを進展させ、完全にし、深化させた。これ等の追隨者たちの內から年の進むにつれて、それは當然避け難いことではあるが、多數の者等が離れて行き、彼等獨自の道を歩み、或は反對者に廻り、かくて精神分析の發達の連續が脅威を受けたやうに思はれたほどであつた、一九一一年と一九一三年との間には、チウリッヒのユングと、ヰインのアードラーとは分析的事實に別の解釋を下さうと試み、分析的見地から離れようと努めたゝめに、多くの動搖を來したが、併し彼等の分離は大した影響をあとに殘さずに、やがて動搖は納まつてしまつた。何が彼等に一時的の成功を與へたかと云ふに、それは大衆が精神分析的見解の壓迫から免れたいと云ふ心持を持合せてゐたから、どんな道を開いてやつても走り出して來たのだと云ふ事に依つて容易に說明がつく。遙かに大多數の共働者たちは踏止まり、彼等に示された方向に向つて着々とその仕事を進めて行つた。吾人は次に甚だ簡單ながら、精神分析が多種多樣な方面に應用せられた業績を述べることにするが、その內に彼等共働者たちの名前が繰返し出て來るであらう。

四、精神分析と精神病學

醫者仲間の方面から精神分析に對して起つた騷然たる反對の聲は、その追隨者らをして斯學を特別な病理學として、また神經症の治療法として、發達せしめんとする（この問題はまだ今日もなほ完全に解決されてはゐないが）彼等本來の意圖を擲たしむるに力はなかつたのである。總てこれまで到達してゐたより以上に遙かによく治療の成功することの否定すべからざるがために、愈々新たな努力を重ね行くことの勵みがつき、また材料により深く突入して行く際に直面する困難のために、分析技法の深き改變と理論的假定及び豫想の重大なる是正とが生じて來たのであつた。

精神分析の技法はこの發展の道程に於いて、他の何れかの醫學的專門分科と同じやうに、甚だ精密に、甚だむづかしいものになつて來た。この事實に對する認識の不足からして、殊に英米に於いては精神分析に對する多くの冒瀆がなされた。卽ち、たゞ文字の知識に依つて精神分析の講義を習得したに過ぎないものが、何等特別の練習を受けずして、自ら分析處置をなすの能力あるものと誤想したのであつた。さう云ふ不始末の結果は斯學に對しても患者に對しても、甚だ助からぬことになり、延いては精神分析に對する信用を失墜するに至つたのである。それ故に、一九二〇年、ベルリンにアイティンゴンが始めて精神分析診療所を建設したことは、高き實踐的意義を有する第一歩となつたのである。この研究所は一方に於いて一般大衆の分析治療を引受けるのみならず、他方に於いて醫者たちに實踐

的分析者としての修業を與へるために一定の教程を課するのである。但しその教程の内には、諧習者が自ら精神分析を受けることが條件となつて含まれてゐるのである。

醫者が分析材料を處理する上に必要な諸々の補助概念の内でも、第一に舉ぐべきは「リビドー」„Libido“の概念である。リビドーとは、精神分析に於いてはまづ、對象にさし向けられたる（精神分析理論に依つて擴大せられた意味に於ける）性愛の（量的に變化し且つ測り得るものと考へられる）力を意味する。更に研究の進むに從つて、この『對象リビドー』と相並んで、自我にさし向けられたる『ナルチスムス的リビドー又は自我リビドー』を想定する必要が生じた。さうしてこれ等二種の力の相互效果に依りて、心理生活中に於ける幾多の常態的並びに病理的過程を說明することが出來るのである。やがて大雜束ながら、所謂轉嫁神經症„Übertragungsneurosen“とナルチスムス的病弊とを區別することになつた。前者（ヒステリー及び强迫神經症）は、精神分析の本來の對象であるが、後者即ちナルチスムス性の神經症は、固より分析の力に依つて大いに研究する事は出來るが、これに治療的影響を及ぼすことは原則的に困難である。精神分析のリビドー說はまだ結論に到達してゐないし、また一般本能說に對するリビドー說の關係もまだ說明がついてゐないと云ふのは本當である。精神分析はまだほんの若い、準備の行き屆かない、急造的の學問である。併しこゝでこの機會に

強調しておくが、精神分析に對して屢々それは汎性慾説だと云ふ批難を揚げられるけれども、この批難は甚だ間違つてゐる。著者は云ふ、精神分析の理論は異なる性的本能力以外に他に何らの本能力を認めてゐないと。併しそれに就いて、彼等は「性的」を分析的の意味に於いてゞなく、卑俗な意味に於いて解する事に依つて、通俗的な先入見を利用してゐるのである。

精神病學の方では『機能的精神症』と名付けてゐる一切の病害をもまた、精神分析の考へ方では、ナルチスムス的病氣の内に數へるのである。神經症と精神症とが、截然たる限界に依つて分離されてゐないことは、丁度健康と神經症との間の如きものであることは云ふまでもない。さうしてまだそのやうに謎のやうな精神病的現象の説明にまで、これまで同樣に不可解であつた神經症に就いて得た洞察を當てはめることは、極めて容易である。既に筆者はその孤立時代に、妄想症の或る患者を分析的に研究して見て相當よく理解し得るものにした。さうしてこのやうに曖昧な精神症に於いても單純な神經症の場合と同じ内容（コムプレクス）と似たやうな力の働きが存することの證明がついたのである。ブロイラーは多くの精神症者に就いて調べて見て、彼の所謂『フロイド的機制』の徵を突止め得た。またユングは一九〇一年に早發性痴呆症の窮極的歸結に於ける最も特殊な徵候に對して、これ等の患者の個人的生活史から説明を與へたので、分析者として偉大な尊敬を一擧にして獲得した。一九

一一年にブロイラーは早發性痴呆症(レプフレニイ)を總括的に加療して見て、この精神病の考へ方に對する精神分析的見地の正しいことを、窮極的と思はれる遣り方で明かにした。

このやうにして精神治療は精神分析の第一の應用分野となり、さうして今日もその通りになつてゐる。神經症の深き分析的知識を得るに就いて最も多くを貢獻したこれ等の研究者たち、例へば（最も主立つた人々だけを擧げるが）ベルリンのアブラハム、ブダペストのフェレンチ等は、また精神症の分析的闡明に對して主要な位置を占めてゐる。我々が神經症的及び精神症的現象として認めるところの總ての障害が、要するに一つのものであり、且つ相互に關係があると云ふことの確信は、精神病學者たちが如何に反抗しても、我々に於いて愈々强くなるばかりである。人々は漸く理解し始めたのである——恐らく最もよくアメリカに於いて——たゞ神經症を分析的に研究することに依つてのみ、精神症の理解に對する準備を供し得ることを……。また精神分析は將來の科學的精神病學を可能ならしめるために必須であると云ふことを……。將來の精神病學はもはや奇妙な狀態や樣子や、譯の分らぬ經過やを記述したり、大雜束な解剖的及び銘耐的の外傷が我々の到底知り得ない精神的裝置に及ぼす影響を追及したりするだけで滿足してをるに及ばないのである。

五、深部心理學とその應用

併し精神分析は、精神病學に對するそれの意義に依つて、知識界の注目を己れに牽付け、或は現代史 The History of our times 中に於ける一つの位置を自分のために高めたと云ふことは未だ曾てなかつたであらう。かゝる結果は精神分析の常態的精神生活に對する關係から生じたのであつて、病理的精神生活に對するそれから生じたのではない。本來、分析的研究は、實は二三の病的心理狀態の發生條件（創生 Genese）を根本的に知らうとすることを意圖したに過ぎなかつたが、然るにそのための努力をしてゐる内に精神分析は、根本的意義を有する關係を發見することになり、正に一つの新心理學を創造することになり、そこで我々はそのやうな發見の妥當性は必ずしも病理の世界に限定されるわけはないのだと自ら云はざるを得なかつたのである。かゝる結論の正しさに對する決定的な證明が如何にして與へられたかは、我等既にこれを知つてゐる。それは分析的技法に依つて夢の解釋がついた事に依つてゞあつた。夢は實は常態者の心理生活に屬してをりながら、やはり本來病理的な行爲（健康と云ふ條件の下に於いても常に必ず起き得るところの病理的行爲）に符合するものである。

人々が夢の研究に依つて得たところの心理學的洞察（知識）を確保したとすれば、精神分析を、より深き、意識には直接的には近付き得ない心理生活に就いての學説として、卽ち『深部心理學』として、宣言し、さうして精神的諸科學の殆ど全體に對して應用し得るやうになるのは、ほんの一歩と云ふところである。この一歩は個々人の精神的活動から、人間社會及び民族の心理的所産への移行に、卽ち個人心理から集團心理への移行に、存するのだ。さうして我々は多くの驚くべき類似に依つてこの一歩を踏出すことになつたのである。そこで人々の經驗したことは、例へば、無意識精神活動の深層に於いては、相反のものが相互に區別されないで、同じ要素に依つて表現される。併し言語學者アーベルは既に一八八四年に、我々に知られてゐる最古語に於いては相反を表はすために別語を用ゐてゐないといふ事を主張してゐる。(一)で、強と弱とを意味する古代エヂプト語は始めはたゞ一語であつたが、その後やうやく相反の兩端が輕度の變化に依つて對立するやうになつた。併し、最近代語に於いても明かにこの相反の遺物であるものが指摘される。で、ドイツ語の“Boden”は家の最上部と最下部とを意味し、ラテン語の“altus”が高と深とを同時に意味するのと似てゐる。であるから、夢に於いて相反のものが同一の扱ひを受けてゐるのは、人間思想の一般的な、古代的特徵である。

註(一) 『原始語の相反意義に就いて』（本全集第六卷『分析機制論』の内に包含せられてゐる。——譯者。）

また一つの別方面から一例を擧げるならば、或る種の強迫症者の強迫行爲と、あらゆる世界に於ける信者の宗教的儀禮との間に、完全な一致が存するとの印象をどうしても否むわけには行かない。強迫精神症の大抵の患者の場合は、滑稽な私的宗教と同じやうな樣子を見せる。それで、公的宗教は、それが一般の人々の間に行亙つてゐるが故に弱まつてゐる強迫神經症と見なしてもよいであらう。かゝる見方は總ての信者にとつて確に甚だしく不快ではあらうが、併し心理學的にはこれに依つて得るところ頗る多いのである。何となれば、強迫神經症に於いては如何なる力が相互に爭ひ、遂にその葛藤が強迫行爲の外的形式（儀式）に依る著しい表現を作り出すに至つたかゞ、精神分析にとつて分明したからである。宗教的儀式にもこれと類似したことが存在してゐようとは思ひも寄らなかつたのだが、宗教的感情はその最も深いところが、父への關係に根差してゐる事が分つて此處にもまたこれに類した動的立場の存することが證明せられて、始めてそれと思ひ及ぶやうになつたのである。この實例に依つて讀者諸氏はやはり考へられるであらうが、精神分析の非醫者的分野への應用はまた高く買はれてゐる先入見を侵害し、深く根差してゐる感情を刷抉し、かくて敵愾心（本質として感動に根據を有する敵愾心）を呼起さゞるを得ないのである。

我々が無意識的心理生活の最も一般的な關係（諸本能感情の葛藤、抑壓、並びに代償滿足）を看く

存在するものとして假定することが許されるならば、かくてこれの諸關係の認識にまで導くところの深部心理學が存在するならば、即ち人間の心理生活の極めて多種多樣な分野に精神分析を利用して、著く重大な、これまでは到達することの出來なかつた結果を導き出し來るであらうことは、容易に期待し得るところである。オットー・ランクとハンス・ザックスとは孜々として力を合せ甚だ豐かな研究をなし、如何なる程度まで精神分析者の操作が一八一三年に至るまでのところ、この期待に添ひ得たかを纒めて見せた。玆にその調査研究の中から十分に種々の事を數へ上げたいのだが、紙數に限りがあるので、それも出來ない。私はたゞ最も重要な業績だけをとり出して、一二三の個々の事柄をそれに附屬させて話すことにしよう。

あまりよく分つてはゐない內的衝動を別にして考へるならば、人間の文明發達の主要激勵力は外的現實の必要（この必要が人間の自然な慾求を容易に滿足させることを否み、過大な危險に人間をさらす）である。このやうに外界から拒否せられるので、人間はどうしても現實と鬪爭しなければならなくなる。この鬪爭は一部分は、現實に適應することに始まり、他の一部分はこれを支配することに始まるが、併し自分と同じやうな他の人間との共同勞働及び合同生活をしなければならなくなり、而もこれ等共同の勞働や生活をなすことの內には、社會的にどうしても滿すことの出來ない多種多樣な本

能感情の放棄と云ふことも含まれてゐるのである。文明の愈々進むに從つて、抑壓の要求もまた益々大を加へて來たのである。併し文明なるものは抑々、本能放棄の上に成立つてゐるものであつて、一切の個々人は幼年時代から一人前に成熟するまでの自分の途上に於いて、人類のこの發展を繰返し要心深く諦めるのである。精神分析の研究するところに依ると、このやうに文明に依つて抑壓を被つてゐるものは主として（專らとは云はないまでも）性的な本能感情である。さて、この本能感情の一部分は價値ある特性を示してをつて、それの第一次的目的から離脱し、『昇華』されたる努力としてそのエネルギーを文明發達のために資するのである。また別の一部分は、併し、滿足されざる願望感情として無意識中に殘存し、よしんば歪められた滿足にもせよ、何らかの滿足を得ようと、その方へ進んで行くのである。

人間の精神的活動の一部分が現實外界を支配することのために用ゐられてゐると云ふことは、人々の前から云つてゐたところだ。ところで精神分析は右の説を敷衍してかう云ふ、一つの別の、特に高く評價されてゐる部分の精神的所產が願望充足に、かの抑壓されてゐる願望（幼年時代以來各人の心の内に滿足させられないで來た願望）の代償滿足に、資するのだと。これ等の精神的所產物（これと譯の分らぬ無意識との間に關係の存することは常に察せられてゐた）の内には神話、文學並びに藝術が

屬し、さうして實際、精神分析者たちの仕事は、神話學、文藝學、並びに藝術家心理の諸分野に、十分な光明を投じたのであつた。その見本としてこゝにはたゞオットー・ランクの業績だけを擧げておく。彼等は、神話と童話とが夢と同樣、解釋を下し得るものであることを明かにし、無意識の願望から藝術作品の實現に至るまでの錯雜した道を追及し、藝術作品の享受者に對する效果を理解し、また藝術家自身に就いては、彼と神經症者との內的關係並びに相違を說明し、彼の構想、彼の偶然的經驗並びに彼の所行との間の關係を指摘したのである。藝術作品の美學的評價並びに藝術的天分の闡明は固より精神分析にとつて問題となり得ない。併しながら、精神分析は、人間の空想生活に關する一切の問題に於いて、決定的な言葉を吐き得るやうに思はれる。

さうして今や第三に、——所謂エディポス・コムプレクス即ち兩親に對する幼兒の感情關係が人間の心理生活に於いて如何に不思議なほど大きな役割を果してゐるかを、精神分析に依つて認識して、我々の驚歎はいや增し行くのである。併しエディポス・コムプレクスなるものは、二つの基本的な生物學的事實（幼兒時代に人間が永く兩親の世話になると云ふ事實と、人間の性生活が三歲又は五歲に於いて最初の頂點に達し、やがて禁制の一時代を經て思春期に至つて再度高潮し來ると云ふ注意すべき事實）の心理的相關であることを承知するならば、この驚歎もさほどではなくなるのである。やがて併し、

人間の精神活動の第三の、最高の、眞劍な部分（宗教、法律、倫理、ならびにあらゆる國家的な諸形式を造り出したあの部分）が根柢に於いては、各個人をして、そのエディポス・コムプレクスを支配するを得しめ、彼のリビドーをその幼兒的結合から、窮極的な、望ましい、社會的結合にまで移行せしめることを目的とするものであることが洞察されて來る。精神分析を宗教科學竝びに社會學に應用すること（報告者、テオドル・ライク、プフィスタ）に依つて右述べた如き洞察を得たのであるが、これ等の應用は未だ著くして十分に價値付けられてをらぬけれども、併し、なほ研究を進めて行くと、この重大なる結論の確實さが高められて來るであらうことは疑ふまでもない。

なほ附錄的に言及しておかなければならないことは、教育學がやはりまた、幼兒心理の分析的研究が斯學に與へた暗示を利用せざるを得なくなつてゐると云ふことである。また重い肉體的病害を分析的に處置して有望であるとの聲が治療家（グロデック、ジェリフ）の間に起つてゐると云ふ事である。何となれば、これ等の病害の多くのものに於いてはやはり心理的要素が伴つてゐて、その心理的要素には影響を及ぼすことが出來るからである。

そこで人々はかく期待することが許される。精神分析（これの發達と從前の業績とを右に簡單で不十分ながら述べて來たが）は、次の數十年間に於ける文化發展の重要な一醱酵となり、個人に對する

我等の理解を深め、生活の邪魔になると認められる多くのものを排除するの一助となるであらうと。たゞ人々の忘れてならぬことは、精神分析はそれ自身だけでは人の世の姿を全的に彷彿することが出来ないと云ふことである。前にも私が簡單に云つておいた通り、心理裝置を、外界に向つてゐる意識的な自我と、無意識的で本能的要求に支配されてゐるエスとの二つに區分する見方を採るならば、精神分析はエス（並びにそれの自我への干渉）の心理學と名付けるべきである。このやうに、斯學はあらゆる知識分野にたゞ寄與を供するのみで、それを補ふて全的たらしめるものは自我の心理である。併しこの寄與に過ぎぬものが屢々正に、一行爲の本質的なものを含んでゐるとするならば、卽ちこの本質的なものは、永く認識されずにゐた無意識心理が我々の生活に對して要求し得るだけの重要さに正に相當するだけであるのだ。

自傳

『自傳の形に於ける現代醫學』叢書の第四輯として一九二五年に公刊せられたるもの。同叢書の編纂者はグローテ博士 Prof. Dr. L. R. Grote, 出版所はライプチヒのフェリクス・マイナー Felix Meiner, 原書全集第十一卷收載。

一

この『自傳』叢書の大抵の執筆者たちは、引受けたこの課題の特殊さと困難さとに就いていろ〳〵考へ直して見て、自分の仕事に取掛つてゐるのである。私の仕事にはなほ一層困難な部分があると私は思ふと敢て云はう。何となれば、こゝに要求せられてゐるやうな類の仕事は、私は既に幾度も公にしてゐるし、また對象の性質上から、私の場合に於いては、他の人々の場合に普通であり、必然的であると思はれるより以上に、私の個人的役割が問題になつてをつたからである。

精神分析の發展及び内容を始めて纏め表はしたものとしては、マサチウセッツ州のウスター市のクラーク大學に於いて、一九〇九年に述べた五講がある。これは私が同大學の創立廿週年の記念講演に招かれて述べたものである。[一] 近頃、私は或るアメリカの叢書に同樣な内容の寄書をしてくれとの求めに應じたばかりである。何となれば、「二十世紀の頭初に就いて」のこの出版物は、精神分析のために特に一章を割愛することに依つて斯學の意義を容認したからである。[二] これ等兩者の中間に出た書物としては、『精神分析運動史』(一九一四年)[三] がある。この論文中には、私が現在の立場に於いて書き込

むべき筈の一切の本質的な事柄を書いて了つてゐるのである。私は自分で矛盾したことを云ふことが出來ないし、さりとてまた同じことを繰返すのも智慧がなさすぎるし、するからして、私は自傳的興味と歴史的興味との間に、主觀的表現並びに客觀的表現の間に、一つの新たな混合關係を發見するやうに試みざるを得ないのである。

註(一)　未來は英文にて、一九一〇年に『アメリカ心理學雜誌』に發表せられた。獨文 „Über Psychoanalyse," Wien, 7. aufl. 1924. 本書卷頭論文がそれである。

(二)　多事なる二十世紀。本世紀を作りつゝある人々に依るその記述。二卷。ロンドン及びニウ・ヨーク。百科辭典會社。摘論はブリル博士に譯せられ、第二卷の第七十三章を構成してゐる。

(三)　一九二四年に始めて公刊。本書二一七頁以下參照。

私は一八五六年五月六日に、今日ではチェコスロワキア領内になつてゐる一小都市なる、メーレン Mähren のフライベルグ Freiberg に生れた。私の兩親はユダヤ人であつたから、私もやはりユダヤ人である。私の父方の家族に就いて私の知り得てゐるところでは、彼等は十四五世紀に於けるユダヤ人迫害のために東方に遁れ、さうして十九世紀の間にはリタウエン Litauen 地方からガリチエン Galizien 地方を經てドイツのオーストリーへと逆戻りして來て、永らくライン河畔のケルン Köln に住んでゐた。四歳の幼兒の頃に私はヰインに來り、この地で私は大低の學校を濟ませた。高等學校に

於いては、私は七年間首席で通し、特待生に擧げられ、一度も試驗を受けたことはなかつた。我々は誠に世間を狹く暮してはゐたが、父は私をして職業の選擇に於てたゞ自分の傾向にのみ從はしめようと望んでゐた。醫師としての仕事や活動に特別の偏愛を持つてゐたとは、さう云ふ若い時分にも私は感じなかつたが、後年になつてもやはり感じなかつた。寧ろ私は一種の知識慾に動かされたが、併しその知識慾も自然的對象に對してよりは人事關係により多く向ひ、またその滿足を得るために觀察と云ふことが一つの主要手段として價値あることを認識しなかつた。けれども當時に行はれてゐたダーヰンの學説は私を惹付けた。何となれば、これを學べば森羅萬象を大いに知ることが出來ると思はれたからである。またゲーテの『自然』と題する美事な文章が、或る通俗講演會で朗讀されたのを聽いたことがあるが、それは卒業試驗の直前であつたので、私は醫學を専攻する決心を固めたのである。

私は一八七三年に大學に入つたが、そこで私はまづ二三の痛切な失望を感ぜしめられた。就中、私は自分がユダヤ人であるが故に、自分を劣等であり、人々の間に伍すべからざるものだと云ふ風に考へるやうになつた。併し私は自分が劣等であると云ふ考へは、斷然これを拒けた。何故に私は自分の血統（或は、人々の云ひ始めたところに依ると、人種）の故に、自分を恥ぢなければならないのか、全く分らなかつた。私が人々に伍することが出來ないと云ふ事の方は、これを斷念するにさして困り

はしなかつた。そのやうに仲間に入れて貰へなくとも、熱心な働きをして行けば彼等の一隅に割込むことは出來るに違ひないと私は考へてゐた。併し大學に於いて靑年時にこのやうな印象を始めに受けたゝめにそれが後年に重大な結果を及ぼしたことの一つは、私はやがて世間から反對せられ「結束してゐる大多數者」から排斥せらるべき運命を夙くに知悉したことであつた。私が多少とも人とは違つた見方をするであらうことは、旣にこのやうに下準備があつたのである。

その他、私が大學生活の最初の一二年に於いて經驗せざるを得なかつたことは、自分の天分が特殊であり狹隘であるために、靑年血氣のあまり引摺つた大低の科學的部門に於いて總て失敗したことであつた。で、私はメフィストの次の警告を成程と知つたのであつた。——

君がいくらあちこち學問をしようとしてさまよつても、
それは駄目だ。てんでに學ばれることしか學ばれない。——森鷗外博士譯——

エルンスト・ブリュッケ Ernst Brücke の生理學實驗室に於いて、遂に私は落着きと十分な滿足とを見出し、また私の尊敬し模範となし得る人物を知つた。ブリュッケは私に神經組織學の中から一つの問題を課したが、私はそれを彼の滿足の行くやうに解答し、且つ自分でその問題を進めて行くことが出來た。私はこの研究所に於いて一八七六年から一八八二年まで（その間多少の中斷はあつたが）働い

た。さうして次に助手の位置に就くものは自分であると一般に認められてゐた。本來の醫学的部門は何れも——精神病科學は例外として——私を寄付けなかつた。私は醫學の研究を等閑に附し、始めて一八八一年に、つまりこのやうに相當遲く、治療法一般のドクトルに推擧せられたのである。

然るに一八八二年に轉機が來た。と云ふのは、私の何よりも尊敬する先生が私の父の男氣ある推擧を是正して、家があまり豐でないなら理論の研究は廢めさせたらどうだと注意したことである。私は彼の勸告に從ひ、生理學の研究室を去つて、求官者として一般病院に入り、そこで私は暫時の後に副醫（内勤醫）に進らめれ、種々な科で勤め、また半年以上もマイネルト Meynert の下で働いたが、彼の仕事と人格とは私を既に門下として結付けてゐた。

併し、或る意味に於いて私は、最初に定めた仕事の方向に對する忠實さを失はなかつた。ブリュッケは下等魚類の一つ (Ammocoetespetromyzon) の脊髓の斑紋を研究對象として指定した。私は今や人間の中樞神經組織に移つて行つたが、この組織の錯雜した纖維に就いては、フレヒジク Flechsig が時を異にして髓鞘の生ずるのを發見したことのために當時非常に大きな光を投じてゐたのだ。また私が自分が始めに一人で Medulla oblongata（延髓）を對象に選んだことも、私の始めの仕事を續けさせる一つとなつた。大學生活の初年の頃には私の研究は多方面に散布されてゐたが、今やそれとは正

反對に、一つの材料又は一つの問題に對して勞作を專攻的に集注する傾向が生じて來た。この傾向は私にはいつまでも殘つて、後には私が一面的であると云ふ批難を買ふやうにさへなつた。

以前には私は生理學の研究所に於いて熱心に仕事をしたが、丁度それと同樣に今や私は頭腦の解剖的研究所に於いて熱心に仕事をするやうになつた。延髓に於ける纖維の發達及び種子の發生に關する小論文は、この病院勤務時代の產物で、常にエディンガー Edinger の注意を牽いてゐた。私のために實驗室を開いてくれてゐたマイネルトは或る日、私は彼の下で働いてゐたのではなかつたが、私に頭腦解剖に轉向したらどうかと提議し、彼の講座を私に讓つてもよい（何となれば、彼は新しい方法を扱ふには老い過ぎてゐると感じた）からと約束した　私は責任の重大に恐れをなして斷つたが、また私は當時既に、天才ある人が決して自分に好意を寄せるものでないことを察知してゐたらしいのである。

頭腦解剖は實踐的見地に於いては、生理學に對して僅に何の進步でもなかつた。私は神經病の研究を始めることに依つて、物質上の要求を眼中においた。この專攻部門は當時ヰインに於いてはあまり問題にされなかつた。材料は種々の內面的部門に散布されてゐた。これを修めるべきよき契機は殆ど存在しなかつた。人々は自分で自分を敎へて行くより外はなかつた。ノートナーゲル Nothnagel の

如きもまた（人々はその少し前に、彼が腦の位置限定に就いての著書ある故に呼んだのであつたが）、院内醫學の他の分野よりも神經病理學を重要視しなかつた。遙か彼方にシャルコー Charcot の大名が輝いてゐた。で、私は此處で神經病の講師の資格を得て、それから高級の修業のためにパリへ行く計畫を立てた。

それ以後、副醫としての勤務中に私は、神經組織の肉體的病氣に關する多くの、疑問解決的な觀察を公にした。私は漸次にこの方面に精通して行つた。私は延髓に於ける病竈の位置を十分に理解し、病理的解剖學者もそこに何物をも附加する餘地はなかつた。急性多發性神經炎（Polyneuritis acuta）の診斷を與へて患者を解剖に遣つたのはヰインでは、私が始めてゞある。論説に依つて私の診斷が確實となつて、その噂のためにアメリカの醫者たちが私の許へ蝟集して來た。彼等に私は、自分の醫局の患者に就いて、片言の英語で講義をして聽かせた。神經症に就いては、私は何事をも理解してゐなかつた。嘗て私が聽講者たちに定着的な頭痛を持てる或る神經症者を慢性の外切的の腦皮質炎症であると云つた時に、彼等は當然ながら私を批難して離れ去つた。そこで私の前期の教師的活動は終りを告げた。自分のためにいさゝか辯明しておくならば、當時は何しろヰインに於けるもつと偉大な權威たちも神經衰弱を腦の腫物として診斷する慣はしになつてゐた位なんである。

一八八五年の春、私は組織學並びに臨床上の論文に依つて神經病理學の講師の資格を得、その後間もなくブリュッケの熱心なる口利きの結果、私は普通よりも多額の留學費を支給されて、その年の秋、パリに向つて旅立つた。

私は留學生として施療の婦人精神病院に這入つたが、併し始めの程は、諸外國から來て居る多くの仲間の一人として、あまり注目を惹かなかつた。或る日私はシャルコーが、大戰爭以來、彼の講義の獨譯者から一向何の便りも寄越さないので困ると云つてゐるのを耳にした。誰か彼の「新講義」をドイツ語に譯して見たいと申出た。その書面には、私はフランス語の運動性失語症はあるが、感覺性失語症はないと云ふ意味を書いてゐたことを、まだ覺えて居る。シャルコーは私を受容して、彼の親交に入れた。それ以來、臨床の事に關する一切に私は十分に參與するやうになつた。

この文章を書いて居る間にも、私はフランスから多くの新聞論說を受取つた。それ等の論說は精神分析の採用に對して激烈な反對意見を示し、また屢々、フランス學派に對する私の關係に就いて最も不當なる主張を立てゝゐる。例へば、かう云ふことが書かれてゐる、——私は自分のパリ滯在を利用して ジャネー P. Janet の學說をすつかり受取り、それを盜んで逃げて行つたのだ、と。そこで、

私は判然と云つておくが、私がパリの精神病院にゐた間にはジャネーの名前などはまだ聽こえてはゐなかつた。

私がシャルコーの許に於いて見聞した總ての事柄の內、私に最も大きな印象を與へたのは、ヒステリーに關する彼の最後の研究であつた。その研究の或る部分はまた、私の見てゐるところで行はれたのであつた。かくてヒステリー現象の眞實と合法性（„Introite et hic dii sunt.“）との證明や、また男に於いてもヒステリーが屢々起ることの證明が與へられ、ヒステリーの障害や痲痺が催眠術的暗示に依つて生ぜしめられた。この手工的な結果は、心的外傷に依つて自然發生的に惹起された偶然的ヒステリーと、微細な點に至るまで同一特質を具へてゐる。シャルコーの與へた證明の多くに對しては、他の客人たちと同樣自分もまた、まづ奇異の感を抱き、反感の傾向を持つた。それ等の感を私は當時に行はれてゐた理論に依憑することに依つて支持しようと試みた。彼はそのやうな感じを常に親切に、我慢強く、併しまた甚だ明確に打消すのであつた。或る日、それ等の論議の一つに於いて、彼は『それは存在するを妨げぬ』（Ca n'empêche pas d'exister）と云ふ言葉を云つたが、それが私には忘れられぬ印象を殘した。

當時シャルコーが我々に敎へた事の總てが今日でもなほ正しく妥當する筈のないことは、固より人

々の知る通りである。今では不確實となつてゐる事もあるし、また時の試錬に堪え得なくなつた事も二三にして止まらない。併し斯學の持續的所有として尊重せられてゐる事も、そこになほ十分に殘つてゐる。私がパリを去る前に、私は先生と謀つてヒステリー障害と肉體的障害との比較研究をやらうと約束した。私が下さうとした論旨は、ヒステリーに於いて個々の肉體的部分の障害や不感症は、人々の普通の（解剖的ならぬ）考へ方と一致するやうな風に、局限されてゐると云ふにあつた。その點に於いて、彼は私の議に賛成した。併し彼は根柢に於いては、神經症の心理の中により深く這入り込んで行くことに對して特別な熱心のなかつたことは、これを觀取するに容易であつた。彼は元來病理的解剖學から出て來た人であつたから……。

私はヰインに歸つて來る前に、數週間をベルリンに滯在したが、それは幼兒時代の一般的病氣に就いて多少の知識を得たいと思つたからである。ヰインのカソヰッツ Kassowitz は公開の小兒科病研究所を營んでゐたが、その研究所内に自分のために兒童神經病科を設けると約束してゐた。ベルリンに於いてはバギンスキー Ad. Baginsky の許に於いて、甚だ歡待せられ、且つ親切に推擧せられた。カソヰッツの研究所からは、私はその次の年の間に、兒童の一方面的並びに兩方面的の腦障害に關して相當大部の研究論文を若干公にした。その結果、ずつと後の一八九七年にはまた、ノートナーゲル

は私に、彼の大著『一般的及び特殊的治療法全書』中の相當個所の材料を改訂して呉れと依頼した。

一八八六年の秋には、私は醫師としてギインに落着き、或る娘と結婚した。彼女は或る遠い都市に於いて四年以上も私に事へて呉れた者であつた。こゝで少しく逆行的に話をするならば、私がこれ等の若い頃に既に有名になつてゐなかつたのは、この婚約者のせいであつた。いさゝか岐路に逸した、併し深刻な興味を私は一八八四年に、當時はまだあまり知られてゐなかつたアルカロイド・コカインに對して抱き、さうしてこれの生理的効果を研究するやうになつた。その研究の仕事半ばに、私は一つの旅行を思ひ立つた。それは二年間も別れてゐたその許婚者に會ひに行くためであつた。私はコカインに關する研究を速かに片付け、コカインはやがて痲醉劑として廣く利用されるやうになるであらうことを私の論文中で豫言しておいた。併し私は自分の友人にして眼科醫なるケーニクシュタイン L. Königstein に囑して、如何なる程度までコカインが痲醉（不感）劑として病眼に利用され得るかを試驗せしめた。私が賜暇から歸つて見るとケーニクシュタインは試みてゐなくて、別の友人カール・コルラー Carl Koller（彼にも私はコカインの話をしておいた、彼は今はニウ・ヨークにゐる）が決定的な試驗を動物の眼に就いてなし、その試驗の事をハイデルベルクの眼科醫師總會に於いて證明した。それ故にコルラーは當然、コカインに依る局部痲醉の發見者となつたわけであつて、この痲醉法

は局部的外科醫にとつては非常に貴重なものとなつてゐる。併しながら私は、當時婚約者が私を離れてゐたことに就いて、別に恨みを抱いたりはしてゐない。

さてまた私は、一八八六年に私が神經病醫としてボインに居を定めたことに話を戻さう。私はシャルコーの許に於いて見、且つ學んで來た事を「醫師會」に於いて報告すべき責めを課せられた。併し私の話はあまり歡迎せられなかつた。會長なる神經病醫師バムベルガー Bamberger の如き主要人物は、私の話が信用の價値なきものであると說明した。マイネルトは私が記述して聽かせたやうな實例をボインに於いて發見し、それを學會に於いて公表せよと要求した。そこで私はその通りにしたところが、私がさう云ふ病狀を發見し來つた患者のゐる病室の科長たる老醫たちには、さう云ふ觀察をなすことを、またさう云ふ處置をなすことを、私に拒んだ。彼等の一人たる或る老外科醫は、私に面と向つて直言した。——「併し貴君はどうしてそんな馬鹿なことが云へるのですか。ヒステロン（Hysteron）と云ふのはギリシア語で、ラテン語のウテロス（Uterus, 母胎）の事ですよ。では、どうして男がヒステリーになれるですか。」と。私はたゞ患者を自由に扱はせて貰へばいゝので、別に私の診斷を是認して貰はなくともいゝのだと抗辯して見たが、無駄であつた。遂に私は病院外で、或る男患者に於いて古典的なヒステリー的半不感症を見付け出して來て、これを「醫師會」に於いて證明した。

この時は人々は私を喝采したが、併しそれ以上私に興味を持たなかつた。大家諸權威たちが私の新說を認めてをらぬと云ふ感じは、やはり存續してゐた。私は男子にヒステリーがあると云ふ說とヒステリー的障害を暗示に依つて作り出すことが出來るとの說とのために、すつかり除け者にされてゐる事を知つたのである。やがて間もなく私は腦髓解剖實驗室から閉出しを喰はされ、また私が自分の講義をすることの出來た講座に全學期中、位置がなくなつた時には、私はアカデミイや學會の生活から退いた。私は『醫師會』をもかれこれ三十年も訪れたことはない。

神經症患者を處置して生活して行かうと思ふならば、その人は彼等に對し何事かを爲てやることが出來なければならないことは明かである。ところが私の治療上の兵庫には只二つの武器——電氣療法と催眠術と——しかなかつた。何となれば、一度だけ相談相手になつて水浴療法に遣つてしまふのでは十分に生活の道とはならない。電氣療法に於いては、私はエルブ W. Erb の著書を虎の卷とした。何となれば、この書には神經的病害のあらゆる徵候の處置に對する指圖が精細に敎へてあるからである。ところが困つたことに、私はやがてそれ等の指圖に從つても何の役にも立たない事を知つたのである。確實な觀察の凝成だと思つたことも、實は空想的構圖であることを知つたのである。ドイツの一派の新病理學者たちの業績も、現實に對して關係を有たざること、宛も通俗書店で賣つてゐるエヂ

プトの夢の書と誇ぶところがないとの洞察は苦しいものではあつたが、併し私が當時未だ十分に專業し切れてなかつた素朴な權威信仰病の一部分を再び取去るには役立つたのである。そこで私は電氣療法などは片付けて了つたのであるが、それはメビウス Möbius が、神經症患者に對する電氣的處置の成功は（少くともそれが成功する場合は）醫師の暗示の效果に外ならないと喝破した以前のことであつた。

催眠術の方はもつとましであつた。まだ私が學生であつた時分に、私は「磁氣治療家」ハンゼン Hansen の公開演技を見たことがある。その時、被術者の一人は強硬的硬直に陷るや死人のやうに蒼白となり、その狀態の間續中始めから終りまでそのやうに硬直してをつたのを見たのである。それ以來、催眠現象が本當であると云ふ私の信念は確立せられたのである。その後間もなく、この信念を科學的に代辯したものはハイデンハイン Heidenhain であつた。併し精神病科學の教授たちは、永い間に、催眠術を詐欺師的なものであり、その上危險なものであると說明し、催眠術者を無價値と見下げることをなるべく抑制しなかつた。パリで私は、人々が催眠術を無遠慮にも、患者に於いて徵候（症狀）を起させ、またそれを解消せしめる手段として用ゐてゐるのを見た。その時我々の耳に達したことは、ナンシー Nancy には一派の人々があつて、彼等は催眠術を用ひたり、或は用ひなかつたり、

とにかく暗示を盛んに與へて治療上に特別の效果を擧げることに利用してゐると云ふ噂であつた。だから私が醫者としての活動を始めた最初の二三年に於いては、催眠術的暗示法が私の仕事の主要な行り方であつたと云ふことは、全く自然なことである。但し、偶然的に、非組織的に、心理療法的方法を用ゐたことも時々にあつたことはあつたが……。

暗示的方法を用ゐるのでは肉體的精神病の處置は斷念したことになるにはなつたが、併しその損失は大したことではない。何となれば、一方に於いて、この方法はこの狀態に對して抑々何等の喜ばしい希望を與へてゐなかつたし、他方に於いて、この肉體的神經病に惱む者の僅少の數は、街醫者（非病院付醫者）の治療實施のために消失してゐるからである。これに對して、直ちに一人の醫者から他の醫者に渡り行くことに依つて益々複雜なものとなり行く神經病者の數は多きを加へて行く。その他の點では併し、催眠術に依る操作は實際的に誘惑的であつた。人々は始めて自分の無力の感を克服した。不思議を行ふ者の職業は甚だ人々の自尊心に媚びるものであつた。この療法の缺陷の何たるかは私にはやうやく後になつて發見出來た。始めの程は、私はたゞ二つの點だけが遺憾だと思つてゐた。即ち、第一には總ての患者を催眠術に掛けることが出來ないと云ふ點、第二には如何なる人でも望み通りの深さにまで催眠させることが出來ないと云ふ點。私の催眠術的技巧を完成するために、一八八

九年の夏に私はナンシイへ旅立ち、そこで私は幾週間を送つた。私はリエボー Liébault 翁が勞働者の女や子供達にその操作を加へてゐる有樣を見て非常に感動し、またベルネイム Bernheim が自分の病院の患者たちに驚くべき實驗を施してゐるところを目撃し、人間の意識にはまだ分つてゐない精神的過程に、如何に不可思議な力のあるものであるかに就いて、深甚の感銘を受けた。知識を啓發したい目的のために、私は自分の患者の一人を說いて、ナンシイへ來させた。それは優秀な、才能あるヒステリー患者で、何人もこの患者には手がつけられなかつたので、私に一任されてゐたのである。

私は催眠術の感化に依つて人生は生きる價値のあるものであることを呑込ませ、その悲慘な心持ちから常に救ひ上げることが出來た。彼等が暫くの後に常に逆戻りをすることを、私は當時の無智のために、彼等の催眠術が健忘を伴ふ夢遊病の程度にまで嘗て達しないせいにしてゐた。ベルネイムは度數を重ねることに依つて、これを達せしめようと試みたが、併しやはりそれを進めることは出來なかつた。彼は率直に私に告白した、彼が暗示に依つて治療上の偉大な成功を得たのは、たゞ彼の病院での實施に於いてのみであつて、私的の患者に對しては試みなかつたと。私は彼と種々興味ある對話を交し、暗示並びに彼の治療效果に關する彼の二書をドイツ語に飜譯することを引受けた。

一八八五年――一九九一年間には私はあまり學問上の仕事をしなかつた　さうして殆ど何も公刊し

なかつた。私は新しい職業に就き、私の物質上の生活、並びに迅速に増大して行きつゝあつた私の家族を保證したい要求を持つてゐた。一八九一年には子供の腦障害に關する最初の著書が現れたが、それは私の友人にして助手なるオスカア・リイ博士 Dr. Oskar Rie との共著である。同じ年に或る醫學辭典の編述に參與し、失語症の說を論ずることになつた。この說は當時に於いてはエルニケ・リヒトハイム Wernicke-Lichtheim の純粹に局部的な見地に支配されてゐた。批判的思辨的の小著『失語症の見方に就いて』„Zur Auffassung der Aphasie,“ はこの努力の結果である。私は今や併し、學問的研究を私の生活の主要興味としなければならなかつたし、またさうなつて來たのである。

二

これまで云つて來たところの缺を補ふて、私は云はなければならない、私は始めから催眠術的暗示以外に、催眠術を別の事に利用してゐたのだと。私はこの催眠術を利用して、患者の徴候の發生史の研究に資したのである。この發生史を覺醒時に完全に語ることは、患者には屢々殆ど不可能である。この方法は單なる暗示的の命令や禁止よりも効果的であると思はれたばかりでなく、またこの方法に依つて醫者は知識慾を滿足させることが出來る。暗示的手續の一本鎗で病的過程をなくしようと努めた醫者としては、その過程が如何なるところから由來してゐるかを突き止めようとするのは正當なことである。

併し私がこの別の方法に向つて來たのは、次の如き方途を辿ることに依つてゞある。私がまだブリュッケの實驗室にゐた頃に、ヨーゼフ・ブロイヤー博士Dr. Josef Breuer と知合ひになつた 彼はヰインの最も令名ある家庭醫の一人であつたが、併し學者としての過去を持つた人で、呼吸作用の生理や均衡器關に就いての不朽の價値ある論文にして彼の筆になるのが多い。彼は非常に知能高き學者で

私よりは十四歳年長であつた。我々の友情關係はやがて益々親密の度を加へ、生活上さま〳〵な苦しい立場に於いて、彼は私の味方となり助力者となつた與れた。我々は常々總ての學問上の興味を互に分け合ふやうにしてゐた。勿論、この關係に於いては、私の方が常に得をする方に廻つてゐた。精神分析の發達につれて漸次我々の友情は離れなければならなくなつたが、友情のために眞理を曲げるわけには行かないので、遂に友情をも失ふを辭してゐられなくなつたのである。

私がパリに行く前に、既にブロイヤーは彼が一八八〇年から八二年までの間に特殊な方法で處置した或るヒステリー患者に關する報告をしてゐた。この處置に於いて彼はヒステリー的徵候の原因及び意義に就いて深刻な洞察を持つことが出來たのであつた。つまり右の事實は、ジャネーの著書がまだ未來に屬してゐた時に起つたのであつた。彼は病歷の部分々々を繰返し講義して聽かせた。それに就いて私の受けた印象は、こゝに神經症の理解のために今までより以上多くの事がなされてゐると云ふことであつた。私はこの發見に就いて(パリへ行つた時に)シャルコーに知らせてやらうと決心した。さうしてまた實際その通りにした。併し先生は私の最初の示唆に對し何等の興味を示さなかつた。で、私はもうそれきり報告しなかつたし、また報告する氣が起らなかつた。

ギインへ歸つて來て、私は再度ブロイヤーの觀察に戻り、その觀察に就いてより多く話して貰ふこ

とにした。患者は異常な教養と才分とを具へた或る若い娘であつた。彼女が感傷的に愛してゐる父親の病の看護中に、彼女は病氣になつたのであつた。ブロイヤーが始めて彼女を引受けた時には、彼女は筋の拘攣の伴ふ障害、禁制、心的錯亂狀態などの雜多な樣相を示してゐた。ブロイヤーは或る偶然的な觀察に依つて、彼女が現に支配されてゐる感動的な空想を言葉として表現せしめれば、彼女のそのやうな意識の混濁を救ふことが出來ると云ふことを認識した。ブロイヤーはこの經驗から、一つの處置方法を得て來た。彼はその患者を深き催眠に陷れ、さうして彼女の心を抑へつけてゐるものに就いて、語らせるやうに幾度もした。消沈的錯亂の發作をこのやうな方法で克服した後に、彼は同じ方法を、禁制や肉體的障害の廢絕にと利用した。覺醒狀態に於いては、娘は他の患者と同樣、如何にして彼女の症狀が起つたかを云ふことが出來なかつたし、またその症狀と彼女の生涯の何かの印象との間に何等の關聯があるとは認められなかつた。催眠中に彼女は直ちに、その尋ねる關聯を呈露した。總て彼女の症狀は病父看護中の印象的な體驗に歸せられることが分つて來た。卽ち或る意義を持つてをり、この感動的立場の名殘又は記憶に相當するものであることが分つて來た。彼女は父親の病床に就いて何かの思想或は衝動を抑壓したに相違なく、これは定石通りに起つたのであつた。その思想や衝動の代りに、それの代償として、後にこの徵候（症狀）が現れて來たのである。併し大槪は、この

徴候は或る唯一の「外傷的」場面の澱滓ではなく、多數の類似した立場の綜合の結果であつた。さて患者が催眠に於いてそのやうな立場を錯覺的に再想起し、當時は抑壓されてゐた精神的行動を後になつて自由な感動發現の下に中絶せしめたとすれば、そのやうな徴候は拂拭され、再び擡頭することはない。このやうな方法に依つて、ブロイヤーは永い間の苦心慘膽たる操作の後に、この患者をそのあらゆる徴候から解放するに成功した。

この患者は全快して、それ以來健康となつてしまひ、重要な仕事をなし得るやうになつた。この暗示的處置の結末に就いてはそこに曖昧なところがあつて、それをブロイヤーは決して私に明かにしてくれなかつた。私もまた、何故に彼が自分の（私の見たところでは）非常に價値ある認識をそのやうに永く秘密に保つておき、これを發表する事に依つて學問を豐富にしないのかを、解し得なかつた。併し第一の問題は、唯一人の患者に就いて發見せられたことに、果して普遍的意義があるかどうかと云ふことであつた。ブロイヤーの發見に係る事情は私には非常に基本的な性質を帶びた事に思はれ、一度唯一人の者に證明せられた以上は、如何なるヒステリー患者にも見られ得る事に相違ないと信ぜざるを得なかつた。併しそれは實驗を俟つて、始めて決定されるべき事である。そこで私は自分の患者に對してブロイヤーの探究法を適用し、殊に一八八九年にベルネイムを往訪して、催眠術的暗示法

の効力に限定のあることを發見した以後は、殆どこのブロイヤー法以外の方法は何も用ゐなかつた。

私はその後數年の間、種々のヒステリー患者にそのやうな處置法を適用して、ブロイヤーの觀察と類似の觀察の立派な材料を手に入れ、愈々確かだと云ふ事になつたので、私は彼と共著で書物を出さうと提案したが、始めの程は彼は頭として聽き入れなかつた。遂に彼は折れて出たが、それは特にその間に、ジャネーの著書が、彼の結論の一部分を（ヒステリー徵候を生活上の印象に歸し、またその印象を催眠術に依り元のまゝに再現せしめることに依つてその徵候を取去ること）を先取して行つたからでもあつた。我々は一八九三年に先行的に『ヒステリー現象の心理的機制に就いて』„Über den psychischen Mechanismus hysterischr Phänomene."と題する報告を出版し、それに續いて一八九五年に共著で『ヒステリー研究』„Studien über Hysterie"を公にした。

これまで話して來たところに依つて、讀者は、『ヒステリー研究』の材料的內容の一切の本質が彼の精神的財產であるとの期待を持たれるやうになるであらうが、私の說であるとされて來たものは偏に彼の精神的財產であり、この度またこの事を明言しておきたいと思つたのである。同書が試みてゐる理論に於いては、何處までが彼の意見でどこからが私の努力かを決することは、今では既に不可能である。この理論は愼ましやかなもので、觀察を直接的に表現した以上には大して出でないものであつ

た。それはヒステリーの本性を根本的に闡明するものではなく、たゞその起源を說明するに過ぎない。即ちそこには感動生活の意義、無意識的及び意識的（もつと適切に云ふならば、意識化し得べき）心理行爲の間の區別の重要さが强調せられてをり、或る感動を堰止めることに依つて徵候が生ずるのだとせられることに依つて、そこに動的要素が導入せられることになる。またこの徵候はもしかうたらなければまた別途に利用されるエネルギー量（所謂、轉換）が變調を來した結果だと考へられることに依つて經濟的な要素をも導入せられてゐる。ブロイヤーは我々の方法を「洗ひ流し法」das kathartische Verfahren と名付けた。この方法の治療的意圖としては、間違つた道に迷ひ込んで、そこで云はゞ行詰つてゐる（徵候保持のために利用されてゐる）感動の總量を正常の道に導き出して來て、そこでその感動を發散せさることにあるのだ。洗ひ流し法の實踐的方法は著しかつた。それが後に多少の缺陷を示すやうになつたが、それは總ての催眠術的處置の缺陷であつた。今日でも、ブロイヤーの意味に於ける洗ひ流し法に執して、これを賞讃してゐる精神療法家も多數に存在してゐる。世界大戰中にドイツ軍隊の戰爭神經症者たちをジムメル E. Simmel が處置し、彼の手に依つてこの洗ひ流し法が簡約な治療法として眞實であることを證した。性慾と云ふことは、洗ひ流し法の理論に於いてはあまり重大でないが、私が『ヒステリー研究』の中に擧げておいたいろんな病歷中に於いては、性

生活からの契機が多少の役割を果してをつて、而もそれ以外の契機は他の感動亢奮として殆んど問題になつてゐない。ブロイヤーの洗ひ流し法に依つて忽ち有名になつたその最初の婦人患者に於いては性的方面は驚くほど發達が遲れてゐるとブロイヤーは語つてゐる。『ヒステリー研究』に就いてゞは、神經症の病源に對して性が如何なる意義を有してゐるかを、人々はあまり容易に判知し得なかつたであらう。

さて、その次の來るべき發展の部分は、洗ひ流し法から精神分析法への轉向で、これは私が既に幾度も詳論したことであるから、こゝで何か新しいことを書き加へるのは困難と思はれるほどである。この當時に起つた出來事は、ブロイヤーが我々の共同事業から手を退いた事であつた。で、それ故に私が彼の遺産を一人で處分しなければならなくなつたのである。既に以前から我々の間には意見の相違はあつたが、併しそのために袂を別つと云ふほどには至らなかつた。如何なる時に精神的經過は病的となるか（卽ち常態的進行から閉出されるか）と云ふ問題に關して、ブロイヤーは云はゞ生理學的た理論の方を好んだ。彼の意見では、そのやうな過程は常態的な心理狀態では起きないで、異常た――催眠的――心理狀態に於いて起きると。そこで一つの新たな問題が――如何にしてそのやうな催眠が由來するかの問題が――生じた。それに反して私の方は寧ろ、常態的生活に於いて觀察される如き

種々た意圖や傾向の闘爭、効果であることを察知したのである。そこで『催眠的ヒステリー』" Hypnoidhysterie " と『防禦神經症』" Abwehrneurose " とが對立した。併し他の契機が起らない以上はこれ等の（並びにこれ等に類似した）對立だけでは、彼は恐らくこのやうな研究を避けようとしなかつたであらう。たゞ別の源因がそこに加はつたがために、彼は避けることになつたのである。その別の源因の一つと云ふは慥に、彼が神經醫、家庭醫として忙しかつたし、また私のやうに彼はその全力を洗ひ流し法に捧げることが出來なかつたからである。それのみならず彼は、我々の共著がボインに於いてのみならず廣く國内に於いても惡評を受けたので、その爲に氣を腐らして了つたのである。彼は他の點では精神的に非常に優れた人であつたが、その自信と對抗力とはそれに匹敵しなかつた。例へば、『ヒステリー研究』がストリュムペル Strümpell のために甚だしくこき下ろされた時、私はその無理解な批評を笑殺することが出來たが、彼は氣を惡くし勇氣を失つた。併しせい／＼彼の決心を助けたものは私のその後の仕事が獨自の方向を進んで行つたことで、その方向を彼も辿らうとしたが駄目であつた。

我々が『ヒステリー研究』の中で打立てようとした理論は、まだ甚だ不完全であつた。殊に病源の問題、即ち如何なる根據からして病的過程は生じ來るかの問題に就いては、我々は殆んど觸れてゐな

かつた。ところがその時我々が屢々氣付いたことは、速かに擡頭し來る一つの經驗であつた。即ち、神經症の現象の背景に働くものは任意の感動亢奮ではなく、常に必ず性的性質を帶びた感動亢奮（實際の性的葛藤か或は以前の性的經驗の名殘であるか、何れにもせよ）であるとの經驗であつた。私はかゝる結果を全然豫想してゐなかつた。そこには私の期待は少しも與つてはゐない。私は全く無邪氣に神經症の研究に立向つたのであつた。私が一九一四年に『精神分析運動史』を書いた時に、ブロイヤー、シャルコー、並びにクロバク Chrobak 等の云つた言葉が思ひ出された。彼等の言葉の中から私は既に夙くそれ等の認識を獲得することが出來たであらうに……。併し私は當時に於いては、これ等の諸權威の意味するところを理解しなかつたのだ。私が彼等から聽いたことでもは、私の內に徒に惰眠を貪り、洗ひ流し流に依る研究の時になつて始めての認識であるかの如くにそれが擡頭し來つたのであつた。また私は當時には、自分がヒステリーを性に歸せしめることに依つて最古代の醫學に合一し、プラトーンに結び付くやうになつてゐるのだと云ふ事を氣付いてゐなかつた。私はそれを後になつてハヴロック・エリスを讀むことに依つて、始めて知つたのであつた。

自分の驚くべき發見のために影響されて、私はそれ以後識に困難な歩みを續けることになつた。私はヒステリーばかりに留まらず、所謂神經衰弱者の性生活を研究し始めたのである。神經衰弱者は私

の治療を受けに來る人々の間に常に相當多かつた。この研究は醫者としての私の人氣にさわつたが、併し私としてはそれに依つて確乎たる信念を得た。さうしてその信念は殆ど三十年後の今日に至るも少しも弱つてはゐないのである。人々は虚言癖と秘密癖とを甚だ多く克服しなければならなかつた。併しそれを克服し得さへしたならば、總てかゝる病人には性機能の重い障害の存することが發見せられるのである。一方に於いてそのやうな障害が甚だ屢々現れ、他方に於いては神經衰弱が現れても、これ等兩者が屢々合致するからとて勿論甚だ大きな證明の力とはならなかつたが、併しそこには相當面白い事實が存したのである。仔細に觀察して見ると、人々が一概に神經衰弱と名付ける病状の雜然たる混淆の中から根本的に相違する二つの型を把み出すことが出來た。これ等二つの型はそれ〳〵都合のいゝ混合となつて現れてゐたが、併し純粹な型として觀察することも出來たのである。一つの型に於いては、中心的現象となるものは不安發作で、そこにそれに等價のもの、根本的の型式、慢性の代償徴候が伴ふてゐる。それ故に私はこれをまた不安神經症（Angstneurose）と名付けるのである。他方の型に對して私は神經衰弱（Neurasthenie）と云ふ名を用ふる事にした。さて、これ等二つの型の何れに對しても性生活の一つの別の變態が呼應してゐる（性交中絶、無效亢奮、性禁止が神經衰弱に存し、手淫過度、遺精頻繁が不安神經症に存する如き）と云ふことは、これを確言するに容易である

つた。病的根源が一つの型から他の型に移ると驚くべき變化の見られる二三の特に意味深長なる場合に對しては、そこに性的機制のそれに相應するだけの變移が根底に見られることが、立派に證明されたのである。もしその障害を取除き、常態的の性活動を以てそれに置換へたならば、その結果は事情の驚くべき改善となつて現れるのであつた。

そこで私は神經症を全く一般的な性機能の障害として認識せざるを得ないやうになつた。さうして所謂現實神經症 Aktualneurosen は直接的な中毒的表現として、精神神經症はその障害の心理的表現として認識せざるを得なくなつた。私の醫學的良心はこの斷定に依つて滿足を感じた。私はそれに依つて醫術の方の一つの缺陷を充たし得た、と思つたのだ。醫術の方は生物學的に見て重大な機能に就いては、傳染とか大雑把な解剖的變化（解剖的）外傷に依る障害以外の障害は考へて見ようともしないのだ。そればかりでなく、性は單に心理上の事柄ではないと云ふことも醫者的考へ方に好都合なものだつたのだ。性にはまた性の物（身體）的な方面がある。性には特殊の化學作用があり、性的亢奮は或一定の（併し現在知られて居ない）材料から生じ來ると、人々は考へることが許される。本當の自然發生的の神經症は他の何れの病氣の群とも類似しないで、中毒や禁斷現象、その他のもつと細かい點では、つて意識される中毒現象とは禁斷現象とに相似して、またバゼドー病（これは甲状腺に依つて生ずる病氣

でないことは人々の知るところである）に似てゐると云ふことは、これまた相當の根據あることでなければならない。

註（一）　本全集第八卷『分析療法論』第五十三頁參照。（譯者）

私はその後それ以上、非心理的神經症に就いて研究する機會を持たなかつた。またこの方面の私の仕事は他の何人に依つても繼承されなかつた。今日にして私の當時の業績を回顧するならば、それはどうやら遙かに錯雜した事情に對する最初の、生硬な計畫であつたことを認識し得る。併し大體に於いては今日でも、その業績は正しいと私は思つてゐる。その後にも少年の純粹な神經衰弱を精神分析的に試驗する場合を持ちたいと思つてゐたが、併しさう云ふ機會が來なかつた。誤解した考へ方をする者のために強調しておくが、私は神經衰弱に心理的葛藤や神經症的コムプレクスがないと云ふものでは斷じてないのだ。たゞ私の主張するのは、さう云ふ病氣の徵候は、心理的に決定され分析的に解消されるものでなく、障害を受けてゐる性的化學作用の直接中毒的結果として考へられねばならないと云ふことである。

『ヒステリー研究』直後の數年に於いて、性が病源的役割を果してゐることを知つた時に、私はこれに就いて或る學會で二三の講演をしたことがあるが、たゞ反對と不信とを招いたのみであつた。ブロ

イヤーはなほ二三度、私のために彼の有力な助太刀を與へてくれたが、あまり大して功はなかつた。そして性が病源となると云ふ考へ方から段々彼も離れて行つたことは、これを見るに容易であつた。ブロイヤーは彼自身の最初の婦人患者を指示する事に依つて私を叱咤し、或は私を誤たしむる事も出來たのだ。（その患者に於いては性的契機は一見したところ、何等の役割を果してゐないかのやうに見えてゐた。）併し彼はそんな事をしなかつた。私は性的契機の重要な役割を永い間理解しなかつたが、遂に私はこの患者の場合を正しく解釋し、彼が夙い頃に云つてゐた二三の言葉に照して彼の處置の歸結を打ち立てることを學んだのである。洗ひ流しの操作が終つたと思はれた頃に、件の少女に於いて忽ち「轉嫁愛」の狀態が見えて來た。それは彼女の病氣には何の關係もないと彼は云つた。彼はその『轉嫁愛』に面喰つて、彼女から手を引いた。この一見災難と思はれることを想起するのは、彼には明かに苦痛であつた。私に對しては如何なる態度をとるべきか、承認すべきか、或は味氣ない批評を下すべきかに就いて、暫時彼は躊躇してゐたが、やがて（とかくさう云ふ緊張した場合に於いては、必ず起き易いやうに）偶然事が起つて、我々は互に袂を分つことになつた。

さてそこで、一般的神經病の諸々の形式に就いて研究した結果、私は更に一歩を進めて洗ひ流しの技法を改善した。私は催眠術をやめ、それに代ふるに別の方法を以てすることにした。何となれば、

ヒステリー形式の狀態に對してこの處置には缺陷があるので、その缺陷を補はうと欲したからだ。それればかりでなく、なほ經驗を積むにつれて、私には、催眠術を用ふることが、洗ひ流しの場合に於いてさへも、二つの重大な缺點を持つてゐることが分つて來た。その第一は、結果が最もうまく行つてゐる場合にでも、もし患者に對する個人的關係が工合惡くなると、忽ち掃ひ去られたやうになつてしまふことであつた。尤も、その關係が元通りに調停されゝば、その結果は復活して來るが、併し個人的の感動關係の方が一切の洗ひ流し的操作よりも力强く、さうしてこの個人的關係と云ふ契機こそはたか〳〵支配されないものであることを人々は知るのである。その内に私は或る日一つの經驗をし、その經驗に依つて私には、自分が長い間推察してゐたことが始めて明確になつたのである。私が嘗て最も催眠術を掛易い婦人患者の一人（彼女に於いて催眠術は最も著しい効力を示してゐたのであるが）を處置し、彼女の病苦發作をその源因に遡ることに依つて彼女を苦痛から解放したが、眼のさめた時彼女は私の頸の周りに自分の腕をからませて來た。その時、思ひがけなく自家の傭人が這入つて來たので、我々は妙な立場になることから救はれたが、併しそれからと云ふもの、我々は暗默の間に、催眠術的處置を續けるのは廢すことにした。私はこの偶然事が私の個人的魅力のせいであるなどゝ自惚れてはゐなかつた。さうして今や、催眠術の背後に作用する神經的要素の本性の何たるかを把握した

と考へるやうになつた。その神秘的要素を除去し、或はそれだけを取出すためには、私は催眠術をやめるより外なかつた。

併し催眠術は洗ひ流し法に對して異常な貢獻をなした。これに依つて患者の意識分野は擴大せられ覺醒時には思ひ出せない知識が自由に想起されるからである。その點に於いて、では催眠術の代りに何を以てするかとなると、一寸困つたことになつた。その困つた揚句、私が想起したのは、私がベルネイムのところで彼等と共に屢々持つた經驗であつた。被術者が夢遊狀態から眼覺めた時に、彼等はこの狀態中に於いて持つた出來事の一切の記憶を喪失してゐるらしいのである。併し、ベルネイムは主張した、彼等はやはりそれを知つてゐるのだと。さうして、一切を知つてゐるのだからそれを想起せよと命じつゝ手を額に置いてやると、忘れられてゐる一切の記憶は實際に蘇生り來り、始めの程は澁つてゐるが、やがて流暢に、完全に明瞭になつて話される。私もそれと同じ事をやらうと決心したのである。私の患者も、催眠術に依つて始めて彼等に分るやうになるであらう一切のことを、やはり『知つて』ゐるに相違ないのだ。で、私も彼等の頭に手を置いて、確かに知つてゐるにきまつてゐるのだから、さア想起して見よと云ふと、忘れられてゐる事實や關係は意識化されて來るやうになつたのである。それは勿論、催眠術に陷入れるよりは骨の折れることには相違なかつた。併しそれに依つて

我々は多くの眞理を學び知ることが出來るのだ。私はかくて催眠術を廢し、たゞ患者を長椅子に寢かせると云ふ點だけを催眠術の形式から保存し、さうして患者の背後に腰をかけ、私は彼を見ることは出來るが、彼等には私の方が見えないやうにしたのである。

三

私の期待は容れられ、私は催眠術を用ゐなくともよいことになつたが、その代り技法の改變はまた洗ひ流し操作の面容を一新することになつた。催眠術には一つの力の働きが匿されてゐたのだ。その働きが今や露はになつて、これを把握したゝめ理論に對して一つの確實な基礎付けを與へることになつたのだ。

ところが、患者がそれほど澤山の外的及び内的經驗の事實を忘れてをり、而も右に練述して來たやうな技法を適用すればそれ等事實を想起することが出來たと云ふは、何に由るのであるか。これ等の質問に對しては、觀察に依つて十分な答辯が與へられた。總て忘れられた事柄は何等かの點に於て苦痛であつたのだ。當人の人格上、それは恐ろしい事か、苦痛な事か、或は恥づかしいことであつたのだ。そこに於いてか自然に生じ來る考へは、それ等は正に苦痛なるが故に忘れられたのだ、卽ち意識化されないでゐたのだと云ふことである。それを再び意識化するためには、患者の内にあつて抵抗する何物かを克服しなければならない。患者を强ひ、已むを得ざらしめるだけの努力を自ら拂はなけれ

ばならない。醫者の必要とする努力の大小は種々な場合に依つて區々であるが、想起の困難に正比例して增加する。醫者の努力の支出は明かに、患者の抵抗に相當する。そこで人々は今や、たゞ自分で感じたことを言葉に譯すればよいのである。かくて抑壓の理論が出來上ることになつた。

この病理的過程は今や容易に立證することが出來る。最も單純な實例に就いて云ふならば、そこに一個の努力が擡頭し、それが他の有力な努力と抗爭するのである。かくて生起する心的葛藤は、我々の期待するところに從へば、かう進むのである、卽ち、二つの動的な大きいもの――我々はそれ等を我々の目的上から本能と抵抗と名付ける――が、意識の力強い割込みのために相互の間に爭ひを起し途に本能が却下されて、それの努力からエネルギーの擺綿が離脫して了ふのである。それが常態的の成行である。神經症者に於いては、併し、葛藤は（如何なる根據からであるかは未知であるが）、また別途の歸結を示す。自我は、云はゞ最初の衝突時に際して、忌はしい本能亢奮から身を引き、その本能亢奮が意識化し、直接實動となつて發出することを堰止めるのであるが、併し本能亢奮はその際にもやはりエネルギーの擺綿を完全に保有してゐたのである。この過程を私は抑壓 Verdrängung と名付けたのであるが、これは全然新發見のもので、これに類したものが嘗て心理生活中に認識されたゝめしはなかつた。これは明かに一種の第一次的な防禦機制であつて、一種の遁逃の試みにも比較さ

れ得る。さうして後になつて常態的に起きる判斷胡麻化しの先驅である。抑壓のこの最初の行動に、更にその後の歸結が付加つて行く。まづ第一に、自我は抑壓されてゐる亢奮の不斷の反抗に對して己れを守るために始終、逆擬總を支出してゐなければならないし、從つてそのために自我は貧窮を告げることになつた。他方に於いて、今では無意識であるところの被抑壓物は別途に發出と代償滿足を求めて行き、かくて抑壓の意圖を無效に終らせるのである。肉體轉換のヒステリーに於いては、つまりこの別途が肉體の神經的思考作用に出てゐるのであつて、抑壓されてゐる亢奮が何故か或る個所から洩れ出し、それが徵候（症狀）となつてゐるのだ。で、つまり徵候とは妥協構成であつて、代償滿足ではあるが、やはり歪められてをり、自我の抵抗に依つてその目的を轉向せしめられてゐるのだ。

抑壓說は神經症を理解するための大黑柱となつた。治療上の問題もまた別の考へ方をされなければならなくなつた。問題の目的はもはや、誤つた道に踏込んだ感動を「發散（アブレアギーレン）」させることではなくて、抑壓を發見し、その抑壓を解消させることである。それを解消させるためには、當時には拒否せられてゐたことを容認したり或は否認したりすることから出發することが出來た。で、このやうな研究法や治療法に對してはもはや洗ひ流し法と云ふ名はつけられないから精神分析法と云ふ名を與へたのは、この新たな情勢に對しては私として當然であつた。

我々は宛も抑壓を中心として、そこから出發し、精神分析學説のあらゆる部分をこの抑壓と結び付けることが出來る。併し豫め私はなほ一つ、論爭的な内容を持つ説を述べておきたい。ジャネーの意見に依れば、ヒステリー患者は素質的に薄弱なるがためにその心的行動を纏めることの出來ない憐むべき人々である。それ故に彼等の心理は分裂し意識は狹隘になつてゐると云ふのである。精神分析的研究の結果に依れば、併し、かゝる現象は動的要素（卽ち心理的葛藤、並びにそれに由つて生じてゐる抑壓）の結果である。惟ふに、これだけの相違はその及ぼすところ甚だ遠く、これまで精神分析に於いて最も價値ある點はみなジャネーの思想からの剽竊であるなど、云ふあらぬ謬言もこれで留めを刺されたことになつた。私の言葉に依つて讀者諸氏は認められたに相違ない、精神分析は歷史的な點に於いても、ジャネーの發見とは全然獨立したもので、それは宛も内容の點に於いてそれとはかけ離れたものであり、また遙にそれ以上に出でたものであると同樣である。ジャネーの業績からしては決して、精神分析が精神科學のためになしたやうな、またそれに對して一般の興味を來いたやうな重要な歸結は生じて來ない。ジャネーそれ自身は私も豫々非常に敬意を以て扱つて來た。それは彼の發見が全部が全部ブロイヤーの發見と符合するからである。尤もブロイヤーの發見の方が早かつたのであるが、發表は遲れてゐる。併し精神分析がフランスに於いても論議の對象となつた時、ジャネーの態

度は面白くなく、何等正確な認識を示さず、醜い論調を用ゐた。遂に彼は私の誤にその眞相を暴露し自らその仕事を無價値にした。何となれば、彼は『無意識的』精神行爲を云々した時に、それは單に『一つの云ひ表はし方』 "une manière de parler" を示さうとするに過ぎないと云つたからである。

精神分析は、併し、病理的抑壓現象並びになほこれから言及する諸現象を研究することに依つて『無意識』の概念を眞劍に採用せざるを得なくなつたのである。精神分析にとつては總て心理的なものは始めにまづ無意識であつたのだ。意識的性質はやがてそこに附加されることもあるし、また離れてゐることもある。この說を述べるや、勿論、哲學者の方から異議が出て來た。彼等にとつては『意識』と『心理』とは同一であつた。彼等は『無意識心理』などゝ云ふやうなあり得べからざるものは考へられないと斷言した。併しそんなことは何の役にも立たなかつた。人々は哲學者のこのやうな性癖を昂然として乘越えて行かなければならなかつた。哲學者は御存知ない色々な病理的材料に就いての經驗を積み、種々な充當（それに就いて人々は何も知らず、外的世界の何等かの事實であるかの如くに結論せざるを得なかつたところの充當）の如何に屢ゝ起り力強いものであるかを經驗するにつけて、そこには旣に疑ふ餘地はなかつた。やがて人々は、それはこれまで旣に他の精神生活のためになして

來たことを、自分自身のそれのためになしたに過ぎないのだと云ふことを確認し得るやうになつた。人々は他人に種々な心的行動があるものと定めてゐる、よしんば彼等はそれ等の行動に就いて何等直接的な意識を持たず、さうしてたゞ外面的行動に依つてそれを察知しなければならないのであるに拘らず……。併し他人に就いて正しいことは、また自分自身に就いても當然でなければならない。この論を更に進めてそこから（自分自身の匿れたる心的行動は或る第二の意識に屬してゐる）との考へを導き出して來ようと思ふならば、卽ち人々は、それに就いては何も知らない或る意識、無意識的の意識と云ふ概念に直面することになるが、この概念は無意識心理なるものを假定するに就いては固より好都合なことではないのだ。併しもし人々が他の哲學者たちと共に（病理的心理的現象は尊重するが併しそれ等の根柢に横たはる行動は心理的とは云はれない、類心理的と呼ぶべきだ）と云ふならば、卽ちその差違はたゞ無駄な言葉の爭ひに入るに過ぎない。この爭ひに於いて併し、人々は『無意識心理的』„unbewusst psychisch" と云ふ言葉を撰しておくのが最も適當であると云ふことに定めてゐる。この無意識それ自身が何であるかの問題は、今一つの問題たる意識とは何であるかと同樣、一向明かになつてゐないし、見當がつく見込みもない。

もつとそれよりも困難なのは、（簡單に云へば）精神分析がそれの認めた無意識を如何にして更に分

割したか、前意識と本来の無意識とに區別したかと云ふことであらう。併しそれに對してはかう云つておけば足るであらう、即ち經驗の直接的表現たる理論を補ふに、材料驅使に適當なる假定、且つ直接的觀察の對象たり得ない事情に關する假定を以てする事は正當であると思はれると。人々はまた他の諸科學に於いても、同じ態度を取つて來たのだ。無意識を區分することは、精神的裝置を一聯の個所又は組織から構成されてゐると考へることに關係を有してゐる。それ等個所（又は組織）の相互關係を我々は空間的な云ひ表はし方で語るのであるが、併しそれを語るに就いて組織を實際の頭顱解剖に結び付けようとはしない。（所謂、局所的見地。）以上のやうな、或はこれに類した考へは精神分析の思辨的上部構造に屬し、それの各部分は、そこに何か不都合が起きるや否や、何等の遺憾も未練もなく、犧牲にされるか、或は交替せしめてよいのである。なほ容易に觀察されることで、云ひ洩したことが隨分殘つてゐる。

既に私の云つた通り、神經症の源因及び根據に對する研究は、本人の性感情と性慾に對する抵抗との間の葛藤に、愈々屡々導かれて行つた。如何なる立場に於いて病氣は生ずるかと云ふに、それは性の抑壓であつて、その抑壓の代りに徵候が代償構成となつて起るのであるが、かゝる立場を研究して見ると、我々は患者の早期の幼兒時代に遡行して見なければならなくなり、遂に其早期の幼小時代に

趁かなければならなくなつたのである。ところで（これは詩人や、酷いも甘いもよく嚙み分けた人々の常々主張して來たことであるが）、かゝる早期幼兒時代の印象は、よしんば大抵は健忘に陥つてはゐるが、個性の發達に拂拭すべからざる痕跡を殘してゐることが、殊にそれ等痕跡が後年の神經症的性癖を植付けると云ふことが、明かになつたのである。併しかゝる幼兒的體驗に於いて、性的亢奮並びにそれに對する反應が眼目になつてゐるので、今や人々は幼兒性慾と云ふ事實に直面したのである。それまた從來人々の考へ及ばなかつた新しい事で、人類の最も力强い先入見の一つに對する矛盾を意味してゐるのである。幼兒は實は『無邪氣』で、性的快感などは與り知らず、『肉慾』てふ惡魔との闘爭は思春期のスツルム・ウント・ドラングを待つて始めて開始せられると考へられてゐた。幼兒に於いて時々性的活動らしきものを知覺せざるを得ない場合には、人々はそれ等を變質、早熟的邪惡の徵象として、或は自然のをどけた氣まぐれとして、考へてゐた。精神分析の種々な發見の中でも、最も一般的な反對を招いたものは、最も甚だしい不興を買つたものは、性的機能が生の始まりから存し、生れたての赤ん坊に於いて既に重大な現象となつて顯れてゐるとの主張であつた。併し他の如何なる分析上の發見も、これほど容易に、これほど完全に證明し得るものはないのである。

更に詳しく幼兒性慾論を進める前に、私は自分が嘗て陥つた一つの誤りに就いて考へておきたい。

その誤りが私の仕事全體に影響を及ぼすことになつてゐるやうである。私の當時の技法の力に依つて私の患者の多くはその幼兒時代の種々の場面（成人に依る性的誘惑を内容とする場面）を想起したのである。婦人に於いてはその誘惑者の役割は大抵は父に歸せられてあつた。私はこれ等の話を信用し幼兒時代に於けるこれ等性的誘惑の體驗に後年の神經症の源泉が發見せられると見做したのである。父、叔父、兄などに對するそのやうな關係が確實に記憶に殘つてゐる時期まで續いてゐる二三の場合を見るに及んで、私の信念は强まつた。私の輕信を嫌つて頭を振らうと思ふ者があれば、それは無理もないと私も思ふが、併し何しろ私は當時に於いては、毎日のやうに自分に發見せられる新事實に對して公平無私に容認し得るためには、故意的に私の批評を抑へて行かなければならない時代であつたのだと云ふことを主張しておきたい。やがて併し、それ等誘惑の場面が決して實際に起きたのではなく、單に彼等の作り上げた空想に過ぎないのを、彼等が恐らく實際に經驗したと私が考へたのだと認識した時には、私は暫くの間はなすべき術を知らなかつた。私は自分の技法にもその技法に依つて知り得た結果にも、私は激しい打擊を受けた。併し私はこれ等の場面を技法的の方途（自分で正しいと考へてゐる）に依つて知つたものであり、またその内容は、私の調査の出發點となつた徵候と、看過し能はざる關係に立つてゐるのである。私は確乎たる證據を持つと共に、自分の體驗の中から正しい

結論——神經症的徴候は現實の體驗に直接結び付いてゐるのではなく、願望空想に結びついてゐるとの結論、並びに神經症に對しては實質的現實よりは心理的現實の方が一層重要であるとの結論——を抽出して來た。私は今日では、自分が患者にあの誘惑空想を押賣した、暗示した、とも信じてゐない。私はその時、始めてエデポイス・コムプレクスに直面したのである。このコムプレクスはそれ以後甚だ重大な意義を持つやうになつたが、併し私はこれをまだそのやうに空想的な形の下に認識してはゐない。また幼兒時代に於ける誘惑と云ふことも、その程度は極微小ではあるが、病源に參與してゐる。併し誘惑者は大低年長兒童であつた。

私の誤りは宛も、かのローマの帝王時代の傳説をリヸウス Livius の語つてゐるまゝを歴史的眞實だと思ひ込み、貧弱な、恐らく嘗て立派であつたゝめしのない時代や事情に對する反動構成だとは考へなかつたのと、同樣である。この誤謬が照破せられた後は、幼兒的性生活研究への道は開かれた。そこで人々は精神分析を今一つの科學分野に應用する場合に立つやうになつた。精神分析の豫想に從つて、これまで不明であつた生物學的事象の部分を羽知するやうになつて來た。

性機能は始めから存在してゐた。始めはまづ、生活上重要な他の機能に依還して存し、やがてそれから獨立するやうになつた。性機能は長い、複雜な發展を閲し、遂にそこから生じ來るものは成人の

常態的性生活として知られてゐるものである。性機能はまづ本能成分 Triebkomponente の全部の活動となつて表れる。これ等の成分は性的の肉體帶域に依據し、一部分は相反一對（サディスムス對マゾヒスムス、窃視本能對露出本能）となつて表はれ、相互に獨立して快感獲得に向ひ、大抵は自分の肉體をその對象とするのである。このやうに性機能は、始めの程は中心がなく、殊に自己戀愛的である。その後、その精神の中に纒まりが出來る。第一の有機化的段階は口唇的成分の支配下に立ち、次に擡頭するものは虐待的・肛門的時期 Sadistisch-anale Phase である。さうして最後にやうやく到達する第三時期に入つて性器の主權が確立せられ、それと共に性機能は繁殖の役目に從ふことになる。この發達の間に本能の多くの部分はこの窮極目的に役立たないとして放棄せられるか、或は他の方面の利用に供せられる。本能のその他の部分はその目的（限界）から轉向して性器組織の中へと移動する。私は性本能のエネルギーを、さうしてこのエネルギーだけを、リビドー Libido と名付けた。ところで私は、このリビドーが右に述べ來つた通りの發達を、常に無難に仕遂げるものでないと云ふことを假定しなければならなかつた。性本能の成分の何れか一つがあまりに强烈であつたり、あまりに早期に滿足の體驗を持つたりすると、その結果として、發達途上の或る個所に於いてリビドーが定着するやうになる。この個所へとリビドーは、後年に抑壓を受けた場合に、戻るやうになる。（退行）さ

うしてこれ等の個所から病的徴候は吹き出て來るのである。その後の洞察に依つて更に分つたことは如何なる個所に定着を見るかに依つて如何なる神經症に罹るかも決定されると云ふことである。つまり、後年の病氣が如何なる形で現れるかは、一に懸つてこの定着個所の如何にあると云ふことが分つたのである。

リビドーの組織化と共に、對象發見の過程も入り込んで來る。この過程は精神生活に於いて大きな役割を果すことになつてゐる。自己戀情期以後の最初の戀愛對象は、男女何れの性にとつても、母親である。母親の哺乳器關は確かに始めの頃は、赤兒にとつて自分の肉體と區別がついてゐないやうである。その後、併しまだ最初の幼兒年代に於いて、エディポス・コムプレクスの關係が生ずる。この關係に於いては、男兒はその性的願望を母の身に集注し、敵對的感情を競爭者としての父親に向けるやうになる。少女もまたこれに類似した態度をとる。エディポス・コムプレクスのあらゆる變化、あらゆる歸結は重要な意義を帶びる。生れつきの兩性的素質は愈々眼醒めて來、同時に存在するさまざまな心的動きの數を複雜にする。幼兒が性の區別を明白に知るやうになるには相當永くかゝる。この時期の性研究に於いて幼兒は典型的の性理論を作り出す。これ等の理論は、彼等自身の肉體組織がまだ不完全であるから自然、間違ひやら本當やらが混合してゐて、性生活の問題（子供は何處から來るかと

の、（スフィンクスの謎）を解決することは出來ない。幼兒の最初の對象選擇はこのやうに、近親姦的である。こゝに述べて來た發達の全體は、速かになされるのだ。人間の性生活の最も著しい特質は、その中間に休みを控へて二つの時期に亙つてゐることである。四五歳に於いてその最初の頂點に達するが、併しやがてこの性的早期開花は萎み、これまで生々してゐた動きは抑壓を受け、潜在期に入つてこれが思春期まで續く。「潜在期の間には道德、羞恥、嫌惡などの反動形成が作り上げられる」。性發達に二期あることは、あらゆる生物の中に就いてたゞ人間にのみ見られることで、恐らくこの事實が生物學的條件となつて、人間には神經症となる性向があることになつてゐるのであらう。思春期と共に早期の動きと對象據縮とは復活して來る、エディポス・コムプレクスもまた再生して來る。思春期の性の性生活に於いては、早期の性感情と潜在期の禁制とが互に相爭ふ。併し幼兒的性發達の頂點に於いても、一種の性器的組織が生じてゐたのであるが、たゞ男性器のみが一の役割を果し、女性器は未發見のまゝになつてゐたのである。（所謂、男根的主權。）性別は當時に於いては、まだ男女別を意味せず、男性器を持つてゐるか、或は去勢されてゐるかと云ふ事であつた。こゝに於いてか生じ來る去勢コムプレクスは、性格及び神經症の構成に對して、特に重大となるのである。

以上は人間の性生活に關する私の發見を簡單に叙べたものであるから、理解し易くするためには私

は一纏めにしておいたが、實は永い間掛つて漸次に知るやうになり拙著『性說に關する三論文』の版の重なる處に補說して行つたことであるのだ。私は性の概念を擴大したことが屢々强調され反對されてゐるが、その擴大が如何なる點に於いてゞあるかと云ふことを以上の略敍に依つて容易に呑込んで貰へたら有難いと思ふ。この擴大は二重である。第一に、性は性器に對するあまりに狹い關係から開放され、もつと廣汎な、快樂追及的肉體機能であり、繁殖の役目を果すのも第二次的發達に入つてからであると云ふことになる。第二に、單に感傷的な、性的な總ての感情（それに對して我々の言語習慣は意義多樣な『愛』„Liebe" と云ふ語を流用してゐる）が性的感情となる。併し私思ふに、この擴大は決して新しいことではなく、復舊である。我々はこの概念を不適當に狹隘にして來たので、その狹隘を廢棄しようとするに過ぎないことなのだ。性を性器から解放して如何なる利益があるかと云へば、即ちまづ我々はそれに依つて幼兒や變態者の性活動を、常態的成人のそれと同じ見地の下に置くのである。然るに幼兒や變態の性生活はこれまで全然不問に附せられてゐたし、常態的成人のそれは道德的に嚴しいことを云はれてばかりゐて、一向正當に理解されてゐなかつたのである。精神分析的の考へ方を以てすれば、最も變つた、最も嫌らしい變態でも、性器的主權の支配を逸した性的部分本能の、さうしてリビドー發達の極初期に於ける如く獨自的に快樂を求めて行くところの性的部分本

能の表現として說明がつくのである。これ等變態の最も重大なものたる同性愛は、實に變態とは呼び難いものである。同性愛の根源は素質的な男女兩性具有、並びに男根的主權の（あとまで殘つてゐる）効果にある。精神分析に依つて我々は、萬人が或る部分の同性愛的對象選擇を有することを證明し得るのである。子供は「多種多樣な變形を具へた變態」"Polymorph pervers" だと我々が云つたとしても、それはたゞ一般に用ゐ慣はされてゐる表現を記述したまでゞあつて、そこに何等道德的價値批判は含まれてゐないのだ。道德的價値などゝ云ふことは、抑々精神分析には緣の遠いことである。

性の槪念の擴大だとあらぬ批難をかけられてゐる今一つの方面とても、精神分析的研究に照して見ると是認せられるのである。現に、この研究の示すところに依ると、總てこれ等の感傷的、友情的感情は本來十分性的意義を帶びたものであつたのだが、それがやがて「目的を禁斷」せられ、或は「昇華」せられたのである。このやうに性本能は影響を受け易く、また他に轉向し易いものであるからして、また多くの文明的行動に轉用されるのであつて、實際この方面に最も重大な寄與をなしてゐるのである。

幼兒の性感に關するこれ等の最も驚くべき發見はまづ成人の分析に依つて獲られたが、併しその後一九〇八年頃には、直接幼兒を研究することに依つてあらゆる點、あらゆる程度までそれの眞實であ

ることを確證せられた。幼兒は如何なる幼兒でも常に必ず性活動をなすものであることを確知することは極めて容易であつて、何人も人類がこれまで如何にしてこの事實を看過してゐたか、非性慾的な幼兒時代願望傳說をかくも永く確保し來つたかを不思議に思ふほどである。この事實は、大抵の成人が自分自身の幼兒時代に對して健忘的であること〻密接に關係してゐる。

四

抵抗說、抑壓說、無意識說、性生活に病源的意義があるとの說、幼兒的體驗が重要であるとの說—これ等は精神分析學說體系の主要構成部分である。遺憾ながら私は玆ではたゞそれ等を個々の部分として記述し得るに過ぎなくて、それが相互に關係し入込合つてゐるかを明かにし得ない。今や我々は分析技法に漸次に現れ來つた變化に就いて語るべき場合となつてゐる。

いろ〳〵の闘些をさしたり證據をつきつけたりして患者の抵抗をまづ克服することは、醫者として自分が期待せざるを得なかつたことに向つて行くに就いて缺くべからざることであつた。併しこの抵抗克服は双方にとつて永い間あまりに骨の折れることであり、またそこに多少考へさせられるやうな點もないでもなく思はれた。このやうにこの克服は今一つの方法（これは或る意味に於いてはその反對の方法であつた）から分離せられた。一定の題目に就いて何事かを語れと患者に強ふる代りに、「聯想」をして自由に湧起せしめよと要求する。卽ち、彼が總ての意識的な目的觀念から解放せられた時に常に心に生じ來ることを云へと要求する。たゞ患者は自己知覺に依つて知り得た一切を實際に語り

個々の思ひ付きがあまり重大ではないのだらうとか、關係がなからうとか、下らないことだらうとか云ふやうな理由で放棄するやうな批評的な自己干渉には全然從はないやうにして貰はなくてはならない。患者の話は正確でなくてはならないと云ふやうな要求は口に出して屢々云ふには及ばない。これは抑々精神分析的治療の出發點であつたのだ。

この自由聯想法が精神分析の根本規則（人々が患者から期待したことで、つまり抑壓を受け、抵抗のために遙かなところにおかれてゐる心的材料を意識にまで持來たす）に從つて行はれねばならないと云ふことは、一寸をかしく思はれるかも知れない。併し人々は考へて見なければならない、自由聯想は實際に於いて自由ではないと云ふことを——。患者はその思考活動を一定の題目に向けてゐない場合にでも、現在自分が受けつゝある分析的處置の立場には影響されてゐる。患者としてはこの立場に關係のあること以外は、思ひ付き得ないと云ふのは本當でなければならない。抑壓されてゐるものゝ想起に對する患者の抵抗は、今や二重の仕方で現れるであらう。第一に、かの批判的自己干渉で、精神分析の根本規則と云ふのは、つまりこの干渉を目安においてゐるものなのだ。根本規則に從ふことに依つて、この干渉を克服することが出來たとしても、抵抗は今一つの形をとつて現はれる。この抵抗は被分析者をして決して抑壓されてゐるもの自體を思ひ付かせないやうにする。さうして暗示の

形でこれに近いものを思ひ付かせるに過ぎない。この場合、抵抗が大きければ大きいほど、報告せられる代償的思ひ付きは、我々の求める本物の思ひ付きからかけ離れたものとなる。分析者は注意を集中して、併しながら固くならずに耳を傾けてゐると、彼は一般的な經驗に依つて大體どんなことが出て來るかの豫想がついてゐるから、患者が呈示する材料を二樣に利用することが出來る。抵抗のあまり甚だしくない場合には、患者の供する暗示の中から抑壓されてゐるものそれ自身を感知することが出來るし、また抵抗の甚だしい場合には、主題には縁遠く見える種々な思ひ付きの中から抵抗の出來具合を認識することが出來、その抵抗をやがて分析者は患者に話してやるのである。併し抵抗の發見は、これを克服することへの第一歩である。で、分析的操作の内には解釋術と云ふことも這入つて來る。この解釋術を首尾よく扱ふには習練、技量を要するが、併しこれを呑込むことは容易でない。自由聯想法は以前の方法に比すると非常な利益がある。單に骨折りを節すると云ふ利益のみでない。この方法ならば被分析者はあまり不安を感じない。またこの方法は現在の實狀との接觸を失はない。神經症の構成中に於ける如何なる契機をも看過せず、自分自身の期待に依つて神經症の中に何事かを押賣するやうなことのないことを、更に保證する。この方法に於いて人々は、分析の進路と、材料の整頓とを定めることを、本質的に患者に任せる。それ故に個々の徴候及びコムプレクスは組織的に加

工（改變）することは不可能となる。催眠術のやうな加工的な方法の場合とは正反對に、分析處置の種々な時期に於いて、また種々の個所に於いて、我々はその間に相互的なものを經驗する。傍聽者——の如きは實際に於いては介在することを許されないが——に對しては、それ故に、分析治療はどうして成るのか全然洞觀し得ないのである。

この方法の今一つの利益は、元來如何なる患者でも自分の思ひ付きを持たないと云ふことはあり得ないと云ふことである。人々が斯々の種類の思ひ付きを持とうなど、云ふ要求さへ持たないならば、一つの思ひ付きを持つことは、理論上常に可能でなければならない。併しさう云ふ風な思ひ付きを常に必ず持たない場合もあるが、その場合を細かく部分に分けて考へて見ると、解釋はついて來るのである。

私は今や一つの契機——分析の樣相に一つの本質的な特徴を附加へ、技法上でも理論上でも最大の意義あるものと云ひ得べき一つの契機——を記述しようとする。總て分析處置の場合に、醫者の方で別にさう仕向けるわけではないのに、患者は分析者の人格に對して激烈な感情を寄せて來る。そのやうな感情は、現實の關係に於いて、何としても說明のつかないものである。その感情は積極性(愛)を帶びた場合もあるし、消極性(憎)を帶びた場合もある。最も情熱的な、甚だ肉感的な惚れ込みから、

反抗、惡意、憎惡の極端な表現に至るまで種々ある。これ等は、簡單に云つて『轉嫁』Übertragung と呼ばれてゐるが、これは患者に於いて、やが快癒への願望の代りに現れ、また、これが穩和であり適宜である限りは、醫者の感化の受容手段となり、共同的な分析操作の本來的の衝動促進者となるものである。その後、もし轉嫁が情熱的となるか、或は敵對的に變るかすると、これは抵抗の主要手段となる。さうなると、患者の思ひ付きの活動が停頓し、處置の成功が危くなる。併し轉嫁を避けようとするのは、馬鹿げたことである。轉嫁のない分析などはあり得ない。分析のために轉嫁が生ずるのだと信じてはならない。また分析の場合にのみ生ずるのだと考へてもならない。轉嫁は分析に依つて、たゞ發見せられ、それとして取出されるに過ぎない。それは人間一般の現象であつて、一切の醫者的影響の成功不成功はこれに依つて決定される。轉嫁は實は、人のその人間的環境に對する關係一般を支配してゐる。轉嫁に於いて人々は、催眠術者が『掛け得る（暗示を與へ得る）』Suggerierbarkeit と云つたのと同じ動的な要素を認識することは困難でない。この要素は催眠術的反應の基體であつて、これの不可解に就いては洗ひ流し法も大いに惱まされたのである。このやうな感情轉嫁の傾向の缺如してゐる場合、或は全然消極的（否定的、憎惡的）である場合には（例へば、早發性痴呆症、或は妄想症の場合の如き）、患者に心理的影響を與へることは出來ないのである。

他の精神療法と同じやうに、精神分析もまた暗示 Suggestion を手段として操作をすると云ふは全然正しい。たゞその區別は、精神分析に於いてはこれに——暗示又は轉嫁に——治療の成功の決定を委せないと云ふ點にある。暗示又は轉嫁は寧ろ、患者をして或る心理的操作を行はしめること——彼の轉嫁的抵抗を克服せしめること——に利用せられる。この克服は患者の心理的經濟の持續的變化を意味してゐる。患者はその轉嫁的態度に於いて、感情的關係（彼は最早期の感情纒綿から、彼の幼兒時代の抑壓されてゐる時期から、發してゐる關係）を再經驗するものであることを成程と納得せしめることに依つて、分析者はこの轉嫁患者に自意識させる、卽ち解消させる。そのやうな變換に依つて轉嫁は、抵抗の最も強い武器であつたものが、分析治療の最善の道具にと移る。とは云へ、轉嫁の扱方は、分析技法中でも最も困難な、且つ最も重大な部分であるのだ。

自由聯想法、並びにそれに附隨してゐる解釋術の力に依つて、精神分析としての一つの仕事が成功したのである。この成功は一見したところ、實踐的にあまり重大でないやうに思はれたが、併し實際には、學問的な仕事に於いて全然新しい立場と意義とを生ぜしめるに至つたのである。かくて夢は意味のあるものであり、且つその意味を辯することの出來るものであると云ふことが證明せられた。夢はなほ古典的な古代に於いては、未來を豫示するものとして高く評價せられてあつた。近代の科學は

夢に就いては何事をも知らうとは欲せず、迷信の解釋に放任し、これを『單に肉體的』行爲として、眠れる精神生活の一種の一時的異調として說明した。誰か眞劍に科學的な仕事に從つて來た者が『夢の解釋者』として名乘りを揭げて出て來ると云ふ事は、一寸まだありさうにも思へなかつた。併し夢がそのやうに厄介視されてゐるに頓着せず、これを理解されてゐない神經症的徵候として、妄想觀念又は强迫觀念として取扱ひ、その內容の外見を無視して、夢の中の個々の事柄を自由聯想の對象にするならば、卽ち我々は一つの別個の歸結に達するのである。夢見た人々の數多くの思付きを硏究して見ることに依つて、そこに一つの纏つた念慮（思想）のあることが知れたのである。その念慮は單に矛盾したもの間違つたものとばかり云ひ去れない、一つの十分に價値ある心理的行動に符合するものであり、顯在的な夢はこの念慮の單に歪められ、短縮せられ、誤解せられた飜譯に過ぎなくて、大抵は視覺的な影像としての飜譯である。これ等の潛在的な夢の思想（念慮）が夢の眞意義を含んでゐるのであつて、顯在的な夢の內容は單に一つの僞瞞に過ぎない、假面に過ぎない。それ等の僞瞞、假面に聯想は結び付き得るが、併し解釋はこれに關係しない。

今や我々は一聯の重大問題に答辯しなければならない立場に立つ。就中、重要な問題は、一體夢の構成には動機が存してゐるのか、如何なる條件の下に於いて夢の構成はなされるのか、常に意味のあ

る夢の思想が屢々無意味な夢の思想に移つて行くのは如何にしてゞあるか、等々。私が一九〇〇年に發表した『夢の註釋』に於いて、私はこれ等の諸問題に答へようとした。それ等の答への試みの中から全部をこゝに再言することは出來ないから、最も簡單に拔萃しておかう。——夢の分析に依つて分つた夢の潛在的思想を研究して見ると、そこには何人にもよく理解され、夢の本人もよく承知してゐる思想の他に、一つ別の思想が儼然區別せられてあるのを知るのである。理解せられ承知せられてゐる夢の思想とは、覺醒生活の殘物（晝間の殘物）である。その殘物を除去つたあとのものに於いて、併し人々は甚だ忌はしい願望感情を認めるのである。夢の本人の覺醒生活に於いては思ひも寄らぬ、從つて本人は驚き呆れてそれを拒否するであらうやうな願望感情を發見するのである。この感情こそは抑々夢を構成したものであるのだ。この感情が夢を作り出すことにエネルギーを供し、晝間の殘物を材料として利用したのだ。かくの如くにして生じた夢はその感情を滿足させたものを表し示してゐるのだ。それの願望充足 Wunscherfüllung であるのだ。かう云ふ過程は、睡眠狀態と云ふ事情に依つて、それが好都合にせられざる限り、不可能である。睡眠のための心理的豫備條件は自我を睡眠願望に集中し、生活の一切の興味から攝綿を離脫させることである。同時に省略動作への出口が塞がれてゐるから、自我はこれまで（覺醒時に）抑壓のために拂つてゐた心的エネルギーの支出を節するこ

とが出來る。このやうに夜になつて抑壓が弛まることを無意識的慾望はこれ幸とばかりに利用して、夢と共に意識の中にのさばり出て來るのだ。自我の抑壓的抵抗は、併し、睡眠中と雖も決して全くなくなつて了つてゐる譯ではなく、ただ低下してゐるだけである。それの一部分は夢の檢閲として殘り、無意識的慾望を強制して、本來ならば適當であるべき形とは別の形で現れることを餘儀なくさせてゐる。夢の檢閲が嚴重であるために、夢の潜在思想はそれ自身を變へたり弱めたりしなければならぬ。その變へたり弱めたりのために、夢の潜在的思想の意識性は知り得ないものとなるのである。夢の歪みはかやうの如くにして生ずるのであつて、顯在的な夢の奇異な特質はそこから來るのである。それ故に、夢は一つの（抑壓されてゐる）慾望の（偽装された）充足であるといふ命題は正しいことになる。我々は今既に認識する。夢は神經症的症候と同じやうに構成せられ、抑壓せられてゐる本能的慾望の要求と、一つの檢閲的な力の抵抗との間の妥協的構成であると。成生が同じである結果、夢も症候と同様に不可解であり、また同様に解釋を必要とするのである。

夢の一般的機能は、これを發見するに容易である。夢は、眠りを醒まさせようとする内外の刺戟に對して一種の緩和によつてこれを防ぎ、かくて睡眠を障害から保衞するに役立つものである。外的刺戟は解釋し變へられて何等かの情景を構成する中に組み入れられる。本能的要求の内的刺戟に對

しては、睡眠者はこれを許容し、（夢の潜在的内容が檢閲に依る束縛に反せざる限りは）夢の構成に依つて滿足を得ることを大目に見る。併しこの束縛に反しようとの危險が迫り、夢があまりに刺戟して來ると、睡眠者は夢を打切つて驚いて眼醒める。（恐怖の夢。）これと同樣に夢のこの機能が果されなくなる場合がある。それは外的刺戟があまりに强くて、これを掻けることの出來ない場合である。（覺醒させる夢。）夢の檢閲と共同することに依つて、潜在的な思想を顯在的な夢の內容に移し達す過程を私は夢の仕事と名付けた。夢の仕事とは前意識にある思想材料の獨特に扱ふことに存するのだ。この取扱ひに際して、この思想材料の組成部分が凝縮せられ、その心理的强調は轉位せられ、その全體はやがて變じて視覺的影像となり戯曲化せられ、更にその上に誤解的な第二次仕上げが附加せられる。夢の仕事は心理生活の一層深い、無意識的な層（この層は我々に知られてゐる常態的な思想過程からは斷然區別せられるものである）に於ける過程の一つの顯著な見本である。夢の仕事はまた多數の古代的な特徴を取出し示す。例へば、夢に於いて特に性的であるところの象徵を用ふるが、この象徵はまた精神的活動の他の分野に於てもやはり發見せられるものである。

夢の無意識的本能感情が晝間の殘物（覺醒生活に於いて果されざりし興味）と結び付くからして、この本能感情に依つて構成せられた夢には、二重の價値（精神分析的操作に對して）が生ずるのであ

る。夢を解釋して見ると、そこには一方に於いて、抑壓された願望の充足のあることが分り、他方に於いては晝間の前意識的思考活動が持續されてをり、勝手次第の内容がそこに果されてをり、決意、警告、熟慮、更にまた願望充足などが表現せられ得るものであることが分る。分析は夢を二つの方面から利用する、卽ち被分析者の意識的過程、並びに無意識的過程を知ることに利用する。また夢には忘れられてゐる幼兒生活の材料が現れると云ふことも、分析にとつては誠に有難いことなんである。幼兒時代の事で忘れて了つてゐる事でも、大低は夢の解釋につれて想起されて來る。かゝる場合には夢は、以前には催眠術が果してゐたことの一部を、果すわけである。これに對して私は、夢を解釋して見ると、總ての夢は性的内容を持ち、或は性的本能力から生ずることが分ると主張するものゝ如くに云はれてゐるが、私はそのやうな主張を嘗てしたことはない。食慾、渴慾、排泄慾なども、何等かの抑壓されてゐる性的又は色慾的感情と同樣に滿足の夢を生ずべきことは、甚だ分りきつたことである。小兒に於いては、我々の夢の說の正しいことの證據が、容易に見られる。小兒に於いては種々の心理的組織がまだ儼然區別されてをらぬからして、さうして抑壓をまだあまり深く行はれてゐないからして、晝間から殘つてゐる何等かの願望感情の露骨な充足に外ならぬ夢を屢々見せられる。無意識の要求が非常に權利づくである場合には、その影響を受けて成人と雖もまたそのやうな幼兒型の夢を

見ることがあるものだ。

夢の解釋と同じやり方で分析はまた、人々が非常に屢々起す小さな行損ひや徴候行爲を研究した。この研究の結果は、やうやく一九〇四年に『日常生活の精神病理』[1]と題する一書となつて公刊せられた。この書物は随分讀まれたものだが、これの内容をなすものは、行り損ひや徴候行爲が偶然的たものでなく、生理的現象としては說明し切れるものではなく、そこには意味があり、解釋のつくものであり、結局、押込められ、或は抑壓されてゐる感情や意慾の結果とするのが正しいとの證明である。併し夢の解釋並びにこれ等の研究の最大の價値は、これに依つて分析的操作が支持されると云ふ事に存するのではなく、それ等が有する別の特性に存するのである。これまでは精神分析はたゞ病理的現象の解消にのみ携つてゐた。さうしてそれ等現象の說明のためには、その取扱はれたる材料の重要さに對する關係以外のことにまでもその範圍が及ばざるを得ないやうな假定を立てたければならなかつた。ところが夢は(夢をやがて精神分析は研究するやうになつたのだが)何等病的徴候ではなかつた。それは常態的精神生活の現象であつた。あらゆる健康者に於いても起り得ることである。夢が徴候と同じやうに構成せられてゐるものであるならば、夢の說明にも同じ假定(本能感情抑壓說、代償構成及び妥協構成の說、意識及び無意識の配分されてある種々な心理組織の說など)が必要であるならば、

卽ち精神分析は旣に病理的精神のみを扱ふ科學ではなく、寧ろ心理に關する一つの新しい知識であつて、常態者を理解するに必要缺くべからざるものであることになる。斯學の假定と結論とは他の分野の心理的又は精神的事象にも擴充することが許される。廣汎なる世間一般への興味の大道が、斯學には開かれてゐる。

註(一)　本全集第三卷『日常生活の精神分析』のこと。(譯者)

五

さて私は、精神分析の内的成長の話はこゝで中斷しておいて、それの外的運命の方に轉ずることにする。私がこれまで精神分析の利得に就いて語り來つた事どもは、大體に於いては私の仕事の歸結であつたが、併しその間には後年になつて知り得たことも混入してゐるし、また私自身の貢獻と、私の門弟、學徒の貢獻との區別を必ずしも立てゝおかなかつた。

ブロイヤーとの訣袂以來、十年以上と云ふもの、私は門弟を持たなかつた。私は全然孤立してゐた。ヰインに於いては私は指彈されてゐたし、外國人は私から何等の知識を取らうとはしなかつた。『夢の註釋』（一九〇〇年）は大抵の專門雜誌には紹介されなかつた。『精神分析運動史』論の中で、私は、ヰインの精神科醫仲間の態度の一實例として、或る助手醫との會話を報告しておいた。彼は私の說に反對した一書を物したのであるが、私の『夢の註釋』を讀んでゐなかつたのである。或る人が臨床實驗の時に、彼にあの本は讀んでも無駄だと云つたとのことだ。當人はその以後或る特別教授になつたが、その時の會話の内容を否認し、抑々私の記憶が怪しいと云つてゐるさうである。あの時の私の報告は

言々句々みな正しいものである。

私が反對を受けたことの如何に必然であり已むを得なかつたかを自ら理解したとき、私の感情は柔らいで來た。漸次にまた私も孤立でなくなつて來た。まづギインに於いて、私の周りに二三の連中が集つて來た。一九〇六年以後には、チウリヒの精神病學者ブロイラー E. Bleuler 並びにその助手ユング C. G. Jung その他が活潑な興味を精神分析に寄せて來た。一九〇八年の復活祭の日に、この新科學の味方たちはザルツブルクに集り、そのやうな私的會合を定期的に催し、また雜誌を發刊しようと云ふ相談をした。その雜誌は『精神病理學的、並びに精神分析的研究年報』„Jahrbuch für psychopathologische und psychoanalytische Forschungen" と題し、ユングこれを編纂し、ブロイラーと私とがこれを監修することになつた。併しやがて、この雜誌も、戰爭勃發と共に休刊になつた。同時に、スヰツル人が參加したと云ふので、精神分析に對する興味は普くドイツに廣まり、多數の批評、文獻、並びに種々な學會に於ける活潑な論議の對象となつた。併し評判は一向親切でもなく、好意的でもなかつた。精神分析をほんの僅か嘗つたばかりで、ドイツの學界はこれを排斥することに一致した。

今後の世界が、精神病學、心理學並びに精神科學一般に對する精神分析の價値に關して如何なる審

樣的判斷を下すであらうかは、今日では勿論私も知り得ない。併し吾人が經て來た時代を歷史に書く人がもし出て來れば、その歷史家は、この時代の代表者たちがドイツの科學に對してとつた態度はあまり賞讚出來ないものであつたことを承認させねばなるまいと思ふ。と云つても、私は必ずしも彼等代表者が新科學を受付けなかつた事實とか、或はあまりに素氣なく拒否したとか云ふ事を問題にするのではないのだ。これ等の拒否や素氣なさは、共にこれを理解するに容易である。それは如何にもありさうなことで、少くとも反對者の人格に何等暗影を投ずることどもではない。併しあれほどまでに傲慢な態度をとり、論理を無良心に蔑視し、攻擊の粗暴にして沒趣味なることに對しては、辯明の仕樣があるまい。既に事過ぎて十五年にもなる今日、昔日の舊感情をそのやうに再燃させることは子供らしいと人々は云ふであらう。併し私が今日これを再び持出す所以のものは、それを云ふことに多少の意義を認めるからである。その後數年、世界戰爭の間に、敵人が聲を合せてドイツ國民の野蠻を批難した時、その批難を領前した前述の人々は、自分自身の經驗に顧みて、その批難に抗することの出來なかつたことを、深く苦痛としたのである。

反對者の一人はその患者が性的な事柄に就いて語り始めた時に、口を禁じたことを自讚してゐた。

さうしてこの方法はとりもなほさず、神經症者に於いて如何に性が病原的役割を果してゐるかを判斷することの正しいかを明かに示すものである。そこに感動的の抵抗の存することは精神分析の理論に照して容易に説明がつき、我々は殆ど疑ふ餘地がないほどであるが、この感動的抵抗以外にも、精神分析への理解を妨げる主要なる障害が横たはつてゐるやうに私には思はれる。それは、反對者たちが精神分析を私の思辨的空想であると考へ、永い間かゝつて骨折つて發見した、何等豫想的先入見のなかつた操作で、その操作がかゝる體系とまでなつたのだと云ふことを信じようとせぬ事情に存するのである。彼等の意見では精神分析は觀察や實驗には關係のない事であるから、彼等自身も別に實驗などはして見るまでもなく、これを排斥して當然である。さう云ふ反感的信念をそれほど確實に持つてゐない他の人々は、自分等の反對するものを見まいために顯微鏡を覗かないと云ふ古典的な抵抗手段を蒸返したのである。何か新しい事を論ずるに當つて自分自身の判斷に依ることは、如何に大抵の人々を誤らせるものであるかは、注意に値する事である。幾年もの間、さうして今日もなほ、私は「好意ある」批評家たちから聽かされて來たものである、こゝまでは精神分析は僅に正しいが、併しこの點から以上はその云ひ過ぎであり、不正なる一般化であると。それに就いて私は知つてゐるのである。そのやうな限度を設けることは何よりも困難であり、また批評家自身も一二日又は一二週間以前まで

はその事に就いて全然何も知つてゐなかつたのであると云ふことを……。

精神分析は學會から公認せられなかつたので、その結果、分析者たちは團結するやうになつた。一九一〇年のニュルンベルクに於ける第二回總會の席上、フェレンチ S. Ferenczi の唱導の下に『國際精神分析學會』„Internationale Psychoanalytische Vereinigung.“ は成立した。この學會は各地に群立し、一人の學會長の指揮の下にあるのである。學會は幸にして世界大戰と云ふ大支障にも堪え、今日ではヴイン、ベルリン、ブダペスト、チウリヒ、ロンドン、オランダ、ニウ・ヨウク、パン・アメリカ、モスカウ並びにカルカッタに支部を有してゐる。第一次の學會長にはユング C. G. Jung を推さしめたが、これは誠に遺憾千萬な第一歩であつたことが、後に至つて判るやうになつた。その頃また精神分析のための第二の雜誌が出來た。それはアードラー Adler とステーケル Stekel との編輯する『精神分析中央雜誌』„Zentralbatt für Psychoanalyse.“ であつた。やがて間もなく第三の雜誌『イマゴー(像)』„Imago.“ が出來たが、これは非醫者なるザックス H. Sachs とランク O. Rank との編輯に懸り、分析を精神科學に應用するための雜誌である。その後間もなく、ブロイラーは精神分析を辯護して『フロイドの精神分析』„Die Psychoanalyse Freuds,“ (1910) なる一書を

公にした。論爭に於いてとにかく正しさと正直な論理とが言葉に現れたことは甚だ喜ばしかつたが、併しブロイラーの書は私を完全に滿足させると云ふわけには行かなかつた。この書はあまりに不偏不黨と見られようと努め過ぎてゐる。で、この書の著者が、精神分析上價値ある概念であるところのアムビヴレンツを紹介したのを、讀者たちが感謝してゐるのは、何等偶然事でなかつた。その後の著書に於いてブロイラーは分析學說の體系に對して甚だ拒否的な態度を示した。その本質的な部分を擬ひ排擊したが、では如何なる部分が彼の承認し得るところとして殘るのか疑はしくなるほどであつた。併しその後また彼は、『深部心理學』"Tiefenpsychologie"に好意ある論調を熱心に示したばかりでなく、早發性痴呆症 Schizophrenie に關する彼の大著述の立場を、精神分析に置いてゐるのである。ブロイラーはやはり『國際精神分析學會』には永く留らず、ユングとの不和の故にこれを脫退することゝなつた。かくてこの債材は斯學から去つてしまつた。

精神分析に對する公的非認も斯學がドイツに於いて、並びに他國に於いて、傳播するのを妨げるに力はなかつた。私は別の個所（『精神分析運動史』）に於いて、斯學進步の跡を辿り、またその代表者として擡頭し來つた人々の名をそこに擧げておいた。一九〇九年にはユングと私とがスタンリ・ホール Stanley Hall に招かれてアメリカに赴き、そこのマサチウセッツ州、ウスター市、クラーク大學

（同大學の總長でホール氏はあつたのだ）で、同大學創立廿週年記念として一週間に亘つて（ドイツ語で）連續講演した。ホールは誠に聲望ある心理學者であり教育學者で、既に數年來精神分析を同大學に採入れてゐたのである。彼には將に將たる器量があつて、そのために權威を出入させることを好んだのである。我々はまたそこで、ハーヴードの神經症學者パトナム J. Putnam に會つた。彼は老齡にも拘らず、精神分析のために奮起し、世間的に信用ある人格の貫祿を以て、斯學の文化的價値を論じ、その見解の純粹なることにつき責任を以て保證した。この人は卓越した人物で、强迫神經症的な素性に對する反動として嚴しく倫理的に自己を律してゐる人であつたが、たゞこの人が精神分析を或る一定の哲學體系に附加へ、道德的努力に役立たしめたいと要望して來たのには、我々は面喰つたのである。また哲學者ヰリアム・ジェームズ William James との會見は、私に消えやらぬ印象を與へた。私にはどうしても忘れられぬ一場面がある。それは我々が嘗て散步してゐた時、突然彼が立止り、私に彼の金入れを手渡し、先に行つてゐてくれるやうに、やがて心臟壓迫の發作が來つゝあるからそれが過ぎたら行くからと云ふことであつた。彼はその後一年、心臟病で亡くなつた。それ以來私も、死に直面して毅然たること彼の如くでありたいと常に願つて來てゐる。

當時私はやうやく五十三歲であつたが、自ら靑年の如く健康であることを感じてゐた。この新世界

に僅かばかり滯在してゐた間に、私の自己感情は大體快くせられてゐた。歐洲に於いては、私は自分を追放者のやうに感じてゐたが、此處では私は最上の人々に對等者として受容れられる自分を見た。私がウスターに於いて『精神分析五講』を述べるために演壇に登つた時には、一つの信ずべからざる白日夢が實現された如くであつた。かくて精神分析は既に妄想ではなく、現實の價値ある一部分となつた。私の往訪以來、斯學はアメリカに於いて根を生やしたばかりでなく、非醫者の間にも非常に一般的に知られ、多くの正統的精神療法家にも醫學的教養の重要なる一構成部分として容認せられるやうになつた。遺憾ながら、斯學はまたアメリカに於いて甚だ不純なものにされた。精神分析の與り知らぬ多くの濫用が、その名の下に横行した。技法及び理論に於いて根本的に習得すべき機會が、そこには缺けてゐた。また斯學はアメリカに於いては行動派心理學（Behaviourism）と撞着したが、この派の心理學は精神分析上の問題一般を除去したことを素朴に信じて、得意になつた。

歐洲に於いては一九一一年——一九一三年間に、精神分析から脫退する者が二人あつた。即ちアードラーとユングの兩名で、彼等はこれまでこの若き科學のために堂々たる役割を果した人々であつた。彼等の強味は併し、彼等自身の內容に倚ると云ふよりは、精神分析の世人に嫌はれる結論から脫却したい（よしんば

人々はそれの事實上の材料を否定し得ないにもせよ）との誘惑に負ふてゐた。ユングは分析的事實を抽象的なもの、非人稱的なもの、非歴史的なものに變解せんと試みた。これに依つて幼兒性感やエデイポス・コムプレクスを大した問題ではなくさせ、從つて幼兒分析の必要をなくなさうと試みたのであつた。アードラーはもつと遠く精神分析から離れて行つたやうに思へた。彼は性慾一般の意義を排擊し、性格構成及び神經症構成を專ら人々の權力への努めに、また彼等の素質上の劣等への補償の必要に歸した。かくて精神分析が心理學上獲得した新たな業績を、すつかり風に飛ばしてしまつた。併し彼に排擊されたものが、名前を改めて、閉出しを喰つたその彼の體系の中へと這入り込んで來た。彼の所謂『男性的抗議』“Männlicher Protest” とは、不正にも性慾的なものとされた抑壓に外ならない。批評はこれ等二人の異端者を遇するに甚だ寛大であつた。私はアードラー及びユングが、彼等の說を精神分析と呼ばないやうにだけはさせておいた。爾來十年の歲月は流れて、これ等二つの試みも精神分析のためには何の弊害をも殘さずに、行き過ぎたことを確認し得る。

一つの團體が或る基本的な點に於ける意見の一致に基いて成立つてゐる場合には、これ等共通の立場を放棄したものはその團體から離脫すべきことは自明である。然るに嘗ての門弟が私から離反して行くことを、人々は屢々私の責に歸し、そこに何か私に面白からぬ事情があるためにかゝる結果になる

のだと云ふ風に見ようとする。併しこれに就いては私としてはたゞ、ユング、アードラー、ステーケル、その他少數者が、アーブラハム Abraham, アイテインゴン Eitingon, フエレンチ Ferenczi, ランク Rank, ジョーンズ Jones, ブリル Brill, ザックス Sachs, 說教者プフィスター Pfarrer Pfister, ファン・エムデン van Emden, ライク Reik, その他多數の人々にも反對されてゐる事を云ふに止めておきたい。アブラハム以下の人々は約十五年以來、私と忠實に事を共にし、多くはまた友人としても密接な關係にあるのである。私はこゝに、私の門弟中で最も古顏を擧げたゞけで、彼等は既に精神分析文獻中に燦然たる名前を遺つてゐるのである。これ等以外の人々の名前を茲に擧げなかつたけれども、それは擧げるに價せぬと云ふ意味ではなく、後に來た若い人々の間にも大きな希望を抱かしめる才能の存してゐることは勿論である。併し、我こそは絕對に誤ることのないものだと自惚を持つてゐて、寬容を知らぬ人間ならば、（殊に私ほどにも實踐的な誘惑を供さない場合には）、それほど大勢の精神的に重要な人物を自分の周りに寄付けておくことは出來るものではないと云つたとて、大過はなからうと思ふ。

世界大戰に依つて隨分いろ〳〵の團體は崩壞したけれども、我々の『國際』學會は何の痛痒をも感じなかつた。大戰後最初の會合は一九二〇年に、中立地帶たるハーグに於いて催された。戰爭のため

に飢饉と貧窮に惱んでゐた中部歐洲人たちがオランダの友情的な好意を受容れたといふことは、如何にも感動的な話である。またこの破壞せられた世界に於いて英獨兩國人が卓を共にし食を同じくしたと云ふことは、私の知つてゐる限りでは、大戰以後始めての事であつた。大戰はドイツ國に於いても西方諸國に於いても、精神分析に對する興味を高めた。戰爭神經症患者を觀察することに依つて醫師たちは、神經障害に於ける心理的源因の意義に眼を開かれ、我々の方の心理的概念たる『病氣利得』、『病氣への逃込み』などは迅かに一般化して行つた。分裂前の最後の總會（一九一八年ブダペストに於ける）には、中央諸勢力の聯合政府から公認代表を派遣り、彼等は戰爭神經症者を處置するための精神分析治療部を設けたいと申し出た。その話はそれきりになつた。また我々の最良の會員の一人たるアントン・フォン・フロインド博士 Dr. Anton von Freund は雄大な計畫を建て、ブダペストに精神分析の教授及び治療の中央機關を造らうとしたが、やがて革命が起り、またこのかけ代へのない人物が意外に早世したゝめに、この計畫も挫折することになつた。彼の盛んなる計畫の一部分は、後にマクス・アイティンゴンが一九二〇年にベルリンに精神分析診療所を設けて實現した。ボルシエヰキが短期ではあるがハンガリーを支配した間に、フェレンチは精神分析の公認代表者として大學に於いて講義を試み大いに成功した。戰後、精神分析の反對者流は得てして、この經驗が精神分析者の主張の正

しさに對して止めを刺したと云はうとする。戰爭神經症などの存するに徵しても、如何に性的契機が神經病的苦惱の病源として必ずしも必然でないかゞ分ると云ふのであるが、併しそれはあまりお手輕な、あまりに倉卒の勝利感である。何となれば、一方、戰爭神經症の如何なる患者をも徹底的に分析した者はなく、從つてその動因に就いて何等確實な事が分つてゐないのであるから、そのやうな無智から何等の結論を抽出すことは許されないのである。併し他方に於いて、精神分析は久しくナルチスムス並びにナルチスムス的神經症の概念を獲得して來てゐる。この概念は、リビドーを自分の自我に纏綿させ、對象には纏綿させないと云ふのが、その內容である。で、それはつまり、精神分析が性の概念を不當に擴めたと云ふことに對する批難であるが、併しこれを論爭に濫用すると、そのために何を批難するのかを忘れ、精神分析に對して又ぞろ最狹義に於ける性慾を押付けるやうになる。

精神分析史は私にとつては二つの部分に分れる。洗ひ流し法としての前史は別として……。第一部は私が一人で何もかもやつて來た、それが一八九五、六年から一九〇六、七年頃までゞある。第二の部分はその當時以來、今日に至るまでゞあるが、この間には私の門弟並びに協力者の寄與が愈々その重要さを益し、從つて今では私も、近づき來る最後に於ける重き煩ひに脅かされつゝ、心を安めて自分自身の仕事はやめにしようと考へることが出來るやうになつてゐるのである。併し正にそれ故にこ

そ、私はこの『自傳』に於いて精神分析發達の第二部を、その第一部（それは私一人の活動を以て滿たされてゐるのだが）に於ける漸次の構成と同じ精しさを以て取扱ふことは出來ぬわけになる。で、こゝではたゞ、私もまたそれを獲得するに就いて著しい役割を果してゐるところのあれ等の知識、殊にナルチスムス、本能說、並びに精神症への應用の領域に於ける知識を擧げておくだけが正當であると私は感ずるのである。

實驗のいや揄むに從つて、エディポス・コムプレクスが神經症の核心であることが、愈々判然して來た。私はその事を、敢て附言しておかなければならぬ。エディポス・コムプレクスは幼時的性生活の頂點であるばかりでなく、後年の一切の性的發展はそこから始まるのである。併しさうなれば當然、神經症者にのみ特殊な契機を分析に依つて發見し得ると云ふ見込みは立たないことになるのだ。ユングが分析者としての早期にいみぢくも云ひ得たやうに、神經症はそれにのみ專ら特有な內容を持つてゐるのではなく、たゞ常態者が無事に乘越えて來たことを、彼等が躓いたゞけの事であると、人々は云はなければならない。かう云ふ事が分つたからとて、少しも失望することはないのである。つまりこれは、精神分析に依つて發見された深部心理が常態的精神生活の心理であるとの別の新洞察事實と、正に最もよく符合する事なのだ。この點は我々に於けると化學者に於けると丁度同じやうである。化

學的所産物が質的に非常に變化してゐることは、同一要素の構成關係が量的に變化してゐることに歸せられたのである。

エディポス・コムプレクスに於いては、リビドーが兩親的な人物の觀念に結付いてゐることが明かに認められる。併しそれよりも以前には、總てそのやうな對象のない時期があつたのである。そこからしてリビドー說の根柢をなす一つの考へ方が生じて來るのである。卽ちその時期に於いては、リビドーは自分の自我に一杯になつてゐて、自分自身を對象にとつてゐた（對象を他に求めなかつた）と云ふ考へ方である。この狀態を人々は「ナルチスムス」又は自己愛と名付けることが出來る。それに次いで考へられることは、この狀態は本來決して完全に失くなされるものでないと云ふことである。一生涯の間、自我はリビドーの偉大な貯藏庫であり、その貯藏庫からリビドーは對象に纏綿するために送り出され、また對象から引揚げられたリビドーは再びその中へと逆流して行くことが出來る。ナルチスティッシュのリビドーはこのやうに、進んでは對象リビドーとなり、對象リビドーが退いてナルチスティッシュのリビドーとなるのである。如何なる程度までこの變轉が爲し遂げられるかに就いての一つの著しい實例は、自己犧牲にまで達するほどの性的惚込み又は（それの）昇華されたるものを我々に示すのである。人々はこれまで抑壓過程に於いて、たゞ抑壓されたものをのみ注意してゐたが、この

考へ方に依つて來た、抑壓するものにも正しく注意を向けることが出來るやうになつた。抑壓は自我の中に働いてゐる自己保存の本能（「自我本能」）に依つて發動させられ、さうしてリビドー的本能に於いて完了せられると、人々は云つて來た。[2] 然るに人々は、自己保存の本能をまたリビドー的性質のものとして、即ちナルチスティッシュなリビドーとして認識したからして、抑壓過程はリビドーそれ自身の內部の出來事であると見えるやうになつた。ナルチスティッシュのリビドーは對象リビドーに對立する。自己保存の興味は對象愛の要求に對して、從つてまた狹義に於ける性慾の要求に對して、抵抗する。

精神分析に於いて何よりも緊急に必要とせられるのは、確乎とした本能說である。それに基いて更に種々な理論を構成して行く事の出來る如き、さう云ふ有爲な本能說である。併しさういふ說はありあせてゐないので、精神分析は自力で手さぐりしながら、本能說を求めて行かなければならない。精神分析はまづ自我本能（自己保存、食慾）とリビドー的本能（愛）とを對立させたが、やがてナルチスティッシュなリビドーと對象リビドーの新たな對立を以てそれに置換へた。併しこれでこの本能論の問題に片がついたわけではない。生物學的見地からすると、たゞ一種だけの本能を假定して滿足してゐることは禁ぜられてゐる。

精神分析總論

私は昨年中の諸論文（『快不快原則を超えて』、『集團心理と自我の分析』、『自我とエス』）に於いて、久しく論じやうとして論じなかつた思辨的問題を存分に論じた。さうして同時にそれ等の中で、本能問題にまた別の解釋方を與へようと試みた。私は自己保存と種族保存とをエロスの概念の下に包括し、それに對立するものは默々として働いてゐる死の本能又は破壞本能であるとした。この本能は生物の一種のねばり強さとして極めて一般的に認められてゐる。嘗て存在したが、或る外的障碍のために廢絕されてゐる何等かの立場を反復したいとの衝動であると解せられてゐる。本能がこのやうに本質的には保存的な性質を帶びたものであることは、反復強迫の現象に依つて說明される。エロスと死の本能との相互及び相反の作用が、とりもなほさず生の姿である。

かう云ふ考へ方が何か實際に役立つかどうかと云ふことは、問題外である。この考へ方は、精神分析上の二三の重要な理論上の觀念を定めるための努力から、自然にそちらの方へ導かれて行つたのであるが、併しこの考へ方は精神分析を遙かに越えたものである。精神分析のリビドーや本能のやうな不確實な概念を基礎とする科學などは考へられないと云つたやうな馬鹿げた事を云ふ人々を、私は幾度も聞いたことがある。併しそのやうな批難は這般の事情が如何なる根據に基くかを十分に認識せぬから起るのである。明白な根本概念や劃然たる定義は、これ等が或る知的體系構成の諸々の部內に於

ける一つの事實的領域を包括せんと欲する限りに於いて、精神科學に就いてのみ可能である。自然科學（心理學はこれに屬する）に於いては、基本概念は必ずしもそのやうに明白であるには及ばぬ、またそれは不可能でもある。動物學や植物學は動物や植物の正確な、行互つた定義から始まつてゐるのではない。生物學の如きは今日でもまだ生物の概念に確實な內容を盛ることが出來ない。いや、それぱかりではない、物理學でさへも、物質、力、重力その他の諸概念が望ましいだけの明白さと精確さとを持つに至るまで待つてゐたならば、今日のやうな發達を見るには至らなかつたであらう、自然科學的諸學科の根本觀念又は基本概念は、始めの程はいつも不確定のまゝにしてあるのだ、最初の頃はそれ等の諸概念が生れて來たその現象領域に言及することに依つてのみ說明される。さうして觀察材料の分析が進むに從つて明白となり、內容豐富となり、且つ矛盾もなくなつて行くのである。

私は既に早い頃の諸論文に於いて、精神分析的觀察から發して一般的見地にまで達しやうとの試みをなした。一九一一年には私は『心理現象の二つの原則に就いて』„Formulierung über die zwei Prinzipien des psychischen Geschehens" と題する一小論文中で、勿論その說き方は獨創的ではなかつたが、精神生活が快不快原則に支配されてゐること、並びにそれが所謂『現實原則』に依つて打破せられることゝを、强調しておいた。その後、私は敢へて『超心理學』„Metapsychologie" を

試みた。私が斯く名付けた考へ方と云ふのは、總ての心理現象を動的 Dynamik, 局所的 Topik. 並びに經濟的 Oekonomie の三見地の綜合に於いて見んとし、さうしてそれが心理學の到達し得る窮極の目的であるとするにある。この試みは、手脚のない胸像に終つた。二三の論文（本能と本能の成行――抑壓、――無意識、――悲哀とメランコリ、その他）の後にこの試みを中止した。それは僅に當を得たことであつた。何となれば、そのやうに理論を固める時期にはまだ達してゐなかつたからである。私は最後の思辨的論文『自我とエス』一九二三年）に於いて、我々の心理的裝置を病理的事實の分析的研究に基いて區分せんと試み、それを自我、エス、並びに超自我の三者から成るとした。超自我はエディポス・コムプレクスの遺産であり、人間の倫理的要求を代表するものである。

と云つたからとて、私がこれ等最後の時期に於いて忍苦的觀察の自分の仕事に背を向け、全然思辨的な方面に沒頭して了つたと思はれては困る。それどころか私は常に分析的材料と內的に接觸し、專門的の、診療上の、或は技術上の、諸題目を調べることを決してやめはしなかつた。また私が實地觀察から離れた場合にでも、本來の哲學に近付いて行くことはなるべく注意して避けるやうにした。一體、素質的に自分は哲學者には出來上つてゐないのだから、さういふ迴避は寧ろ容易であつた。私は

いつでもフェヒネル G. Th. Fechner の思想に近付いて行く傾きがあり、さうして重大な點に於いてこの思想家に負ふところがあるのである。ショーペンハウエルは人生が感情に支配されるものであり性慾が重大な役割を果すことを認めたのみならず、抑壓の機制をさへ知つてゐた人であるから、精神分析とショーペンハウエル哲學との間には甚だ一致點が多いわけであるが、その一致點は何も私がショーペンハウエル哲學を知つたからと云ふわけではない。私がショウペンハウエルを讀むやうになつたのは、隨分後年になつてからの事である。ニイチェはまたその直觀と洞察とが精神分析の孜々たる探究の結果と驚くほど合致する一人の哲人であるが、それまた私は正にその故に永い間、讀むことを避けてゐた。併し私は自分と彼等と何れが早いかと云ふことを問題にするのではなく、自分が彼等に影響されたものでないと云ふことを問題にするだけである。

神經症は最初の、さうしてまた永い間唯一の、分析對象であつた。醫術は神經症を精神症と別物扱ひにし、肉體的の神經病と同類視するけれども、これの間違つてゐることは、何れの精神分析者にも疑ひなきところである。神經症學は精神病學に所屬し、精神病學の概論中に缺くべからざるものである。ところで、精神症を分析的に研究することは、治療の見込が立たないことのために、さう云ふ努

力をしても始まらぬやうに思はれる。精神病者には概して積極轉嫁の能力が缺けてゐるから、分析技法の主要手段を施すに術がない。併しそれ以外になほ施すべき術が種々ある。轉嫁が全然ないと云ふわけではなく、それの一部分は見られるのである。週期的に來る欝憂、輕微の妄想的變調、部分的早發性痴呆などに於いては、分析が効を奏したことを我等は疑ひ得ない。また多くの場合に於いて、果して精神神經症か早發性痴呆症かの診斷に迷ふものであることは、少くともこの學問にとつて好都合であつた。治療の試みをとつて、結局は破綻に終らざるを得なかつたが、それでも種々重要な結論を窺すことが出來た。併し最も多く考へられることは、人々が神經症に於いては骨を折つて深いところから取上げて來ることが、精神病に於いては表面に、誰の目にもつくやうに露出してゐると云ふことである。それ故に、多くの精神分析的主張に對して、精神病學的診療所は最善の證據材料を供する。であるから、分析はやがて精神病學的觀察の對象への道を發見したことは勿論である。既に甚だ夙く(一八九六年に)、私は戀愛的痴呆の或る患者に於いて、神經症者に於けると同じ病源的契機と、同じ感情コムプレクスの存在とを確認することが出來た。ユングは痴呆症に於いて謎の如き同型のあるのを、患者の生活史を顧み、そこに關係を求めることに依つて說明した。ブロイラーは種々な精神症に於いて、分析が神經症者に就いて報告したのと同じやうな機制のあることを明かにしてゐる。それ以

來、分析者は精神症を理解するための努力を少しもやめてはゐない。殊にナルチスムスと云ふ概念を用ゐて考察するやうになつて以來、其處此處に精神症の契機を覗込むことが出來るやうになつた。この分野に於いてこれを最も廣くメランコリーの說明に利用したものは、恐らくアブラハムであつたらう。永い間にはまた精神病學者たちも、彼等の患者の材料から示される證明力の前に甲を脫がざるを得ないであらう。今ではドイツの精神病學に於いても、分析的見地を以てする一種の平和的滲透 Pénétration pacifique が完成してゐる。彼等精神病學者たちは、精神分析者にならうとは思はぬとか、『正統派』に屬さうとは思はぬとか、その極端の學說、殊に性慾的契機を過大視する說には贊同し難いとか、何等實際經驗の裏付のない斷言をしてゐるが、けれども大低の若い研究者たちは分析學說のあれこれの部分を自家藥籠中のものとして、これを彼等自身の行り方で、自分の患者に應用してゐるのである。總ての樣子から見るに、今後は愈々この方面に進展して行くやうである。

六

精神分析を受容れないとフランスが久しく剛情に頑張つてゐたのは、如何なる反動徵候の下に於いてゞあつたかを、私は今や遠くから跡付けて論じて見たい。それは、夙くに經驗されてゐたことが再經驗されるやうな風に這入り込んで行つた。併し再經驗には再經驗なりの特徵があつた。フランス人は趣味感が高雅だから精神分析のやうな衒學的な、不様な名稱のつけ方が氣に喰はぬと云ふが如き、誠に信ぜられぬほど馬鹿げた抗議が喧しくなつてゐる。(我々はレッシングの作中の不滅の人物たる騎士リコー・ド・ラ・マルリニールを想起せざるを得ないではないか!)またこれとは違つた云ひ表はし方もあるが、この方はも少し眞面目に聞ゆる。この方はソルボンヌに於ける心理學の敎授でさへもが尤と思つてゐる。ラテン精神は抑々、精神分析の考へ方に堪え得ないのだ。そこへ行くと、精神分析の使徒たるアングロ・ザクソン同盟國は大いに褒められてよい。それを聽く人は、チウトン精神は精神分析を自分が生んだ可愛い子として大事にすると、勿論信ずるに違ひない。

フランスに於いて　、精神分析に對する興味は文藝家たちの間から始まつたのである。それを理解

するためには、人々は、精神分析が夢の解釋を以て、單なる醫師的の關心事たるの範圍を越えたことを忘れてはならない。精神分析がドイツに擡頭し、やがて今やフランスに擡頭したまでの間には、文藝及び藝術學の分野に於いて、宗教史及び有史前史の分野に於いて、神話學、民俗學、教育學その他の分野に於いて、多種多様な應用がなされてゐる。總てこれ等の應用事項は醫學とは何の關係もない。たゞ精神分析と云ふ仲介を通して、結びついてゐるだけである。それ故に私はこゝで醫學を立入つて論じようとの要求を持たない。さりとて醫學を全然無視しておくことも出來ない。何となれば、一方に於いて、醫學は精神分析の價値と本質とに就いて正しい觀念を持たせるためには缺くべからざるものであると共に、他方に於いて、私は自分の生涯の事業を語ることを引受けたのである。これ等の應用の多くは、これを始めると共に、私の著述に戻つて行くことになる。私は其處此處で、それ等非醫者的興味の一つを滿足させるための歩みを踏み出してゐる。その他、醫者以外の、專門の人々も、やがて私の道しるべに從ひ、當面の分野へと深入りして行つた。ところが私は、自分の本稿のプログラムとして、精神分析の應用に關する自分の論文の報告だけをしておく筈であるから、私としては讀者諸氏にそれ等の論文が如何なる範圍に亘り、また如何なる重要さを帶びたものであるかを、ほんのさつとお話しておくことが出來るだけである。

抑々私の一聯の興味の出發點となつたのは、エディポス・コムプレクスである。このコムプレクスが普く行亘つてゐることは、私これを漸次に認識するやうになつたのである。恐ろしい話材を採擇し、否、造り出すことが常に謎であり、それがその話材の詩的表現の感動的な効果であり、運命悲劇の本質であるならば、それは、心理的な出來事の合法性がその全的意義を髣髴させるのだと解せられると見ることに依つて、一切の説明がつくのである。宿命と神託とは單に内的必然性の外化に過ぎなかつた。主人公がそれと知らず、またその意圖に反して、罪を犯したと云ふことは、實は彼の犯罪の欲求の無意識性を正當に表現したものとして理解せられる。この運命悲劇を理解すれば、性格悲劇ハムレットを闡明することもたゞ僅かに一步である。この劇を人々は三百年來、その眞意を說明し得ることなしに、また詩人の動機を察知し得ることなしに、賞讃して來たのである。併し詩想に依つて創造されたこの神經症者が、現實生活に於ける多くの同類者と同じ樣に、エディポス・コムプレクスのために破綻してゐることは注意に價する。何となれば、ハムレットはエディポス的意圖を內容とする二つの行爲に對して或る人に復讐をしなければならないことになつた。併しその復讐をなさむとするに當つて、自分自身の漠とした罪惡感が彼の腕を制するのであつた。このハムレットを書いたのは、シェークスピヤが、父の死に會して直後であつた。この悲劇の分析を暗示しておいたところ、アーネスト・ジョーン

スは後にこれを根本的に仕上げてくれたのである。やがて同じ實例を出發點としてオットー・ランクは劇詩人の題材選擇を研究した。『近親姦の主題』に關するその大著中に於いて、オットー・ランクは、如何に詩人等がこのエディポス的立場の主題を表現の題材に撰んでゐるかを、またさう云ふ話の變化、模樣替へ、寛和などを世界文學を通じて跡付けてゐる。

註(一) 長谷川誠也氏著『文藝と心理分析』(春陽堂)にこれの詳しい紹介がある。但しそれへの氏の批評は譯者の承認し得ざるところである。(譯者)

であるから、文學的及び美術的創作一般の分析を企てることは容易である。空想の世界は一種の『とつとき』"Schonung" であつて、人々が現實生活に於いて放棄せねばならない本能滿足の代償として、快樂原則から現實原則へと移行する時の苦しまぎれに、その『とつとき』はしつらへられたものであることを人々は認識したのである。藝術家は神經症者と同樣に、滿足を供さない現實からこの空想世界へと退却してゐるのである。併し神經症者とは違つて藝術家はその空想世界から引上げて來て現實にしつかりと足を下す道を心得てゐる。彼の創作する藝術作品は彼の無意識願望の空想的滿足であることは、丁度夢と同じである。作品は夢と共に妥協としての性質を頒有してゐる。何となれば、作品もまた抑壓の力と公然相爭ふ事を回避しなければならないからである。併し非社會的な、ナルチ

スティッシュな夢と云ふ心的所産とは違つて、藝術作品は他の人々がそれに共鳴すると云ふ事を勘定に入れておかなければならない。他の人々に於いて、同じ無意識願望を刺戟し滿足させてやるやうにしておかなければならない。たほその上に藝術は、『誘惑のおまけ』〝Verlockungspremie〟として、形式美の知覺慾を利用する。精神分析の爲し得たことは、その藝術家の生活の個々の印象、偶然的な運命、各々の作品などの相互關係から、彼の素質を、それ等の諸關係に表れてゐる本能感情を、即ち彼の内なる一般的な人間性を組立てゝ行くことである。そのやうな意圖の下に於いて、私は例へばレオナルド・ダ・ヰンチを研究對象にとり、彼が自分で云つてゐる唯一の幼兒時代記憶に基いて、『三人づれの聖アンナ』と題する彼の畫作の說明を目指したのである。やがて私の友人並びに學徒の者等は、諸々の藝術家並びにその作品に就いて同樣な試みを數多く物した。このやうにして獲られた分析的理解に依つては、藝術作品の鑑賞は損はれると云ふことはあり得ない。併しこの點に就いて分析から恐らくあまりに多くを期待する非分析學者に對しては、私はこゝで告白しておかなければならない、多分彼が最も興味を感じてゐるであらうところの二つの問題に對して分析は何等の光明を投ずるものではないと。即ち、藝術家的天分の闡明と、藝術家が依つて以て仕事をなすところの手段——藝術的技巧——の發見とには、分析は何の資するところもない。

イェンゼン W. Jensen の『グラディーヴァ』Gradiva と呼ぶ、それ自身としては特別の價値はない一小小說作品に就いて、私は作品中の夢が現實の夢と同じ解釋を下され得るものであることを證明し得た。卽ち、詩人の創作に於いて、夢の仕事の中に見られる無意識機制と同じ機制の働いてゐることを證し得た。

『機智とその無意識に對する關係』に就いての拙著は『夢の註釋』から直接的に派生して來た論である。當時私の仕事を助けてくれた唯一の友は、私の夢の解釋は屢々『機智的』であるとの印象を受けたと云つてゐた。この印象を闡明するために、私は機智の研究を企て、機智の本質はその技巧的手段に存してゐるが、併しこれ等の手段とは要するに『夢の仕事』の働き方と同じであつて、結局、凝縮轉位、逆に依る表現、最小に依る表現、その他であることを發見した。更にそこに、機智を聽くものに於いて高き快感の起るのは如何にしてゞあるかを、經濟的見地から研究した。その答案はかうであつた。――併せられたおまけの快感（豫備快感）の誘惑の方へと、抑壓支出が一時的に節せられるために、と。

更に一層高く自分で評價してゐるのは、宗教心理に關する私の諸論文である。それの最初のは、一九〇七年に公にしたもので、それには强迫神經症的行動と宗教的習俗（儀禮）との間の著しい類似を

確證したものである。更に深い事情が存することを知らなかつたから、私は强迫神經症を歪められた個人的宗教と名付け、宗教をば一般的な强迫神經症とも云ふべきものとした。その後一九一二年に、ユングが神經症者の精神的所產と原始人のそれとの間に種々な類似の存することを證據立てたので、私はそれに深い印象を受けて、自分も注意をその方面に向けるやうになつた。『トーテムとタブー』と題する拙著の中には四編の論文が含まれてゐるが、これ等諸論の中で私は、原始人に於いては文明人に於けるよりは近親姦嫌惡が一層强く、特別な防禦規則が編み出されてあることを細說し、タブー禁斷（と云ふ形で最初の道德的制限は擡頭したのだが）が感情のアムビヴレンツ（相反併存感情）に對する關係を調査し、原始人のアニミスムス（萬象有靈觀）的世界體系の中に、精神的現實性過重視の原則を、『念慮の全能』の原則を（この原則がやはり魔術の根抵にも存してゐるのだ）發見したのである。强迫神經症との比較があまねく爲され、さうして、原始的精神生活時代の信念の如何に多くが、この强迫神經症と云ふ病氣に力强く殘つてゐるかを示した。併し就中、私を乘付けたのはトーテミスムス（族靈觀）であつた。これは原始種族を有機化する最初の組織で、この組織の中に於いて社會的秩序の始まりが、單純な宗教や、二三のタブー禁斷の嚴格な支配と一つになつてゐるのである。トーテミスムスに於いて『崇敬』せられてゐるものは、本來常に何かの動物である。その動物からしてそ

の種族は發した子孫であると主張する。種々な様子から結論して、總ての、最高の民族と雖も、最初はこのトーテミスムスの段階を通過して來たものであるとされる。

この方面に於ける私の仕事の主要なる文獻的據所は、有名なフレーザー J. G. Frazer の著者(『トーテミスムと同族結婚忌避』、『黄金の樹枝。』)で、この書は價値ある事實や見地の寶庫である。併しトーテミスムスの諸問題の説明に對しては、フレーザーは餘り多くをなしてゐない。彼はこの問題に關する見解に於いて、屢々根本的にグラ〳〵と變つてゐる。また彼以外の人類學者や考古學者も、これ等の事柄に於いて不確實であると共に意見の一致を見てゐないやうである。私の出發點となつたのは、トーテミスムスの二つの禁斷條項(トーテム獸を殺すことなかれ、同一トーテム族の女を性的に用ふる勿れ)が、エディポス・コムプレクスの二つの内容(父をなきものにし、母を娶りたい)と奇しくも一致すると云ふことであつた。そこで、トーテム獸を父と同一と見做す試みが起つたのである。丁度、原始人がその試みはやらないが、それと同じことを明かに爲してゐたのである。現に彼等はトーテム獸を族の祖先として尊崇してゐるのである。精神分析の方面から、やがて私にまで、二つの事實が助太刀にやつて來た。それはフェレンチが子供に就いてなした誠に有難い觀察である。その觀察

に依つてトーテミスムスが幼兒に於いて再歸すると云ふことが出來るやうになつた。またもう一つは或る子供の早期の動物恐怖の分析である。分析の結果に依つて分つたところでは、その怖れられてゐる動物は父代償であつて、その父代償にエディポス・コムプレクスに基く父への畏怖が轉位せられてゐた。今や、父殺しをトーテミスムスの中核として、また宗教の出發點として、認識することは、もはや殆ど疑ふ餘地のないことゝなつた。

この僅かに殘つてゐる餘地を埋めたものは、ロバートスン・スミス W. Robertson Smith の著『セミ族の宗教』,, The Religion of Semites " を知つたことに依つてゞあつた。彼は天才者で、物理學者で、聖書研究家であつて、トーテム宗教の本質的な部分をなすものは、所謂トーテム餐 Totemmahlzeit であると云つてゐる。平常は非常に神聖視されてゐるトーテム獸が、一年に一度だけ、同族一同の寄合の下に、祭祀の間に殺され、喰盡され、悲しまれる。この悲嘆の後に盛んな祭禮が催される。ダーギンは、本來人間が團體の内に生きてゐたが、その團體内の各自は唯一人の强力な、橫暴な、嫉妬深い男の支配下に立つてゐたと想像してゐるが、この想像が正しいとすると、私には次のやうな狀態の假定（と云ふよりは寧ろ幻想と私は云ひたい）が、形作られて行く。卽ち、原始團體の父は無制限な專制者として一切の女を我がものにし、競爭者として危險の虞れある息子たちを殺し、或は放

遂した。ところが或る日、息子たちは團結して、彼等の敵ではあるが、併し理想でもあつたところの父を、協力して征服し、殺し、喰盡して了つた。この行爲の後で、彼等は父の遺産を取ることが出來なかつた。それは御互に御互が邪魔になつたからである。この不首尾と後悔との影響の下に、彼等は妥協し合ひ、トーテミスムスの掟に依つて互に一つの兄弟族に結び付き合つた。その掟はそのやうな行爲を反復することを禁じ、またそれ故に父をまで殺した女を所有することを御互に斷念することになつた。そこで彼等は他族の女に向ふことになつた。これがトーテミスムスと密接に結び付いてゐる異族結婚の起源である。トーテム饗は、この大それた行爲の記憶祭である。この行爲から人類の罪惡意識（原罪）は由來し、またこの行爲と結び付いて社會的組織、宗教、並びに道徳的制限は同時に起源して來たのである。

さて、右に假定して來たやうなことが歴史的に可能として受容れることが出來るかどうかはとにかく、宗教の成立は父コムプレクスの基礎の上に置かれ、また父コムプレクスを支配してゐるアムビヴァレンツの上に建てられてをる。トーテム動物が去つてその代りに父代償が生ずると、恐れられ、憎まれ、尊崇せられ、嫉妬せられてゐる原始父（ウルファーター）それ自身は神の原型となつた。息子の反抗とその父憧憬と

は、常に新しい妥協構成となつて相爭ひ、この妥協に依つて一方に於いては父殺しの行爲が贖罪せられ、他方に於いて妥協の利益が主張せられることになつた。このやうな宗教觀はキリスト教の心理的基礎の上に特に明かな光りを投ずる。キリスト教に於いては實際、トーテム餐の儀式はまだあまり歪められてをらず、現に聖餐(Kommunion)となつて存續してゐる。私は明白に斷つておくが、この最後の(有形の現象だけに就いての)斷定は、私に由來するものではなく、既にロバートスン・スミスやフレーザーの發見に屬するものである。

テオドル・ライク Th. Reik と人類學者ローハイム G. Roheim とはその數多い好著中に於いて、拙著『トーテムとタブー』の中のさまざまな考へに讃同し、それ等を敷衍し、深化し、整理してゐる。その後、私自身も二三度この方面の事に戻つて行つたことがある。卽ち、神經症者の中でも重大なものと認められる『無意識罪惡感』に關する研究をした場合と、社會心理を狹く個人心理に結びつけようとの努力をした場合(『自我とエス』――『集團心理と自我の分析』)とである。また、催眠術に掛り得ることの說明に、人類の原始團體時代からの古代的遺産のあることを指摘したことがある。

精神分析のこれ以外の應用方面に直接私の參與したのは、あまり多くない。併しこれ等の方面も一般の興味に價するものではある。個々の神經症者の空想からは、大衆や民族の空想創造(例へば、神

話、傳說、寓話などの中に明かに存してゐるもの）への大道が開かれる。神話學はオットー・ランクの仕事の分野となつた。神話の解釋、神話を周知の無意識的幼兒コムプレクスに歸着させること、天文的な說明に代ふるに人間的動機を以つてすることなどは、多くの場合に於いて、彼の努力の成功を示した。また象徵觀と云ふ主題も私の周圍に多くの研究者を見出した。象徵觀は精神分析のために多くの敵を作つた。多くのあまりに謹嚴な研究者たちは、精神分析が象徵を認めることを（例へば、夢の解釋に依つて判る如き）、決して許すことが出來ない。併し象徵の發見は分析の責めではないのだ。象徵は旣に他の諸方面に於いて認められ、それ等のところ（民間傳承、傳說、神話）に於いては、「夢の言葉」に於けるよりは一層大きな役割をさへ演じてゐるのだ。

分析を敎育學に應用することに就いては、私個人としては何の論策をも試みたことはない。併し兒童の性生活及び精神的發達に關する分析的知識が敎育者たちの注意を牽き、敎育上の問題を新たな光りで見させるやうにしたことは、自然であつた。敎育學に於けるかゝる方針の倦むことなき鬪士としては、チウリヒのプロテスタントの牧師プフィスター O. Pfister がある。彼は分析學を擁護して行くことは、一つの昇華された宗敎を確立することゝ一致すると考へてゐる。彼以外になほヰインの博士フーグ・ヘルムート夫人 Frau Dr. Hug-Hellmuth 並びにベルンフェルト博士 Dr. S. Bernfeld

その他多くの人々がある。精神分析を利用して、健康兒童の豫防的教育に、また神經症には未だなつてをらぬが、併しその發育の損はれてゐる兒童の是正などに資することに就いては、相當重要な結果が示されてゐる。精神分析の實施を醫者にのみ專らにし非醫者を除外しておくことは、既に不可能の事となつてゐる。事實上、分析者としての特別の教養を受けてをらぬ醫者は、醫者としての免許狀はあつても、分析者としては素人であるから、非醫者と雖も相當の準備を經、また時々醫者に相談するならば、神經症者の分析的處置と云ふ仕事を果すことが出來るのである。

精神分析は種々の方面に發展し、その結果に對して人々はどうしても抗することは出來ないが、それ等諸々の發展の一つに依つて、精神分析と云ふ言葉それ自身が種々な意義を持つやうになつて來てゐる。本來は一定の治療法の呼名であつたものが、今ではまた無意識心理に關する一科學の名稱ともなつてゐる。この科學は本來それ自身だけで、問題を十分に解決し得ることは極めて稀である。併し種々な知識分野に重大な寄與をなすべき役目を持つてゐるやうに思はれる。精神分析の應用方面は心理學のそれと同じやうに廣汎である。その心理學に對して精神分析は更に廣大な領域を附加するものである。

そこで私は自分の生涯の事業の未完了的な仕事を顧望して、かう云ふことが出來る、私は多くの事

を始め、また多くのことを暗示はしたが、それらからやがて將來に於いて何物かゞ生れて來るだらう、と。私自身としては、それが多くなるか少くなるか、知ることは出來ない。

精神分析運動史

――波に揺られて沈まず――

（パリー市紋章内の句）

一九一四年二月「精神分析年報」第六卷に始めて掲載。原書全集第四卷收載。ブリルの英譯あり。原名は „Zur Geschichte der psychoanalytischen Bewegung."

一、學海のロビンソン・クルーソー

私はこれから精神分析の運動史を述べようとするのであるが、そこに主觀的な特質があつたり、私自身の個人的な役割を云々したりしてゐるところがあつても、讀者諸氏は怪まれないであらう。何故ならば精神分析は私の創めたものであり、斯學のために十年間孜々として骨を折つて來たものは私であり、又この新しい現象に對して同時代の人々が抱く反感は批評として私の頭上に下つて來たのであつたからだ。今日では私は既に唯一の精神分析者ではなくなつて久しいけれども、併し精神分析の何たるかを知り、精神生活を研究する他の方法と斯學が如何なる點で區別されるかを知り、何をこの名に依つて呼ぶべきか、またもつとよい名は何であるか、などを心得てゐる點では何人も私ほどでないと云つて、過言でないと私は思つてゐる。かう云ふことは甚だ大膽な聲明であるやうに見えるが、私は特にこれを公言することに依つて、何故にこの年報がその代りに、このやうな形で編纂され出現したかを、我々の讀者諸氏に間接的に說明するものである。

私が一九〇九年にアメリカの某大學の講堂に於いて始めて精神分析に就いて公けに話すことになつ

た時に、私は自分の活動の契機となつたことを說く段に及び、精神分析を生み出したものは自分でないと說いた。精神分析を生み出したものはヨーゼフ・ブロイヤー Josef Breuer で、それは自分がまだ學生で、試驗を濟ませようとして一生懸命になつてゐた時分（一八八〇年――一八八二年）のことであつた。[1]

註(一)　本書卷頭の『五講』のことである。

ところが親切な友人達がその後、あの時あゝ云つたのは感謝の辭の表現とは云へ、チト不適當であると云つた。從前云つてゐたやうに、ブロイヤーの「洗ひ流し法」は精神分析の前驅としての價値があるので、精神分析は催眠術を廢棄し自由聯想を採入れることに依つて創まつたとすべきだ。世の人々が精神分析の歷史は洗ひ流し法から始まるとするか、或は洗ひ流し法に對する私の改變から始まるとするか、それはまづどちらでもよい。これは全く下らない問題であるが、たゞ精神分析に反對する多くの人々が、この技法は私から創まつたものでなく、ブロイヤーから由來するものであると時々考へ慣はしてゐるので、この問題を取上げるものである。かう云ふ考へ方は、精神分析に何かの見所を發見し得るやうな立場にある人々のみが持つものであることは勿論である。ブロイヤーは精神分析に對して寄與するところ大ではあるが、所がそのためにその程度の賞讃と批難とを受けたことは聞き及

ばない。ところで、精神分析なるものは抑々、人々の反感と怒りを買ふやうに出來てゐるのだと云ふことは私の既に久しく承知してゐるところであるから、精神分析の特質をなす一切は、私がその正當の創始者であると云ふ結論に自ら到達したのである。色々と罵詈せられた分析學に於ける私の寄與を少く見ようとする如何なる努力も、ブロイヤー自身から出づるものでないと云ふこと、或は彼を支持する結果にならないと云ふことゝを、こゝに滿足を以て私は附言しておかう。

ブロイヤーの發見の内容は、これまで屢々論じたことであるから、こゝに更めて詳說するには及ぶまい。ヒステリーの症候は患者の生涯の印象の深かつた、併し忘れられてゐる場面（外傷）から來てゐるものであると云ふのが根本の事實で、それに基く療法とは患者をしてそれ等の體驗を催眠中に想起せしめ、再製せしめること（洗ひ流し）で、從つてそれ等の事實と療法とからしては、かゝる症候が滿たされざる亢奮の異常な適用（轉換）であると云ふ理論が生じ來るのである。ブロイヤーは『ヒステリー研究』の中で彼の理論を說いてゐる個所で、轉換と云ふことを考へねばならない場合には、常に私の名を括弧の中に入れて、宛もこの理論上の最初の試みが私の精神的財貨であるかの如くにしてゐる。これは併し、たゞ名稱を與へたのが私だと云ふだけで、考へは同時に共通に二人に起きたのだと私は信じてゐる。

またブロイヤーが彼の洗ひ流し處置法を幾年も放置して居て、私がシャルコーの許から歸つて來てそれをも一度勸めた時に更めて採上げるやうになつたのだと云ふことも、周知の事實である。彼は病院付きの醫師で、永年の醫師としての經驗で重寶な人であつた。私は已むなく醫者になつたのであるが、併しその時分、神經病患者を助け、少くとも彼等の狀態に就いて何事かを知りたいとの强い動機を持つてゐた。私は醫師的療法を信用してゐた。で、いろ〳〵暗示するところの多いエルブ W. Erb の「電氣療法」も駄目だと知つて私は殆どなすところを知らなかつたのである。後にメビウスに依つて確定された判斷に、私も自分一人でゞはないが、その當時に到達して、神經の障害を電氣で處置して効果のあるのはたゞ暗示の効果に過ぎないと云つたとすれば、それは確に約束せられたゞけの成功が一向に見えなかつたことに責めがあつたのだ。電氣治療が駄目だとなると、その當時それに十分に代り得るものは、深き催眠狀態に於いて暗示を與へることであつた。催眠術を私は、甚だ印象的な證明に依つてリエボーやベルネイムから學んだのであつた。併し、催眠術をかけておいて種々の事を探り出すこと（それを私はブロイヤーから教へられたのだが）の方が、その自動的な効果の及び方に於いて、同時に知識慾を滿足させる點に於いて、單調な、無理押付けな、調べて見ると云ふことを全然やらない暗示的禁止よりは、比較にならぬほど魅力のあることであつた。

我々は精神分析の最近の獲得の一つとして自分達自身に警告を與へるやうになつた。實際の葛藤と病氣の源因とを分析の主なる對象とするやうにとの警告を……。さうしてそれこそは正に、私とブロイヤーとが洗ひ流し法を始めた時に行つたことなのだ。我々は患者の注意を、その症候が起きた外傷的場面に、直接向けるやうにし、さうしてこの場面に於いてその心的葛藤を察知し、抑壓されてゐる感動を解放しようと試みたのである。かくして我々は神經症者の心理に於いて特色をなすところの過程を、即ち私が後に退行と名付けたところの過程を、發見するやうになつた。患者の聯想は我々が闡明せんと欲した場面から始まり、それ以前の經驗に逆行し、現在を是正すべき分析をして、過去を問題にさせるのである。この退行は、いつでも愈々早期に逆行するもので、まづ思春期に逆行するのが常であるやうに見えたが、それでもどうも理解し難い點や不十分な點があるので、それより更に背後にある幼兒時代を分析操作しなければならないやうになる。ところでこの幼兒時代の事はこれまでは如何なる方法を以てしても探ることは出來なかつたのである。このやうに逆行的方向をとると云ふことは、分析の一つの重要なる特質となつたのである。そこで、精神分析は過去の何物かに逆行することに依つてのみ、實際的の何事かを說明し得るのだと云ふ事が明かになつた。實に、一切の病理的經驗は、それ以前に一つの經驗のあることを豫想し、その古き經驗はそれ自身としては病理的ではない

が、後の經驗に對してその病理的性質を賦與するのである。偶然知れてゐる實際の動機だけにしておきたいとの誘惑は甚だ大であつて、私はやはり後年の分析に於いてこの誘惑に屈したほどであつた。一八九九年に私は『ドラ』と呼ぶ婦人患者を處置したことがあつたが、その時、實際發病の契機となつた場面を私は知ることが出來た。私はこの體驗を分析しようとして幾度も幾度も骨を折つたが、その時私の直接の要求に於いては、同じ貧弱な、怪しげな說明以外に、何事をも知ることは出來なかつた。やうやく長い迂路を通つて（その迂路はその婦人患者の最早期の幼兒時代を通つてゐた）後に始めて、一つの夢が生じた。その夢を分析してゐる內に、その場面のこれまで忘れてゐた細々した事柄が想起され、かくて實際的葛藤の理解と解決とが可能となつた。

この一例からして人々は、前（前頁第一行）に擧げた警告が如何に人を惑はすものであるかを知ることが出來る。また分析技法に於いて退行現象を右のやうに等閑視することが、如何に科學的退步を意味するかを知ることが出來る。

ブロイヤーと私との間の相違は、右の場合よりももつと我々に親炙してゐる、ヒステリーの心理的機制の或る問題に於いて、明白になる。彼はまだ生理學的とも云ふべき理論の方を好み、ヒステリー患者の心理分裂を、種々な心理狀態（當時我々はこれを意識狀態と呼んだ）の沒交涉として說明せん

と致し、かくて『催眠類似狀態』の説を作り出したのである。この催眠類似狀態に於いて生じた種々のものが、同化せざる異體となつて、『覺醒意識』の中へ這入つて來るのだと云ふのである。私の見方とても科學的にあまり正しい方ではなく、日常生活の諸傾向に類似した諸傾向を普く探し、心理分裂それ自身をさへ反撥過程の結果と考へたのである。この反撥過程のことを、私は當時、『防禦』と呼んだが、後には『抑壓』と名付けることにした。私はこれ等二つの機制を並存させようと試みたが、永續きしなかつた。私にとつては實驗は常に同じであり、唯一つの事を示すので、やがて彼の催眠類似説と私の防禦説とは對立するやうになつた。

併しながら、このやうに對立はしてゐたけれども、そのために我々がやがて別れるやうになつたのでないことだけは確である。別離はもつと深い動機から來てゐた。別離を私は始めに理解しなかつた。後になつてあらゆる證據が歴然と現れてゐるので、それで始めて判知するやうになつた。かう云ふ風に別離は現れたのである。世人も記憶してゐる通り、ブロイヤーは彼の有名な最初の婦人患者に就いてかう云つてゐる。性的要素は彼女に於いては驚くほど發達してゐない、そして彼女の豐富な病狀に對して嘗て一つの寄與をだに供してゐないと。私が常々不思議に思つて來たことは、批評家たちがブロイヤーのこの確言と私の主張（神經病は性的病源を持つとの主張）とをあまりよく對比しないこと

である。で、彼等のこの呑氣さを、彼等の正直さと見てゐいのか、それとも不注意と見てゐいのか、私には分らないのである。ブロイヤーの症狀史を、最近二十年間に得た體驗の光に照して新たに讀み返して見るならば、誰しも、蛇、硬直になること、腕の痺れることなどの象徴を解釋し損ふわけはないであらう。そして父の病褥に侍してゐると云ふその立場を考慮に入れることに依つて、あの症候構成の現實的意義を容易に判知し得るであらう。卽ち、その人の（かの娘の心理生活中に於ける性の役割に關する）判斷は、ブロイヤーの判斷とは非常に違つて來るであらう。ブロイヤーは患者を直すために最も猛烈な、暗示を與へるやうな事を話すと云ふ方法をとつた。暗示的な話をすると云ふ事は、我々が轉嫁と呼んでゐることのモデルとして利用することがあり得る。そこで、ブロイヤーは、一切の症候の失くなつた後に、この轉嫁の性的動機を新たな徵象に就いて發見したに相違ないと想像すべき確な根據を私は持つのである。併し彼はこの思ひ掛けぬ現象の一般的性質を見逃し、かくて彼はこゝのところで、『面倒な事件』が起きて、調査を中止して了つたのだと、推知されるのである。これに就いて彼は、私に何等直接の報告を與へはしなかつたが、併し色々な時に於いて、かう云ふ風に纏めて考へて當然と思はれる點を示したのである。やがて私が愈々決定的に、神經症の重要源因を性に認めるやうになるにつれて、かの不機嫌な反撥の反應を示した最初の人は彼であつた。かゝる反應は後に

は私も當然だと知るやうになつたが、併し當時に於いてはまだ私の不可避の成行だとは知らなかつたのである。

神經症者を處置する場合には常に、甚だしく性的强調を帶びた、感傷的、又は敵對的の轉嫁が起きるものであつて、この事實は私にとつては神經症の衝動力が性生活から由來することの不動の證據と思はれるのである。この問題はまだ久しく眞劍になつて取上げられてゐない。何故ならば、轉嫁が起きると、卽ち患者の分析調査と云ふことは出來ない相談になつて了ふからである。併し私は分析操作の特殊な結果に就いて、この事を信ぜざるを得なくなつてゐるのである。

神經症が性的病源から發するとの私の說はまた更に狹い範圍の友人仲間にも受けが惡かつたが——かくて私は身を置くべき處もなくなつたが——、それに對する一つの慰めは、自分が一つの新しい、獨創的な思想のために戰ひを宣したのだと考へることであつた。ところが私は或る日、二三の記憶が甦つて來て、自分の滿足感は擾亂されたが、そのために私は我々の事業の由來と、我々の知識の本性とを突事に洞察するやうになつたのである。私の創造とされてゐる思想は、決して私の內に始めて生じたものではない。この思想を私は自分に最も深甚の影響を與へた三人から受入れたのである。卽ちブロイヤーから、シャルコーから、我々の大學の婦人科醫クロバク（彼は現在のヰインの醫師の內で

恐らく最も卓越した人であらう）から受入れたのである。彼等三人がみな私に一つの觀察力を與へたのであるが、嚴密に云へば、彼等の何れもがその觀察力を自分等では所有してゐなかつたのである。彼等の內二人までは、後年になつて私が彼等から自分の思想を得て來たのだと云つて聞かせたところ、自分はそんな事を云つた覺えはないと云つた。第三の人（シャルコー先生）も、もし自分が先生に會へる事があつたとしても、やはり同じ答をしたことであらう。併し私はそれと知らずして彼等三人の話を自分の心の中に抱き眠らせてゐて、それが遂に一つの獨創的とも見ゆる認識となつて覺醒したのである。

私がまだ若き病院醫であつた頃、或る日ブロイヤーと共に街中を散步したことがあつた。その時、一人の男が彼の許に近寄つて來て、押付けるやうに話掛けた。私は背後に控へてゐたが、話が濟んでその男が去ると、ブロイヤーは、その男が婦人患者の夫で、妻の事に就いて報告を寫したのだと、私に云つて聞かせた。彼は更にかう附け加へた、その婦人は人中へ這入ると甚だ樣子が變であるから、神經症患者だと云ふので彼の處置を受けることになつたのだと。それはいつでも『Allkoven の秘密だ』と云つて、彼は話を結んだ。私は驚いて彼の云ふ意味を尋ねた。すると彼はその言葉（『閨房の』）の意味を說明した。何となれば、この事が私にそれほど珍しく思へたとは知らなかつたからである。

一二年の後に、シャルコーの或る歡迎會の席上に於いて、私はこの長發する先生の近くに腰掛けてゐたが、その時彼は丁度ブルアルデル Brouardel に一つの（どうやら）非常に面白さうな話を、その日の實地經驗の中からしてゐた。私はその話を始めの內はよく聽いてゐなかつたのだが、段々それに注意を向けるやうになつた。東方からの若い夫婦があつて、妻君の方は重病で、夫の方は不能であるか、或は甚だ拙劣であつた。私はシャルコーが繰返し云ふのを聽いた。「だから、行つて見給へ、大丈夫だよ、うまく行くよ。」ブルアルデルはあまり聲の高い方ではないが、やがてさう云ふ事情の下でその婦人のやうな症狀が起きるものかと云ふ彼の驚嘆を云ひ表はしたに違ひない。やがてシャルコーは忽ち非常な活潑さを以つて、かう云つた「だが、かう云つた場合にはいつでも性器の問題だよ。……何時でも……何時でも……何時でも……。」さうしてその時彼は兩手を肚の前で交互にして、彼獨特の生き〳〵した樣子で以つて、身體を上下に搖すぶつた。私はそれを聽いて一瞬間、殆ど驚倒せむばかりになつた事を知つてゐるが、私はその時から一人言を云つた、これを知つてゐるなら、どうして云はないのだらう？と。併しその印象もやがて忘れてしまひ、腦の解剖とヒステリー麻痺を實驗的に作り出すことゝに總ての興味を打込んでゐた。

一年後、私は神經病の私講師として、私の醫師的活動をヰインで始めた。さうして、神經病の病源

に關する總ての事に就いては、甚だ無責任に、甚だ無智であつた。實際、さう云ふ事は人々も、たゞ見込みのある大學の教授にのみ、期待することが出來たのだ。その内に、やがて或る日、クロバクから親切な便りがあつて、自分は大學の教師として新たな地位を得ることになり、或る婦人患者のために十分に時間を割いてゐられないから、その患者を引受けてくれと云ふ申出であつた。私はクロバクよりも早く患者の許に行き、彼女が無意味な不安發作に惱んでゐることを知つた。その發作は、一日中の刻々に於いて彼女の醫者が何處にゐるかを細々と知らせて貰ふことに依つてのみ、鎭撫することが出來るのである。クロバクが現れて、やがて彼は私を小脇に呼び、この患者は十八年間の結婚生活に拘らず無垢處女であつて、そこから彼女の病氣が由來してゐるのだと云つて聽かせた。夫は絶對的に不能症である。醫者としてさう云ふ場合に爲し得ることではたゞ、この家庭の不幸を被ふに我が身の評判を以てし、口さがなき人々から、あの醫者もあんなに永く處置してゐて癒せないところを見ると、彼には何も仕様がないのだと云はれて唯々としてゐなければならないことだ。そのやうな病苦に對する唯一の處方は（彼は附加へて云つた）我々によく分つてゐるが、併し我々はそんな處方は書けない。卽ち――

處方―― Penis normalis （常量男性器）

dosim

Repetatur!（反覆）

私はそのやうな處方に就いては何も聞いたことはない。さうして私の恩人の皮肉に就いて頭を振つたと思ふ。

私は自分の下等視された思想の生れが意外に高貴なところから出てゐることを明かにしたのは、この思想に對する責任を他に嫁せんとするためではない。一つの思想を不圖した思付きの形で一度か數度口にすると云ふことは、それを眞劍に取扱ひ、それを言葉に明白に表はし、それと撞着する一切の細部を整理し、承認されてゐる諸々の眞理の間にそれの地位を確立することゝは、自ら別であることを私はよく承知してゐる。それは輕薄な浮氣と、一切の責任と厄介とを甘んじて負ふところの正當の結婚との相違である、何々の思想と結婚する（Epouser les idées de …）と云ふは、少くともフランス語に於いて慣用せられてゐる言葉の轉用である。

私が自分の働きに依つて洗ひ流し法に附加し、更にまた精神分析に形を變へて標示して來た契機は種々ある中に、殊に舉げておきたい事は、抑壓說と抵抗說、幼兒性慾の確認、並びに夢を解釋し利用して無意識の認識に資することなどである。

精神分析運動史

抑壓説は確に私の獨創である。私はこれに近いものへと私を示唆した他人の影響を知らない。私はこの考へを自分の創案であると永い間考へてゐたが、曾てランクがショーペンハウエルの『意志及び觀念としての世界』の中の或る箇所を指示して、そこに此の哲人が妄想の説明のためにこれを用ひようとしたのを知つた[1]。現實の苦痛な部分を承認することに對しての反抗に就いてそこに述べてあることは、私の抑壓の概念の內容と完全に符合するので、自分の讀書の可能性の乏しいことによつて自分の發明を實ゐることを再び知つたのである。併しながら、他の人々はこれ等の個所を讀みはしたがそれを看過し、かかる發見を爲し得なかつたのだ。恐らく私にもやつたことであらう。若し私が若い頃に哲學書を讀む趣味を持つてゐたならば。後年私はニイチエの著書の高價な享樂を自ら斷つた。それは精神分析に依つて得た印象を熟慮する際に、如何なる種類の豫期觀念にも妨げられることを欲しなかつたからである。精神分析に依る困難なる研究が直感的に得られた哲學者の洞察を確證し得る場合が甚だ屢々であるが、それ等の場合に於いて私は常に先取權の要求の放棄は覺悟してゐたし、また只今もあるので
ある。

抑壓說は精神分析てふ大建築の依つて以て立つ根本柱である。即ち斯學の本質的な部分であり、催眠術の助けなくして神經症患者を分析せんとする場合に幾度でも好きなだけ繰返される或る經驗を理論的に云ひ表はしたものに外ならないのである。分析中に我々は患者の抵抗を感ずるやうになる。この抵抗は分析操作に反抗し、患者をして記憶や聯想がないと云ひ張らせ、操作の手をつけられないやうにさせる。この抵抗のあると云ふことは催眠術を適用したのでは分らなくなつて了ふ。それ故に本來の精神分析の歴史は催眠術の放棄と云ふ技法上の革新のあつた時から始まるのである。この抵抗は健忘と云ふことに外ならない。この事を理論的に考究して行くと、やがて必然的にかの無意識的精神活動てふ考へ方に到達せざるを得ない。この無意識的精神活動と云ふ考へ方こそは精神分析に特有であり、無意識に關する哲學的思辯と常に著しくこれを異らしむる所以のものである。それ故に、精神分析的理論とは、神經症者の病害症候を彼の生活史中に於けるそれの源泉にまで遡らうとする際に、思ひも寄らず現れて驚かせる二つの經驗(轉嫁と抵抗との事實)を、理解し得るものにしようとの試みに外ならないのだと云ふことが出來る。これ等二つの事實を承認し、これ等を出發點としてその操作をなす研究は、如何なる方向をとるにもせよ、精神分析と名付けることが出來るのである。それは私の如き結論に到達しなくとも、差支へはないのである。併しこの問題の別方面を捕へ、これ等二つ

の豫想から離反するものは誰しも、人質似に依つて所有を亂すものであるとの批難を免れ得ないであらう。よしんばその人が精神分析者と頑固に自稱しようとも……。

抑壓說と抵抗說とを精神分析の結論と見ず豫想と見ようと欲する者があるならば、私はその人に對して猛烈に反對する。一般に心理學的、並びに生物學的性質を帶びたそのやうな豫想は精神分析にも存在してはゐる。さうしてそれ等に就いてはまた別の個所で說くのが適當であらうが、併し抑壓の說は精神分析的操作に依つて獲たものであつて、無數の經驗の中から正當の方法に依つて理論的精粹として獲得したものである。

もつと後になつてからではあるが、やはり同樣にして獲得したものには、幼兒性感論がある。幼兒性感は、分析に依る最初の模索的探究の時代には、まだ問題にならなかつたものである。始めには我々はたゞ、實際的印象の効果を過去に溯つて探ねたければならないと氣付いたゞけであつた。併しながら「求むるものは、彼が望んだ以上を發見するのが屢々である。」我々は愈々深くこの過去に誘はれて行き、遂に我々は、性的亢奮が傳統的に眼覺める時期たる思春期に至つて落着くものと望んでゐた。ところがそれは駄目で、痕跡は愈々深く後退し、幼兒時代、更に嬰兒時代に赴くのであつた。が、そこまで行くにはその途上で一つの誤り（その誤りはこの若き學問にとつては殆ど不可避の運命であつ

た）を克服しなければならなかつた。シャルコーに關係あるヒステリー外傷說の影響を受けて我々は患者の報告（その報告に依れば、彼等の症候は早期幼兒時代に於ける受動的な性的體驗、端的に云へば誘惑に出づると）を眞實であり病源として重要であると、考へ易い傾きがある。これ等の病源觀がそれ自身の眞實らしからぬ點に於いて、また確實な事情と矛盾する點に於いて、破産して了つた時には、その結果は當然、研究も全く手がつけられなくなつて了つたのである。分析は正當の道を通つて、そのやうな幼兒時代の性的外傷に遡したが、而もこれ等はやはり眞實でなかつたのである。我々はこのやうにして、現實の土臺を失つたのである。その當時、私は自分の仕事を全然放棄して了はうかと思つたのである、恰も、私の尊敬する先輩ブロイヤーが、望まぬ發見をした時に放棄したやうに……。私が頑張り通したのは、これ以外に別に何も仕樣がなかつたからであらう。遂に私にはかう云ふ考へが起きて來た、我々は自分の期待が水泡に歸したからとて絕望してしまふ權利はない、寧ろこの期待を再吟味しなければならないと。ヒステリー患者が自分の症候を或る知られてゐる外傷に歸したとするならば、そこに生ずる新たなる事實は、彼等がそのやうな場面を空想したと云ふことである。またた心理的現實は實踐的現實と同樣に、重要視せられねばならないと云ふことである。そこで次に我々の洞察し得ることは、これ等の空想が、最早期幼兒時代の自己色情的活動を隱蔽し美化し、より高き段

階へと擧げるものを見しておると云ふことである。で、今やこれ等の空想の背にかくれて、幼兒の性生活がその全體を擧げて現れて來るのである。

最早期幼兒時代のこの性活動に於いては、またも一つ持つて生れた素質と云ふことが問題になる。素質と體驗とは解き離すことの出來ない一個の病源となつて、かくて素質は印象（體驗）を（普通ならば、平凡に無害に過ぎて了つたであらう印象を）外傷的、定著的のものにまで高めるのである。他方また經驗は素質的の要素を（その經驗がなかつたならばそのまゝ眠つて了ひ、恐らく發展しなかつたであらうところの遺傳的要素を、呼醒ますものである。外傷的病源說の問題に於ける最後の言葉を長年にかけて吐いたものはアブラハム（一九〇七年）であつた。即ち彼は、幼兒の特殊な性素質が特種の性體驗を、即ち外傷を、作り出すことを如何に心得てゐるものであるかを述べたのであつた。(一)

註（一） Klinische Beiträge zur Psychoanalyse aus dem Jahren 1907—1920. Intern. Psychoanalyt. Bibliothek, Band x, 1921,

私の幼兒性理論は、始めの程は餘り多くの成人を分析し過去に溯ることに依つて知り得たところを基礎としてゐた。幼兒を直接に觀察する機會が私にはなかつたのだ。それ故に數年の後に、極早期の幼兒を直接に觀察し分析することに依つて、その結論の大部分が確證されたことには非常な滿足を覺

えたのであつた。併しその勝利感も、考へて見れば段々小さくなつて行くのであつた。發見とは云ひながら、抑々こんな事を今更發見したと云ふことを恥ぢねばならぬ底の發見であつた。愈々深く見直し觀察して見れば見るほど、愈々この事實は自明となつた。併しまた、人々がこの自明の事實を看過するためにあれほどの骨折りをしてゐたと云ふことが、愈々をかしくなつて來たのである。

幼兒性感の存在及び重要さに就いてのそのやうな確信は、人々が分析と云ふ方途を辿り、神經症者の症候と特徴とから遡行してその窮極の源泉に到る場合にのみ得られるのだ。この源泉を發見するならば、神經症に就いて說明し得べきことは說明がつき、變化させ得ることなら變化させ得るやうになるのである。併し人々が、近頃のユングのやうに先づ性本能の性質に就いて一つの理論的觀念を構成し、さうしてこの觀念からして兒童の生活を概念しようと欲するならば、別の結果に到達するであらうことを私は理解する。そのやうな觀念はたゞ任意的（氣まぐれ）にか、或は別方面の考へを顧慮してのみ選ばれ得るに過ぎない。さうしてその觀念を人々が適用せんと欲する分野に於いてはそれが不適當となる危險を冒すことになるのである。成程、精神分析の行き方でも結局は、性並びにそれの個人生活全體への關係に就いて或る窮極の困難と曖昧とに到達するが、併しこれ等は哲學的思辯に依つて取除かれるものではなく、別の觀察、又は別方面に於ける觀察に依る解決を待つより外はない。

夢の解釋に就いては、私は簡單に云ふことが出來る。この夢の解釋は、私が或る漠とした豫感に從つて、催眠術に代ふるに自由聯想を以てしようと決心した後に、私の技法革新の初生兒となつたのだ。私の知識慾は始めから夢の解釋にさし向けられてゐたわけではなかつた。何の影響に依つて私の興味が動いたか、また何の感化のために力強い期待を持つやうになつたか、それは私にも分らない。私はブロイヤーと交際を絶つ前には、私が今や夢を解釋することを理解したと、一寸して彼に報告するだけの時を殆ど持たなかつた。發見の次第がさう云ふ譯である結果として、夢の言葉の象徴は夢に就いて私が知るやうになつた殆ど最後のものであつた。何となれば、象徴を知ることに對しては、夢見た人の聯想は殆ど役には立たないからである。ところで私は一體、書物を調べる前にまづ事實を研究する習慣になつてゐるので、シェルナー Scherner の書物に依つて夢の象徴を指示される前に、自分でこれを確めることが出來たのである。全體としては、夢のこの表現手段を私は、後年になつてやうやく重視するやうになつたのである。その一部分は、始めにはあれほど貢獻したが、後には完全に斯學から逸脫したステーケルの著作の影響に依るのである。嘗てあれほど尊重せられた古代の夢判斷術に對する精神分析的夢判斷の附加が狹小である事は、ずつと後年になつて明白になつた。私の夢の說の最も本質的な、最も重要な部分であるところの、夢の歪みが內的葛藤から生ずるとの見方、卽ち內的

不調との見方は、私これを後に或る學者の說の內に發見したが、この學者は醫學はともかく、哲學は心得てゐたのだ。即ち、その學者は有名な技師ポッパー J. Popper の事で、彼はリンコイス Lynkeus の名の下に一八九九年に『或る現實家の空想』を公にしてゐる。

私が分析を始めた頃の困難な時代に於て、私が神經症處置の技法と臨牀實驗と療法とを同時に行つた時代に於て、全くの孤立に陷り種々の問題の紛糾と困難の堆積との間にあつて屢々爲すところを知らなくならうとする不安に驅られてゐた時代に於いて、夢の解釋は私の慰めとなり依り所となつたものである。「神經症は分析に依つて理解されるに違ひないとの私の豫想が正しいか否かを調べるには、患者に就いて隨分根氣よく待つてゐなければならないのが屢々である」。夢は症候と類似のものと考へることが出來たのであるが、その夢に就いて見れば、この豫想が殆ど常に確證されることを知り得たのである。

この成功に依つて、私は頑張り通すことが出來たのである。それ故に私は、心理學的な仕事をしてゐる人がどれくらゐ分つてゐるかを測定するには、夢の解釋問題に對するその人の態度如何を見ることに定めてゐる。また精神分析の大抵の反對者たちはこの領域に踏込むことを恐れ、或は踏込んだとしても甚だしくヘマな樣子をしてゐるのである。私はそれを觀察して如何にもさうであらうと感じた

のである。私は自己分析（その必要がやがて私に明かになつたが）を自分自身の一聯の夢に依つてなし遂げたが、それ等の夢は私の幼兒時代のあらゆる出來事の中に導いて行つた。さうして私は今日でもやはり、夢巧者な人やあまりに變態でない人々に於いては、かう云つた種類の分析だけで澤山だと云ふ意見を持つてゐる。

このやうに精神分析創成の歷史を展開することに依つての方が、これの體系的論述に依つてよりは、寧ろ斯學の何たるかを示すに適してゐると私は信じてゐる。自分の發見したことに如何なる特殊の性質があるかを、私は始に認識しなかつたのである。私は醫者として相當流行しかゝつてゐたし、また神經症者にして私の許に處置を受けに來るものも段々殖えてゐたのだが、私が始終、彼等の神經症の源因を性生活に求めたので、切角の客にも隨分逃げられてしまつた。併しその間に得た數々の經驗に依つて、私は性的契機の實際的意義に就いての私の信念を窮極的に確立するやうになつたのである。私は、當時クラフト・エービングを會長とするヰイン醫師會に演說者として、別に何の豫期もなく入會して行つた。そして私は同僚醫師たちが私の話に興味を寄せこれを容認してくれゝば、自分の自由意志に出づる物質上の損害も何でもないと思つてゐたのだ。私は自分の發見を學問への無私なる寄與として取扱ひ、他の人達にも同じことを期待してゐたのだ。私の講義の後に、先づ現れたものは沈默

であつたが、やがて私の身の周りには誰もゐなくなつた。私はかう云ふ樣子を示されて、やうやく感付いたのであつた、神經症の病源に於いて性の果す役割に就いては、これを他の事物と同樣に報告してはならないと云ふわけなのだと。そこで私は悟つたのである、自分はかのヘッベル Hebbel の言葉を用ふれば、『眠つてゐる世間を搖り起す』者の一人であると。さうして客觀的な、公平寛容の態度を期待することは許されないと。併しながら自分の觀察と結論とが斷然正しいとの私の信念は愈々增大し、私自身の判斷に對する私の信賴、並びに私の道德的勇氣は共に小さくなかつたから、かゝる立場からの歸結は疑ふまでもなく明白であつた。私は特に重大な關係を發見すべき幸福が自分に下つたのだと信じようと決心した。さうしてそのやうな發見にはつきものゝ運命を私は摑んだことを、旣に知つたのであつた。

この運命を私は自分でかう云ふ風に考へた。――自分は新しい技法の治療上の成功に依つて多分自分を支へて行くことが出來るであらう。併し學問の方では自分の生きてゐる間には認められないであらう。二三十年經つ內に誰か別の人が自分の尙早に發見したのと同じことに確に目をつけ、これを遂に認め、自分を當然不遇に終つた先驅者として尊敬するやうになるであらう、と。併しその間にも私は自分をロビンスンとして私の孤獨の島に出來るだけ心持よく自らを置くことにした。現今のこの混

亂と繁忙の間にあつてあの孤獨の年代を顧みると、それは美しい、英雄的な時代であつた。「素晴らしい孤立」"splendid isolation"にもその長所と魅力とがなくはない。私は別に何の文獻を讀む必要もなく、無學な反對者の愚談などに傾聽する必要もなく、また他からの影響もなく、干渉も受けなかつた。「私は思辨的な傾向を制し、恩師シャルコーの忘られぬ忠言に從つて同じことを幾度も新たに吟味し、遂にその事自身が何事かを云ひ出すまで待つことを學んだのであつた」私は自分の著書を公刊するために多少の骨を折つて、やうやくその緒に着いたのであつたが、自分の知識の進むまゝにいくらでも延すことが出來た。好き勝手なだけ遲らせてよかつた。新學說の『先取權』がどうのかうのと、疑はれたり辯解したりする必要はなかつたからである。例へば、『夢の註釋』の如きも、その肝心のところは全部、一八九六年頭初に用意が出來上つてゐたのだが、併し始めて書下したのは一八九九年の夏であつた。『ドラ』の處置は一八九九年末まで掛つて完成した。彼女の病歷はその次の二週間で書き付けたが、併しやうやく一九〇五年になつて公刊せられた。併し私の著書は專門家の文獻中には報道せられず、もし報道せられたとしても、嘲笑的な、氣の毒がつたやうな優越的態度で退けられてしまつた。時にはまた同學の士は、その出版物の中で私の事をとり上げて何か云つてくれたが、それは甚だ簡單で、お世辭のないものであつた。例へば、抑々御熱心で、極端で、變つてゐる、と云つた風な

ものである。嘗てまたかう云ふことがあつた。嘗て、ボインの診療所で私は定期の講義を始めたが、その時診療所の或る助手が私のこの講義に出席することの許を私から得たことがあつた。彼は熱心に聽講してゐたが、何も云はなかつた。併し最後の講義の終つた後に、散歩にお伴をさせてくれと云ひ出した。この散歩の間に、彼が告白したところに依ると、彼は自分の醫局長も承知の上で私の學說に反對する一書を物したが、今度の講義に依つて私の學說を始めてやうやく正解し、先に反對論を書いたことを甚だ後悔してゐると云ふのであつた。もしこの講義を聽いてゐなかつたら、まだいろ〳〵と書いた筈だと云ふのである。とにかく彼は、豫め『夢の註釋』を讀んだ方がよからうかと診療所で尋ねたところ、そんなものは讀むには當らないと云はれた。彼はやがて、今や彼が理解し得た如き私の學說の構造を、その内的接合の緊密の故に、カトリック寺院に比較した。彼の心持に同情を以て假定して見ると、これ等の言葉の内には一部の承認が含まれてあつたのだ。併し彼はやがてかう結論した、彼の書物はもう印刷に附せられてゐるので、これを改訂することはもう遲いと。當の同僚はやはり、私の精神分析に關する彼の意見の變化に就いて何事かを後から世間に知らせる必要はない、寧ろ醫學雜誌の常任の報告者として、精神分析學の發展に諧謔的傍註を附しつゝ隨いて行く方がよいと考へてゐた。

私の個人的な感情などは、その時分には有難いことに、癡痺して了つてゐた。人々の惡意に對しては併し、私は一つの事情に依つて守護されてあつた。さう云ふ事情は總ての孤立的發見者には與へられてゐないものであつた。卽ち、さう云ふ人々は、自分の同時代者たちが何故に自分の說に耳を傾けないか、自分を相手にしないかに就いて、判然たる目安が立たないのである。自分は自說の眞をこれほど確信してゐるのに、どうして人々はこれが分らないのか、その矛盾に惱まされるのである。さう云ふ惱みは私には必要がなかつた。何故ならば、精神分析學說そのものが、世人のかゝる態度を、分析的根本假定の必然的歸結として理解することを敎へるからである。私の發見した人間の無意識生活を患者の意識が內的感動の抵抗に依つて否認すると云ふのが正しいならば、卽ちかゝる抵抗はまた健康者に於いても、我々が彼等にさう云ふ抑壓があると外部から云つてやる時に、やはり起るに相違ないのである。この健康者たちは感動的（無意識本能的）にしてゐる拒否を知性的に理屈付けすることを心得てゐる事は不思議でない。患者だつて同じことを屢々やる。さうして持出された理由と云ふやつは――理由は（フォルスタフの云ひ草ぢやないが）黑イチゴのやうにありふれてゐる――定まりきつたもので、一向鋭くない。たゞその間の相違としては、患者に對しては我々が壓迫手段を持つてをり、それに依つて彼等の抵抗を洞察し克服することが出來るが、併し所謂健康者に對してはそのやう

な手段が缺けてゐると云ふ點である。どんな方法に依つて我々は、かゝる健康者をして冷靜な、學的に客觀的な觀察と調査とに赴かしめるかは未解決の問題であるが、これの解決は當面の懸案である。我々は學問の歷史に於いて屢々確認することが出來たのである、同じ主張が始めの内はたゞ世人の反對を受けてゐたのに、やがて暫くたつて、別にそのために新たな證明を與へたと云ふわけでないのに、承認されるやうになると云ふことを…。

併しながら、私が精神分析の唯一の代表者であつたこの時代に於いて、世人の判斷を特に尊重する心持が、知的謙讓の心が、私自身の内に擡頭してゐたと云ふことは、恐らく何人も期待しないところであつたらう。

二、弘通と反感

一九〇二年この方、一群の若い醫者たちが精神分析を學び、習ひ、弘通せむ明かな意圖を以て私の周圍に集まつて來た。分析療法のよき効果を自分に體驗した或る同僚醫師が、さう云ふ風に仕向けたのである。人々は定められた晩に私の宅に集り、若干の規則に就いて討議し、この珍奇な新分野研究の方策を樹て、これに對して他の人々にも興味を持たせようとした。或る日、なか〳〵よく分つた實業學校の生徒が我々のところに原稿を寄せて來たが、それを讀んで見ると、異常な理解を示してゐた。我々は彼に高等學校に行くやうに勸め、大學に通はせ、非醫者として精神分析の應用に沒頭せしめた。我々の小さな團體は、かくて一人の熱心な、信頼するに足る書記長を得たわけである。私はオット・ランク(一)を最も忠實な助力者、協力者と認めてゐる。

註(一)　現在では、國際精神分析學會出版部の幹事であり、『國際精神分析學雑誌』及び『イマゴー』誌の、發刊頭初からの編輯者である。

我々の小團體は漸次に擴大して行き、その次の年の内にはその關係が益々雑多に變つた。全體とし

て云へば、これ等の人々の有する天分の豐富と多樣とに於いて、如何なる診療所の幹部教師たちにも殆ど劣らぬものがあつた。精神分析運動史中に於いて後年あれほど重大な（必ずしも常に好ましいとは云へないが）役割を果すことになつたあれ等の人々は、始めからこの小團體の内に加はつてゐた。併しこのやうに發展しようとは、當時我々はまだ豫期し得なかつた。私は當然、滿足に思つた。さうして私は自分が知り且つ經驗した事どもを他の人々にも知り得るやうにするために總てを盡したと思ふ。惡い前徵としてはたゞ二つの事があつて、そのために私は遂にこの集團に内的の疎隔を覺えるに至つた。かう云ふむつかしい仕事に從ふ者等の間には友情的親密さがなければならない筈であるが、その親密さを會員の間に生ぜしむることが私にはうまく行かなかつた。また共通的に仕事をしてゐると云ふ條件の下では、先取權の爭ひがどうしても起き易いものだが、その爭ひを鎭めることも、これまた私にはうまく行かなかつた。精神分析實習指導の困難は殊に大きく、今日の論爭分立もそのためであるが、この困難は既にこの私のヰイン精神分析團體に於いて感ぜられてゐた。私自身はまだ完備してゐない技法や不確な理論を、（他の人々を迷はせないやう窮極的に脱線させないやうにするだけの）權威を以て說くことは、敢へてし得なかつた。精神的方面で仕事をする者の自立、教師から早く獨立することは、心理的には常に結構である。學問的な考慮に於ける利得は、これ等の學問探究者に於い

て若干の(あまり屢々は見られないところの)個人的條件が充たされてゐる場合には、かゝる獨立不羈から生ずるのである。正に精神分析こそは一つの長い、嚴格な訓練と、自己訓練への教育とを要するものであらう。自分の周圍の者達の間にはやはり醫者ばかりでなく、それ以外の教養ある者にして、精神分析に何等かの意義を認めた人々、文士、藝術家等も含まれてゐた。『夢の註釋』、『機智論』などは、精神分析學説が醫者の領分のみに限定されず、種々の他の精神科學への應用にも役立つことを、始めから示してゐたからである。

一九〇七年以來、事情はあらゆる豫期に反して、また宛も急轉直下の如く、變革して行つた。精神分析は極めて靜かに人々の興味を喚醒まし、同情者を獲得して行つたことを、實際、科學者にしてこれに左袒するの用意を有する者のあることを、我々は知つたのである。ブロイラー Bleuler は既に夙く手紙を寄せて、私の著書がブルグヘルツリ Burghölzli に於いて研究せられ、尊重せられてゐることを知らせてくれた。一九〇七年の一月には、チウリヒの診療所の所屬者アイティンゴン博士 Dr. Eitingon[1] が始めてヰインへ來た。やがてまた續いて別の人が來訪して、盛んに思想の交換をなすべき道がついた。遂に、當時はまだブルグヘルツリに於ける助手に過ぎなかつたユングから、一九〇八年春のザルツブルグに於ける第一回の集會に出席してくれとの招待が來た。その會にはヰイン、チウ

リヒその他諸方に於ける精神分析の同情者が一堂に集まつた。この最初の精神分析總會の結果として一つの雜誌を起すことになつたが、それは『精神分析的及び精神病的研究年報』としてブロイラー及びフロイドに依つて發刊せられ、ユングこれを編輯して、一九〇九年に出始めた。ボインとチウリヒとの間の仕事の上の内的共通が、この出版に於いてその表現を示した。

註(一) 後年ベルリンに於いて『精神分析診療所』を創設したるはこの人。

私は精神分析弘通にとつて、チウリヒ精神療法派の、殊にブロイラーとユングとの、偉大な功績を、幾度も感謝を以て容認した。で、今日では事情も甚だ變つてゐるのであるから、こゝに改めてまたそれを反復するには及ばないやうに思ふ。僅に、チウリヒ派が仲間に加はつたから、そのために學界の注意が精神分析に向つて來たと云ふわけではない。雌伏時代は旣に過ぎて、あらゆる方面に於いて斯學は、いや昇り行く興味の對象となつた。併しあらゆる他の土地に於いてはこのやうに興味が向いて來たが、始めはそれは最も熱烈に强調された拒否に外ならなかつた。これに反しチウリヒに於いては大體に於ける一致が根本の調子となつた。他の如何なる場所に於いても、熱心な追及者たちがこれほど緊密に集つてゐるところはなかつたし、公開の診療所が精神分析的研究のために儲かれたことはなかつた。つまり、精神病學の缺を補ふために精神分析學說を採用したやうな診療所の敎師は、チウリ

ヒ以外には何處にもなかつたのである。で、チウリヒ派の人々は、分析尊重のために戰つてゐる一小軍勢の中心部隊となつたのである。この新技法を學び、この技法に依つた操作を爲さうとするには、たゞ彼等の許に行くより外はなかつた。私の今日の追隨者、又は共働者達は、大抵はチウリヒを經て私のところへ來たのである。よしんば地理的に云へば、ヰインへ來る方がスヰツルへ行くよりも近い者でさへもさうであつた。現代の文明の偉大な諸々の中心を宿してゐる歐洲西方にとつては、ヰインは一方に偏在してゐる。重苦しい先入見に依つてヰインの聲譽は幾年來傷はれてゐる。精神的に甚だ活潑なスヰツルに、重要な諸國民の代表者たちが集合する。フライブルグのホーヘ Hoche の云ひ草ぢやないが、このスヰツルに於ける傳染巢窟は、心理的傳染病の蔓延にとつて特に重要となつたのは必然であつた。

ブルグヘルツリに於ける斯學の發達に參與した或る同僚の實證に依ると、精神分析はその地に於いて既に早く興味を持たれてゐたことを我々は確に知り得るのである。ユングが一九〇二年の、神靈現象に就いて公刊した書物の中に、夢の註釋への最初の言及である。一九〇三年又は一九〇四年以來、精神分析は重要視されて來たと、私の門下の者が報告してゐる。ヰインとチウリヒとの間に個人的關係の結付きが出來たので、その後、一九〇七年の中頃には、やはりブルグヘルツリに遠慮のない會

が催され、これの例會に於いて精神分析が討議せられた。ヴインの人々とチウリヒの人々との間の聯合に於いては、スヰツル人達は必ずしも單に受容的な役割だけを受持つてゐたわけではなかつた。彼等は自ら既に尊敬すべき學問的業績を成就し、その結果は精神分析に大いに役立つたのである。ヴント派に依つて與へられた聯想實驗法は、チウリヒ派に依つて精神分析的の意味に解釋せられ、彼等はそこに豫期せざる程の價値を認めた。かくて、精神分析的事實を迅速に實驗確證することが出來るやうになり、今までは分析者はたゞ話して聽かすことが出來たに過ぎなかつた個々の事情をも、これを證明して見せて、分析を學ぶものに納得させることが出來るやうになつた。このやうにして、實驗心理學から精神分析學への聯橋は架せられた。

聯想實驗は精神分析處置をなさんとする場合に、病氣の性質を豫備的に分析することは出來るが、分析技法に對して何等本質的の寄與をなすことは出來ない。さうして分析を仕上げる場合には全然無くても差支へない。チウリヒ派の、或はこの派の二人の指導者たるブロイラー、ユングの今一つの業績の方が一層重要である。ブロイラーはかう證明してゐる、即ち、純粹に精神病學的な場合の多數に於いて、それ等を十分に說明し盡すには、どうしても精神分析が夢や神經病を分析して認識した過程（「フロイド的機制」）を以てしなければならないと。ユングは分析的な解釋を早發性癡呆症と云ふ最も

特異な最も近づきにくい現象にさし向けて成功してゐるのである。早發性痴呆症が患者の生活史及び生活興味から由來してゐることは、やがて明白になつたのである。その時以來、精神病學者たちにも、精神分析を之れ以上無視しておくことは不可能となつたのである。早發性痴呆症（Schizophrenie）に關するブロイラーの大著（一九一一年）の中には精神分析的な觀察方法が、臨床的組織的な觀察方法と併立して對等に用ひられてゐるが、この書に依つて右の成功は完成されたのである。

併し私はこゝで、當時既に兩派の操作方向に判然存在してゐた區別を指摘することを怠らないでゐよう。私は既に一八九六年に早發性痴呆症の一患者を分析して、それを公表してゐる。併しこの患者には妄想症的の特徴がかなりあつたから、それを解明したことはユング式分析の先驅をなすといふ印象をも與へ得る。併し私にとつては、症狀の解釋よりも、病氣の心理的機制が重要であつたのだ。殊にこの機制が、既に知られてゐるヒステリー機制と一致してゐる事が重要であつたのだ。兩者の相違に就いては、その當時はまだ何も判らなかつた。私は實は既にその當時に於いて、神經症のリビードー的療法を目指してゐたのだ。リビードー療法はあらゆる神經症的、又は心理病的現象を、リビードーの異常な成行から説明しようとするのである。リビードーが正常に使用されずに、どうなつてゆくかを説明せんとするのである。かう云ふ考へ方をスイスの研究家たちは見損なつた。ブロイラーは、私の知

つてゐる限りでは、諸々の形の早發性痴呆症の源因が肉體に在るとの說を固執してゐる。ユングはこの病氣に關する論書を一九〇七年に著したが、一九〇八年ザルツブルグの總會席上で、本病の中毒說を唱へ、リビドー說を除外しないまでも、これを離れてしまつた。この點に於いて彼は後年（一九一二年）になつて行詰つた。彼が以前に用ゐようとしなかつた材料から、今やあまりに多くを取つたからである。

スキツル派の第三の貢獻は恐らく全部的にユングの力であるが、これは遠くから見る者が買ふほどには、私は高く評價しないのである。その貢獻はコムプレクスの說で、この說は『聯想の診斷的研究』„Diagnostischen Assoziationsstudien," (1906—1910) から生じて來たのである。この說はそれ自身一つの心理學的の理論を生みもしないし、また精神分析學說の中へ是非とも附加せられねばならないと云ふほどのものでもない。然るに、この『コムプレクス』と云ふ語は心理學的事實を記述的に把握するに便利な、缺くべからざる術語として精神分析學の中に存在權を獲得することになつた。精神分析の必要から新たに造られた名稱や術語にしてこれほど一般的に通俗化し、これほど誤用（概念構成を混然たらしめるには迷惑な誤用）されるやうな語は、他にはないほどである。今や精神分析者たちも仲間の用語に於いて、『被抑壓物の復歸』と云ふべき筈のところを『コムプレクスの復歸』と云つ

病源は歐州人の病源と同じところにあると報告した。

註(一) エリス『フロイド派の學說』, H. Ellis: The Doctrine of Freud School.

(二) G. Greve. Sobre psicología y Psicoterapie de ciertos Estados angustiosos. 『精神分析中央雜誌』第一卷參照。

精神分析を北アメリカに導入したことについては、特に光榮とすることがある。一九〇九年の秋、ユングと私とは、ウスター州の(ボストン附近)クラーク大學總長スタンリ・ホール博士に招待され、同大學の創立廿週年紀念に際し、ドイツ語で講演することになつた。あの小さな、併し尊敬せられてゐる教育學的・哲學的大學の、先入見を持たない人々が、總ての精神分析的仕事を心得てをり、彼等の學徒のためにした講義を熱心に聽いてくれた事は、私の驚きであつた。これほど愼みあるアメリカに於いて、我々は、少くとも大學關係の人々の間に於いては、實生活に於いてはいやなことゝして考へられてゐる總てを自由に論議し學問的に扱ふ事が出來た。私がウスターに於いて卽席的に話した五回の講議は、やがて英譯せられてアメリカの心理學雜誌に現れ、その後またドイツ文で『精神分析に就いて』"Ueber Psychoanalyse," の題下で現れた。(三) ユングは聯想の診斷的研究、並びに『幼兒心理の葛藤』に就いて講じた。我々はそのために LL. D. (法學博士) の學位を贈られた。ウスターに於

ける紀念祭の時に、精神分析を代表して話したものは都合五名で、ユングと私以外では、私の旅行に同伴して來たフェレンチ、當時はトロント（カナダ）の大學にゐたが、今はロンドンにゐるジョーンズ、並びに當時既にニウ・ヨウクに於いて分析を實施してゐたブリルであつた。

註（一）本書巻頭『精神分析五講』のこと。（譯者。）

なほウスターに於いて得た最も重要な友人はハーヴァード大學の神經病學の教師パトナム [illegible] Putnam であつた。彼は數年前に精神分析に對して同情のない批評を下したことがあつたが、今や忽ち斯學に好意を持ち、幾多の内容豐富な、形式美はしき講義に於いて斯學をその同國人に、專門同學徒等に、推薦したのである。彼の高德と勇敢なる眞理愛の故に、彼の人格はアメリカに於いて非常に尊敬されてゐたので、精神分析は非常に有難くも一般の批難を受けずに濟んだが、もしさうでなかつたならば、暫くは人々の誤解を免れなかつたであらう。パトナムはその後、彼の本領たる偉大な倫理的、哲學的要求にあまりに沒頭し過ぎ、精神分析に依つて一定の道德的・哲學的の世界觀を打樹てようとの（私の意見では）出來ない相談を斯學に持掛けた。併しパトナムは彼の祖國に於ける精神分析運動の大立者であることに變りはない。(1)

註（一）『精神分析論』« Addresses on Psycho-Analysis. » International Psycho-Analytical Library No. 1, 1921.

――パトナムは一九一八年に逝去した。

新學運動の弘通のために、やがて最大の功績を致したものはブリルとジョーンズとであつた。卽ち彼は自己沒抑的な勤勉を以て自分等の著書の中で、日常生活、夢、神經症等の容易に觀察され得る根本事實を、常に新たに彼等の國人に示した。ブリルはこれ等の影響を私の著書の飜譯に依つて强調し、ジョーンズは示唆多き誹義や適切な論議に依つて强大にした。(一)

註(一) これ等兩家の論文は、それぞれ纏つた著書になつてゐる。Brill: Psychoanalysis, Its theories and practical applications, 1912. E. Jones: Papers on Psychoanalysis, 1913. 前著は一九一四年に、後者は一九一八年に第二版が(一九二三年には第三版が)出てゐる。

アメリカにはこれと云ふ學問的傳統が根を張つてをらぬし、また官憲の勢力もさう强大でないので、スタンリ・ホールがこの國のために與へた刺戟は決定的に好都合であつた。またこの國に於いて始めから特色的であつたのは、瘋狂院に於ける敎授や院長諸氏が獨立的な實施家と同じやうに分析に對して關心を示したことであつた。併しそれ故にこそ正に明かなことは、精神分析のための戰では、もつと大きな抵抗の存するところに於いて、古き文明中心の土壤の上に於いて、決勝戰が演ぜられたければならないと云ふことである。

精神分析總論

歐洲諸國の內ではフランスが最も反撥的な態度を示した。そのくせチウリヒ人メーデル A. Maeder の親切な著書が斯學の入門として非常に安易な道を開いてゐたのだが……。最初の讚成の聲はフランスの中央都市でなく、地方から聞えて來た。モリショウ・ボーシヤン Morichau-Beauchant (Poitiers) は、公然精神分析に左袒した最初の人であつた。レヂ Regis とエスナール Hesnard (Bordeaux) とは、やうやく近頃（一九一三年）になつて、詳細な、併し時々は理解の缺けた論（彼等は斯學の象徵觀を嫌つてゐる）を公にして、同國人等のこの新學說への先入見を打破しようと試みた。パリに於いては、昔ながらの先入見的信念がまだ支配してゐた。その信念を最も端的に云ひ表はしてゐるのは、一九一三年にジャネーがロンドン總會に於いて吐いた言葉である。卽ち、精神分析の取柄とすべき點は、多少の變化を加へてはあるが、要するにジャネーの學說を反覆したものであり、ジャネー說以外に出でたものは、みなその惡い點であると。ジャネーはなほこの總會に於いてジョーンズの難詰的論述に遭つて、それを認めざるを得なかつた。ジョーンズとしては自分の認識した事實の一小部分を示し得たに過ぎなかつたのだ。それにも拘らず、神經症の心理學のために彼が爲した功績は、我等これを忘れることは出來ないのである。尤も、彼が主張するほどの功績は認められないが……。

イタリーに於いては、始めは一寸有望な樣子に見えたが、その後一向盛んにならなかつた。オラン

ダには、個人的關係に依つて早期から斯學は導入せられた。ファン・エムデン、ファン・オフイーゼン van Ophuijsen, ファン・レンテルゲム van Rentorghem（「フロイドとその派」）並びに兩ステルケが、そこでは理論的にも實踐的にも活動して成功を收めてゐる。(一) 英國學界の分析への興味は徐々に發展したが、併し元來イギリス人は事實を尊重する氣持が強く、また眞正に加擔する情熱を有するからして、種々な徴象から見て將來大いに盛んになると云ふことが出來る。

註(一) 始めて夢の解釋と精神分析とが歐洲に於いて公認せられたのは、ライデン大學の總長にして心理治療家たるイエルゲルスマ Jelgersma であつて、彼は一九一四年二月九日に總長就任演說としてそれを論じた。（「無意識心理生活」國際精神分析學雜誌、第一號附錄。）

スエーデンに於いては、ウェッテルストランド Wetterstrand の醫師的活動に從ふてゐたビエーレ P. Bjerre が分析的處置のために、少くとも一時は、催眠的暗示を放棄した。フォーグト R. Vogt（クリスチャニア）は、既に一九〇七年に、その著 „Psykiatriens grundtraek" の中で、精神分析の價値を認めてゐる。これはつまり心理的療法の教科書にして、精神分析を認めた最初のものである。これはノルウェー語で書かれてあつた。ロシアに於いては精神分析は甚だ一般的に認められ、擴まつてゐる。私の著書もその他の精神分析學者等の著書も殆ど全部飜譯せられてゐる。ロシアの醫者たち

の貢獻は、現在のところでは大したことゝは云へない。たゞオデッサにはウルフ M. Wulff と云ふ調練ある分析者がゐる。精神分析をポーランドの學界文壇に紹介したのは、主としてイェーケルス L. Jekels の功績である。オーストリーはハンガリーとは地理的には極めて近いが、文化的には甚だ疎遠で、今までのところハンガリーからは精神分析學者としてはフェレンチを出したに過ぎないが、併しかゝる人物ならば、實は一人でも一つの團體に相當する位である。(一)

註(一)〔一九二三年補〕　右に述べたは一九一四年の現在情勢であるから、これを以て今日にまで及ぼさせようとする考へは私にはない。その間には世界戰爭などもあつて、様子は隨分違つて來たが、それは一二の言葉を以てしても察せしめるに足る。ドイツに於いては分析學説は臨床的心理治療の中に徐々に（よしんばそれが承認せられてゐないにもせよ）浸透しつゝある。フランスに於いては私の著書の譯が最近に出て、それに依つて遂にこの國に於いても精神分析への興味が呼覺まされたが、現在のところでは、學界に於いてよりは文壇に於いて一層大きな影響を及ぼしてゐる。イタリーに於いてはレギ・ビアンチニ Levio Bianchini (Nocera sup.) とエドアルド・ワイス Edoardo Weiss (Trieste) が精神分析の飜譯者及び翻譯者として擡頭した。(»Biblioteca Psicoanalitica Italiana«) スペイン語を用ゐてゐる諸國に於いても熱心家（リマの Prof. H. Delgado）がゐて、現に私の全集譯がマドリッドに於いて出版されてゐる。(譯者は Lopez-Ballesteros.) 英國に於いては、右に云つた豫言は着々と實現されつゝある。英領インド（カルカッタ）に於いては、分析の特別の保護機關が作られてゐる。アメリカに於いては、斯學は

一般化する場合には深く行かないやうである。ロシアに於いては分析事業は、革命以後には、諸方の中心から新たに初められてゐる。ポーランド語では、現在、"Polska Biblioteka Psychoanalityczna" が出てゐる。ハンガリーに於いては、フェレンチの指導の下に立派な分析學校が榮えてゐる。スカンディナヴアの諸國は、今日でも最も頑強に拒否的態度をとつてゐる。

ドイツに於ける精神分析の位置は、次のやうに記述するより外に云ひ方はない。斯學は學界討議の中心に立ち、醫者からも非醫者からも決定的な排撃の聲を聞いた。この聲は併し、なか〳〵やむべくもなく、寧ろ益々高まり、時と共に強まりつゝある。如何なる公立の學校もこれまで精神分析學を受容れたものはなく、これを實施して成功を收めてゐる實践的分析者の數は極めて少い。クロイツリンゲン（スキツルの地域に屬するが）のビンスワンガーの病院、ホルスタインのマルチノウスキーなどは斯學を受容れた。ベルリンの評壇では、分析の最も勝れた代表者の一人であり以前にブロイラーの助手であつたところのアブラハムが戰つてゐる。精神分析發群以來、隨分相當の年月を經てゐるのに、今だにこの樣子ではをかしいと人々は思ふであらうが、併し右の叙述はたゞ外面的な顯現を云つたものであることを知らねばならない。學界の公的代表者、各病院長、並びにそれ等に依屬する後繼者たちが排撃するその意義を我々は過大に評量してはならない。反對者たちは、自分等の追隨者等が小心

質々として自分等に嚙り付いて安心してゐる間は、聲を大にするものであることは當然である。その追隨者たちの内には分析への最初の寄與に依つてよき期待を持たれたものも多いのであるが、やはり事情の壓迫のために、この運動から身を退いたのであつた。併しこの運動それ自身は私かな歩みを着々として進め、常に新たな追隨者たちを醫者の間からも、非醫者の間からも獲得しつゝある。分析的文獻の讀者は益々增加し、そのために反對者たちは愈々激しく排擊の氣勢を擧げなければならなくなる。私は本年中に於いて、或る總會、學會の報告、又は若干の出版物の報道などに於いて、今や精神分析は死んだ、決定的に克服された、撥無されたと云ふやうな記事を讀んだことは殆ど六回ばかりもある。これに對する答辯としては、我々はかのマーク・トヱンが自分の死を誤報した新聞紙に對して與へた電文の如きを以てしてよからう。――私が死んだとは吹立てたね。このやうに死んだと云はれるあとから、精神分析は新たな追隨者と協力者とを獲、またそれ自身も新たな機關を作り出した。死の如き沈默に抗して進むことだけは、儘に死んだと云はれる。

右に述べて來た通り、精神分析は空間的に擴まつたが、それと同時に、神經症學や精神病學の他の知識分野にも影響を及ぼすことに依つて、內容的にも擴まつて行つた。我等の學理の發展史のこれ等の部分は、私これを立入つて論じないであらう。何となれば、ランクとザックスとの素晴らしい著者

(レーヴェンフェルドの『限界問題』に於いて)があつて、精神分析の此等の業績は詳細に論じてあるからである。併しこの書とてもやはり始めての仕事で、十分に書き盡してあるとは云へない。大抵は單に附論であり、內には時々準備的論文もあると云ふ程度に過ぎない。公平に考へるものは、そこに何等批難すべきものを發見しないであらう。無數の問題を前にして而もこれを扱ふものは少數者に過ぎない。彼等の內の大抵の者は主要の仕事を別方面に持つてゐて、さうして專門外の學問の特殊問題をディレッタント的訓練を以て把握しなければならないのだ。これ等の精神分析出身者たちは彼等の仕事のディレッタント的であることを否認はしない。たゞ專門家たちのための道案內となり、代理者となり、彼等自身が仕事を爲さうとする場合にとつて精神分析の技法と原理とを呈示したに過ぎないのだ。併しその目指した結果が今では既に大したことではなくなつてゐるとすれば、それは一方に於いては、分析的方法論が實を結んだゝめであり、他方に於いては、醫者にはならないで精神分析學を精神科學に應用することを一生の仕事とする二三の學者が既に存在してゐるためであるのだ。

大抵のこれ等の應用は、私の最初の分析的勞作からの囘收に戾つて行くことは明かである。神經症及び常態者の神經症的徵候を分析的に研究して見ると、必然的に我々は種々の心理的關係を想定せざるを得なくなつたのである。さうしてこれ等の心理的諸關係は、それ等が發見された分野に就いての

み妥當すると云ふことはあり得ない。そこで、分析は我々に病理的現象の說明を與へたのみならず、また常態者の心理生活とそれとの間の類似をも示すやうになり、かくて精神病學と（心理活動を內容とする）種々の科學との間に思ひがけぬ關係あることを闡明したのである。若干の類型的な夢からして、例へば、多くの神話や童話が理解されるやうになる。リクリン Riklin とアブラハムはこの方面を追及し、神話に關する概論的研究を爲し、それ等はやがてあらゆる專門家的要求にも協つたランクの神話學に關する業績となつて完成したのである。夢の象徵を追及することに依つて我々は遂に、神話學や民間傳承（ジョーンズ、ストルファー）、並びに宗教的抽象觀念の諸問題の眞中に入込んだ。或る精神分析學會總會の席上で、ユングの一門下が早發性痴呆症の空想と原始時代や原始人の宇宙觀との間に一致の存することを證明した時には、非常な印象を與へた。も早批難を免れないが、併し非常に興味ある解釋としてその後に現れたのは、ユングの著書中に於ける神話學の材料であつて、彼はこの解釋に依つて神經症の空想と、宗教的空想と神話的空想との間に關係を認めんとしたものである。

今一つの別の方途は、夢の研究から文藝作品の分析、更に詩人や藝術家自身の分析に赴くやうになつた。その方途の最初の譯に於いて分つて來たことは、詩人等に依つて發見せられた夢は分析に對して屢々如何にも純眞であると云ふことであつた。（イエンゼンの「グラディーヴ」）無意識的心理活動と云

ふ斯へ方に依つて、詩的創造作用の本質を始めて觀念することが出來るやうになつた。神經病になると人々は必然的に本能の刺戟を尊重するやうになるが、この刺戟の尊重に依つて藝術的創造の源泉を認識することが出來、また藝術家がこれ等の刺戟に如何に反應し、また如何なる手段に依つて自分の反應を裝ふかとの問題も起つて來る。（ランクの『藝術家論』„Der Künstler"サドガー、ライクその他の人々の文藝家分析論、レオナルド・ダ・ギンチの幼兒期記憶に關する小論、アブラハムのセガンチニ Segantini 分析など）。一般的な興味を持つてゐる大抵の分析者はその著述の中で、この問題への論を試みてゐる。この問題こそは精神分析の應用の中では最も魅力あるものであるからだ。併しこの方面とても勿論、分析をよく心得てゐない者等から抵抗を受け、同じ誤辨と熱烈な排擊とを被ることは、精神分析の醫療的方面に於けると同じである。實は、斯學は何處へ侵入して行かうと、そこに始めから定住してゐた者等と同樣な戰ひを演じなければならないであらうことは豫期するに難くない。たゞ侵入の試みが、將來はとにかく只今のところ、總ての分野に注意を呼び覺ましてゐないだけである。分析を嚴格に文藝學的に應用したものゝ中では、ランクの近親姦問題に關する根本的な業績が最上位に立つてゐるが、この内容は最も嫌惡されることは確かだ。精神分析に恭く言語學的、及び歷史的著述は、まだあまり出來てゐない。宗教心理の問題には私自身が一九一〇年に始めて觸れ、宗教儀

式と神經症者の行爲と比較した。チウリヒの牧師プフイスク博士 Dr. Pfister はチンツェンドルフ伯の敬虔心に關する著書（その他）の中で、宗教的狂熱が要するに變態性慾に歸せられると論じてゐるチウリヒ派の最近の業績に於いては、故意に敵對する如く、分析に宗教的觀念を浸透させるやうになつてゐる。

「トーテムとタブー」に關する四論文に於いて私は、民族心理學の問題を分析に依つて取扱はうと試みた。これ等の諸問題は直ちに、我々の最も重要なる文明組織たる國家統制、道德、宗教などに導いて行つたが、更にまた近親姦禁斷や良心の問題にも這入つて行つた。かくの如くにして闡明せられた諸々の事柄が今後の批評にどの程度まで堪えて行くであらうかは、今日のところでは恐らく何とも云へないであらう。

分析的思考を美學的題目に應用したものとしては、「機智」"Witz" に就いての拙著が最初の實例を與へたものであらう。これ以上の事はこの領域に於いて豐富な收獲を期待する必要のある人々の研究と努力に俟たねばならない。併しこの方面へは專門科學からの仕事の力が背く缺けてゐるのだが、この方面の誘惑に應じたものはハンス・ザクスで、彼は一九一二年にランクと共に主宰して「イマゴー」"Imago" と云ふ雜誌を發行した。哲學體系や人格を精神分析で照し出さうとの試みを、ヒチマ

ン Hitschmann とキンテルスタイン V. Winterstein の二人が始めたが、それの存續と深化とを希ふて已まない。

幼兒性慾に關する精神分析の革命的見解、卽ち幼兒に於いて性亢奮が如何なる役割を果すか（フーグ・ヘルムート博士）、繁殖と云ふことには用ゐられなくなつた部分の性慾はどうなるかなどの事柄は、早くから注意を敎育學に向けしめ、またこの方面に於いて分析的見地を第一におくやうになつたのである。分析のこの方面に、尊敬すべき熱意を以て沒頭し、斯學を宗敎家や敎育家に紹介したことは牧師プフィスターの功績である。（精神分析的方法、一九一三年。モイマン Meumann 及びメスマー Messmer の敎育學第一卷。）スキツルに於ける敎育學者の全部をして、彼と同じく斯學に興味を持たせることに彼は成功した。彼と同職の他の人々はたゞ彼と同じ信念を持つやうな風をしてゐたゞけで、自分等はむしろ幕の背後にかくれてゐることを好んだのである。ギインの分析者の一部分は、精神分析から脫退の途上に於いて一種の醫學的敎育學に辿りついたやうである。（アードラー Adler 及びフルトミュラー Furtmüller の健康と敎育、一九一二年。）

以上の記述は不完全ながら、私はまだ十分に大觀することの出來ない諸々の關係（醫療的精神分析と他方面の學問との間に生じた諸關係）を指示しようと試みたのである。多くの研究者たちが幾十年

も題つてするに足るほどの材料がある。さうしてさう云ふ仕事も、精神分析に對する抵抗がその母體的分野に於いて克服されゝば、成されるであらうことを私は疑はない。(二)

註(一) 『精神分析に對する興味』と題する拙論(原書全集第四卷)參照。

このやうな抵抗史を書くことは、現在ではまだ効果がないし、またその時機でもないと私は考へてゐる。この歴史は現代の諸學者のために甚だしく名譽あるものではない。併し私は同時に云ひ添へておきたいと思ふ、私は精神分析の反對者等が單に反對者なるが故に、十把一からげに嘲罵はせぬと云ふことを……。二三の下らない個々人は別問題として、彼等は戰の時には兩端を持し、洞ヶ峠をきめ込んでゐる連中だ。私は實は、これ等反對者流の態度を説明することは分つてゐたし、なほその上、精神分析のために各人の最も惡い面が露出するやうになつたと云ふことを知つた。併し私は自分でも反對者には一切答辯をしないやうに、また自分の感化を受けた者に對しては、論爭には拘泥するなと云ふことに、決心した。公の、又は文筆上の討議の効用も私には、精神分析のための論爭の或る條件の下に於いても疑はしいと思はれる。總會や聯合會の席上での多數決はきまつてゐるし、反對者諸君の公平と正直とに對しては私はあまり信用してゐない。自分が觀察に依つて知つたところに依ると、「學問的論爭に於いて慎み深く、沈默し、眞實に與することは、極少數者にのみ可能である」。さうして

學問上の論戰の印象は私には嘗から甚だ落膽的であつた。多分人々は私のかうした態度を誤解したであらう。私などには傾聽するに當らぬと人々の思つたであらうほど、私は人のいゝ臆病者と考へられたであらう。それは間違つてゐる。私としても人並に罵詈したり怒號したりすることは出來る。併し私は自分の中心に存する感動の表現を文字にすることが出來ないのだ。それ故に自分は全然控へてゐる事にしてゐるのだ。

恐らく自分としては自分の中なる情熱を、また自分の周圍に情熱を、思ふさま荒狂はせた方が、多くの方面に於いてよかつたのだらう。我々は精神分析がギインと云ふ都市の環境から生じたと云ふ面白い起源說明論を承つた。ジャネーは一九一三年に於いてなほかうした說明の仕方を用ゐて恬として恥ぢなかつた。そのくせ彼はパリ人であることを誇りとし、またパリはギインよりも道德堅固な都であるとは、まさか云ひ張れないのに……。と云ふのはどう云ふ意味かと云ふに、精神分析が神經症は性生活の障害から生ずると論ずるところを見ると、かゝる學問はたゞギインのやうな、その雰圍氣が他の都市に於いては見られぬ程肉感的であり淫蕩的である都市に於いてのみ生じ得るもので、これこそはギインの特殊事情を、云はゞ理論の形で端的に表出したものであると云ふのである。ところで私は別に愛鄕者ではないが、併しこの理論は私にはいつもとりわけ馬鹿げて見えるのである。ギインへ

の批難は今一つの批難（それを人々は公然と口外することを欲しないところの批難）の婉曲なる代理に過ぎないのだと、屡々考へようとするほど、馬鹿げて見えるのである。云ふことが反對ならば、事實に就いて見ることだ。こゝに或る都市があつて、その都市の住民たちはその性的滿足に特別の制限を加へ、同時に特別の神經症的傾向を示したと假定しよう。さう云ふ都市を觀察する人ならば、これ等二つの事實が相互に結付き合ひ、その内の一つが他から導き出されてゐると云ふことを考へ付くであらう。ところで、これ等二つの豫想的事實はボインには當て嵌らない。ボイン人は他の大都市人よりも攝慾的でもなければ、神經症的でもない。性關係はいさゝか無拘束で、謹愼の度は貞操を誇る西方及び北方の諸都市よりは少い。ボインの事情はこのやうであるから、右に假想せられた觀察者は、これに依つて神經症の源因を説明し得るよりは、寧ろまごつかされるであらう。

ボインの町は併しまた、精神分析の發生に就いての已の參與を一所懸命に否認してゐる。如何なる他の土地に於いても、學問あり敎養ある者等が分析者に對して敵對的無關心を示すこと、ボインに於けるほど甚だしいところはない。

それに就いては多分私に於いても多少の責がないでもないであらう。私があまり廣く公表することを避ける政策をとつたのが惡かつたかと思ふ。ボインの醫學會に於いて精神分析を喧々たる問題にさ

せ、かくてありたけの情熱を吐き出させ、本来舌にも心にも互に持合つてゐる抵抗と嘲罵とを出来るだけの大聲で怒鳴らせるやうに私がさせたならば、多分今日では精神分析に對する邪魔は克服され、斯學はもう早この生れ故郷に於いて他郷人扱ひをされなくても済んだであらうに……。で、併し、その曲中人物のワレンシュタインをしてかく云はせてゐる詩人は、成程正しいかも知れない。——

『私は騒動のためにギインの人々を捌いたのだが、彼等はそれを許してはくれない。』

精神分析の反對者に向つてその間違ひと出鱈目とを優しく諄々として説くなど云ふことは私の柄にないが、この役目を引受けてくれたのはブロイラーで、彼は一九一一年に『フロイドの精神分析、辯護と批評』,, Die Psychoanalyse Freuds, Verteidigung und kritische Bemerkungen, " なる一書を物してこの任務を誠に見事に果した。兩方に對して等しく批判的なこの書を、私として賞揚してゐることは自明であるからして、私はこの書に就いて批難しなければならない事を、取敢へず云ふことにしよう。この書はやはりどうも偏頗であるやうに私は思ふ。反對者の缺陷に對してはあまりに寛大でありながら、斯學遵奉者のそれに對してはあまりに峻嚴であるやうに見える。かゝる特質からして説明がつくのではあるまいか、何故にこれほど尊敬されてゐる人であり、これほど疑ふまでもない適材であり、これほど獨立の人でありながら、この精神病學者の判斷が専門同僚の間にも早感化を及

ぼしてゐないかと云ふ事實の說明が….。『感動性』 „Affektivität“ (1906) の著者は敢へて不思議に思はないであらう、或る著書はそれの內容價値に依つてよりは、それの感情の調子に依つてそれの効果が決定されてゐることを示しても….。この効果の今一つの部分――精神分析遵奉者への効果――をブロイラーは後に自分で打壞した。彼は『フロイド說批判』 „Kritik der Freudschen Theorie“ (1913) の中で、精神分析に對する彼の心的態度の反面を暴露したからである。彼はこの書の中で精神分析學說の構造の大部分を破壞してゐるから、この辯護者の助太刀を得て反對者等は大いに滿足したに違ひない。ブロイラーがこの裁斷の規準となつたものは、併しながら、新たな論題やよりよき觀察ではなくして、ひたすら自分自身の認識の立場への準據であつて、この認識の如何に不備であるかを著者は以前の著書に於けると同樣、一向氣付いてゐないのである。このやうにして精神分析にとつては、容易に拂拭し難き損失が來り脅すものゝ如くに見えた。併し、彼の最近の著書(『早發性痴呆症批判』 „Kritik der Schizophrenie“ 1914) に於いては、ブロイラーは、早發性痴呆症に關する彼の著書中に精神分析を取り入れた彼の企てに鑑みて、彼自身の所謂『自負』 „Ueberhebung“ なるものをする決心をした『今や私は自負をやらうと思ふ。』と云ふのは、これまでの種々の心理學は心理的症候と病氣との間の關係を說明するために殆ど何事をもなしてはゐない、併しかの深部心理學はこの說明

の一部分を爲すべき心理學を與へてゐる、さうしてさう云ふ心理學は醫學が患者を理解し、合理的に治療するために必要だとの意味である。」また私は自分の早發性痴呆症に於いて、かゝる理解に向つて一つの小さな歩みを爲したと云はうとするものである。初めの二つの主張は慥に正しいが、最後のは間違つてゐるかも知れない。』

ところで、『深部心理學』とは精神分析のことに外ならないのであるから、我々はこの懺悔を以て只今のところ一先づ滿足することが出來る。

精神分析總論

三、離反と確立

手短かにしてくれ、
最後の審判の日にはそんなことは屁の河童だ。
――ゲーテ――

第一回の精神分析者私會のあつた二年後に、第二回の私會が、今度はニュルンベルグで（一九一〇年三月）催された。その中間の年代に私は、アメリカで歡迎された印象や、ドイツ諸國で益々敵對される事や、チウリヒ派の人々の援軍に依つて意外の心强さを覺えたことなどのために、一つの意圖を持つやうになり、その意圖を私は友人フェレンチの助力を俟つてかの第二回目の私會に於て實行に移した。私は精神分析運動を組織化し、その中心點をチウリヒに移し、將來もこゝが首腦部となつて注意してやつて行くやうにと考へた。かうして私が斯學の基礎を他所に置いたことは、精神分析從事者の間に甚だしい反對を招いたから、私はこゝに私の動機を事細かに述べておかうと思ふ。それを述べることに依つて自分があまり寬容でなかつたことが是認せられるやうにならうとも、それに依つて自

分が是認せらるればと希ふのである。

私はポインと關係してゐることはこの若き運動を促進させることではなく、寧ろ障害になると判斷したのである。歐洲の中心にあるチウリヒのやうな場所で、大學の教師が自分の精神分析研究所を開いてゐたのであるから、その土地の方が遙かに見込のあるところだと私には思はれたのだ。私は更にかう考へた、第二の障害は私と云ふ人物に在るのだと。私の人物は、斯學に贊成すると否とに依つてその評價が賞讃と憎惡とに於いて甚だしきに過ぎた。人々は私をコロムブス、ダーヰン、ケプレル等に比較するかと思ふと、私を麻痺症だなどゝ罵つた。私はこのやうに私自身を、精神分析發祥の都市同樣に、背後に押遣つておかうと欲したのだ。それに私はもう青年ではなかつた、遼遠なる前途を眺めて、かくも遐く指導者となることの任務が自分に下つて來たことを壓迫的に感じた。併しながら誰かゞ大將にならなければならないと私は考へた。分析の仕事に携る總ての者に如何なる誤りが待伏せしてゐるかを私はあまりによく承知してゐた。で、教訓や諫止を唯々として行つて與れる權威を立てゝおいたならば、さう云ふ誤りの多くを犯さなくても濟むだらうと考へたのである。その權威は私がざつと十五年間の、利益の伴はない元祖だと云ふので、まづ私にあると云ふ事になつた。そこで私はこの權威を私より若い人で、自分の退職後、當然自分の代理となるべき人に讓渡する役目になつた。

これはユングより外には適任はなかつた。何故ならば、ブロイラーは私と同年輩者であつたし、而もユングの卓れた才能、彼が既に分析のためになした寄與、彼の獨立の位置、並びに彼が本質的に有する確かな精力的な印象などが物を云つた。たほその上、彼はいつでも友情的に私を遇し、私のためなら人種的先入見（それを彼はこれまでは持つ方ではあつたが）を放棄するに吝でないやうに思はれた。私はその當時には、ユングを操んだことが、右に數へ擧げたやうな種々の利益はあるに拘らず、甚だしく不幸な選擇であつたとは夢にも感付かなかつた。卽ち他人の權威を保持することが出來ず、況んや自分自身の權威を築くことも出來ず、そのくせ自分のエネルギーを、自家の興味を、無反省に追及することに專らにして了ふ如き人物を操んだのだとは夢にも氣付かなかつた。

一つの公認的學會の形式を必要だと私は考へた。何となれば、精神分析が一般化するや否や、忽ち斯學が亂用せられて滅茶々々になつてしまふことを私は恐れたからだ。さう云ふ場合に說明をしてやる場所が存在してゐなくはならない。そのやうな馬鹿げたものは精神分析ではない、斯學とは何の關係もないとのことを云つて聞かせる制度が存しなくてはならない。各地團體（それの集合が國際學會となるのだが）の會に於いて、精神分析の療法が敎へられなければならない。また醫者は分析上の敎育を受け、彼等がこれを實施するに就いては、一種の免許を與へることにしてよい。また精神分析の

遵奉者は親密に交際し、相互に支持し合ふことが望ましく思はれた。官學は斯學遵奉者に大いなる破門を宣し、斯學を實施した醫師と病院とにボイコットを喰はせたのであるから・・・。

私が『國際精神分析學會』を設立したのは、これ等の事を爲したいと思つたばかりで、それ以外に意志はなかつた。そこには、可能なことより以上のものが、どうやらあつたらしかつた。私の反對者たちは、この新運動を阻止することが不可能であると知つたに相違ない如く、私としても自分の指定した道をこの運動が進んではくれないと云ふことを知つたのであつた。フェレンチがニュルンベルグに於いて申出た建議は受容せられたが、ユングは會長に擇ばれ、ユングはまたリクリン Riklin を己れの書記長とした。また學會誌の發行が決議せられ、それに依つて中央學會と各地支部との通信交渉はなされた。學會の目的は『フロイドに依つて創始せられたる精神分析學を純粋の心理學としてのみならず、また醫學及び精神科學に對する理論的及び實踐的應用としてもまた保護し、且つ發達せしむるに在る』と宣明せられた。併しヰインの人々の側からはこの計畫には熱心な反對がなされた。アードラーは、これでは『學的自由の檢閲と制限と』が意圖せられてあるのではないかとの虞れを熱烈な感情を以て語つた。ヰインの人々はそこで頑強に主張して、チウリヒを學會の定着地とせず、二年毎に改選せられる當時學會長の定住地を以てそれに充てることにした。

總會に集つた者は三地の團體で、卽ちアブラハムを支部長とするベルリンの團體、學會の聯結事業のために支部長を出席せしめたチウリヒの團體、私がアードラーをしてその指揮に任ぜしめておいたヰインの團體であつた。第四の團體たるブダペストのそれは、漸く後になつて參加する事が出來るやうになつた。ブロイラーは病氣に妨げられて總會には出なかつた。彼は後に、學會に入ることを原則的に遲疑するやうになり、その後私を通じて入會の個人的約束を定めてゐたのだが、併しそれから間もなくチウリヒに意見の相違が生じたゝめに入會しないことになつた。チウリヒの連中とブルグヘルツリ病院との聯結は、これに依つて破れた。

ニュルンベルグに於ける總會の結果の一つは『精神分析中央雜誌』創刊の事で、この事にはアードラー及びステーケルも參加した。この雜誌には明かに始めから反抗的傾向があつて、ヰインはユングの選擧に依つて脅された主權を奪還することになつた。併しこの中央雜誌の二人の計畫者がこれを發刊してくれる書肆を見付けることの困難なあまり、私のところへ來て別に論敵を作るわけではないからと云つて、自分等の意の保證として拒否權を私に許したので、私は出版者としての役目を引受け、新しい機關に熱中した。その第一卷は一九一〇年の九月に出た。

私は精神分析總會の歷史を續ける。第三回總會は一九一一年九月ワイマールに催され、その雰圍氣

及び學的興味に於いて前二回の會に勝つてゐた。パトナムはその會に出席し、アメリカに歸國してから會員諸氏の心的態度に好感と敬意とを持ち、私がこの第三回總會に用ゐたらしい言葉を引用してゐた。卽ち、『彼等は眞理の一部を支持することを學んだ』[二]と。實際、この學會の總會を訪れた總ての人々は、學會に就いて好印象を受けたに相違なかつた。前二回の司會は私が自分で勤め、各講演者には其報告の時間を與へ、それに就いての討議を私的な思想交換に指定した。ワイマールに於いて會長として司會の役を引受けたユングは、各講演の後に再び討議をするやうにしてゐたが、併しその時はこの討議はまだあまり騷がしくはならなかつた。

註(一) On Freud's Psycho-Analytic Method and its Evolution. Boston medical and surgical Journal, 25. Jan. 1912.

その後二年、一九一三年九月にミュンヘンで催された第四回總會はまた、大分變つた樣子を示したが、その時の事は出席者諸氏にはまだ記憶に新たなわけである。ユングはこの總會を司會したが、その遣り方は好ましくなかつたし、また正しくもなかつた。講演者は時間を制限され、討議を放任したゝめに講演の方が押されてしまつた。惡く頭の働くホーヘ Hoche が偶然の親分氣どりのために、分析者等の會議をする同じ家の中に宿をとつた。ホーヘは長上に盲目的に從ふ狂信的宗徒のやうな已れ

の特質を彼等分析者たちが惡く（沒理性的に）導いたのだと、苦もなく信ずることが出來たやうである。だらけた、氣の拔けた相談の結果がまた、ユングを國際精神分析學會の會長に再選した。出席者の五分の二は彼を信用しなかつたが、彼はその選擧を受諾した。人々は再會の要求を持つこともなしに、互に別れた。

國際精神分析學會の勢力は、この總會の時分には次のやうであつた。――ポイン、ベルリン、チウリヒの各地團體は一九一〇年に於けるニュルンベルグの總會に參加した。一九一一年の五月にはミュンヘンの一團體が、ザイフ博士 Dr. Seif を支部長として更に參加した。同じ年には始めてアメリカに支部が出來た。名稱を『ニュウ・ヨオク精神分析協會』"The New York Psychoanalytic Society" と呼び、協會長はブリルであつた。ワイマール總會の際には、第二のアメリカ團體の創立が許容せられ、これはその翌年に『アメリカ精神分析學會』"American Psychoalalytic Association" となつて誕生して、カナダ及び全米の會員を網羅し、パトナムを會長とし、ジョーンズを書記長に選んだ。一九一三年のミュンヘンの總會直前に、ブダペストの團體がフェレンチを長として活動した。それから間もなく、ロンドンに最初の團體が起つた。支部長は當時英國に移住したジョーンズであつた。今や成立した支部は八ケ所となつたが、その支部員の數だけでは、精神分析の、組織せられざる學徒や進

準者の套を判定すべき標準とならぬことは勿論である。

また定期刊行の精神分析文獻の發達も、さつと述べておく必要がある。精神分析のための始めての定期刊行物としては、『應用精神學文書』„Schriften zur angewandten Seelenkunde“で、これは一九〇七年以來、臨時的に刊行せられ、現在では十五卷に達してゐる。（發行者は始めはヴインのヘルラー H. Heller であつたが、後にはドイティケ F. Deuticke になつた。）この文書に現れたのは、フロイド（一及び七卷）、リクリン、ユング、アブラハム（四及び十一卷）、ランク（五及び十三卷）、サドガー、プフィスター、グラーフ M. Graf、ジョーンズ（十及び十四卷）、ストルファー及びフーグ・ヘルムート等の著作であつた。その後、またサドガー（十六及び十八卷）、キールホルツ Kielholz（十七卷）のが現れた。後に言及する『イマゴー』の出現は以上のやうな形式の雜誌の價値を多少とも低めることになつた。一九〇八年ザルツブルグに於ける集會の後に、『精神分析的及び精神病理的研究年報』が誕生し、ユングの編輯の下に五ケ年間存續したが、今では題名をいさゝか改め『精神分析年報』となつて、別の編輯者の下に生れ返つて世に出た。今度のはこれまでのやうに、研究發表の機關として内輪の研究を集めると云ふだけでなく、編輯部の活動に依つて精神分析分野に於ける一切の現象、一切の業績を評價せんと試みることに依つてその任務を果さうとするものである。(二)

註（一） 學會雜誌のための作用

「精神分析中央雜誌」は前にも云つた通り、國際學會創立（一九一〇年ニュルンベルグにて）後に、アードラーとステーケルとに依つて創刊せられたものであるが、その後間もなく動きのある運命を閲した。既に第一卷の十號に於いて、アルフレッド・アードラー博士が主筆と學的見解の相違のために、編輯部から自發的に手を退くと云ふ事が出てゐる。ステーケル博士はそれ以來、唯一人の編輯者として殘つた（一九一一年の夏）。ワイマールに於ける總會に際し、中央雜誌は國際學會の公認機關として昇格し、學會會員は同誌に寄稿して毎年の內容增加に資することを許された。第二年目の第三號（一九一二年の冬）以降、ステーケルは同誌の內容に對して單獨責任を負ふ事になつた。然るにステーケルは自分の立場を公然と宣言することが出來ないと云ふので、それでは自分も雜誌の發行責任者となることが出來ないから、これを辭任し、改めて「國際精神分析醫學雜誌」。Internationale Zeitschrift für ärztliche Psychoanalyse" と云ふ新しい機關雜誌を新學のために造らなければならないことになつた。殆ど總ての會員、並びに出版者ヘルラー氏の助力に依つて、この雜誌は一九一三年の一月に創刊號を出し、國際精神分析學會の公認機關として中央雜誌に代ることが出來た。

その間に、一九一三年の始めから、ハンス・ザックス並びにオットー・ランクの兩博士に依つて新雜誌

『イマゴー』(ヘッラー氏出版)が創刊され、專ら精神諸科學への新學の應用に向けられることになつた。『イマゴー』誌は目下は丁度第三年目の中頃にあるわけで、醫術的分析には緣のない人々の間にも幸にして愈々熱心な讀者を增しつゝある。(二)

註(一) これ等兩雜誌は一九一九年に國際精神分析學會に委讓せられ、現在(一九二三年)では第九年目に入つてゐるわけである。(本來は『國際雜誌』の方は十一年目、『イマゴー』の方は十二年目に當る。(戰爭のために『國際雜誌』の第四卷は一年以上、卽ち一九一六――一九一八年に亘り、『イマゴー』の第五卷は一九一七――一九一八年に亘る。)『國際精神分析雜誌』は第六卷の第一號から『醫』の一語をとられることになつた。

これ等四種の定期刊行物(『應用精神學文書』。『年報』。『國際雜誌』。『イマゴー』。)以外にも、ドイツ語又は他の國語で、斯學の文獻として價値ある論文を揭載する雜誌が相當に在る。モートン・プリンス Morton Prince を發行人とする『異常心理學雜誌』"Journal of Abnormal Psychology" は大體に於いて非常によい分析的論文を收載してゐるので、アメリカに於ける分析學文獻を代表する主要雜誌であると云つて大過はない。一九一三年の多に、ニウ・ヨオクのホワイト White, ジェリフ Jelliffe 兩氏が精神分析專門の新雜誌『精神分析評論』"The Psychoanalytic Review" を創刊したが、この雜誌は、アメリカに於ける醫者にして精神分析に興味を持つ者は多いが、彼等にとつてはドイツ語は

雜物であると云ふ點に眼をつけたものと思はれる。(一)

註(一)　一九二〇年にはジョーンズは英米の讀者のための英文『國際精神分析雜誌』の創刊を企てた。

×

私は今や精神分析學徒間に起つた二つの離反運動を述べたければならない。第一の離反運動は一九一〇年に於ける學會創立と一九一一年に於けるワイマールの總會との間に起こり、第二のはワイマール總會後、卽ち一九一三年ミュンヘンに於いて起つたのである。かゝる離反のために私の覺えた失望は避けらるべきものであつたと思ふのだ。もし我々が分析處置を受けてゐるものに於いて起る現象をもつとよく注意してゐたならば……。誰でも好ましからぬ分析的眞理に始めて近づいて來たものはみな逃出すと云ふことを、私は十分によく承知してゐたのだ。また人々は總ての理解を自分の抑壓に依つて押返す(その抑壓を保持する抵抗に相應して)、從つて分析への理解も或る一定の點以上には超えて來ないと云ふことをも、私は常々自分で主張して來たのだ。併し分析を相應の深さにまで理解した者がその理解を再び放棄し、喪失して了ふと云ふことは、私の期待しないところであつた。併し患者に就いての毎日の經驗の示すところに依るに、分析的認識は深層に達する毎にそこに特に力强い抵抗が存してゐて、その認識が全部的に撥ね返されて來ることのあり得るものである。骨の折れた操作に

依りそのやうな患者をして或る部分の分析的知識を把握せしめ、彼自身の所有としてその知識を抜はしめておいても、而も次の抵抗に支配されると忽ち一切の收獲を風に吹飛ばされ、元の默阿彌になつて了ふことのよくあるものである。さう云ふことは患者分析の場合だけかと思つたら、分析者の間にもあり得るものだと云ふことを、私は知るやうになつたのである。

これ等二つの離反運動の話を書くことは、容易な仕事でもなく羨ましい役目でもない。何となれば、一方私にはそれをやるだけの强き個人的衝動が缺けてゐるし——私は恩を着せたこともないし、また締めつけるまで復讐しようと云ふ考へもないから——、他方に於いて、そんな事をすれば無考へな批難の感染に自分が罹つたことになるし、また分析の敵が非常に見たがつてゐる『精神分析者同志の泥仕合ひ』と云ふ見せものを演じて見せることになるのを、私はよく承知してゐるからだ。私は分析以外では反對者を相手にしての鬪ひはやらぬと云ふことに就いて随分な克己をしてゐるのだ。而も私は今や以前の門下學徒と、或は今もさう呼ばれむことを欲してゐる者等と、戰はねばならぬ羽目になつた自分を見るのである。併し私はそれに就いてあれこれと遠ふことを許されないのだ。沈默してゐることは安易であり臆病であつて、現在の弊を公然暴露するよりは一層事態を惡化せしめることであらうと思ふ。他の學的運動をしたことのある者は誰しも知る通り、彼等の場合にも類似の障害と不和と

が生じてゐるのが常なのだ。併し恐らく、彼等はそれをもつとひた隠しに隠してゐるのであらう。精神分析は多くの習俗的理想を否認するものであるが故に、かゝる事柄に於いても更に正直な態度をとるであらう。

今一つの、それと感じにくい厄介事は、私が離反者二人の分析的解釋を全然しないでおく事が出来ないと云ふ點だ。併しながら、分析は論爭に使用するに適したものではない。分析にはまづ被分析者の承諾が必要であるし、次に分析者が優秀で被分析者がそれよりも劣つてゐると云ふ關係を必須條件とする。さう云ふ次第であるから、分析を論爭的意圖のために用ふるものは、被分析者がまた逆に彼を分析し返し、かくてこの討議に於いて、不偏不黨の第三者を納得させることが全然除外されると云ふ事を覺悟してかゝらねばならない。で、私は精神分析の利用を、從つてまた私の批難者への無分別な行爲と攻撃とを最小限度に制限し、且つ私はかゝる方法に依る批評を何等學的なものと考へてゐないと云ふことを言明しておかう。私は自分の排斥する學説に偶然的の眞理内容があるにしても、それを問題にするのではないのだ。別にその學説の否定を試みようとするのではないのだ。そんなことは分析の分野に於いて適材が他にゐるから、その人に任せておくべきことだし、又それを或る部分既にしたものもゐる。私の言つておきたい事はたゞ、これ等の學説が分析の根本命題に抵觸すると云ふ事

――また如何なる點に於いて誤解するかと云ふ事――であり、從つてまたこの名の下にそれ等を包括してはならないと云ふ事である。それ故に私が分析を用ふるのはたゞ、分析者の間に如何にして分析からの離脱が起るやうになつたかを理解し得るやうにするために過ぎない。別れ際に於いても、私はやはり純粹に批判的な言葉を以て精神分析のよき權利を守らなければならない。

精神分析は神經の說明を以て第一の任務と認めたのである。さうして抵抗と轉嫁との二つの事實を出發點として數へ、それ等二事實の存するのは、第三の事實（抑壓の理論に於ける健忘の事實）を考へ合せて見ると、神經症は性本能力と無意識とのためであると斷じたのである。精神分析は決して人間の精神生活一般の全體的理論を與へようとしたことはない。これに依つて得た知識は、人間が他の方法で得た知識を補つて完全にし、また是正するに資せらるべきだと主張するのである。アルフレッド・アードラーの理論はこの目的を遙に越えてゐる。彼の理論は人間の行動や性格をも、人間の神經症的、心理的病氣と同じ遣方で理解し得るやうにしようと欲する。彼の說は、その發生史の動機から云つても常に神經症的領域を對象とするものであるのに、それ以外のあらゆる分野に、實際上適當するものである。私は永年の間アードラー博士を研究する機會を持つて來たが、彼は卓越した頭腦の持主ではあるが、その頭腦は殊の外思辨的であることを否み得ない。彼は私から種々の「强制」を受けた

と云つてゐるが、その强調の證據として、私が彼に、學會成立以後に、ヰイン支部の指揮を委託したと云ふのは本當である。學會の全會員の側からたつての要求があつたので、私は已むなく學問上の會議の議長の役を自分で取上げることにしたのである。彼にはどうも無意識の材料を十分に扱ふ才能があまり豐富でないことを認めた時に、漸次私は、彼が精神分析と心理學との關聯、更に本能現象の生物學的現象への關聯を發見するやうになつて行くだらうとの期待を持つた。さうしてそれには、内體器關の劣等に就いての彼の立派な研究が丁度役に立つだらうと思つたのは、或る意味で正當であつたのだ。彼の仕事の個人的動機に關しては我々は公然と語ることが許されるのだ。何となれば、彼はそれを自分でヰイン支部會員の一小會合の席で、披瀝したからである。「では貴君等は信ぜられるのですか、私の全生涯が貴君等のための日蔭者になつてしまつても私が大いに喜んでゐるものであると……?」もつと若い男が公然名擧慾のためにかう云ふ事を放言するならば、私はそこに非難すべきものを認めない。何故ならば、人間は自分の仕事の促進力、衝動力として名擧慾をこの上ないものと察するであらうからだ。併しそのやうな動機に支配されてゐるにもせよ、人々は英國人がその微妙な社會的氣轉を以て unfair（不公正、横車押し）と名付けてゐる事柄（ドイツ語にはこれほどうまく云ひ當てた言葉はない）を避けることを心得てゐなければならない筈だと思ふ。ところがアードラーには如何に

この心得が足りないかと云ふことは、彼の細々した不正のためにその著作に條理が出來、途方もない先取權の主張がそこゝに現れてゐることを見れば、思ひ半ばに過ぐるものがある。ヰインの精神分析學會に於いて、私は嘗て直接聞いたことがある、『神經症の統一』や『動的見地』と云ふ考へ方は抑々彼が先づ唱へ出したものだと云つてゐるのを……。それを聞いて私は大いに驚いたのである、何となればそれ等二つの原理は私がアードラーを見知らない以前から自分の唱道して來た說だと常々信じてゐたからである。

太陽の位置を占めようとのアードラーのかゝる努力は、併しながら、精神分析にとつてためになると感ぜざるを得ないところの一つの結果を生むことになつた。一致し難き學問上の反對の現れて來た後に、アードラーをして中央雜誌の編輯部から私が脫退せしめた時に、彼は同時に學會からも退いて、自ら別に新學會を創立し、名づくるに『自由精神分析學會』と云ふ趣味ある名稱を以てした。併し精神分析の門外漢から見ると、二種の精神分析者の見解の相違を區別することは、我々歐洲人が二人の支那人の顏に存するニュアンスを認識するのと同樣に難事であることは明かである。『自由』精神分析は『公認的』『正統的』精神分析の蔭にかくれ、後者への附屬、別派として取扱はれるに過ぎなくなつた。そこでアードラーはいゝ考へを起こし、精神分析への未練を斷ち切り、彼の學說を『個性心理學』

として、精神分析から截然區別することにした。普天の下、卒土の濱、住むべき所はいくらでもあるのだから、誰でもそれの出来るものは邪魔されないで地上をあちこち歩き廻ることは慥に正當であるが、併し自分の理解し得ず、和解し得ざるものと共に同じ屋根の下に暮してをるのは、好ましからぬことだ。アードラーの『個性心理學』は今や、精神分析に反對する種々な心理學的傾向の一つとなつたが、それの將來の發展は精神分析の興味の埒外にある。

精神分析は『體系』化することを注意深く避けてゐるのに、アードラーの理論は始めから一つの『體系』であつた。それはまた、例へば夢の材料に對する覺醒思想に就いて見られる『第二次仕上げ』の著しい一例である。この夢の材料は、アードラーの場合には、新たに獲られた（精神分析的研究の）材料が代りになつてゐる。さうしてこの材料は自我の見地に依つて徹頭徹尾纏め上げられてゐる。自我の承知してゐる諸範疇の中へと持ち來たされ、そこで飜譯せられ、適用せられ、さうして夢の構成に就いてなされるのと丁度同じやうに、誤佛せられるのである。それ故にアードラー說はその主張するところに特色が見られるのではなく、その否定するところに特質が見えるのである。從つて彼の說は、價値不同の三つの要素から成立つてゐる。卽ち、自我心理への善き寄與と、（これはあらずもがなのことだが、我慢のならぬわけでもない）分析的事實を新たな組合案に譯し直すことゝ、それ等の事實

が自我の豫想（體系）に適應しない限りに於いてそれ等を歪曲し附會することゝである。第一種の要素は、精神分析がこれに特別の注意を拂ふことを責任とするものでないが、哲學は決してこれを看過することをしなかつた。精神分析は寧ろ、あらゆる自我の働きにリビドー的要素が混合してゐることの方に、より大きな興味を示さなければならなかつた。アードラー說ではその反對に、リビドー的本能感情に自我の助勢があると云ふことを主張してゐる。これも結構な考へであらうが、たゞアードラーはこの考へ方を誇張るのあまり、如何なる場合にも自我本能の要素のために都合のよいやうにリビドー充奮（感情）を否定するから困るのである。彼の理論はこれに依つて、總ての患者や我々の意識思想一般が爲すところと同じ事をなすのである。つまり、ジョーンズの所謂『理屈づけ』（ラショナリゼーション）に依つて無意識の動機を被ふやうになるのである。アードラーは女を征服すること、上になることを、性行爲の最も力强き本能衝動力だと賞揚してゐるほど、この點に於いて徹底してゐる。併し、この猛者振りをやはりその著述に於いても示してゐるかどうか、私は知らない。

總て神經症的症候の存在し得るのは、それが妥協となつて現れてゐるがためであると云ふことを、精神分析は夙に認識してゐた。それ故に、抑壓をなすところの自我の要求を、症狀は、何等かの程度に於いて容認しなければならないのだ。それに優先權を與へ、有効に利用して貰はなければならない。

でなければ、症候も、本來的に發生して拒否せられた本能充當それ自身と同じ運命に陷らなければならないのだ。『病氣の利得』"Krankheitsgewinn"と云ふ術語は、かゝる事情を云ひ表はしたものなのだ。自我に對する第一次的の利得（それは既に發生した時から効果を示してゐる筈だ）を第二次的の部分（これは症候が存續してゐなければならない場合に、自我の別の意圖に依屬して生ずるのだ）から區別することは、當然であらう。また、この病氣の利得が奪はれるか、或は現實の變化の結果としてこの利得がなくなつた場合には、症候の癒ると云ふ機制が生ずると云ふことも、分析者には隨分前から分つてゐた。こんなことは確證するにさして困難でなく、洞視するに大して骨は折れないが、アードラーの說に於いてはこの事が主に强調されてゐる。而もそこに全然看過せられてゐる事は、自我が單に已むを得ずして德を爲すことが隨分屢々あると云ふ事である。卽ち、自我は望ましからぬ、己れに强制せられた症候を、それに依屬してゐる効用の故に甘んじて受けてゐる、例へば自我が不安を自己安全の手段として受容する如きことがあると云ふことである。自我はこの場合には、丁度曲馬場の道化役アウグストの馬鹿げた役割を演ずるのだ。卽ち仕草の變化は總て自分の指圖の結果だと見物に思はせるやうに、身振り手振りをしてゐるが、併し見物の中の最年少者ばかりが、彼のすることを信用してゐるだけだ。

アードラー說の第二の構造部分に對しては、精神分析は自家の財產に對するが如くに、責を負はねばならない。この部分はまた精神分析的認識に外ならないのだが、著者は十年間の共同操作に於いてあらゆる利用し得べき源泉からこの認識を造り來り、やがて名稱を改めて彼の所有と云ふ刻印を押して了つた。例へば「安全法」"Sicherung"と云ふ語は、私の用ゐた「保安處置」"Schutzmassregel"と云ふ語よりはよいと自分でも思ふ。併しそこに新しい意味があるとは認められない。「僞りの、虛構の、及び架空譚」"fingiert, fiktiv und Fiktion"の代りに前から用ゐられてゐた「空想せられた」"phantasiert"や「空想」"Phantasie"を置き換へて見るならば、アードラーの主張の中には前から知れてゐたものが隨分澤山に這入つてゐることが分るであらう。精神分析の側からはこの同一性は主張せられるであらう。よしんば著者が我々と共同で操作をやつてゐなかつた人であるにしても……。

アードラー說の第三の部分、卽ち面倒な分析的事實を變檘したり歪曲したりすることの中には、現在の『個性心理學』をして窮極的に精神分析と分袂せしめるものが含まれてゐる。アードラーの體系思想は明かにかうである、『男性的抗議』の形をとつて生活の上に、性格の構成に、神經症に、常に力强く現れるのは、個人の自己主張の意圖であり、『權力への意志』である……。この男性的抗議、これがアードラーの原動力であるのだが、これは併しその（抑壓の）心理的機制から離れた抑壓に外なら

ないのであつて、而も性的なものとなつてゐるのであるから、性は心理生活に於いて何の役割をも持たぬとする御自慢の說と一向しつくり合はない。ところで男性的抗議は儘に存在してゐる。併しこれが心理的事件の原動力にまで構成せられるに際して、觀察と云ふ事はたゞ踏上臺（それを離れることに依つて己自身を高める）の役目を果すに過ぎない。幼兒的願望の根本的な立場の一つとして、子供が成人の性行爲を觀察した場合を採つて見よう。やがてその子供が成人して、醫者がその人の生活史を調べて分析して見たとすると、かう云ふことが分る、卽ちその瞬間にこの幼き觀察者に二つの感情が起きてゐる。その子供が男兒だとすると、自己を能動的な男子の位置に据えようとする感情、今一つはその反對で、受身になつてゐる女に自分自身を同一化する感情である。これ等二つの心持ちはそれ〴〵に、この場景の偷視から快樂を持ち得るのである。たゞ前者のみが男性的抗議（もしこの概念に何等かの意義あらしむべしとせば）に從ふのである。第二の（女性への同一化の）心持の成行きに就いてはアードラーは何も氣にかけてをらぬし、また何も知つてゐないが、併しこの方が後年の神經症に對してより重大な意義を持つものである。で、アードラーは自我が局限せられて嫉妬的になつてゐる點を全部的に問題にし過ぎ、自我にとつて愉快な、從つて自我が要求する如き本能充奮（衝動感情）をのみ考慮に入れたのである。この本能充奮が自我に逆ふ神經症の場合は、途に彼の視野には

入らなかつたのである。

學說の根本原理を幼兒の心理生活に結び付けることの試みは精神分析に依つて拒むべからざるものとなつてゐるが、この試みに於いて、アードラーにとつては最も困難な（觀察の現實性からの）離脫と最も深刻な概念の混亂とが生じたのである。『男性的』及び『女性的』の生物學的、社會的、及び心理學的の意味は、彼の試みに於いて、望みなきまでに混淆せられてゐる。男兒にせよ、女兒にせよ、子供が自然發生的に女性を輕視することの上にその生活のプランを樹て、『俺は正しい男にならうと欲する』との願望を導きとするであらうことは、不可能であると共に、實際子供を觀察して見てもそんなことは認められることでない。子供は始めは性の區別の意義などゝいふことは、豫期してゐないのだ。寧ろ、兩性は同じ性器（男性器）を持つてゐるのだとの豫想から出發し、その性研究を性の相違の問題からは始めず、女性の社會的劣等視などゝ云ふ事には凡そ何の緣りもないのである。女の神經症に於いて男になりたいとの願望などは何等の役割を果してゐないものも少くない。男性的抗議を蔽證するものとしては、要するに本來の獨樂觀念を去勢脅威に依つて障害せられること（その人の性活動の受ける最初の邪魔）がある。神經症の心理的起源に關する論爭は結局、幼兒神經症の分野に於いて、解決せられなければならない。早期幼兒時代に於ける神經症を細かく分解して見ると、神經症の

病源に関するあらゆる誤りや、性本能の役割に就いての疑問はなくなつて了ふ。それ故にアードラーもやはり、ユングの著『幼児心理の葛藤』への批評に於いて、この場合（患者）の材料は『恐らく父に依つて』第一に定められたものだとの考へを採つてゐるのである。(註)

註（一）『精神分析學中央雜誌』第一卷、一二三頁。

私はアードラー説の生物學的背景にはこれより拘泥してゐないことにする。また刺戟たる器官上の劣等又はそれの主観的感情——これ等刺戟の何れであるか、我々には分らない——が基礎となつて實際に、アードラーの體系を支持することが出來るかどうかを、調べようともしないであらう。ただ云つておいてもよいと思ふことは、さうなれば神經症は一般的發育不全の副的現象だと云ふことになつて、併し實際に觀察して見ると、不具者、醜者、不具者、貧困者のみが大部分は自分の缺陷に對する反應として神經症を起すといふ如きことは見られぬ。また幼児性の中に劣等感を認めると云ふ興味ある説をも、私は取上げない。この説は、分析に於いて非常に强調されてゐる幼児性 Infantilismus の契機が如何に外衣を改めて再現出するかを示すものである。併し私は指摘しておくべき義務を感ずる。精神分析の發見した如何に多くの心理的問題がアードラー說に於いて完全にも見失はれて了はせてあるかどうかといふこと……無意識はそれでも『神經質の性格』に於いて一つの心理的特徴として現れ

てゐるが、併し彼の體系に對して何等の關係をも持つてゐないのである。後になつて彼は、一つの觀念が意識的であらうと無意識的であらうと、彼にとつてはどちらでもいゝと說明したが、彼として合理的である。抑壓と云ふ事に對しては、彼は以前から何等の理解を持たなかつた。ギインの學會に於いて或る講演（一九一一年二月）に關する報告の中で、かう云つてゐる。――『或る患者の場合にはリビドーを抑壓するどころか、續けてそれを保留しておきたいとの試みが明かに現れてゐる……』と。(一)その後間もなく、或るギインの討議に於いて、彼はかう云つた。――『抑壓は何處から來るかと諸君が尋ねるなら、その答へは、文明からだと云ふに在る。ところでその文明は何處から來ると諸君が尋ねるなら、それは抑壓からと人々は答へる。御覽の通り、これは畢竟するに、言葉の遊戲である。』と。アードラーは自分の『神經質的性格』說を辯護する方法としてこのやうな才智の一斷片を以てするのであるが、そのやうな斷片でもあるならば、かゝる三百代言式論法から脫する途を發見し得るに十分であつたらうに……。それはつまり、文明は前時代の抑壓行爲の上に成り立つものであり、また一切の新しき時代は同じ抑壓を完成することに依つてこの文明を受容するものだと云ふだけのことである。私は或る子供の話を聞いたことがあつたが、その子供は卵は何處から出來るかと尋ねたに對し、鷄からと答へられ、更に鷄は何處から出來るかと尋ねたに對し、また卵からと答へられたので、馬鹿

にされてゐるのだと思つて泣き出したと云ふのである。併しさう云つた大人は何も言葉の悪戯をしてゐるのではなく、何等かの眞實を子供に云つてはゐたのだ。(二)

註(二)　操會誌、第五號、チウリヒ、一九一一年四月。

精神分析の合言葉たる夢に關してアードラーが云つてゐる事は總て、同樣に遺憾千萬なものであり、無内容であることを呈露してゐる。夢は彼にとつては、まづ女性線から男性線への轉向であつた。これはつまり、夢に於ける願望充足說を『男性的抗議』の言葉に飜譯したものに外ならぬ。その後、彼は人間が意識的には拒否されてゐることを無意識的に可能ならしめる、それが夢の本質であることを發見した。夢が夢の潜在内容と混同せられること（彼の『先見的傾向』の認識はこれに基いてゐる）は、彼の先取權として承認せらるべきだ。メーデル Maeder もその點に於いて、後に同意見になつた。併しその間に於いて人々の看過してゐる事は、一つの夢（それの顯在的外見に於いて何等理解し得べきことを語つてゐない夢）の一切の解釋が、抑々その同じ解釋を適用することに依つて下されるのに、その解釋の豫想と結論とがまだ問題になつてゐると云ふ事實である。抵抗に就いてはアードラーは、これが患者をして醫者に反撥せしむると云ふことを知つてゐる。これは慥に本當である。これは抵抗が抵抗に役立つと云つてゐるに外ならないのだから……。併し、抵抗が何處から來り、またそ

の現象が患者の意圖に從ふのは如何にしてゞあるかと云ふやうなことは、自我に興味のないと同樣で、何等論議せられてゐない。症候や現象に種々な部分的機制があつたり、病氣や病狀に多種多樣さが定まつたりするのは如何なるわけからであるか、そんな事は一向顧みられてゐない。總ては同樣に男性的抗議に、自己主張に、個人性の高揚に役立つのだからである。體系はもう出來上つてゐるのだ。異常な曲解の仕事をやつて除けたが、それに對して一つだに新たな觀察は供せられてゐない。こんなものは精神分析とは何等の關係のないものであることを、示し得たと私は信ずる。

アードラーの體系に依れば、人生の要は全然攻撃本能に基いてゐることになる。こんな殺風景な人生觀が抑々何等かの注意を呼んだと云ふのが不思議だと人々は思ふに違ひない。併し性的要素の桎梏に重壓せられてゐる人類は、『性の克服』と云ふ好餌をさへ見せられるならば、何にでも喰付いて來るものであることを忘れてはならない。

アードラーの離反は一九一一年のワイマールに於ける總會以前に起つた。スヰツル派の離反はその後に起つた。この離反の最初の徵象は不思議なことに、スヰツルの文獻の通俗的論文中に於けるリクリンの二三の言葉であつた。これ等の言葉に依つて一般世間の方が最も近しい專門同僚よりも早く、精神分析が二三嗤ふべき、不名譽な誤りを克服したことを知つたのである。一九一二年にユングはア

メリカから手紙を寄越し大いに威張つて來た、何か精神分析に多少の改變が加はつたので、從來斯學に就いて何も知らうとは欲しなかつた人々の抵抗を克服したと。私は答へた、それは威張るべきことではない、精神分析が骨を折つて得た眞理を彼が犧牲にすればするほど、抵抗は消えて行くのを彼は見るではあらうが、と。スヰツル派の人々がそれほど得意になつてゐる改變とは、何の事、性的契機を理論的に撤回したゞけのことである。私は始めからこの『進步』とは要するに、世間の要望にあまりにも調子を合せ過ぎたことだと考へてゐた。

精神分析からのこれ等二つの離反の運動を、私はこれから比較しなければならないが、併しこれ等二つにはまた類似の點があつて、それ等は何等かの高所からの見地（例へば、永遠の相の下に於ける見解の如き）に依つて世人から好感を以て見て貰はうとするのがその點である。アードラーに於いては何れがその點かと云ふに、それは認識の相對性と個人の權利（知識材料を個性的に、藝術的に形成することの權利）とである。ユングに於いては、老耄してその觀方の硬化した者がなほ暴君的壓倒を肆にしてゐるのに對する、青年の桎梏打破の文明史的權利と云ふことが恃みとなつてゐる。併しこのやうな議論に對しては、二三辯駁の辭を必要とする。我々の認識の相對性と云ふことは、精神分析と同様一切の他の科學にも見られる愼重なる用意であるのに、現在に於いては、周知の如き反動的な、

科學陣營の潮流が襲來し、我等の側には缺如せる思想的熟慮を持つもの丶如き外見をとるのである。我々の理論的努力に關する人類の窮極的判斷が如何なるものとなるであらうかは、何人も豫測し得ざるところである。次の八九十年に排撃せられようとも、更にその次の時代に是正せられ、承認せられると云ふ實例もないではない。で、我々科學者としては、自分自身の批判的な聲と反對者のそれとに細心の注意を以て傾聽して後に、自分の經驗に支持せられてゐる信念のまゝを全力的に追及して行くより外に道はないわけである。我々は正直に自分自身の仕事を進め、自分は判決の官とならず、これを將來に期するだけで滿足するものである。科學上の事柄に個人的氣まぐれを强調することは妄である。さう云ふ事は明かに科學としての精神分析の價値を失はしめんとするもので、その價値は既に右の論に於いて低下せられてゐる。科學的思想を高く評價するものは寧ろ、個人的な、藝術的な氣まぐれを、それが過大な役割を果す場合に於いてさへも、出來るだけ制限するやうな、手段と方法とを求めるであらう。それに落着いて考へて見れば、辯明のためにそんなに躍氣になるにも當らないことだ。アードラーのこれ等の議論はそんなに眞劍なものではないのだから……。それ等はたゞ敵本主義の論議であるのだが、併しそれ自身の理論を尊重すべき筈である。それ等の議論でもアードラーの追隨者たちをして、アードラーを救世主として（あれほど世人が幾多の先驅者を出して待ちに待つた救世主

として）讃仰せしめる事になつたのである。この救世主は最早相對的なものではなくなつてゐる。

世人の好意を獲得せんためのユングの議論は、人類、文明、知識などの進歩が常に斷絶なき線をなして成就するものであるかの如き、あまりにも樂天的な豫想の上に立てられてゐる。總轉に依つて前代の業績を放棄して了つて來た、來流が、革命の後の反動と復辟とが、寃もこれまで嘗てなかつたかのやうな風である。大衆の見地に近接して行つたことゝ、不快なものと感ぜられてゐる革命を放棄したことゝのために、ユングの分析是正が青年の革新行動として認められるのが當然だと云ふのが我々には始めから尤の事のやうには思はれない。要するに、結局問題は行動者の年齢ではなくて、行爲の特質である。

右に論じて來た二つの離反運動の中で、より重大なるは勿論アードラーのそれである。然しアードラー說の根本の誤りとして目に立つのはそこに作りつけの首尾一貫の存することだ。彼の運動はやはり一つの本能說に基いてゐる。ユングの改變はこれに反し、現象と本能生活との關聯を緊密ならぬものにした。それに、ユング說は、彼の批難者たち（アブラハム、フェレンチ、ジョーンズ）が指摘したやうに、甚だ不明であり、曖昧であり、混亂してゐて、何ともそれに對する態度をとり難い。何處かに一寸觸れようものなら、やれ誤解をしたの、やれ正しい理解の持ちようを知らぬのと、直ぐ云ひ出さ

れるのを覺悟してかからねばならぬ。それはそれ自身の考へ方も獨特のフラ〜以前になつてゐて、「その故にと叫びを擧げて見たが、その時にも及ばねば全く莱獻であり目標的である。」（ユング）かと思ふと、また新しい治療の軌道で、それに依つて精神分析上に新しい時代が劃せられ、若精神分析以外の誰に對しても一つの新しい世界觀を供するものであるとも云ふのだ。

ユングの傾向はこれを個々に、私的に云ひ表はした場合と公的に云ひ表はした場合との間に一致を缺いてゐる點があるので、このやうな不一致にはそれ自身の不明瞭と不正直とが相當大きな役割を演じてゐるのであらうと自問せざるを得なからう。併しながら人々は、この新說の代表者たちが窮地に陷ると云ふであらう。彼等は以前に自分等が擁護してゐたところの說に反對し、而もそれが自分に確かに分つてゐる新しい觀察に基いてゐると云ふわけではなく、何等かの曲解のために今や以前とは違つて見えるやうになつて來た爲に過ぎないのだ。それ故に彼等は、世間からそれを非する者として知られてゐるその精神分析との關係を放棄することを欲せず、精神分析それ自身が變化したのだと云ふ風に振れ廻らうとしてゐるのだ。ミュンヘンの總會の際に、私はこの半ば曖昧な點を明然とさせる必要を認め、そのために私は、スイス派の革新は私の創めた精神分析の正統なる發展及び進步ではないと云ふ事を明かにした。局外の批評家たち（例へばフルトミュラー Furtmüller の如き）

はこの事情を既に夙く認識してゐた。またアブラハムはユングが精神分析から全然離れて了つたことを正しくも云つた。私は勿論、何人でも自分の考へたい事を考へ、書きたい事を書くことは御勝手だと思つてゐる。併しそれでないものをそれだと云ひ張る權利はない。

アードラーが精神分析を研究することに依つて何等かの新しいもの（自我心理の一部分）を齎した如く、さうしてその根柢に横たはるあらゆる分析的學説を放擲することに依つてこの贈物をあまりに高く吹掛けようと欲した如く、ユング並びにその追隨者たちもまた、精神分析のための新たな獲得を斯學に對する戰ひに結付けた。彼等は細かく種々の事を追及し（その點に於いては、プフィスターが彼等の先驅である）、例へば、家族コムプレクスや近親姦的對象選擇からの性的諸觀念の材料が、人類の最高なる倫理的、及び宗教的興味の表現にまで利用せられると云ふ如きことを問題にし、かくて性的本能力の昇華の著しい場合やそれの變形を、既に性的とは呼び難い働きとして說明した。これは、精神分析に含まれてゐる種々の期待と最もよく調和し、また夢や神經症に於いてこれ等の（並びにそれ以外のあらゆる）昇華の退行的還元が見られると云ふ考へ方と見事に一致する。併しながら世間は憤然として叫んだ、彼等が倫理と宗教とを性慾化した！　と……。そこで私は一度『最終的』に思索をなし、これ等の發見者たちがこの憤慨の暴風雨に抗し得ざるやうに感じたと想像することを避ける

ことが出來ない。多分彼等自身の胸の中にもまた、暴風雨が吹き起り始めたのであらう。多くのスキツル派の人々がその前身が神學者であつたことは、彼等の精神分析に對する立場を見る上にどちらでもよくないことは、丁度アードラーが社會主義者であつたことがその心理學の發展に對して重要であるのと一般である。そこで人々は、あのマーク・トエンの作中にある彼の時計の運命に關する有名な話を思ひ出すであらう、殊にその話が次の一句で終つてゐたことを想起するであらう。――『そこで彼はいつも考へるのであつた。あのものにならなかつた錺掛屋、鐵砲鍛冶屋、靴屋、鐵工等はどうなつたらうかと…。併し誰もそれを知つてゐるものはなかつた。』

私はなほも比較の考へ方を押進め、かう假定したいと思ふ。或る社會に成上り者が居て、その者は自分の出が他國の古い貴族であることを誇りにしてゐると。ところが彼の兩親はどこか近所に居て、而も甚だ微賤な者であることが分つて來る。そこで彼はいろ〳〵手段を取つて調べて見る。彼はどうしてもその兩親を否認することは出來ない。併し彼は兩親が高貴の者であるが、たゞ落零れてゐるだけだと主張し、世話好きの役人に賴んで系圖を兩親のために拵えて貰ふ。スキツル派の人々の行つたことは、丁度これと似てゐると、私は云ふのである。倫理と宗教とが性慾的に見らるべきものでなく、始めから何か『高貴』なものであつたにしても、それ等の持つ諸觀念を家族コムプレクスやエディポ

ス・コムプレクスから導き出すのを拒むことは出来ないと思はれる。そこでから云ふことだけが分つて来る。——これ等のコムプレクス自身は始めからそれの語るが如く見えてゐることを語らうとしたものでは必ずしもなく、あの、より高尚な、『神にまで高める』ほどの意義（ジルベラーの命名を用ゐれば）を持つてゐたのである。さうしてこの意義を持つてゐるが故に、これ等のコムプレクスは倫理及び宗教的神秘の抽象的思想の道筋の中に入込むやうになつたのであると。

私は革新チウリヒ派の學說の內容と意圖とを誤解したと又もや云はれることは覺悟してゐるが、併し私の考へに對して反對（この派の出版の中に見える反對）が出るのは、彼等自身に責めがあるのではなく、私にあると云ふ說に對しては、私は豫防しておく。私はユングの革新の全體をこのやうな風にしか理解し得ないのである。このやうな關係に於いてしか把握し得ないのである。家族コムプレクスの中から性的なものを取去ることに依つて、宗教や倫理の中にいやなものを再び見出さないやうにしようとの意圖は、ユングが精神分析に加へたあらゆる改變の中に照り亙つてゐる。性的リビドーに代ふるに一つの抽象概念を以てしてゐるが、この概念に就いては人々は、これが賢者にも愚者にも等しく神秘的であり、糢糊としてゐると、主張し得る。エディポス・コムプレクスは單に『象徵的』な意義のものとなり、その中に於ける母は到達すべからざるものを、持つことを許されざるものを、意味

し、人々は文明發達の興味のためにはこれを斷念しなければならない。父はエディポスの神話に於いては殺されることになつてゐるが、これは『内的』の父で、人々が自立するためにはこれから獨立しなければならない。性的觀念の材料の他の部分も、行く〳〵は確に同様な新解釋を下せるやうになるであらう。自我に反對する性的な力と、自我の主張との間の葛藤に代ふるに『生命の問題』と『心理的惰性』との間の葛藤を以てする。神經症的罪惡意識は、自分の生命の問題に忠實でないことの批難に相當する。新しい宗教的、倫理的體系はこのやうにして創られたが、これはアードラーの體系と同様に、分析に依つて發見した眞理を事實上變解し、破碎し、除去することにならざるを得なかつた。實際に於いて、彼等は世の中の出來事の交響樂の中から一二の文明的上調子を聽取したのみで、本元的な力となつてゐる本能の諧律は聽漏したのである。

この體系を保持するためには精神分析的の觀察及び技法からの完全な離脱が必要であつた。時には高尙なことに對する鼓舞のために學的論理の輕視が許されることがある。例へば、ユングがエディポス・コムプレクスを神經症の病源としては『特殊さ』が十分でないと考へ、この特殊さを事物の惰性に、卽ち生物及び無生物の一般性にあるとした時の如きである。ユングのこの考へ方に於いて注意せられることは『エディポス・コムプレクス』がたつた一つの内容をしか示してゐないと云ふことである。

その内容は個人の心理の力に匹敵するものだが、それ自身が『心理的惰性』の如き力ではないのだ。個々人を研究して見て分つたことであるが、さうしてまたこれからも新たに分ることであるが、性的コムプレクスはその本來的の意味に於て彼等の内に生きてゐるものである。それ故に個人研究は抑けられて、その代りに民族研究からの觀點に恭く判斷が用ゐられるやうになつた。萬人は早期幼年時代に於いて、右のやうに新釋せられたコムプレクスの本來的の、裝はれざる意義に直面するの危險に最も夙く曝されてゐる。それ故に、治療上の掟としてこの過去には出來るだけあつさりと觸れ、實際の葛藤にまで下つてそこに力瘤を入れるやうにせねばならぬが、併しこの葛藤に於いては偶然的、個人的のものが斷じて本質でなく、一般的なものが、生命問題の充足せられざるものが、本質である。併しながら我々の聽き知つたところに依ると、神經症者の實際葛藤は患者のこれまでの生活史を跡付け、彼のリビドーが病氣になるに就いて辿つた道を行くことに依つて、始めて理解もし得るし、直しも出來るのである。

革新チウリヒ派の療法が如何にしてそのやうな傾向の下に形成せられたかを、私は、自分で親しく經驗した或る患者の話に基いて報告することが出來る。『こゝでは過去や轉嫁を調べる形跡は見られない。私がこれこそ轉嫁だと信じた場合でも、それは純粹なリビドーのシムボルとして說明される。道德

的教訓は如何にも美しく、私はそれ等の教訓に從つて忠實に生きたが、併し私は別に何の進步も見なかつた。それは私には一層不快であつたが、それに對して私は何が出來ようか？…分析的に解放する代りに、處置の時間毎に新たな大仕事が課せられ、その仕事を果すことが神經症の克服のために必要なのだ。例へば、內向に依つて內面を集中すること、宗敎的に深化すること、沒頭的愛情の內に妻と新たな共同生活を營むことなどに依つてゞある。それは殆ど力以上の事であつて、而も內的人間の全體を根本的に變形させることは出來ない。最も力强き後悔の念と最もよき決意を持ちつゝも、而も同時に最も深き絕望に陷れる懸れなる罪人の如く、人々は分析を離れ行くのである。彼が私に薦めたものはあらゆる坊さん達がやはり私に忠告したところのことであつたが、併し何處から力を得るのか？』―患者の過去の分析と轉嫁の分析とは眞先にやらねばならないと云ふことを知つてゐると、この患者は報告してゐた。これ等の分析はもう十分にやつてあると云はれたとのことだ。ところが十分にやつてある筈の分析が一向役に立つてゐないのだから、これはまだ十分にやつてないと云ふ結論を下して當然であると思ふ。その後に施された部分の處置（それは精神分析の名に價するものではない）も決して何の役にも立たなかつた。チウリヒ派の人々が遠いボインへの迂路をとつて、遂に間近のベルン（そこではデュボア Dubois が神經症患者を倫理的な激勵に依つて甘やかしつゝ扱つてゐる）へと

歸つて行つたのは不思議なことである。(一)

註(一)　患者の云ふことをかう云ふことに利用するのはどうかと思はれるが、私はそれを思ふが故に判然と確證しておきたいと思ふ、私に報告してくれた患者は信用の出來る人物であると共に判斷も具へてゐる人間であると云ふことを……。彼は別に私の要求に應じて報告したわけではない。で、私は彼の報告を利用するに彼の贊成を求めもしなかつた。何故ならば、精神分析者は自分の技術に就いて世人に默つてゐてくれと要求すべきものでないと云ふことを、私は承認し得るからである。

この新しい傾向が精神分析と完全に分離してゐることは、勿論また抑壓の虚僞(抑壓などのことはユングの書中にはも早出てをらぬ)に於いても、夢の誤認(ユングはアードラーと同樣、夢の心理を斷念することに依り、夢と夢の潛在思想とを混同してゐる)に於いて、無意識に對する理解の喪失に於いて、一言以てこれを掩へば、私が精神分析の本質と認め得ざる總ての點に於いて、明かになつてゐる。近親姦コムプレクスは單に象徴的であり、何等現實的に存在するものではない、野蠻人だとて老ぼれ婆さんなどに興味があるわけはなく、やはり若い方がよいにきまつてゐるなど〻、ユングから說き聽かされたならば、人々はかう考へたくなるであらう、『象徴的』と云ひ『何等實際的存在を持たぬ』と云ふその意味は、人々が精神分析に於いて、その顯現と病理的効果とを顧慮して、『無意識的

存在』と名付けた（外見の矛盾をなくしようためにかく名付けた）ところのものであるのだらうと。

夢は夢の潜在思想とは違つたものであり、寧ろ潜在思想を加工改變させるものであることが分ると、人々は不思議に思はなくなるであらう、患者たちは自分の意味するところを分析者が處置中に（あるものを以て）滿してくれたそのものを夢みるのだと云ふこと……。そのものが『生命の問題』であるにせよ、或は『上になる下になる』ことであるにせよ……。慥に被分析者の夢はこれを導くことが出來るものだ。それは丁度、普通人の夢でも實驗的に刺戟を與へて影響を及ぼすことが出來るのと一般である。人々は夢に出て來る材料の一部分を決定することが出來る。併し夢の本質と機制とはこれに依つて變ることはない。また私は所謂『傳記的』の夢が、分析以外の時に起きるとは信ぜられないのだ。これに反し、處置以前に起きた夢を分析するか、或は夢の本人が治療中に與へられる刺戟に何を附加するかを注意してゐるか、或はさう云ふ仕事を彼に課するのを避けることが出來るならば、即ち人々はつくぐ〜と思ひ知るであらう、如何に夢には、たゞ生命の問題の解決の試みと云ふ、正にその事を供すると云ふのが緣遠いことであるかを……。夢は思想の一つの形式に過ぎない。この形式の理解は夢の思想の內容からは得られない。これの理解をなすには夢の仕事を考究しなければならない。

ユングの誤解と精神分析からの離反とを事實上から辯駁することは困難でない。總て分析を正規に

行つて見れば、殊に幼兒を分析して見れば、精神分析の理論的基礎が愈々確信せられ、アードラーの體系やユングの體系からの新解釋は拒否せられるやうになる。ユング自身もその大悟徹底以前にそのやうな幼兒分析を完成し、發表してゐる。同じ幼兒分析の新しい解釋を、また別の『事實の統一的傾向』（これに關するアードラーの用語を用ふれば）に依つてユングが企てるであらうか、期して待つべきである。

夢及び神經症に於いて『より高尙なる』思想が性的に表現されるのは、古風な表現方法たることを意味するに外ならないとの見解は、勿論あの事實（神經症に於けるこれ等の性的コムプレクスが、現實生活から避難してゐるリビドー量の保持者であるとの事實）と一致しない。もしその『高尙なる』思想の表現が要するに性的な隱語に過ぎないとすれば、リビドーの經濟に於いてはそこに何の變化も生じはしない。ユング自身もなほこの事を、彼の『精神分析の理論』"Darstellung der psychoanalytischen Theorie" の中で告白し、治療の課題としては、これ等のコムプレクスからリビドー纒綿を引離さなくてはならないと斷じてゐる。併しこれをなすにはこれ等のコムプレクスを回避したりこれ等を昇華せしめたりするだけでは駄目である。斷然虎穴に入つてこれ等のコムプレクスと組打ち、それを全般的に意識化しなくてはならない。患者にとつて考慮を拂はねばならない現實の第一の部分は

正に彼の病氣である。この現實の第一部分たる病氣に考慮を拂ふことの課題を患者から奪ふことは、醫者の無能（患者をしてその抵抗を克服せしめ得ざること）を示してゐる。或は醫者がかゝる操作の結果を嫌惡してゐることを示してゐる。

私は結論として云つておきたい、ユングが精神分析に加へた『改變』は、有名なるリヒテムベルグの小刀との好一對を供してゐる。彼は小刀の柄を變へ、別に一つの刄を添加した。然るに商標だけは同じのが打込んであるので、我々は今やこの道具を以前の道具と考へなくてはならない。然るにその反對に精神分析に取つて、代らうとするこの新學説は放棄と離脱とを意味するものであることを示したと私は信じてゐる。世には恐らく、今度の方の離脱は前の離脱よりは關係するところが大きい、何となれば、この方は精神分析運動にあれほど大きな役割を果し、またあれほど大きな進歩を與へた人物に依つてなされたから……と心配する向きもあるのであらうが、私はその心配には及ばないと思ふ。

人間は一つの強い思想を奉じてゐる限りは强いものだ。自分でその思想に叛いた時に無力となる。精神分析はこれ等有力なる追隨者を失つた損傷に堪え、新たな追隨者を獲得するのであらう。私としてはたゞ最後に一つの願ひを以てこの稿を終ることが出來る、卽ち精神分析の下界に停ることに堪え

られなくなつた總ての人々にはこの謀反に依つて安易なる昇天の途が與へられてあらむことを……。その他の人々は、この深部に於ける勞作を最後まで屈せず仕遂げるやうにして欲しいものである。

精神分析總論　完

本全集總索引

凡例

一、本索引中、ゴチにて表はしたる羅馬數字は本全集の卷數を示し、それに續く普通活字の日本數字は當該卷中の頁數を示す。

一、本索引に採用したる項は本文中のものに限り、序文及び附錄（第一卷末の『精神分析學語彙』をも含む）中のものは、採らず。

一、脚註中の項も採用しあれども、譯者附記の註はその限りに非ず。

一、假名遣ひは努めて簡單化を目ざし、ドイツ語のT及びPの前のSはスと發音し、日本語の『くわ』（菓、火など）は單に『か』と發音せり。

一、配列は五十音順に從ひ、重複音（ぞゞ、ミゝなど）は第一字に依り索めらるべし。

一、重要ならぬ名稱はよゝ省略せるものあり。

件名索引

（注意）本文中にその名は出でずとも、その項に重大る關係ある個所は、特にその名を掲げたるものあり。

ア

イ

ウ

エ

オ

カ

ガ

本全集總索引

ク

グ

ケ

ゲ

コ及びゴ

サ及びザ

シ

ジ

ス

セ及びゼ

ソ

タ

ツ

テ

デ

ト

ド

ナ

ニ

ヤ

ユ

ヨ

リ

レ

ロ

人名索引

（注意）
一、人名の内には神名、及び作中人物の名をも含む。
一、その名を擧げずとも、實際上その人に關係ある箇所は掲げおけり。
一、人名綴字は本文中のものと本索引中のものと差異ある場合は、本索引中のものを正確と認められたし。

ア

本全集總索引

カ及びガ

キ及びギ

ク

グ

本全集總索引

ジ

ス

本全集總索引

セ

ソ及びゾ

タ

ダ

チ及びヂ

ツ

デ

ト及びド

ナ

ヒ、ビ及びピ

フ

本全集總索引

プ

ブ

本全集總索引

書名索引

注意

一、書名の後に編輯名をも合せ掲げたり。
一、學術書以外は掲げず。
一、本全集に於ける言及個所は掲げず。例へば「夢の註釋」中にて「夢の註釋」に言及あるは當該にて索引を待つの必要なければなり。
一、整冊ならざるものは雜誌又は個人著書以外のもの（例へば聖書など）とす。

キ及びギ

ゲ

コ

サ

シ

ジ

セ及びゼ

書名索引

本全集總索引　終

昭和八年四月十日印刷
昭和八年四月十五日發行
昭和十四年三月十日第三版發行

フロイド精神分析學全集

（精神分析總論）

定價一圓八十錢

譯者　大槻憲二

發行者　和田利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者　吉原良三
東京市牛込區早稲田鶴巻町一〇七

印刷所　株式會社康文社印刷所
東京市牛込區早稲田鶴巻町一〇七

發行所
東京市日本橋區通三丁目八番地
株式會社春陽堂
振替東京一六一七番・電話日本橋五一番

フロイド精神分析學全集

（第一卷）　**夢の註釋**

・定價　一圓八十錢・
・送料　十二錢・

大槻憲二譯

第一章夢に意味あり、第二章夢の機制、第三章何故に夢は願望を扮裝するか、第四章夢の分析、第五章夢に於ける性、第六章夢の忘却、第七章退行、第八章夢に於ける願望充足、第九章夢の機能、第十章第一次的及び第二次的現象——抑壓　附錄、精神分析學略說（說明付）

（第二卷）　**日常生活の精神分析**

・定價　一圓八十錢・
・送料　十二錢・

大槻憲二譯

第一章固有名の忘却、第二章外國語の忘却、第三章名稱の忘却と文句の忘却、第四章幼時記憶及び隱蔽記憶について、第五章言ひ損ひ、第六章讀み損ひと書き損ひ、第七章印象及び意圖の忘却、第八章行り損ひ、第九章症狀行爲と偶然行爲、第十章誤り、第十一章複合的行り損ひ、第十二章決定觀・偶然信仰と迷信・樣々の見地

（第三卷）　**社會・宗教・文明**

・定價　一圓八十錢・
・送料　十二錢・

長谷川誠也
大槻憲二譯

（原著者當年六十六歲當時）

一、**群衆心理と自我の分析**　第一章緒言、第二章ル・ボンの集團心理說、第三章その他の集團心理說、第四章暗示とリビドー、第五章人爲的集團（教會と軍隊）、第六章爾餘の諸問題、第七章同一化、第八章惚れ込みと催眠狀態、第九章群衆本能、第十章集團と原始團體、第十一章自我の段階、第十二章追錄

二、**宗教の將來**　第一章以下第十章まで

三、**文明と不滿**　第一章大洋原のやうな感情、第二章宗教は幸福を與へるか、第三章文明とは何か、第四章文明の缺陷、第五章攻擊慾と文明、第六章エロスと死の本能との鬪爭、第七章良心の起源、第八章餘論

（第四卷）　快不快原則を超えて　・定價　一圓八十錢・　・送料　十二錢・　大槻憲二譯

一、快不快原則を超えて　第一章以下第七章まで
二、强迫神經症の一例　一、病床記錄の抽出（a 治療の開始、b 小兒の性慾、c 大强迫恐怖、d 治療に誘導すること、e 强迫觀念とその說明、f 强迫神經症の起因、g 父性コムプレクス及び鼠の觀念の解除）二、理論（a 强迫形成の或る一般的特性、b 强迫神經症の或る心理的特性、c 强迫神經症の本能的生活及び强迫と疑念との根源）
附錄　三、何故の戰爭か　四、精神分析學への興味

（第五卷）　性慾論・禁制論　・定價　一圓八十錢・　・送料　十二錢・　矢部八重吉譯

原著者肖像及び筆蹟
一、性慾に關する三論文　第一論文　性の錯誤（第一章性的對象に關する變態、同性愛、性的對象としての性的未熟者及び動物、第二章性目的に關する變態、解剖的逸反、暫定的性目的の定着、第三章あらゆる變態に一般的なもの、第四章神經症患者の性本能、第五章部分本能と性的帶域、第六章神經症患者に於いて性的變態が外見的には目立つ所以の說明、第七章幼兒性慾について）第二論文　幼兒の性慾（幼兒時代の性的潜在期間とその中絕、幼兒性慾の顯現、幼兒性慾の性目的、性的顯現としての自瀆、幼兒の性研究、性組織發達の諸段階、幼兒性慾の源泉）第三論文　思春期に於ける性慾の變化（性器帶域の優化と前驅快感、性的亢奮の問題、リビドー說、男女の別、對象發見）論旨要約
二、禁制と觸穢と忌避　第一章以下第十一章まで
三、附錄　フロイド先生會見記（譯者）

フロイド精神分析學全集

（第六卷）**分析藝術論** ・定價一圓八十錢・送料十二錢・ 大槻憲二譯

一、機智とその無意識に對する關係と（第一章以下第三章）　二、フモール　三、詩人と空想　四、レオナルドとモナ・リーザの微笑　五、原始語に於ける相反意義について　六、箱選みの動機　七、ミケルアンヂエロのモーゼ　八、ゲーテの幼兒期記憶　九、氣味惡さ　十、ドストイエフスキー

（第七卷）**トーテムとタブー　自我とエス** ・定價一圓八十錢・送料十二錢・ 矢部八重吉譯　對馬完治譯

一、トーテムとタブー（一、近親姦恐怖　二、タブーと感情のアムビバレンツ　三、アニミスムス・魔法及び思想の全能　四、幼兒に於いて復活するトーテミズム）　二、自我とエス（一、意識と無意識　二、自我とエス　三、自我と超自我　四、二種の本能　五、自我の依賴的關係）

（第八卷）**分析療法論** ・定價一圓八十錢・送料十二錢・ 大槻憲二譯

（原著者肖像メダル寫眞及び分析室）　一、フロイド式分析療法　二、精神療法について　三、分析の『仕寵し』について　四、夢の解釋と分析治療　五、分析取扱についての醫師への助言　六、分析取扱入門　七、記憶と反復　八、分析中に受ける轉移愛について　九、分析療法への道　十、非醫者の分析問題　十一、小兒分析法

（第九卷）**分析戀愛論** ・定價一圓八十錢・送料十二錢・ 大槻憲二譯

（原著者肖像）、一、戀愛生活の心理（1、男性の對象選擇の特種の型　2、戀愛生活の一般的卑しめについて　3、處女のタブー）　二、ナルチスムス緒論　三、拜物癖　四、文明的性道德と近代の神經病　五、ヒステリー空想と兩性具有性　六、ヒステリー發作の一般的敍述　七、子供の噓二つ　八、或る婦人の同性愛の心理的原因　九、嫉妬、妄想、同性愛　十、マゾヒスムス論　十一、家族ロマンス

（第十卷）**精神分析總論** ・定價一圓八十錢・送料十二錢・ 大槻憲二譯

（原著者青年時肖像）、一、精神分析入門五講　二、精神分析運動史　三、自傳　四、本全集總索引（件名及び人名）